（右和譯文）

以手紙致啓上候然は貴政府長官より公然御達の趣にては貴政府おゐて琉球島を貴國一統の一部と被見做外務省おゐて右島交際の事務を被扱候趣に候就ては此場合に乘し且各國と琉球國政府と取結びし條約に基き拙者今閣下の御懇切に依賴し右島に在留貴國長官に右島中貴國の權の及ぶ所於ては舊條約於て他國人民に被許候處の權と利とを我伊太利國の船艦竝に人民にも同樣被許候樣御通達被下度扨拙者只今の處にては此書狀爲取換而已にて充分と心得候得共或は別段に條約被取結候樣の事に候得は閣下御答次第無遲延我政府に通達可仕先は右申述度如此に候已上

千八百七十三年八月二十七日

東京於テ

リ　タ

註　本號文書ニ對シ九月十九日附副島外務卿ヨリ伊國代理公使宛書翰ヲ以テ「同藩と米佛蘭と約束致候件には貴國船艦幷に人民をも同樣取扱候樣同藩え相達し置可申」云々ト回答セリ

事項九　小笠原島問題ニ關スル件

一八〇　三月十三日　太政官正院ヨリ上野外務卿代理宛

小笠原島處分ノ儀ニ關シ下問ノ件

附屬書一、三月十日井上大藏大輔ヨリ太政官正院宛書翰
小笠原島處分ノ儀ニ關スル横濱稅關ヨリノ伺出ニ對シ同島放置然ルヘキ旨上申ノ件

二、一月二十八日中島租稅權頭ヨリ陸奥租稅頭宛書翰
小笠原島處分ノ儀ニ關シ至急指令アリ度旨申出ノ件

三、二月十日中島租稅權頭ヨリ陸奥租稅頭宛書翰
小笠原島處分ノ儀ニ關シ至急指令アリ度旨重ネテ申出ノ件

附記一、明治三年六月十日民部省ヨリ外務省宛
小笠原島開拓ノ必要上同島在留人ノ國籍ニ關シ問合ノ件

九　小笠原島問題ニ關スル件　一八〇

附屬書　明治三年五月谷暘卿ヨリ民部省監督司宛ノ無人嶋實見言上書寫

二、明治三年六月二十三日外務省ヨリ太政官辨官宛
小笠原島管轄縣一定ノ上同島在留外國人處置方ハ外務省ヘ伺出ツル樣指令アリ度旨上申ノ件

三、明治三年六月二十七日外務省ヨリ民部省宛
小笠原島在留人ノ國籍ニ關シ回答ノ件

四、明治三年七月十八日民部省ヨリ外務省宛
小笠原島管轄縣ノ儀ニ關シ外務省ノ見込問合ノ件

五、明治三年七月二十三日外務省ヨリ民部省宛
小笠原島管轄縣ノ儀ニ關シ回答ノ件

大藏省伺小笠原島の儀御下問相成候條意見早々可被申出候也

六年三月十三日　　正　院

上野外務少輔殿

（附屬書一）

小笠原島の儀伺

我國八丈島東南に有之候小笠原島（一名無人島）の義に付横濱税關より別紙伺出候右は隔海の小島にて他年物産増殖し有益の見込も無之候間先つ度外に被爲差置候方可然存候此段奉伺候也

明治六年三月十日　　井上大藏大輔

正院御中

註一、大藏少輔事務取扱澁澤榮一ヨリモ右附屬書一ト同日附同文ノ書翰ヲ以テ太政官正院宛伺出アリ附屬書トシテ共ニ送達セラレタルモ省略セリ

（附屬書二）

八丈島の東南に在る小笠原島（一名無人島）の儀は舊政府の節御國に屬する明證有之屢降手の義も有之候よしの處當時は如何の御扱に可有之哉若し御國内に屬する義に候得は不開港場の義に付外船碇泊いたし候ては條約面に對し不闇義に可有之且又其島人の貨物出入に付ては御國内外の差別を以收税の方則も異り候義に付其邊如何相心得可然哉逐々税法更正の秋に當り了知致し置不申候ては差支候間其分別早々御報達有之候樣致し度此段申進候也

明治六年一月廿八日　　租税權頭　中島信行

租税頭　陸奥宗光殿

（附屬書三）

無人島へ外國人居住致し候に付貨物輸遭等致し候節心附方の義去る一月廿九日（八カ）附を以云々申進置候當八日米國ソーツシイ船同島へ向け出港願書差出强て可差拒辭柄も無之候に付尋常の手續を以差許候得共元來同島の義は先船（原註朱書ノ誤カ）も申進候通り

皇國に屬する確證有之候趣にて舊幕府於て屢々降手開拓の術を盡し既に安政年間には官吏差置候得共其後遂に廢棄に屬し方今に至りては外國人而已多分占居し其産物を以て專ら産業を營み居候由然る時は假令　皇國に屬する確證有之候共其實彼に屬する姿に相當り候故御國内不開港場の處置も難相成去迚各國人雜居致し居候樣子に付ては何國に屬し何人領得致し居候と申義も不相分候間同盟國と視傚候譯にも難相成若し亦强て

皇國に屬するを主張せは同島は不開港場の儀に付御條約面に對し不都合を極候間航海は難差許義と相考申候元來物産輸出入に付ては税則於て内外の區別有之前條の次第取計方差支候間何れにも取扱方判然致し候樣御指示被下度此段再應申進候也

明治六年第二月十日　　租税權頭　中島信行

租税頭　陸奥宗光殿

註二、小笠原島處分ノ儀ニ關スル明治五年以前ノ文書一括左ニ附記ス

（附記一）

貼紙

去巳十月中谷暘卿建白に因て無人嶋開拓御準許相成當三月中谷暘卿より手入の便宜伺出候に付辨官え相伺候處當時御吟味中に付追て御沙汰相成候迄可差留旨御達に付其段申渡候後谷暘卿尚又伺出候一體右無人嶋開拓の儀は既に御準許にも相成候得共別段御調筋有之到底谷暘卿え御許容無之儀に候はゝ其段説諭及ひ斷念可爲致旨猶又辨官え相伺候處開拓手の附け方委細細可取調旨申越候に付谷暘卿呼出し右開拓の順序子細取糺候得は谷暘卿より別紙寫の通當春中谷暘卿手下のもの兩人米利堅便船に乘組無人嶋え渡海地理實驗及候に各國人在留所に雜居活計相營且航海の艦船不斷碇泊汲水致し水税取立候哉なと申立候仍ては無人嶋の儀は

皇國の版圖に候ても所謂無人嶋にて一箇も皇國人住在土着致候に無之然に右體各國人種營屋雜居の處突然開拓相創候ては各國條約旨趣吋否に關係し些少の事より嫌隙相生し大事の不都合を引出し候ては無詮の儀に候間右無人嶋在留の者は各國載籍の民に候哉又は漂着民自己の便宜より其儘占住致し何國のものとも未定の族に候哉差別分明承知致度此段及御掛合候也

庚午六月十日　　民部省

外務省

（貼紙）
小笠原島は舊幕の節閣老より各國公使へ書翰を申送りたる事あり右を取調へ此返答書に添べし
水野筑後守巡島の節土地住居の外國人え說諭の對話書あり右之趣意も申遣すべし
詰りの趣意は在住の外國人多くは其國々羈絆の外國人に相違無之今日本人行て此島を開手するは妨なし然れとも其住居の外國人を保護し其作業を助け日本の支配下に加ふべし右大趣意なり

（附記一附屬書）

無人嶋實見言上書

東京深川新田住人　井口直助

下總銚子住人　眞一郎

右兩人の者は私同志にて兼て無人嶋の事件に召使候者故當午正月廿五日七字ニウヨルク便船に依頼して無人嶋え渡り候に同月廿七日五字即ち同嶋父嶋と申す港え着到し其夜は從來嶋中に在住す英國の人にて名はウエフトカス家に止宿し翌日より彼此嶋山を見分し二月一日より南母嶋え渡り彼此屬嶋巡覽仕り候處舊幕開墾の時より人家五軒計も增加して嶋中惣計三十六軒人口九十人計雜居仕候然とも人種は前年通り魯英佛米カナカイタリヤ（マヽ）等の國人而已にて餘國は相見へ不申候尤嶋中殊の外清水有之候に付外洋の舟船悉く清水を汲取仕候に付水稅の事も有之候然るに彼米國便舟は清水を汲込正月廿六日六字前本國へ出船仕候然る所二月十三日夜三字過頃米國サンフランシスコの商船幸い同嶋父嶋へ着港仕清水を取り翌十四日出船横濱え參り候に付則乘込同月十六日横濱へ着船仕候右の通無人嶋へ遣し候直助儀は先年舊幕の時此嶋へ出役して貳ケ年餘も在住して風土は篤と存知候者故此度遣し申候然といへとも官へ窺すしては誠に以多罪奉恐入候得共如此被仰付候上は私一身而已ならず多く人民を移住なさしめ開墾の事業にして既に去る四月中には是非出船の事定と云舊幕の時より數年往復も相絶へ候なれは一應實着の所篤義の人物を相添へ嶋内實見致させ申候間此段言上奉り候幾重にも御海容謝罪偏に奉拜願候誠恐誠惶謹言頓血稽首

庚午五月

臣谷暘卿　源應貞

民部省

監督使御中

（附記二）

（朱書）「午六月廿三日達ス」

辨官御中　外務省

小笠原島は

皇國の版圖に相違無之候處南洋懸隔の孤島にて船路往返不容易土地產物の所得を以開拓船費等に引當候得は其仕法の精粗巧拙により或は出入不相償損失勝にて舊幕府の節度々其擧に及候得共何れも中廢いたし候趣に御座候乍去外國人は鯨獵其外薪水等のため必由の地にして年來住居いたし居候者も有之此上打捨置候ては主客換地銘實共失の患無之とも難申且後來鯨獵御仕出或は南洋諸大洲へ御開手相成候には同島并其附近ラドルネ諸島は航路樞要の地とも被存候間何卒早々御處置有之樣仕度然るに政府にて御手を下され候ては莫大の耗費を生し候而已にて實效薄く即舊幕の失算を踏候姿に可相成候間同島は西南諸藩の内へ管轄被仰付開拓の諸費諸得とも惣て御委任相成候はゝ處事親密にて永續の規模相立可申被存候一體同島は伊豆七島に屬候義に付韮山縣管轄にて當然に可有之候得共縣の力にては行屆兼候場合も可有之依て諸藩と申上候事に候右の趣可然筋にて其藩一定候はゝ土着の外國人處置方等は當省へ伺出候樣被仰付度候此段申上候也

庚午六月

（附記三）

（朱書）「六月廿七日別紙相添民部省え遣す」

去冬谷暘卿建白に依て小笠原島開拓御准許相成候處猶又當春中同人より申立候旨有之候に付辨官へ御伺の處當時御吟味中に付御沙汰有之候迄可差留旨御達の趣其後再應同人より伺出候に付一體同島の義に付縷々御問合の趣致承知候右は往昔より

皇國の版圖に無相違義に有之已に外國人も唱居候得共方今は無人にて有名無實の島嶼故いつの頃より歟外國より人民遷徒し來り生活相營候趣に相聞舊幕中文久年間開拓の義評決相成水野筑後始役員數輩差遣し巡島檢查爲致候得共國内多端に紛れ成功に至り兼其儘廢沮相成實以遺憾の事に有之候間當省の見込の次第頃日政府へ建言致候義に有之候に付谷暘卿に不限有志輩有之候はゝ速に手を下させ度存候義に

候間右の趣を以可然御處置有之度尤此度改て開拓被仰付候に付各國より妨碍申立候義萬々無之候得共居住の外國人民共は素より其國の戸籍の人種に無相違義に付右人民共を深切に愛護し生業を助成し漸々化誨馴服する樣の方略を施設致し候義肝要と存候間右等の處能々御注意有之度尤當人彌開業に取懸り此地出立の節に至候はゝ猶いさゐに當人え爲申聞候樣可致候間其節當人御さし出可被成下依之御心得として舊幕の節老中より英亞公使へ贈答の書簡寫幷水野筑後巡島の節居住の外國人へ及應接取極候定書寫相添此段及御答候也

庚午六月

外務省

民部省御中

尙以無人島の義文祿年中小笠原民部少輔貞賴此島を檢出せしより自ら嶋名となり外國人もしか唱候よし洋書にもまゝ見えいつとなく無人島の名は消候姿になり不言して

皇國版圖の確證顯然に有之候間無人島とは不唱方可然存候間此段爲御心得申入候已上

民部省

外務省御中

(附記五)

(朱書)「七月廿三日廻答スミ」

民部省御中

外務省

小笠原島開拓の儀に付當省より辨官え差出候書面其御省え

註三、右附記三ニ差添ヘラレタル「英亞公使ヘ贈答之書簡寫」及「定書寫」見當ラス

(附記四)

小笠原島開拓の儀に付御省よりの御建白當省え御下け有之然る處政府にて御手を下され候ては莫大の耗費を生候而已にて實効薄く西南諸藩の內へ管轄被仰付開拓の諸費諸得とも御委任相成候はゝ處事親密にて永續の規模相立可申との御見込に有之西南諸藩の內有志の藩有之格別踏込開拓可申との御見込有之儀に候哉亘細承知致度先般及御掛合候谷暘卿其他開拓有志の者共も有之旁以御省の御見込倒底承知不致候ては不都合の次第も有之候間否詳密に御報有之度此段及御掛合候也

庚午七月十八日

民部省

外務省御中

御下相成候由の處書面中西南諸藩の內え管轄被　仰付開拓御委任相成候はゝ云々付て諸藩の內開拓有志の藩當省見込有之哉御掛合越の趣致承知候差當何れの藩え命し可然との見込は更に無之候尤谷暘卿其他有志の者とも追々及獻議候義も有之右等に御命相成候とも可然候何れにも其儘打捨置候ては外國人も雜居いたし居候得は自然主客名實混淆の姿に立至り可申哉と懸念致候より辨官え伺出候迄に有之候此段及御廻答候也

一八一　五月十三日　上野外務卿代理ト英國公使トノ對話書

小笠原島ノ所屬ニ關シ討議ノ件

附記一、明治五年三月十七日副島外務卿等ト獨國辨理公使トノ對話書

小笠原島ノ所屬ニ關シ討議ノ件

二、小笠原島管轄ノ儀ニ關スル米國公使ヨリ同國政府ヘノ上申書和譯文竝ニ之ニ對スル米國政府ヨリ米國公使ヘノ下知狀和譯文

明治六年五月十三日於外務省外務少輔上野景範大不列顚國特命全權公使ハルリーパークスト應接記ノ內

一無人島ノ儀追々居留人增加ノ趣ニ相聞候ヘ共右ハ貴國所屬ニ可有之哉

一固ヨリ我屬島タル事ニ候ヘ共距島ニ付未タ管轄モ不定布令モ行屆不申儀ニ有之候

一十二年前舊政府官員ヲ派シテ數月在留ノ上屬吏ヲ置在嶋ノ人民ヲ管シ候處僅一ケ年ヲ過スシテ屬吏及移民日本人ヲ率テ盡ク引拂候間此嶋ハ全ク措テ問ハサルモノト存セラレ候

一否當時右一條取調中ニテ已ニ書類等編集爲致居候事ニ有之候

一御書類拜見致シ度候

一編輯成功次第入御覽可申候

一米公使ヨリ何共不申出候哉

一何共不申出候

一此嶋ヘ當時英國人凡二十名米國人二十名在留致シ候趣ノ處管轄ノ者無之故中ニハ亂妨人モ有之大ニ困却致シ候由也

一我政府於テ管轄行屆ヘキ目的相立候旨官員ヲモ遣シ取締相立可申存候

一舊政府官員悉皆引拂タルヲ見レハ御國ニテハ已ニ之ヲ棄ツルモノト存セラレ候最初米英國人此島ニ族ヲ立テ又御國人族ヲ闖ケ候儀ニテ當時ハ漁鯨船等モ多ク據島ノ趣ニ有之候

一全嶋ノ事書類未充分熟覽不致候ヘ共取締無之候テハ難叶尚書類繙閲ノ上所置可及事ニ有之候

一判然御國屬嶋ト御見做シ被成候哉

一然リ右樣存居候

一書類編輯次第拜見致シ度候

一承知イタシ候

註　小笠原島所屬問題ニ關係アル文書一括左ニ附記ス

（附記一）

壬申三月十七日於外務省外務卿副島種臣外務大輔寺島宗則獨逸公使フランフラントえ應接記の内

一無人島はいつれの屬島に候哉

一日本の嶋也

一其嶋の儀に付各國より議論申出候事有之候哉

一議論と申程の事は無之咄し位有之候事は可有之先年我國より官員差遣し世話爲致候得共水不自由其上作物抔も不出來よしに付役員も引取申候尤我國屬嶋の儀は嘉永年中上木の地理全志にも明了に有之候と此時讀聞る

一チャイナ、ハイロと申書中に右嶋英國所轄の趣相見驚候

舊政府の節右嶋え各國人薪水等の爲め上陸候共宜鋪旨御布告相成候趣さすれは何國にても所轄いたし候節は議論可致筋に有之候

一布告致し候義は如何候哉取調不申候半ては不相分候

（附記二）

明治六年八月日不詳在留ノ米公使此原書横文ヲ外務卿種臣ヘ密ニ出シ其本國政府ヘ上陳其指令也ト示ス卿受取テ平井少丞ニ譯サセシム横文ハ平井ノ手ニ預レリ尤公使表向進呈スルニアラス只懇情ヲ以テ示セハ之ヲ證トシテ公然議スヘキニ非ス

米公使デロングより米國政府へ上申の書英文飜譯

今朝甲比丹ペンジャミンビーズなる者來つて拙者に告く云く余は米利幹の一民にして無人島（一名小笠原島また勃念島とも云）に居住して既に三年の久しきを經たり今度君の許に來るは彼島の住民過半人數より賴を受け此の群島は果していつれの管轄なる哉住人はいつれの保護を蒙るへきやを確知せんためなりと云へり

拙者猶彼に種々の尋問をなせしにピース之に答て云く此の群島は三の大島を併せたる總名なり曰く彼理（ペルリー）曰く勃念（ボネン）曰く米利（ベイリ）是也其他小島數多し

先年コモドールペルリーの日本に航し條約を結ひし時其船隊を曾て此群島中に會せし事あり此時に方つて右船隊の内「プリムツ」船號の艦長前に云へるベイリー島に上陸して合衆國の旗章を彰揭し之に對して祝炮を放ち之に據有せるの禮を行へり又千八百二十八年英國軍艦「プロソム」船號の艦長「ビーチー」人名も禮を以此島を占居し陸地に標柱を建て銅板を安着し「此群島英國の管轄なり云々」の銘文を刻したり此標柱銅板及ひ合衆國の旗章等今に存せり然るに今を去る事九ケ年前日本大君政府より一の官員を派出し家族六十員とともに此島に來りて日本國の名を以て禮式を以て此島を据有せり此官員の島地に在るや外國人の望みのことく地券證書を渡して島民に居留を許せり而して島中在住の外國人を悉く呼出し大君より彼等に居留を免許ありしを謝する爲の書面を示て皆悉く之に記名調印せしめたり然るに此后十四ケ月の後日本人は悉く本國より呼返へされ其後再ひ此島に來る事なし無人島居住の人は米利幹二十五名英民十七名佛民四名及布哇民數名あり

彼利（ペルリ）島には米利幹一名及ひ非勃（フヒルボツト）島の土人一名あり

此群島合して英方里百五十里あり而して天候甚佳にして地味實に肥たり尤も產物を收獲すへきの地なり而して漁利甚多し又たポルトロイトと云ふ良港あり別に内港と稱すへき處ありて鯨漁の船抔屢來りて船を濱邊に引付け修理を加ふる程安穩の港也

島中五歲より十六歲位迄の少年二十六人あれとも更らに學に入り智を增の事を知らす之れ全く土地は强者爲酋の政法なれは敢て開化に志す事をせす偶ま寃を受るの人あるも之を訴ふに處なし

ポルトロイド港は横濱港を距る事英里四百八十里神戸港を距る約そ五百里也日本國の開港場は此兩港を最も近しとす

甲比丹ビーズ又云へらく日本の官員此地を占め群島を居有するを公告せし時此群島一圓を外國人の爲め居留地及貿易場に開きたり

甲比丹ビーズは布哇島に赴き牛馬家畜を夥しく此島に輸入せしとしたりしかと住民一圓に先つ彼等何れの國法に從ふかを知り而して其后商業及ひ一般の事務を盛大にせんとの意なりと云々

拙者甲比丹ビーズに答へて云く拙者速に此赴を閣下（米國外務卿を）云ふ也（さして）に上申し合衆國政府にて果して此群島を管轄するや又此を管轄するの權を需むるやを知んとすと若又此島を日本の管轄なりと認るへき時に至りては甲比丹ビーズ又は他の或る人を合衆國の領事に會し此島に在留せしむへき歟を伺わんとすと固く前條の次第謹て爰に陳述し閣下の旨意を乞ふもの也

米公使デロングへ米政府より下知狀　英文譯

曾てコモドールペルリーか日本へ航渡せし時船隊中の一艦彼の島々を見分し合衆國の名を以て此島々を居有せし一件既に吟味を經たり然るに右船隊中の一艦の此島に至るや更に國會の免許を得し事なく其後といへとも當政府に於て彼海軍士官の前意を續助くるの主旨あるを知らす因て萬一合衆國の住民ありて住居を求めん主意の爲に此島に滯るあらは是らは其所行に付我政府より保護を與ふる爲の明許もなく又默許もなき者共也此景況に方つて彼の者共は正さに地求上疎濶の土地に集り住せんと決して定めて歸鄉の念なく合衆國を棄却せし者共とす之に因て合衆國民たるの權は我と其職掌とを廢棄するもの也

一八二　六月十四日　塚本少内史ヨリ外務大丞等宛

小笠原島ハ放置方然ルヘキ意響ナルモ外務省ノ見込至急回報アリ度旨通達ノ件

附屬書一、五月三十一日大隈大藏省事務總裁ヨリ三條太政大臣宛書翰

小笠原島處分ノ儀至急指令アリタキ旨再度上申ノ件

二、小笠原島處分ノ儀ニ關スル太政官ヨリ大藏省ヘノ指令案

小笠原嶋の儀に付別紙の通大藏省より上陳有之候に付熟考候處抑此島嶼は文久年間舊幕府より官吏被指置八丈島居民相移開拓着手外國人へ右嶋嶼は皇國へ屬し候儀及布告候處同島物産蕃殖の見込も無之費用許多に付追々御國民は爲引拂其後外國人而已雜居の地と相成候得共外國人は前布告に基き未た皇國屬島と相認候儀に候就ては官員被差遣島中規則等も夫々相定め候は當然に候處方今用度御多端の折柄産物蕃殖の目的も不相立荒嶋え御國財投沒も無益の儀に付前大藏大輔見込に任せ暫く度外に附し其儘被指置候方可然被存候條大藏省え別紙御指令案取調候處右は外國關係の事件尚御省御見込の義も可有之候間前大藏大輔幷に大藏省再上陳御指令案共取東御回し申候條御見込の件々至急御回報有之候樣致度此段及御回議候也

明治六年六月十四日　塚本少内史（印）

外務大小（マヽ）丞御中

追て本文差急き候義に付草々御協議有之度此段も爲念申進候也

註　本號文書ニ「前大藏大輔幷ニ大藏省再上陳御指令案共取東御回シ申候」云々トアル前大藏大輔ノ上陳書トハ一八〇附屬書一ヲ指スモノト認メラル

（附屬書一）

小笠原島の義に付再申上

我國八丈島東南に有之候小笠原島の義に付横濱税關より申遣候次第有之候に付當省見込前大藏大輔より上陳仕置候右は各國商船等同島え向け出港免狀願出候義屢有之税關於て强て可差拒辭柄も無之候に付尋常の手續を以差許來候趣に候得共若我國に屬し可申義にも候得は同島は不開港場の義に付御條約面に對し不都合を極め可申且又輸出入に付ては税則おゐて内外の區別も有之旁以前條取計方差支候間速に御決議御指揮相成候樣仕度此段奉申上候也

明治六年五月卅一日　大藏省事務總裁　參議　大隈重信

太政大臣　三條實美殿

（附屬書二）

大藏省え御指令案

小笠嶋（マヽ）の儀は前大藏大輔見込に任せ置税關取扱方等暫く是迄の通取計置可申事

一八三　六月十八日　上野外務卿代理ヨリ三條太政大臣宛

小笠原島ハ之ヲ放置セス韮山縣管轄トスヘキ旨意見上申ノ件

貼紙

三條太政大臣殿　　上野外務少輔

小笠原島の儀に付中島租税權頭申立書并大藏省上達の書面共添御下問の趣致熟考候は同島の義我所屬たる事著しく素より管官なかるへからす然るに往歳より外國人獵業の爲め此地に去就し或は在留する者數十人有之由に付去る辛酉年間幕府始めて外國奉行等を遣し島勢を巡知し近傍の各嶼に至る迄標を立て以て我所屬を明にし吏を置て在島の人民を管し候處其後物事多端遂に同島の事を熄む然るに維新の時に際て現に我所屬たる嶋嶼を度外に措き候義遺憾不尠乍併御國費多端の際物産蕃殖の目途未定の嶋嶼へ許多の御國財を投浪する亦無益の義にも有之是れ大藏省上陳の度外に措くと爲す所以にして費用を惜むの意を重しとする亦不得已義に有之候得共只度外に措くと爲す時は外船彼の島嶼へ向け出帆を願ふとも又彼地より物産を積來るとも是を默許して輸出入せしめざるを不得是れ甚快然ならざるのみならす將來の有爲に關し候間同島開拓樹殖等の義は暫閣措すとも差向韮山縣管轄となし判任官一兩名差置十分の體裁を張らす只衣食の需用を足すの目的を以縣の出張所を開き輸出入品共無税にて免狀を與追て條約改定の後は公然たる開港地になすとも夫れ迄の間は各國公使へ布告し雜居外人の爲前書の手數を許容する旨を定め置候はゝ假令神奈川港より彼島嶼へ輸出を願ふ時差許候而差支有之間敷且右の如く體裁を張らす一二の官員差置迄に候はゝ費用も更に些少大藏を傷ましむるに及ばすと存候右の通御一定候はゝ外人へ許容する爲の假規則は別段取調可相伺依て御下問の書類一同返却此段申進候也

明治六年六月十八日草

（貼紙）

即今小笠原嶋諸島ハ現在ノ事實ニ於テ在レトモナキガ如ク内國ノ利害ニ於テ差テ關係ナキニ似タリ然レトモ此般改テ度外ニ措ト定メ一度國外ノ樣見做ス時若後來他ノ一國ニテ此ノ諸島ヲ掠略シ自領ト主張セバ我國又夫ヲ承領シ其國ノ屬地ト認メザルヲ得ス然レバ再度時勢ニ依リ我等ノ版圖ニ復歸セシムルヲ欲ストモ事已ニ遲カルベシ故ニ即今俄ニ手ヲ下シ開拓ヲ初メ費用ヲ重ル事ナシトモ

只海外各國ヲシテ彌彼諸島ハ我ガ版圖内ニ在ル事ヲ承認セシムル樣ノ所置大要ナルベシ

彼ノ諸島ノ利益ニ至テハ已ニ多小ノ物産モ在且時々外國船ノ彼諸島ヘ航海免許ヲ乞者在時ハ必貿易上ニ於テ幾多ノ利益在ニ依ル事ナルベク最宮本氏未來ヲ深思スベク論アリ云々ノ説明論遠見トスベシ

次ニ此諸嶋ハ前體日本政府諸各國ト和親ノ條約ヲ結ビシ前ヨリ外國人モ來往セシ所ト見ヘ且内地隔絶ノ諸島ニテ居住ノ人モ多クハ外國人ニシテ自然事實ニ於テ差別アル事ナレバ未開港場ノ事トハ云ヘ格別ノ取扱相成トモ條約面ニ對シ掣キ難シト云事ハ差テアラザルベシ

差當リ韮山縣管轄トシ判任官兩人位差置云々ニテモ可然歟ナレトモ先彼諸島ハ暫時海軍省ノ所轄地同樣ニシ一船艦ヲ差出シ置其船將ヲシテ諸嶋ノ知事ヲ兼シメ保護關轄ノ道ヲ立ルモ可ナランカ然レハ船ヲ繫グハ何地ニ於テモ費用ハ大概同一事ナレバ只無事ニシテ内港ヘ繫ギ置モ彼諸嶋海ニ置モ格別ノ入費ナラザルベシ且海軍ノ運用航海練熟ノ爲大益アル更ニ疑ベカラス終リニ利害云々ノ説ハ掣キ當今我國ノ屬ト自ラ思而已ナラス外國人迄モ左承認スル處ノ地ヲ差立タル故障モナク自ラ捨テ度外ニ措トハ抑何ノ意ソヤ解シ難シ今曾是ヲ捨ルニモ相當ノ人ヲ遣シ實地ノ形情猶又能取調シ上ニテ彌不用ト決シタル時ノ事トスベシ

追算ニテ管轄スル方可然

註　本號文書ハ草案ニシテ達シニハ至ラサリシモノト認メラル

一八四　八月十四日　副島外務卿ヨリ三條太政大臣宛

小笠原島ハ之ヲ放置セス海軍省直轄トスヘキ旨意見上申ノ件

（朱書）「八月十四日達了」

三條太政大臣殿　　副島外務卿

小笠原島の義に付上陳

小笠原嶋の義に付中島租税權頭申立書并大藏省上陳の書面とも相添御垂問の趣致熟考候處同島の義は我部内たる素より不竣論然るに航海不便なるより殖民の方法を達せず近年外國人私占の地となり候處去る辛酉年間幕府外國奉行等を遣し島勢を巡知せしめ吏を置て在島の外民を管し夫々受書をも取置候末物事多端遂に開植の業を廢弛す然るに維新百度更張の時に會し却て是を度外に捨るは尤不可然義に有之候但國費多端の際一時に開手候は無益の義に有之去迚度外に差置候ては横濱港より物品積載小笠原島え向出帆を願ふとも又彼島より土産積來り輸入を願ふ時も是を默許して輸出入せしめさるを不得是甚快然ならざるのみならす諸般規

則に關渉し甚不都合に付是則度外に差置難き筋に有之候依て勘考候に同島開植の事は暫く閣き當分海軍省にて爲取扱品川碇泊の船艦の内より繰合せ一年一兩度つゝ試運轉旁彼島迄往復せしめ官廳取立尚又同省官員本省官員等も寄留致し島民の扶助幷取締の方法を設爲し候得は我政府の保護中に在る外民に付我海關え向け遞送の物品類は免狀收稅等の處分を施與候とも差支候義は無之如此相定候後漸を以通信往來の便誼を開き我刑民の内流移に可處者は實決せしめ本島え移植追々開拓漁獵の利を興し候はゝ全島維持の目途可相立就ては相當の官吏壹兩名今一應本島え派出實地檢閲爲致尚以后の確法可相立存候仍て御下問の書類返上且從前取調候本島關係の書類三冊相添此段上申候也

明治六年八月

追而本文關係の書類三冊は御一覽の後御返却有之度候也

註　本號文書ニ謂フ「御下問の書類」ハ一八〇附屬書ヲ指ス又「本島關係の書類三冊」ハ見當ラス

一八五　十二月九日　寺島外務卿ヨリ岩倉右大臣宛

外務省

小笠原島之儀者舊幕府於テモ官吏差遣シ取締筋其外着手候儀有之固ヨリ御國版圖タル儀者既ニ判然之處維新以來御多端之際改テ御處置モ無之今日ニ至迄其儘被差置候處外國船之内往々同島へ向ケ出帆免狀申請候者モ有之彼是不都合不少ニ付テハ今後相當之施設ヲ以テ島民撫恤土地取締及船艦往來之規則等ヲ相立漸々殖民漁鹽種藝を始土地適宜之利益ヲ興シ全島繁榮ノ術ヲ被爲盡候御旨意ニ付大藏海軍兩省へ協議ノ上差向着手ノ順次取調可伺出此旨相達候事

明治六年十二月廿三日

右大臣　岩倉具視

小笠原島處分ニ關シ速ニ評議アリ度旨具申ノ件

（朱書）「十二月九日達ス」

小笠原島御處分之儀ニ付再應陳述

小笠原島の儀に付中島租稅權頭申立書幷大藏省上陳の書面共相添先般御下問有之候に付過る八月中當省見込云々申進置候所未御評決不相成候哉同嶋の儀は彼我の別判然不致誠に方今多人數外國人住居いたし居候付今通りにて打捨置候ては彼是不都合不少已に同島は日本政府の所屬なる歟の旨英公使より申立の儀も有之候間旁速に御評議有之度此段申進候也

明治六年十二月九日　外務卿　寺島宗則

右大臣　岩倉具視殿

一八六　十二月二十三日　岩倉右大臣ヨリ外務省宛

小笠原島處分ニ關シ當面ノ方策取調ヘ意見稟議アリタキ旨達ノ件

事項一〇　下ノ關事件償金支拂ニ關スル件

〔第五卷事項八參照〕〔事項二、三參照〕

一八七　一月二十四日　佛國外務省ニテ岩倉大使ト佛國外相トノ對話書

償金殘高ノ支拂ノ停止方請求ニ關スル件

附記　佛國外相ヨリ岩倉大使宛右對話ノ書取答書和譯文

明治六年一月廿四日（西暦千八百七十三年第一月廿四日）佛國於ウエルサイル外務省岩倉大使同國外務卿レミュサ應接記の内

公使　ウートレー

侍座　鮫島辨務使

前略

一（岩倉使節）第二條は即下ノ關償金の事に候此事件は餘程入組居候事柄に付委細書面に認め持越し候間外務卿に後渡し可申候

一（外務卿）是を受取何れ披閲の上篤と取調可申候

一（岩倉使節）右ケ條に付是迄の成行を陳述す云く元來此下ノ關征討の擧に預りし各國には決して金額の償を以て本旨にては無之内海におゐて一港を開く時は右償金を出すに不及との餘地を日本政府に與へられ候へとも其節の形勢迚も其處置に至り候事出來かたく各國の望み通取計兼候により不得已償金を出す方に取極め候事に有之候爾來形勢大に變遷致し天皇陛下にも外國との貿易を益盛大ならんとの御趣意にて既に其證數多有之即ち日本政府自から大阪の港を開き海岸諸方に燈臺を築き稅目を改正し之を減省したる事の如き皆其確證に有之候是等を以て考ふるに日本政府は特に外國政府より望まれ候廉を一々遂け候のみならす其餘分の事をもなせし姿に候故是迄我政府外國人の便益を計り處置せし事篤と御推考被成最初の趣意に基き殘り高拂方をも差止相成候樣いたし度候

一（外務卿ニテ）貿易の爲め便益を御計り被成候事御盡力御坐候はゝ自分おゐて聊か疑を容れす候へとも右等の通相成候は日本政府唯外國人爲のみならす自國の人民にも其益を與へられ候に相當り利益は雙方の爲にて外國人のみ一方に歸し不申又燈明臺の如きは條約により御約諾通り御踐行有之候迄に候假令其費用の高は最初御見積より餘程差越し候共これを以て下ノ關償金拂高の代とは難致義と存候結局諸船より燈臺の稅を取立るの權を日本政府に任せ可申哉を論し候迄に有之大阪開港の義は使節より御申立も候へとも自分には信用難致彼地在留公使よりの申立にては泊場遠方にて貿易上利益無之より夫是以て日本政府の御申立は我政府にて如何決答可及哉否只今聢と御請合申兼候且又此一義に預り候各國と御談の上に無之ては御答いたしがたく他の國にては別段の便益なくしては承諾致間敷と存候間此義は只今より申上置候て差支無之候尤相談におよひ候事は出來可致且又佛國政府にては双方の爲め相成候樣精々盡力の事決て厭ひ不申候乍併又十分の御處置は御約束通り千八百七十二年皆濟可相成筈に有之候事は聢と申立置候又今日迚も御差支無之樣御用意有之候方御爲めに宜候但し會計の御都合に寄り御差支も候はゝ拂高の手續等御賴談相成候はゝ別段の事に候

一（岩倉使節）只今差出候書面篤と御熟覽の上書面を以て御報答有之樣致し度候

一（外務卿）承知いたし候

（附記）

佛國外務卿より差越候書取答書の譯

去る正月廿四日外務卿日本使節と面晤の節使節より同人へ渡せし下ノ關償金一條に付而は書面を外務卿注意熟談せり即其節の約を踐み不取敢書面を以て左の答を述ふ

日本政府より可拂殘金即ち償金の半高拂方を差止め度との見込を以て縷述せらるゝ趣意に付ては過日話上申入の通今更之を變易するの理あるを見す

最前右約定を取極めし時に當り外國政府償金の代りと見做せし所置を執行におゐては日本政府償金を拂ふに及はさりしなれとも其頃の形勢不得已の事情ありて償金を出す方を以て適意とせられし以上は更に外國に對し與ふる處の便益を唱ふる事なく盡く約諾の條件を果すへき筈なり其故は右樣の便利は今日に至り最早當初所望せしものにあらすまた其便利あるにもせよ外國人の爲になるへき程の事は日本人の爲にも亦益となれはなり日本政府外國との交際上におゐ

て近時頗る進歩をなせし事は佛國政府はこれを認めさるにあらす却て其開化進歩を感賞する者は佛國其者にあるへし且其實地の功績に至りては下ノ關償金の約を取極めし國々にても賞譽する事少なからす故に右拂方の延期を毎時承諾せしも畢竟日本政府の趣意を熟解しての事なり

燈明臺の建築其他貿易上の便益は日本人民の爲めにも大稗益ある事にして日本政府諸船の航路を照す爲め若干の金額を費せしは自國の諸船航海の爲めに大利を起せしにて外國諸船の航路をして容易に且安全ならしめ共に其利益を蒙らしめは自然往來するため最も重すへき方便を設けし也且日本に至る外國船は何れの國を論せす一樣に便益を受るなれは强て下ノ關の償金一條に關係する四ケ國のみに對し日本金庫より入費をかけられし事を陳述せらるるの理なきに似たり過日外務卿より天皇陛下の使節に縷述せしことく右書面の目的たる趣意に付佛國政府は右事件に關係する外國々に打合せすして獨決定するを得す佛國政府は日本に對し情誼懇篤なれは此一條に付各國政府と協議の上雙方のため滿足なるよふ落着せしめんとの望深し然りといへとも最初の延期を承諾せし後外國におゐては日本の形勢國論に不得已

の事情あるを權察し千八百七十二年の延期を承允せしなれとも其期限に至れは無相違拂方皆濟すへき約定なりし事を爰に申述るの理ありと考ふるなり

一八八　三月四日　和蘭國海牙ニテ岩倉大使等ト和蘭國外相等トノ對話書

償金殘高支拂中止方請求ニ關スル件

明治六年三月四日西曆千八百七十三年第三月四日荷蘭都府於海牙岩倉大使伊藤副使同國外務卿ケレツキドヘンウエーネン日本在留舊公使フアンドルウーヘン同新公使(マヽ)應接記の內

筆記　田邊一等書記
通辨　栗本二等書記

前略

今一事申上候馬關償金の一條に候我國政府より貴國政府へ對可相拂金額の半高追々延引致候一體我政府おゐても御承知の通外國交際貿易上におゐて頗る盡力いたし候事に付右償金に付て別段御勘辨も可有之哉と存候結局の處如何御考

御坐候哉右次第は委曲書面に記取持參候間右御熟覽の上可然御返答承り度候

彼馬關償金の儀は確乎たる御約定御坐候事に付決而御變革は有之間敷事と心得居候處昨年右償金御拂可相成期限僅に八日前に至り突然右談判使節方に御委任相成候旨御報告有之實は驚愕仕候事に候一體償金の儀は貴國通信各國に一樣關係候事には無之間此度の御使節おいて右御談判に被爲涉候事は不都合には無之哉此方にては御先約通御拂相成候事と企望いたし候外無之候

我右談判の儀は我々共より右關係の各國へ談判可及樣別勅を奉し候事にて右を不都合とは不被考候畢竟償金の起原は當時下ノ關又は內海おゐて開港いたし外國貿易の便利をなし候事にて償金には不及筈の處其節國步艱難右運に至り兼不得已償金の沙汰に相成候事に候左候へは我政府にも爾來外國貿易の爲頗る盡力いたし從て費用も有之往時に比し候得は多少の差御坐候事に付貴國政府にも前約の趣意に御立戻り御勘考の程も有之哉と相考候間御談判およひ候事に候右は書面に委曲を盡し有之候間先御一覽有之度候

彼償金の儀は貴國政府おゐて度々延期の御談有之殆と御拂方不相成哉と被疑候程に御坐候乍併右は是非御拂有之候樣此方にて御促し可申上權御坐候只今御話御坐候商買上種々御配慮有之候趣は事實左樣にも可有之候へとも償金の事に相綺ひ可申儀とは不相考候將又前申上候通償金の儀は各國一樣の事に無之候間右に付御談判の模樣に寄特約を以此國の便利を謀り候次第も可有之哉には候得共左候ては御國一體の御交際上に於て不都合御坐候間被行間敷奉存候結局御約束通御拂相成候事と此方にては心得候外無之候間御書面は拜見候も拜見不致も同樣と存候

我御說の趣承り候此方おゐても全く不筋の儀申入候事とは不被存一說御坐候事に付先此書面御熟覽相成度候

彼御書面落手いたし候へ共此方見込の趣は決て變改有之間敷存候御滯留も間合無之候間御返事の儀は御出立前に及候はゝ宜敷もし相後れ候へは御出先え向け差上可申且聢と申上置度候御書面熟覽の上御同意可申上筋に候はゝ無論に候得共此方見込通御同意仕兼其段御返事申上候はゝ償金の儀直樣御拂相成候哉

我償金の儀は貴國而已に無之英佛米等にも關係有之都て歸國の上取計候積に候間假令相拂候事に決すとも夫迄は延期有

之度候

彼英佛は英佛荷蘭は荷蘭元より別段に御坐候間他國におゐて如何樣の見込御坐候とも右には關係不致候今日迄も右償金に付度々延期の御談有之結局御拂無之哉に疑慮仕候

此我邊度々延期いたし候へ共所謂なく相延し候事には無之且其都度々々在留公使え引合の上雙方の承諾を以延期候事に付可拂金額を强て拂申間敷樣との擧動は立國の體におゐても決て無之事に候成程貴國と英佛等とは御携り有之間敷候へ共此方にては全く一事件に付同樣の處置にいたし度歸國の上取計申度と申候事に候右は御承知有之候哉

彼左候得は御歸國の上直樣御拂方取計可相成候事と心得可申候兩政府の間に確約御坐候事決て間違は有之間敷候

我心得候左候へは右書面に付別段御返答振も無之候得は今日承り候此口上にて貴政府御趣意も相分り候間別段御返事にも及不申候

彼乍併右書面一覽の上可申上條も可有之間是非とも御返事書面を以可申入候得共御出立前間に合兼候はゝ御出張先え差出し可申候

註　右對話書末尾ニ「御返事書面を以て可申入候得共」云々トアルニ關シテハ三二附屬書「下ノ關償金事件ニ付和蘭政府答書概略」參照

一八九　三月三十日　上野外務卿代理ヨリ太政官正院宛

米國駐劄森代理公使ヨリ送付ノ償金一件書類提出ノ件

（附屬書一）

一、受領償金ノ處分ニ關シ米國人「ノースロップ」ノ同國上下兩院ニ呈出セル懇求書和譯文

二、明治五年十一月二十六日右件ニ關スル米國人「ノースロップ」ノ意見書和譯文

三、一月一日米國人「ノースロップ」ヨリ州會議員ニ送付ノ右意見書同一內容英文

（朱書）「即日達ス」

正院　御中　　外務少輔　上野景範

長州下ノ關償金一件書類在米森代理公使ヨリ差越候ニ付右寫譯文差進申候也

明治六年三月三十日

（附屬書一）

亞人「ノルゾルプ」氏合衆國公會上下兩院ニ捧ケタル懇求書ノ寫

私儀謹テ我國官庫ノ中ニ納メテ未タ其用方ヲ決セサル彼日本償金ニ付愚見言上仕候然ハ右償金ヲ余政府通常ノ目的ニ費スハ公正寬仁ナル國民タル余合衆國ノ名義ニ符ハサル事ナリ因テ之ヲ直ニ日本政府ニ返濟スルニ就テハ種々ノ妨碍アルベケレトモ亦教育ノ良法施行ノ爲メ及ヒ文明開化ノ利澤ヲ推及スル爲ニ之ヲ費スニ着眼スヘキ至當ノ道理ナキニシモ非ス右ノ道理及ヒ他ノ判然タル道理ヲ以テ右償金ヲ余公會ノ適當ト考ヘ畫示シタル規則ニ從テ日本國人民教育ノ目的ノ爲メ適宜ニ用ユル事ハ眞ニ公正寬仁ノ赫然タル榮事ナルニ御注思アリテ御商議ノ上何トソ余國民ノ面目ヲ施シ併テ日本國民ノ利益ニ相成候樣右償金御配當ノ方法御決議有セラレ度此段謹テ奉懇求候敬白

譯者云ク同氏ヨリ諸學校ノ學頭及ヒ諸博士ニ差出タル回文ハ則同氏ノ日本償金一件ニ付云々ノ議論ニ大同小異ナレハ之ヲ譯セス

（附屬書二）

日本償金一件

千八百六十三年一小藩　朝廷ノ命ヲ待タスシテ外國商人及ヒ船艦ヲ掃攘セントテ下ノ關海峽ニ砲臺ヲ建築セリ同年七月十六日ニ至リテ下ノ關近海ニ於テ日本砲臺ト米國蒸氣「ワイフミン」船ト砲戰ヲ始メリ米船ハ烟管網具ヲ大ニ損傷セリ海軍局ニ於テ其修復料ヲ勘定ナセシニ五千元也出征彈藥ノ費用五千百六十九元惣計一萬百六十九元ナリ千八百六十四年九月英佛蘭米ノ四ケ國合縱シテ日本ニ向ヘリ其時偶々米國軍艦ノ横濱在港ナカリシカハ我公使パルロウト砲一門ヲ備ヘタル蒸氣「ターキヤン」船ヲ一月九千五百元ニテ借受ケ四日ノ間ノ戰ニ十八彈ヲ放發セリ其價二百六十元ニシテ總計我政府ノ費ス所一萬九千九百廿九元也千八百六十四年十月廿二日會同ノ上右四ケ國ノ申立ノ如ク償金三百萬元ヲ出サン事ヲ日本政府ニ於テ同意セリ右ハ四度ニ割合ヒ五十萬元宛ヲ等分ニ四ケ國ニ渡サン事ヲ約定セリ爾後三度分即百五十萬元ハ納リタレド殘五十萬元ハ千八百七十二年條約改訂ノ期限マテ若干時間絹帛茶葉ノ稅銀ヲ免除シ延期セン事ヲ四ケ國ニテ承允セリ右五十萬元ノ內三十七萬五千元

ハ我國ノ受納ス可キ分ナリ右ハ去冬下院ニ於テ棄捐ニナサン事ヲ衆議一決シ其趣ヲ上院ニ申立テ外國事務官ハ既ニ許准セリト

日本ヨリ納メタル償金ハ國務執政之ヲ預置キ合衆國官券ソ資金ニ加ヘリ千八百七十二年三月十二日「ハミルトン、フヒシ」氏ノ記載ニ據レハ七十八萬零三百五十四元九五ニ至レリト尙今日迄ノ利息ヲ加ヘハ八十萬以上ナルヘシ

去ル國會ノ折ニ余カ國諸ノ學頭博士及ヒ名望アル諸君子ヨリ差出タル懇願書ヲ許容アツテ我政府ニテハ淸國政府人民教育ノ爲ニ所謂淸國償金ヲ返濟スル議案一決スベク思ハレタリ但シ淸國償金モ日本償金モ其情實一樣ナル者ト見做サレタリ尤淸國償金ハ日本償金ヨリ八ケ年モ以前ノ事ナレハ尙能ク人民ノ耳ニ熟スル所ナリ右二口償金共今ヨリ之ヲ言ヘハ實ニ拂過タル金額ノ如シ偖當時淸國償金ハ大凡五十萬「ドルラル」卽一千八百七十二年三月十三日ニ之ヲ正算セシニ則四十二萬九千六百五十九「ドルラル」、一四ナリ之ヲ只我國ノ利益ニ耳用ユルハ我國ノ名望威德ヲ墜損スル也ト前ノ大統領「ビュカーン」國務執政「カース」及「セワルド」公使「ブリンゲーム」及「ワード」及「ロウ」在淸國代理公使ニテ淸國定約ノ節兼通辨官タル「ドクトル、エス、ダブルユ、ウエリアムス」等ハ之ヲ頻ニ感慨セリ然ルニ二ケ年前右ノ儀ニ付淸國皇帝ニ我國ノ說ヲ言出シタル時淸國皇帝ハ自重傲慢ノ國俗ナレハ貴國ノ望ニ一致スベク解說スルニ由ナキヲ以テ答ヘ我國政府ノ決意次第何トモ可然樣之ヲ所置スルヲ允可シタリ就テハ余思ニ此金ヲ返辨シ且之ヲ用テ淸國教育ノ利益ニ專ラ費スナラハ我國ノ名望ニ符ヒ且兩國ノ大利益タルヲ得ヘシト

現今淸國北京府翰林院ノ教頭タル我國有名ノ一學士「ドクトル、ダブリユ、エ、ビ、マルチン」ノ說ニ云右償金ヲ淸國人民ニ返濟スルナラハ則淸國人民ハ之ヲ最上ナル義氣公心ノ美擧ト尊重スヘシ而シテ若シ之ヲ盡ク當國ノ學校ノ支持ニ供スルナラハ則府下ノ人民ハ論ヲ待タズ淸國四陸ノ人民ニ至ルマテ萬世我國ノ仁心ノ厚キヲ銘肝忘ルヽ事勿ルベシ蓋金貨ノ利ト知識ノ利トハ淸國ニ屬ス然ルニ獨リ作善ノ利ニ於ハ萬世我國ト離レサルヘシ若夫我國自己ノ費用ニ之ヲ給スルナラハ則我國人民ノ屢々右金額ハ公平ニ論スレハ則正サシク淸國人民ノ所屬タルヘシト宣言シタル事實ニ背キ且我國人民ノ上ニ汚名ヲ蒙ラスニ足レリサレハ右金額ニ

學士椅子二三箇ヲ添ヘテ之ヲ淸國翰林院ニ寄付シタランニハ則我國人民ノ義氣ノ厚ク交誼ノ堅キ永世ノ表記タル事疑ヒナシ

實ニ現今ハ日本國ノ償金ヲ返辨スルニ極テ好機會ト謂フベシ蓋今日本國ヨリ我國ノ文明ノ學術ヲ學得之カ果實ヲ故鄕ニ齎サン爲ニ許多ノ書生ヲ送出シ今ハ本國ニ於テ普通ノ教育ノ法方ヲ熟々商量中ナリサレトモ右教育ノ新法ハ種々ノ防碍ニ遭ヒ頑固ニ舊法ヲ守ル因循家ハ徒ラニ外國ノ德威ヲ輕視シ先年歐亞ノ諸國ノ爲ニ蒙ラセラレタル種々ノ暴行ヲノミ再三口實トナシ古ヲ貴慕シ今ヲ慷慨シ古來未知ノ腥羶ナリト喋々之ヲ咎メ之ヲ罵リ故ラニ之ヲ古ニ挽回セントス而シテ右守舊者ハ所謂下ノ關償金ハ彼カ爲ニ剝奪サレタル者ト見做スハ尤ノ事ナレハ怪ムニ足ラス蓋シ一千八百七十二年三月二十日國務執政「ロビーソン」氏ノ官報ニ由レハ我國人民下ノ關ニ於テ受タル損耗ノ金額ハ唯一萬九千九百二十九「ドルラル」ニ過サレハナリ然レトモ外劫內亂ノ屢次ナル中ニ揉マレ忍耐ノ久シキ遂ニ日本國開闢ヨリ以來比類ナキ新紀年ヲ開クヲ得テ現今ノ政府ハ寬大公平改革進步ヲ期シ將來帝國ノ福祚長久利益安全ナルヲ更ニ確實ニセント欲シテ遠大ノ良策ヲ巧ミニ斟酌スルモノト謂フベシ然ラハ則此好機會ヲ捨テ何時之ヲ返濟セント欲スルヤ

大使及森公使及大木文部卿等ハ右償金返辨一件ヲハ深ク感心シタル喜ヒヲ言出シタリ實ニ今右償金ヲ返濟スルハ極テ好機會ニテ日本國ニ於テ新學制ノ施行ヲ勸奬勇進スルニ又利アラン且右ハ全ク正道ニ符ヘル處置トシテ我カ國民一般少モ日本國民ニ隔意アルナク同情相憐ムノ好意ヲ顯ハスニ足レハ則其作善ノ功德ハ返濟シタル金額ニ過キテ尙尊フヘキ價アリト謂フヘシ其上之カ爲從來日本國人ハ所謂先入主トナルノ故ヲ以テ只謂レモナク外國人ヲ忌猜スルノ癖モ大ニ減シ我國ノ交誼威德貿易ヲ大ニ益シ西方ノ學術技藝文明開化ヲ斯ニ移シ來ルモ亦更ニ容易カルベシ」森有禮閣下ノ余ニ示セル教育ノ方法ヲ日本ニ施行シテ實効ヲ奏スルハ中々一朝一夕ノ事ニ非ス此ノ如キ廣大ナル企ハ種々ノ妨碍起ラサルヲ得サレハ宜ク深謀遠慮ノ久キヲ經テ始テ之ヲ施行スルヲ得ヘシ就テハ大使等歐亞諸國ノ學校規則ヲ熟察實驗ノ上之ヲ畫策シタル者ヲ以テ右教育ノ方法ヲ施行スルノ基本トスヘシ其畫策ノ詳細ナルハ斯ニ緊要ナラザルヲ以テ暫ク斯ニ記サズ

近頃東京ニ行キ文部卿大木氏ニ面會ノ折ニ彼「アムヒルスト」大學校ノ博士「ヂョリウス、エッチ、セアイル」氏日本國婦女子教育ノ爲ニ所謂下ノ關償金返濟ノ企ヲ同氏ニ告タル由ナリ右面會ノ事ヲ横濱港ヨリ書送レル即去ル九月五日附ノ書簡ニ云ク前略

大木氏ハ殊ニ我カ告ヲ欣ビ若彌此儀行ハルヽナラハ我國ノ大幸何事カ之ニ如カンヤト云ヘリ當時日本人ハ童幼教育ノ法ヲ設ケタレトモ婦女子ノ教育ノ法未タ立サル缺典ヲ憾メリ故ニ若シ我公會此國婦女子教育ノ爲ニ右償金ヲ備フルナラハ則其所置ハ正且賢ノ美擧タルベシ蓋シ右金額ハ彼實ノ損害ノ度ニ過キテ之ヲ拂ハセタル者ナレハ則之ヲ返スヲ豈正ト謂サル可ンヤ蓋現今ハ日本人婦女子教育ノ法ノ國家ニ大切タル事ヲ知リ只曾此缺典ヲ憾メル時ナレハ則右金額ヲ供ヘ此教育ノ法ヲ設ルヲ得ルノミナラス以テ日本國中ニ我國ノ德威ヲ一層耀カスニ足ルヘケレハ則之ヲ返スヲ豈賢ト謂ハザルベケンヤトアリ

右償金一件ニ付嘗テ日本政府トノ定約ヲ專ラ監督シタル「ウイリヤム、エッチ、セワルト」氏此國ニ到レル後殊ニ昨年間此國ニ於テ經驗スル所ノ事情ヲ以テ右償金ヲ返シ日本婦女子教育ノ法ヲ興サントノ決意ヲ一層堅固ニシタリト同氏ノ親友擧テ同氏現今世ニ在ルナラハ此企ニ熱タ左袒センハ疑ヒナシト謂ヘルヲ余亦之ヲ信許ス

右償金一件ニ付余カ持論ハ即現今日本國ハ一般教育ノ爲ニ已ニ非常ノ金額ヲ費シ且大使ノ請合ヲ得タル森氏ヨリ證書ニモ右償金ノ内僅カ一「ドルラル」ト雖モ他用ニ費サス盡ク教育ノ費用ニ供ント明カニ記シタレハ更ニ又別ノ約定ヲ待タス日本政府ニ直ニ之ヲ引渡ヘキトス就テハ余我カ公會ニマテ速ニ一ノ案書ヲ認メ我國諸學校ノ諸博士及諸學頭ノ下ニ之ヲ回達シテ各ノ證印ヲ受ケ然後之ヲ公會ニ差出シ直ニ右償金ヲ日本政府ニ引渡スカ或ハ公會ヨリ右ノ用方ヲ畫シ其レノ規則ニ從テ日本國教育ノ法ニ供フルカノ決定聞ント欲スサレトモ按スルニ公會ノ定メタル其ノ規則ニ從テ之ヲ教育ニ費ヤサス可トノ策ノ如キハ前ニ華盛頓府及其他ニ於テ起レル（右償金ハ元來英佛蘭三ケ國ト連合シタル定約ヲ以テ請取タル者ナレハ右三ケ國ノ一致ヲ得サレハ直ニ日本政府ニ返濟スル能ハス）トノ異論ニ答ヘタル案書ノ中ニ記載サレタルハ必然ナラン今夫右償金大凡八十萬「ドルラル」餘無益ニ我政府ノ手ニ滯在スル事柄タルヤ畢竟特ニ善ラサル耳ナラス動モスレハ是不善ヲ釀ス媒妁タランノ患ナキニシモ非ルベシ而若今之ヲ教育ニ費セハ則萬世無盡ノ資本ニテ又多分ノ利得アルヲ得ン所謂外劫内患ノ艱難ノ中ニ揉レナガラ近頃ノ驚クベキ進歩猶且將ニ施行セントスル企ノ眞ニ盛且大ナルヲ洞察スレハ則方今事務ノ險危ナル地位ニ際セル日本國ノ情實ハ正ニ是字内ノ同情相憐ミ患難相救フヘキ時ト謂フヘシ此時ニ當テ若我國其機ヲ察シ其情ヲ憐ミ今ヲ以テ彼ヲ惠ムヘキノ日ト理會スルナラハ日本國民ノ幸福タルノミナラス又我國民ノ幸福タリ我カ諸ユル國史ニオイテ余未タ此ノ如ク容易ク一大國民ノ大改革ヲ助クルノ好機會アルヲ觀ス然ハ則此明カナル職務ヲハ寧ロ天與ノ權理ト見做シテ余等之ヲ忽ニスベカラサルベシ

一千八百七十二年十二月二十六日

亞人

ビー、ジー、ノルゾルプ述

（附屬書三）

THE JAPANESE INDEMNITY.*

STATE HOUSE, NEW HAVEN, CONN.
January 1st, 1873.

The enclosed memorial is sent to all the Presidents of Colleges and to State and City Superintendents of Schools in the United States. If it meets your approval, will you sign it and secure the signature of the members of your Faculty, with the appropriate title of each, and return as soon as may be to the subscriber. The importance of this measure must be my apology for thus taxing your time.

The numerous inquiries made as to the nature of the Japanese Indemnity, since I advocated its repayment before the congressional committees on foreign affairs, indicate a general desire for information on this subject.

In 1863 one of the minor daimios, without authority from the central government, erected batteries in the Straits of Simonoseki to keep out traders and all foreign vessels. An engagement occurred between the American steamer "Wyom-

* For a fuller statement, see "The Independent" of Dec. 26, 1872.

ing" and the Japanese batteries and vessels on July 16th, 1863, off the town of Simonoseki "with considerable damage to the smoke stack and rigging of the "'Wyoming.'" The cost of repairs was estimated by the Navy Department at $5,000, and the ammunition expended at $5,169. Total, $10,169. In September, 1864, there was a combined expedition against these Japanese by the English, French, Dutch and Americans. As no United States man-of-war was then in Yokohama, our minister chartered the steamer "Ta Kiang," with one Parrott gun, at the rate of $9,500 per month. During the four days' hostilities she fired eighteen shells, valued at $260. So the total expense to our government was $19,929.

Under the convention of October 22d, 1864, the Japanese Government assented to the demand of these four Powers to pay an indemnity of $3,000,000. It was to be paid in installments of 500,000 each, and shared equally by these powers. Three installments, or $1,500,000, have been paid.

The House of Representatives last winter *unanimously* passed a bill "to release the government of Japan from the payment of the balance of the Indemnity Fund remaining unpaid, amounting to $375,000, under the convention of October 22, 1864." This bill is now in the Senate, having just been approved by the Senate Committee on Foreign Affairs. The unanimity of this action is a hopeful sign.

The Japanese Indemnity Fund now in custody of the Secretary of State is invested in United States bonds, and according to the statement of Hon. Hamilton Fish on the 12th day of March, 1872, amounted to $780,354.98. Adding interest to the present time the amount will exceed $800,000. In accordance with a similar petition from the Presidents and Professors of our colleges and other distinguished gentlemen, presented to Congress during the last session, a bill seems likely to pass in favor of repaying the Chinese fund directly to the Chinese Government, or for educational purposes in China. But both funds are entitled to the same consideration. The Chinese payment having

been made eight years earlier than the Japanese has been more fully before the public. In both cases this surplus is essentially an overpayment. The Chinese Indemnity Fund is now nearly half a million of dollars. (The exact sum, Jan. 17, 1870, was $421,000.) To use this money for our sole advantage would be derogatory to the honor and dignity of our country. Such was the sentiment of Presidents Buchanan and Lincoln, of Secretaries Cass and Seward, and Ministers Burlingame, Ward and Low, and Dr. S. W. Williams, several times U. S. Charge d'Affaires in China, and who, as Chinese Interpreter (sic), participated in the negotiations of this treaty. His Imperial Highness the Prince Kung, when consulted on this subjet two years ago, said that self-respect and national pride, would prevent his doing anything that could be construed into a request. He was content to leave it to the American Government to follow its own sense of justice; but the return of this indemnity, and its devotion to the interests of education in China "would be highly honorable to the United States and advantageous to both countries."

Dr. W. A. P. Martin, the distinguished American scholar, who is now President of the Imperial College in Peking, says, "If this money were returned to them, they would regard it as an unparalleled instance of honesty and integrity, and if applied to the support of their national College, it might continue for ages to impress the people of this capital, and the heads of this empire, with the fact that we have a national conscience. While the pecuniary and intellectual benefit would belong to China, the moral gain would be with us. The use of that fund for our own national purposes would belie the frequent confession that it belongs morally to the Chinese, and prove to us a disgrace instead of a credit. On the other hand, the endowment with it, of two or three chairs in the Imperial College would be a lasting monument to the integrity and friendship of the American people."

The present time is specially opportune for this movement. Japan is sending large numbers of students here for a thorough course of study, that

they may carry home the blessings of our science and civilization, and is now maturing comprehensive educational plans. But the new schemes meet obstacles. Conservatives deprecate foreign influence and recount the many wrongs already suffered from Europe and America. They glorify the past and denounce the ills unknown in the good old days of isolation. It is not strange that they deem the Indemnity an extortion as the total amount of our pecuniary damage, according to the official statement of Secretary Robeson, March 20th, 1872, was only $19,929. But in the face of manifold spoliations from abroad and difficulties at home, a new era has been opened for Japan—the noblest in all her long history. The government is liberal and progressive and is wisely considering plans which will bless and benefit the empire through all coming ages.

Mr. Mori and the Japanese Embassy and Mr. Oki the Minister of Education in Yedo have expressed the deepest interest in this movement. It would give timely encouragement in the inauguration of

the new system of Education in Japan. Both as an act of justice and an expression of national sympathy and good will, its moral influence would be of greater value than the money refunded. Such an appropriation of these funds would remove existing prejudice, increase American intercourse, influence and commerce and introduce Western science and civilization. Though the Educational Service in Japan proposed to me is indefinitely postponed, my interest in the progress of that most remarkable and progressive people, especially in their present embarrassments is unabated. The time for inaugurating their new and grand educational system has not yet come. A plan so comprehensive must involve difficulties, and require long preparation. The return of the embassy, and the completion and circulation of their report on the schools of Europe and America, are among the many necessary preliminaries.

Professor Julius H. Seelye of Amherst College in his late visit at Yedo had an interview with Mr. Oki, the minister of Education, and laid before him

the plan of returning the Japanese Indemnity Fund, to be used for the purpose of female education in Japan. Describing this interview, Prof. Seelye says in a letter dated Yokohama, Sept. 5, "Mr. Oki was exceedingly pleased with the proposal, and assured me that it would if accomplished, be most welcome here. The Japanese are doing much in the education of young men and are feeling the need of, but are not yet taking many steps towards female education. If Congress would appropriate the Indemnity fund to this purpose it would be eminently just and wise. It would be just, because the amount originally paid was disproportionately large to the offence, and it would be wise not only as inaugurating a work among this people, which I can see plainly needs such an impulse *just now*, but as serving powerfully for the increase of American influence in Japan."

The late Hon. Wm. H. Seward, under whose administration, the stipulation for the Japanese Indemnity Fund was made, after visiting that country and especially during the last year became

much interested in the project of devoting this fund to the education of the daughters of Japan. I am assured by his intimate friends in Auburn, that were he now living "he would warmly second this plan."

My own opinion is that this money should be returned to the Japanese Government *without conditions*, especially as they are now making extraordinary expenditures for general education, and as Mr. Mori has given me a written assurance, sustained by the Embassy, that every dollar of it would be devoted to educational purposes. The petition includes another alternative to meet the objection felt in Washington and elsewhere "that, having been received under a joint treaty with England, France and Holland, it cannot properly be returned directly to the Japanese Government without the concurrence of these powers."

The fact that over $800,000 of this money remains unexpended in our hands may suggest unworthy schemes or bogus claims; but devoted to education, it becomes a permanent and profitable invest-

ment. In view of the wonderful progress recently made, and the still grander plans now forming, in the face of difficulties and dangers *from without*, as well as within, no nation ever more needed or merited the sympathy and encouragement of the world than Japan in the present crisis of her affairs. Happy will it be for us and for them if America understands her day of grace. Never in all our history have we had the opportunity of aiding so easily in the regeneration of a great nation. This plain duty or, rather, this privilege we cannot afford to neglect.

BIRDSEY GRANT NORTHROP.

一八七〇 十一月二十八日 寺島外務卿ヨリ英國公使ヘ

償金支拂方延期ノ件

Yedo,
November 28, 1873.

Sir,

It will doubtless be within the recollection of Your Excellency that when the Ministers of Great Britain, France, the Netherlands, and the United States informed His Excellency Sawa, then Minister for Foreign Affairs, and Your Excellency, then Vice-Minister for Foreign Affairs, in a Note identique dated the 7th March 1870, that the application of the Japanese Government to be allowed to delay until May 15th 1872 the payment of the remaining half of the Shimonoseki Indemnity had been granted by their respective Governments, the Ministers of the Said Four Powers distinctly informed the Japanese Government that the proposal of the latter was accepted on the express condition that it was to be regarded as the final settlement of the question, and that no further postponement of payment was to be asked for by the Japanese Government.

In the language of the Said Note identique the Ministers of the Said Four Powers declared that "in view of the repeated delays which have occur-"red in the payment of the Said Indemnity it be-"comes necessary that the Notes Now Exchanged

"between their Excellencies (the Japanese Ministers) "and the Undersigned should declare that the "present postponement is final, and that the Japa-"nese Government will not fail to pay to the Four "Powers interested in the Shimonoseki Indemnity, "on the 15th May 1872, the whole of the moiety "remaining due, namely, one million five hundred "thousand dollars." And in acknowledging the Said Notes His Excellency Sawa and Your Excellency stated in your despatch of the 9th April 1870: "In reply we have the honor to inform you that "we accept the delay offered, namely, till the 15th "May 1872. In view, however, of the repeated "delays in the payment of the Said Indemnity, it "is agreed that no further postponement shall take "place."

In the face of this distinct agreement, the Representatives of Great Britain, France, and the Netherlands were informed by His Excellency Soyéjima, then Minister for Foreign Affairs, and Your Excellency, then Vice-Minister for Foreign Affairs, in a note dated the 8th May 1872, just one week before the payment of the Said Money became due, that His Excellency Iwakura, who had then left Japan five months, had been instructed to treat on this subject with the respective Governments of the three Said Powers.

This reference resulted in an understanding on the part of the Said Powers that payment of the money due to them should be deferred until the return of the Embassy to Japan.

As it is more than two months since the Embassy arrived in Japan, and as neither Your Excellency, nor your predecessor in Office has yet alluded to the subject, it becomes my duty to join with my Colleagues, the Ministers of France, and the Netherlands, in requesting Your Excellency to be so good as to inform us of the course which the Government of Japan propose to take in reference to this question.

I take this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

HARRY S. PARKES,
Her Britannic Majesty's Minister in Japan.

His Excellency,
Terashima Munénori
Minister for Foreign Affairs

（右和譯文）

翻譯文

大不列顛佛朗西和蘭亞米利加四國の公使千八百七十年第三月七日附同文の書翰を以同四國政府に於て下ノ關償金殘半高千八百七十二年第五月十五日迄延期可致樣貴政府の願承知の趣澤閣下其砌外務卿幷閣下其砌外務大輔え致報知候砌四ケ國にて貴政府の願意にしたがひ候得共右の通延期致候を以て此一件の確定とし此後貴政府より延期不可願の箇條を以て致承允候事は四國公使より明白に致告知御承知可有之然は前書同文の書簡を以右償金是迄拂方度々致延引候右此度は右期限より決て延期不可致且千八百六十二年（七カ）第五月十五日惣て可拂半高則百五十萬弗下ノ關償金關係の四ケ國え相拂無相違旨を雙方取替の書簡に可書加と有之然る處澤閣下幷閣下より千八百七十年四月九日の御回答には西洋千八百七十二年五月十五日迄被成延期趣致承知候右は度々延期相成候に付右の期限迄には無相違不殘相拂可申との明文有之候處右期限七日程前則千八百七十二年第五月八日附の書簡を以其節の外務卿副島閣下幷其節閣下外務大輔より其以前五ケ月程に貴國致出立候岩倉閣下に右事件委任せられ大不列顛佛蘭三ケ國の政府へ可致談判趣同三ケ國公使え致告知候に付遂に貴國使節日本歸着迄拂方延期可致樣同三國に於て致承知候運に相成候處使節歸國後最早二ケ月に相成候得共閣下よりも前職の外務卿よりも未た其發言に不被及候間拙者佛蘭同僚と申合貴政府に於て右事件に付如何なる御取計可被成哉相伺申度候敬具

英國公使
ハリエスハルケス

寺島外務卿閣下

註一、本號文書ニ「千八百七十年三月七日附同文の書翰」「千八百七十年四月九日の御回答」「千八百七十二年第五月八日附の書簡」トアルハ夫々第三卷三六八、三六九（但此處ニテハ四月七日附トナリ居レリ）及第五卷一八六ヲ指ス

二、佛國公使及和蘭辨理公使ヨリモ同日附ヲ以テ同文意ノ書簡送達アリタリ

一九一 十二月十五日 寺島外務卿ヨリ英、佛、蘭各公使宛

岩倉大使ヨリノ談判承諾無キ上ハ償金ノ支拂ハ實施スヘキモ茶、生糸稅則增額ノ約定復活セシムヘキ旨回答ノ件

十二月十五日達了

當十一月廿八日附貴翰致披見候然ハ下ノ關償金之儀ニ付御申越之趣致承知候右ハ先般右大臣岩倉具視等貴國聘問之次前件償金之儀ハ卽去ル元治元年九月廿二日卽西曆千八百六十四年十月廿二日付取極書中第三ケ條ニ揭載セシ如ク從來各國政府ノ眞意目的ハ其國民ト日本トノ貿易ヲシテ盛大ナラシメ其利益ヲ擴充セシメントスルニアルナレハ金額ヲ以償補スルヨリハ却テ其代リトシテ下ノ關港カ又ハ內海ニ於テ別ニ他ノ港ヲ開クヲ以テ好トスルヲ希望サレシ事有之候ニ付我政府ハ右取極書之趣旨ヲ目的トナシ實際ノ證據ヲ顯ハス爲メ慶應二年五月十三日千八百六十六年六月廿五日附ニテ新定約書ヲ議定調印シ右約定書ヲ以海關ノ稅目ヲ改メ手數料ヲ廢シ各種ノ法則ヲ寬優ニシ總テ外國ヘ對シ不容易便益ヲ與ヘ更ニ安政五年卽西曆千八百五十八年ノ條約ノ外大阪ノ港ヲ開キ東京ヲ開市シ且右新定約書十一ケ條ニ基キ我政府ハ外國船ノ進港ヲシテ安穩平易ナラシメン爲メ內地ノ要務ヲ差置キ會計ノ窮乏ヲ顧ミス急ニ各所ヘ燈明臺及標木等ヲ建築スル大工業ヲ興セリ此工業ニ費ス處ノ金額既ニ一百萬弗ニ超過シ其他造幣寮ヲ建內外ノ貨幣ヲ一致ニスル等枚擧ニ遑アラサル財用ヲ費セシハ何レモ中外ノ貿易ヲシテ昌盛便益ナラシムルノ目的ナラサルハナシ然レハ下ノ關暴擧ノ過失ヲ償フノ實功ヲ顯ハシ文明ノ友國ニ對シ大ニ面目ヲ開ラキ得ル之場合ニ至候ヘハ右償金ノ殘額ハ總テ免除ニ相成度段縷々右大臣ヨリ懇談ニ及ヒシ處右ニテハ猶充分ナラサルトノ儀ニモ可有之歟貴政府御不同意ニテ我請求ニ應セラレス今更ニ閣下ヨリ御來示ノ段ハ到底無餘義次第ト相考此上ハ金額ヲ以決算スルヨリ他ハ有之間敷ト致決定候依テ貴國政府ヘ可拂殘金額ヲ三度ニ割リ來我明治七年一月四月七月何レモ月末ニ相拂可申候就テハ是迄右延期幷利足ノ代リトシテ一旦御談決ニ相成候茶生糸稅則增額ノ儀ハ其約定ノ廢シタルヲ起復シ右全額償還ノ日ヨリ我海關ニテ收納爲致候筈ニ有之其旨御承知有之度存候依テ回答旁此段得

御意置候敬具

明治六年十二月十五日

外務卿 寺島宗則

英佛蘭公使閣下

陸 本號文書ニ「元治元年九月廿二日即西曆千八百六十四年十月廿二日付取極書」トアルニ關シテハ第二卷第一冊一二三附記一參照

一九二 十二月十六日 英國公使ヨリ寺島外務卿宛

岩倉大使ノ談判ナルモノ事實ニ相違セル旨申越ノ件

別紙書 明治五年十一月六日岩倉大使ト英國外務卿トノ應接記

下ノ關償金支拂ニ關スル件

Yedo

December 18, 1873.

Sir,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellency's note of the 15th next communicating a statement of the representations made by His Excellency Iwakura Udaijin when in England on the subject of the Shimonoseki indemnity.

On comparing this statement with the record of what passed between His Excellency Iwakura Udaijin and Her Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs I find that the two accounts do not quite agree, and I therefore think it desirable to place in your hands an extract from the Minutes of the Interview held between the Udaijin and Earl Granville on the 6th of December 1872.

It will be seen from this extract that Earl Granville stated clearly to the Udaijin that he would be happy to consider the point of remitting the indemnity if the Japanese Government would adopt a progressive policy in regard to the removal of existing restrictions on intercourse and commerce. He counted greatly on the representations that would be made by such distinguished Ambassadors on their return to Japan and felt sure that they would take statesmanlike views of these questions

and devise means of meeting the views of Her Majesty's Government in a reasonable and practicable way.

Unfortunately however the course taken by the Japanese Government since the return of the Embassy has not been in accordance with Earl Granville's hopes. They have shewn no disposition to remove the existing restrictions on intercourse and commerce which are wholly unsuited to the present condition of Japan and are as injurious to the interests of Japanese as they are to those of foreigners. While Japanese are allowed to gratify every wish whether as regards travel, study, residence or trade in the territories of all the Treaty Powers, and while the Japanese people are themselves petitioning their Government to allow foreigners to visit the interior of Japan, the Japanese Government over which the late Chief Ambassador now presides has yet shewn no desire to consider in a favorable spirit the proposals for freer intercourse which have been submitted to the Japanese Government by all the Foreign Representatives.

The representations of the Udaijin contain no offer of an equivalent for the remission of the indemnity. In return for the trifling concession to foreigners of allowing their vessels to lie off Osaka the Japanese Government desired the advantage of delay in the opening of Yedo (Tokio) and Niigata until 1869. The interest on the Shimonoseki indemnity which has been remitted to the Japanese Government amounts to half the cost of constructing the light houses which were asked for by the Foreign Representatives and the Japanese Government must admit that native shipping benefits as greatly as foreign by these facilities to navigation. The mint is less a boon to foreigners than to the Japanese Government as it saves the latter from the ruinous disorder and loss which their former debased and ever fluctuating currency occasioned them, and if properly worked it might be made productive of great profit to the Government. "Other costly measures too numerous to mention" are also alluded to in the representations of the Udaijin as having been undertaken with the object

of encouraging and facilitating internal and external commerce, but I can only say that I am not acquainted with them. The revision of the Tariff could have been claimed under the Treaties five years after the opening of the Port of Kanagawa, whereas in order to meet the wishes of the Japanese Government it was not revised until two years later than that date. The conditions contained in the convention attached to the Tariff are either a repetition of those agreed to by the Japanese Government in London in 1862 when a delay of five years was granted them in the opening of Hiogo, Osaka, Yedo and Niigata, or they are as advantageous to Japanese as to foreigners and were therefore not agreed to in the interest of the latter alone.

I have to request Your Excellency to place this letter and its enclosure before the Council of State.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

HARRY S. PARKES.

(右和譯文)

當十五日附の貴簡致落手候然は岩倉右大臣閣下我國聘問の次下ノ關償金の儀に付御談判の趣御告知の主意致承知候其砌岩倉閣下我國外務卿と應接の覺書致比較候はゝ普合不致廉も有之候間千八百七十二年十二月六日右大臣閣下とヱルグランビル氏と應接の抄書差進し申候依て貴政府當今交易交際を致錮東候法則を廢し開明なる法を立るに到り候はゝ欣然償金免除の談判に可取掛趣ヱルグランビルより右大臣え明白に申述候事と相見へ申候且斯程高名なる使節歸國の上陳述可被成事深く致依賴候間必前件御明考の上我政府の存意に叶ひ候樣適當にして便利なる御處分御工夫可被成と外務卿に於て存候得共不幸にして使節歸國致候以後貴政府の行事ヱルグランビル希望致候事に相適せす現在交易交際錮東の法則全貴國當今の景況に合せす內外人民同樣に害するものといへとも夫を廢すへき氣色も無之條約濟各國に於て貴國人民の旅行留學居留交易望に任せ候又は貴國人より外國人に內國通行を可許樣願書差出し候得共前の大使當時司り居候貴政府より未た各國公使え交際自由に致樣談判致候箇條可然御勘考の景色も相見へ不申尤右大臣縷々談判致候得共償金免除に代るへき事一切申述候義無之貴政府より外國船舶大坂沖に碇泊爲致候些少の免許に代りて東京幷新潟開市の事千八百六十九年迄延引致し且燈明臺建築の入費も有之候得共下ノ關償金利足免除の高同入費半額に當り右に依て航海便利の筋も有之と雖も外國船貴國船同樣に相及し候事に有之候

一造幣寮は外國人の爲めに起し候擧業より貴政府を相助候ものに相當り候其以前通用金貿金多く頻に變遷致し莫大の損と混雜との弊を相助け候事に有之可然施行致候はゝ貴政府の大利益に可相成筈のものに有之候其他枚擧に遑あらざる財用を費し內外の交易をして昌盛便益ならしむるの目的を以起し候事有之との趣右大臣申聞らるゝと雖拙者に於て更に存不申候

一條約に從ひ神川(ママ)開港より五年の後稅目改正の筈に候得共貴政府御請求に從ひ二年の間致延引又は稅目附錄の條約に於て致記載候ヶ條或は兵庫大阪東京新潟開港五年延期を致承知候時千八百六十二年龍動に於て貴政府承諾のヶ條と同意或は內外一樣の利益有之候間外國人のみの爲に致決定候箇條には無之閣下より此書簡幷別紙共貴政府の御一覽に御呈し有之度存候敬具

十二月十八日

英國公使

ハリヱスハルケス

寺嶋外務卿閣下

(附屬書)

Extract from Minutes of Interview between Earl Granville and Iwakura Udaijin Chief Japanese Ambassador.

December 6, 1872.

On the question of the payment of the Shimonoseki Indemnity Lord Granville observed that when two Governments make an arrangement it was unusual for one of them to seek to withdraw from it. In the last correspondence which had passed upon the subject, the Japanese Government had solemnly guaranteed the payment of the Indemnity on the 15th of May, 1872. In the memorandum handed in by Terashima, His Lordship could find no mention of an equivalent for the Indemnity, although one was stated by Terashima to be con-

ained in it. In this matter, however, Her Majesty's Government did not wish to make a bargain. Their opinion was that a mere question of money ought not to interfere with the much larger question of the friendly relations between the two countries. He would, therefore, state to the Ambassador that, if, on the return of the Embassy, the experience they would doubtless have gained in the meantime led them to make such representations as would induce their Government to move in the line of policy indicated at the last interview, he would be happy to consider favorably with his colleagues the question of the indemnity. He had indicated to the Ambassadors how friendly feelings might be promoted and commercial intercourse extended. The British Government were desirous that the Japanese Government should afford greater facilities for European ships to visit other Ports than those now open to them by Treaty and for Foreigners to travel in the interior of the country.

Iwakura replied that, on his return to Japan, he expected to be able to carry out what he conceived

to be most conducive to the interests of Japan and other countries, and he felt confident that a good understanding might be come to when the Treaties were under revision. To give an example—it was disirable that Foreigners should be allowed to travel in the Interior of Japan just as in England and although the question was beset by numerous difficulties, he hoped that, by means of good regulations, travelling in the Interior might be made safe and agreeable.

Lord Granville said that he was aware that they had difficulties to contend with, but that he was confident much might be looked for from the favorable reports of a distinguished Embassy like the present. He felt sure they would take statesmanlike views of these and other points, and he therefore hoped that some means might be arrived at of meeting the views of Her Majesty's Government in a reasonable and practicable way.

Iwakura wished to point out that the Indemnity was a question quite distinct from that of the revision of the Treaty. He had always understood

that the desire of the British Government was not to receive money but to remove prejudices and to promote commerce between the two peoples. They had, therefore, in the first instance, asked for the opening of Shimonoseki, or some other port as an equivalent for the payment of the indemnity. This demand it was at that time impossible to concede, and it therefore became necessary to fall back upon a money payment.

Lord Granville repeated that Her Majesty's Government had no wish to drive a bargain in this matter. Their right to the money payment was indubitable, but if they found that the views of the Japanese Government were becoming more progressive, he would recommend his colleagues to consider the question of remitting the payment of the remaining instalments. The removal of restrictions on intercourse and commerce, which was all that was asked for, was as advantageous to Japan as to other countries. He asked them to do nothing hurriedly, but only pointed out the direction in which they ought to move in order to place relations which were already good on a still better footing. If the Japanese Government did so, the British Government would not haggle about a sum of money.

Iwakura asked if he was to understand that he could look for no more definite answer until the return of the Embassy to Japan.

Lord Granville admitted that such was the case. As the Ambassador was unable to negotiate, he could only express his own views very generally.

Iwakura urged that the indemnity had no relation to the revision of the Treaty.

Lord Granville observed that the tone of His Excellency's remarks would seem to imply that he expected a concession without offering any equivalent.

Iwakura replied that he thought the Memorandum which he had handed in showed that by constructing lighthouses and in other ways an equivalent had been given.

Lord Granville said that the ratification of the Treaty, and the revision of the Tariff which were

referred to in the Memorandum could not be considered in this light. The refusal of the former would have been a hostile act, and the revision of the Tariff could have been claimed under the Treaty two years before it was made. The lighthouses were an advantage to Japan as well as to Foreign Countries. Did His Excellency mean when he spoke of the lighthouses as an equivalent, that the Japanese Government would pledge themselves never to levy any light dues on foreign ships.

Iwakura asked if such a pledge would be accepted as an equivalent.

Lord Granville said that he was not prepared to say that it would. He did not however wish to make this a matter of money calculation, but would much prefer to remit the payment entirely if the desired advances were made in the general policy of the Japanese Government.

Iwakura then asked if the demand for payment would be deferred till the return of the Embassy to Japan.

Lord Granville replied that, without making any

positive agreement to that effect and in consideration of the assurances he understood the Ambassador to offer, namely, that the Japanese Government would advance in the line of policy previously indicated, he would consent to maintain the statee quo both in respect to the payment of the indemnity and to the duties upon tea and silk until the return of the Embassy.

（右和譯文）

貼紙

別紙譯文

千八百七十二年十二月六日ヱルクランビル日本大使岩倉閣下と談判覺書抄

下ノ關償金拂方に付ヱルグランヒル左の通申述候

一凡二ヶ國の政府互に約する事有之時一方に於て退かんとする事無之以前此事件に付往復の書簡取替せ候末日本政府に於て千八百七十二年第五月十五日迄に右償金屹度相拂候事を約し候寺嶋閣下より差出候覺書の內償金の代りを被致記載候由には候得共拙者に於て左樣の事を不見乍併此一件に付英國政府に於て商賈賣買に齊しき談判は致

度無之只金子に關する事を以兩國交際の懇親を故障す可らす候間使節歸國の上夫れ迄致熟習候事を以政府に勸め先日應接の砌拙者致教諭候法に赴き候樣處分被致候はゝ償金の儀は同僚と宜敷方の評議可致既に懇親を厚し交易の融通を廣大に可致事を使節に致教諭日本政府外國船をして條約開港場の外の港え入津せしめ猶便利を廣大にし且外國人內國通行を許可する事英國政府にて致希望候

岩倉閣下の返答

歸國の上內外利益を生する事を施行可致存し候條約政正の時必互に相辯する樣に可相成存候縱ひ英國と同樣日本內國にも外國人通行を許可致度候處種々の故障有之候間好規則を設け內國通行無危難愉快に致さんと致希望候

グランビルの答

種々故障有之趣は致承知候得共當時來られし高名の使節宜敷樣政府へ被申立候得は必大事成就可致と致希望候此一條又領事に於ても卓量の上英政府の存意に叶ひ候適當にして實地に施行し便利なる處分におよふ事を致希望候

岩倉閣下の答

尤償金の事と條約改正の事とは全く關係無之事にて元より英政府の存念金子に御望は無之只頑固の念を拂ひ兩國の間交易昌盛に被成度存念と致承知候間最初償金拂方の代りとして下ノ關又は他港を開度望雖有之其砌に在ては難叶無餘義償金拂ふべき事に致決定候

グランビル之答

英政府に於ては此一條に付商賈賣買に齊しき談判は致度無之金子受取へき道理は相違無之候得とも日本政府進步の法を設候はゝ償金の殘高拂方免除の事致評議候樣同僚え相勸め可申尤交際交易の錮束を廢するより外は願ひ不申右は日本內外一般に利益有之事にて輕卒の事は相勸め不申只今厚き交際を猶更厚くなさんとすれは其赴く可き法を教諭する而已に有之日本政府にて右樣致處分候はゝ英政府に於ては金子の儀は彼是論じ不申候

岩倉閣下の答

使節日本に歸國迄に右の返答より猶一層の確答は有之間敷や

グランビルの答

左樣には候得とも使節の方に於て談判致候權理無之候間拙者に於ても只大略の了簡申述候より外無餘儀候

岩倉閣下の申

償金の義は條約改正には關係不致事と再應申述候

グランヒルの答

閣下の論にては拙者より物を呈し候ても其許より格別代りの品を御遣し無之樣の事と存候

岩倉閣下申

差出たる覺書の通燈明臺致建築其他の事を以右の代りと致候事と存候

クランヒル答

條約勅許又は稅目改正の事右覺書に記載雖有之代りと思ふ可らす第一條不承知の事は敵國に取扱候所業に有之且稅目改正の事は條約面に依る改正二年前に催促致候はゝ改正可致筈に有之燈明臺は外國のみならす日本の利益にも相成申候間燈明臺を以代りとする時は日本政府にては永代外國船より燈明臺の運上を不可取立との約束に有之候や

岩倉閣下申

若右樣御約束致候はゝ是れを以右の代りと被致候や

クランヒル答

必其代りに可致と申約束は致かたく乍併是は金子勘定の事にはいたし度無之日本政府惣體の國法拙者存込の通進歩候はゝ右拂方全免除致候方宜敷存候

岩倉閣下申

使節日本へ歸國迄拂方延期被成下候や

クランヒル答

聢とは約束難致候へ共使節に於て前申され候國法に進歩致すと申聞られ候間使節歸國迄償金拂方又茶生糸稅も其儘に致置候事致承諾候

（貼紙）

此方筆記照合候處言語先後繁簡の差有之候得共大意內地旅行と不開港繫船とを以て取替物とせんと欲するの意隱然吐露いたし居候處は雙方共相異なく候

事項一一 箱館賊徒討伐ノ際取押ヘラレタル「ペイホー」號ノ損害賠償請求ニ關スル件 〔第五卷事項一三參照〕

一九三 三月二日 宮本外務大丞ヨリ 榎本開拓中判官等宛

「ペイホー」號抑留事件ニ關スル米國公使ヨリ送付ノ訊問要項ニ對シ下ケ札回答アリ度旨懸合ノ件

三月二日相達ス

各通 榎本開拓中判官殿 長谷部開拓少判官殿

宮本外務大丞

ペーホー船一件に付米國公使デロング華盛頓府へ申立候前別紙の件々決答あらん事を同公使より請求せり依て別紙の件拔萃いたし差進候間右書面に對し候復答振及御尋問候間毎條下へ提札を以て御記載有之度候此段及御懸合候也

明治六年三月二日

註 本號文書ノ「別紙」ニ關シテハ一九四附屬書及同附記參照

一一 「ペイホー」號ノ損害賠償請求ニ關スル件 一九三 一九四

一九四 三月四日 榎本開拓中判官等ヨリ 宮本外務大丞宛

「ペイホー」號抑留ニ關スル米國公使ヨリノ訊問要項ニ對シ回答ノ件

附屬書 榎本中判官宛ノ訊問要項ニ對スル下ケ札回答

附記 長谷部少判官宛ノ訊問要項ニ對スル欄外註記回答

貼紙 三ノ十五號

宮本外務大丞殿 開拓判官

榎本中判官えの御懸合書別紙御答下ケ札いたし則御廻申候

長谷部少判官は明五日出省御面會の上委詳御答可及筈に付

兼て御承知有之度此段申入候也

明治六年三月四日

（貼紙）

明治六年三月四日開拓使ヨリ下札ノ上ニテ返事

（附属書）

（貼紙一）

榎本分

一甲比丹バツセルトル右船に初て關係せし次第は則ち元フアーブル、ボールン商會函館のデフアクト政府と見認めし榎本政府より賣渡證書を以て右船を讓受け同社中にて所有せしに其船其港内に破損の體にて沈沒したるを見てバツセルドル右船を又買入れ夫を水上に浮め假に補修を加へたり而て其讓證書を携へ出港したり且亞米利加の旗章を表し航海し得へき正しき航海證書を其領事館より得たり

（貼紙二）

一此迄外諸船より日本水夫を雇入るゝ例を以て右船も亞米利加領事へ願ひ其港の長官より水夫を乘組ませたり萬一其乘組たる水夫の内壹人たりとも榎本へ仕役されたるものあるとも甲比丹に於ては更に存せす故に此事に付彼れに其責を歸すへからす

（貼紙三）

一此迄外諸船より日本水夫を雇入るゝ例を以て右船も亞米利加領事へ願ひ其港の長官より水夫を乘組ませたり萬一其乘組たる水夫の内壹人たりとも榎本へ仕役されたるものあるとも甲比丹に於ては更に存せす故に此事に付彼れに其責を歸すへからす

（貼紙四）

賣渡證書ハ慥ニ取替セリ

（貼紙二）

此條不審、右船ハ此方ヨリ「ファーブル」商社ニ賣渡ス前ニ故ラニ岸ニ乘上ゲ修復ヲ加ヘ而後試運轉濟ニテ賣渡セリ、「ファーブル」ノ手ニ入リタル後損所生ジテ沈沒セシヲ見ズ

（貼紙三）

「ファーブル」商社ヨリ亞商ヘ轉賣セシハ彼家ノ事ニテ其後ノ顚末ハ此方ニテハ一向存不申候

（貼紙四）

右船「ファーブル」社ヘ賣渡ノ節ハ渠ノ乞ニ任セ在來乘組ノ水火夫中ニ就テ若干人借シ置候得共亞ニ轉賣函館開帆ノ頃彼方ニテ更ニ何人ノ水火夫ヲ新ニ僦入タル歟ハ存不申、尤モ官軍ノ情態探鑒又ハ其他ノ要務等ヲ帶テ此方ヨリ乘組セタル者ハ一切無之候

（附記）

註一、本號文書ニ「長谷部少判官は明五日出省御面會の上委詳御答可及筈」トアルモ三月五日附ヲ以テ同少判官ヨリ所勞ノ爲出省不能ノ旨申越シ居リソノ後如何ナル形式ニテ回答セシカ明ラカナラサルモ三月二日附送達セラレタル尋問書面ニ欄外註記ノ形式ヲ以テ同少判官ノ回答記載シアルモノ存スルニヨリ左ニ附記ス

長谷部分

（欄外註記一）一閣下右船を捉獲せし時火器兵卒は勿論短筒の如きものも船中にはなかりし就ては此を捉獲し使用に供せし時は全く無砲無兵の商船也然れは豈此をもて爭論するの理あらんや

（欄外註記二）一此迄外諸船より日本水夫を雇入るゝ例を以て右船も亞米利加領事へ願ひ其港の長官より水夫を乘込ませたり萬一其乘組たる水夫の内一人たりとも榎本へ仕役されたる者あるとも甲比丹に於ては更に存せす故に此事に付彼れに其責を歸すへからす

（欄外註記三）一右船函館港を開帆せし時官軍は青森港に在りて函館征討のため兵馬を整頓せり右船漏出せしにより白日に難澁の體を表し青森港に入れたり素り其時船中僅か二三十人の乘組なれは豈敢て攻襲交戰するの力あらんや

（欄外註記四）一貴國長官右船え尋問し其船幷乘組の者を調へん事を望まれし時は聊故障なかりし

且右船中に水夫として榎本に仕役さるゝ逆賊ある由にて直に貴國長官其者を捉獲したり之に付ては聊故障なかりし唯出帆するに協力を要す因て其人の代りに別人を遣わされん事を希望したるのみ也

（欄外註記五）一貴國長官右船を捉獲し米國旗を卸して自己の旗を揚けたり其船を運送として久しく貴政府へ用いたり因て其後亞米利加公使より閣下へ右船の捉獲甚不條理に付右船差戻方を請求したり

（下ケ札）

（欄外註記七）

（欄外註記一）無炮無兵其通なり

（欄外註記二）器械方に一の士官體のものあり外に通辨士稻本あり此一士官は元榎本の黨にして此船に乘組時は其黨を出て乘組しなり

（欄外註記三）此乘組人數不殘青森にて締りを付預け置榎本等降服の後不殘差許したり

（欄外註記四）此二三十人は不殘日本人也外に頭取可申者二三人外國人也

（欄外註記五）此事決して無之候

（欄外註記六）船の證書類船中一切無之此事を尋ねし處何も無之是より上海へ修復云々

（下ケ札）長谷部より船將え送れる書翰は如何なる文體なる哉

（欄外註記七）長谷部青森にて斷申越候也（マヽ）辰連候舟を取揚る旨の書翰を送れり但返事はなし

註二、右「長谷部より」云々ノ下ケ札ハ初メ外務大丞ヨリ送達セラレタル訊問要項書面ニナク欄外註記七ハコノ下ケ札ニ對スル回答ノ體裁ナリ

一九五　三月五日　米國外務卿宛「ベッチェルダー」ヨリ

「ペイホー」船抑留ニヨル損害賠償並ニ米國提携
時ニ對スル書簡方督促ノ件

Copy

Sir,

Permit me to address you as the medium through which I can get justice from your Government for wrongful acts done me by Governor Hashibe.

I have been waiting long and patiently for a settlement of my claim for the seizure, detention and loss of The American Str "Peiho." Yet I am just informed by Minister De Long, that his repeated efforts to get a written reply to his last dispatch to the Foreign Department relating to the "Peiho" claim, has not met with the usual success. Therefore I have taken the liberty of addressing this statement to you, believing you can, and will give me a hearing and have the case properly investigated.

At present my record does not stand as clear at the Foreign Office of your Government, as it should, simply on account of Governor Hashibe's seizure of the "Peiho," and his refusal to enforce your order relating to the wrecks at Hakodade sold to me under guarantee of your Gov't.

No one ever in the employ of your Government who rendered them more valuable and faithful services during the time I was employed by the different departments of your Government with the "Yangtsze" and other vessels, than myself, and such services would have continued had I been paid for the seizure of the "Peiho" as I should have been, and your orders enforced by said Hashibe relating to the wrecks. And here allow me to call your attention to the fact, that a few months after the "Peiho" seizure, your Gov't did publicly discharge this same officer who caused that seizure, as entirely unfit to enforce the orders of your Government and not competent to protect the interests of the Mikado's Gov't in Yezzo. And furthermore it seems to me as if the fact that I had permission from your officials to purchase any wrecks in Yezzo had been entirely overlooked. At that time I was rendering valuable aid to the Mikado's forces with the Yangtzce as a transport, and when Enomotto lost the rudder of the Frigate "Kaiyo-Maru," your Government had then a great desire to procure the "Kaiyo Maru" from Enomotto, and having a few months before raised and saved an Iron Steamer in China of 4,000 Tons, Mr. Lindau explained to Governor Issakey the practicability of saving the "Kaiyo Maru" to the Mikado's Gov't, hence the permission given me, and while negociations were pending between Lindau of Walsh Hall and Co. and Gov Issakey the "Kaiyo Maru" was totally lost at Esasai and only the Battery could be saved. At the same time it was well known that there were other steamers disabled there and Gov Issakey gave me permission to buy any of them, and in case I had not completed all repairs before Enomotto's forces were captured that the Mikado's Gov't would respect any purchases made by me from Enomotto's Gov't.

At the same time Enomotto sold "Peiho" she was ashore, sunk and half filled with water and of no practical value to Enomotto or the Mikado's Gov't, and as I saved the "Peiho" the benefits accruing belong to me only. And furthermore during the time the "Peiho" was under seizure, Gov Issakey and every official with the exception of Hashibe that I talked with, always admitted my right to the "Peiho," and furthermore I was after assured by the United States Minister, Admiral, Consuls, Walsh Hall and Co. and many officials of the Mikado's Gov't, that the steamer would be returned to me and that the seizure was wrong and not sanctioned or authorized by the Foreign Department of the Mikado's Gov't and they were only waiting for advices from this officer, who ordered the seizure and then the "Peiho" would be returned to her owner. Still before I left Awamori Bay, I called on Gov Hashibe on two different occasions offering each time to take any dispatches for Yedo that he might wish to send, and each time he told me that he had sent all the particulars of the seizure of the "Peiho" to his Government.

Yet two months after said seizure, his dispatches had not reached your Dep't at Yedo, and again the same excuse was made that your department had

no correspondence relating to the "Peiho."

And yet you could have readily procured the information you wanted from Your Admiral, Commanderin Chief, and officers of the Army, and Navy, who were at Awamori Bay during said seizure. They could also inform you that had I at the time of the seizure taken the "Peiho" in tow of the "Yangtzce" to Yokohama, and left the Mikado's employment there and then, that I should have protected myself by so doing, and caused your war to have continued much longer, and Your Government would have incurred a greater loss than the cost of many "Peihos." I believed then as I do now, that your Government meant well, and that by faithfully continuing with the Admiral and Commander in Chief in transporting their troops and finishing the war and stopping that great expense and misery to the Mikado's Government, that Your Government would repudiate an incompetent officials act, and restore me my property and repay me for the injury and loss sustained.

Your neglect to do so for so long a time, I believe to be caused by bad advice.

And I am fully confident your Gov't will be greatly benefitted by allowing me to help you save many millions annually, that you are losing by inexperienced Brains.

I trust you will excuse me for intruding on your valuable time and hope you will order such steps taken as will repay me for the loss I have incurred by the unlawful seizure of the "Peiho."

I believe you will agree with me that this case has laid altogether too long, and as by giving up the "Peiho" to me, you virtually admitted that you were in the wrong. Now do you not think yourself that your Government is doing a great wrong to me by withholding the money from me and thereby causing my financial ruin for the want of said money? As the case now stands, do you think your Government will be benefitted by having this case with all the evidence, affidavits and correspondence submitted to my Government at Washington proving to the world that some of your officials are wanting in honor, competency, legal and diplomatic

experience becoming a civilized nation which desires the approval of the nations of the World?

I beieve you will admit I have been waiting very patiently for this case to be settled.

I have great confidence in this country, its climate, its people and although I have seen your Gov't make many mistakes I believe it has a glorious future, and if I do speak more plainly than other men, it is because I know I am right, and therefore ask you to excuse my style of addressing you, and now in all candor I beg you to have this claim adjusted and no longer try to screen the acts of such an official, but prove to the people of Japan that you do not repudiate the law and customs of other nations, who invariably in like cases discharge the official and pay the damages incurred by his ignorant acts, and render an ample apology to the Government for the insult done to its Flag.

I would further add for your information, that Commander Williams of the United States Sloop of War "Oneida" on his arrival at Hakokade (immediately after its capture by the Mikado's forces) learning from the United States Consul there of the seizure of the "Peiho" and insult to the Flag, notified Consul Rice to proceed with him to Arwanmori where the "Peiho" then was, under seizure, with the Japanese Flag hoisted when he would take the "Peiho" to Hakodade where there was a Japanese Man of War which Commander Williams would compel the Commander of the Japanese Man of War to replace the American Flag upon the "Peiho," and salute the same. It was only at the urgent solicitation of the Consul Rice and myself that we could induce Commander Williams to wait for advices from his Admiral and Minister, both of whom approved of Commander Williams' course.

The only time I have been at the Foreign Office about the "Peiho" claim was with Minister De Long. After admitting to Minister De Long that he had good ground for demanding a settlement of this claim, he was told that according to the Japanese Govt's international law, they would prefer not to pay the "Peiho" claim then, adding that the Gov't of England had just consented to have the "Alabama

Claims" submitted to arbitration after 8 years constant denial of her liability, therefore if England should be found to be wrong before the arbitrators, then there would be plenty of time for Japan to change her mind and alter her international law.

The "Alabama Claims" award has been made and in my opinion it is time the "Peiho" owner has justice rendered him. Now if you are not disposed to settle this claim equitably, why not submit the same to arbitration? I am perfectly willing to settle this case, by leaving it in the hands of your legal advisers in Yedo. Say two of them and in case they do not agree they to select the third and the amount of damages awarded by them to be final and binding on both parties.

I have the honor to be
Most respectfully and faithfully
Yours
J. W. BATCHELDER.

Yedo,
March 5th/73.
To His Excellency
Soyèzima Gaimukio,
Minister of Foreign Affairs.

(右和譯文)

知事長谷部ヨリ余カ蒙リシ不正ナル所業ニ付貴政府ヨリ至當ノ處置ヲ得ヘキ方便トシテ閣下ニ上陳セン

サレハ余久シク忍耐ノ心ヲ以テ夫ノ合衆國船「ペーホ」號ノ分捕、挽留、損亡ニ付余ノ請求落着アラン事ヲ待テリ然ルニ公使シイデロング氏右「ペーホ」船一件ニ付先日外務省ヘ宛タル書簡ノ返簡ヲ得ントテ再三盡力アリシガ今以其返簡ヲ得ザル由近頃其報知ヲ得タリ是ニ於テ余ハ閣下ノ聽受アリテ右一件ヲ至當ニ吟味アラン事ヲ信シテ忌憚スル所ナク左ニ陳述ス

余ノ記錄ハ其實明瞭ナルカ如ク貴政府外務省ニ於テハ現今判然タラズソハ只ニ知事長谷部右船ヲ分捕シテ貴政府ノ保證ニテ余ニ賣渡サレタル夫ノ箱館ニ在ル破船ニ付閣下ノ命令ヲ奉シ肯セサリシヲ以ナリ

余「ヤンツズ」船及ヒ其他ノ船ヲ以テ從前貴政府諸省ノ雇役ニ在リシ間ハ誰有テ一人モ余ヨリ卓越シテ貴政府ニ信實有益ナル勞役ヲ盡セル者ナシ然リ而シテ「ペーホ」船分捕ニ付余至當ニ償還ヲ得且右破船ニ關係シタル閣下ノ命令ヲ長谷部ノ奉行セシナラハ斯ノ如キ勞役ハ尙依然タラン爰ニ余閣下ヲシテ左ノ事情ニ着眼セシメン即「ペーホー」船分捕ノ後二三ケ月ヲ經テ貴政府ハ右船ヲ奪有セル此官員ヲハ全ク貴政府ノ命令ヲ奉行スル能ハス且蝦夷地ニ於テ皇帝政府ノ利益ヲ保護スルニ任ヘズトナシ公然ト免職セル事是ナリ且又余貴政府ノ官員ヨリ蝦夷ニ在ル諸破船買入ノ許可ヲ得タル事ハ全ク等閑ニ打捨置カレシカト考ヘラレタリ從前余ハ右「ヤンツズ」船ヲハ運漕船トシテ運轉シ皇帝ノ兵隊ニ有益ナル輔助ヲ與ヘ且榎本夫ノ「フレガット」形海陽丸ノ舵ヲ失ヒシ時貴政府ハ榎本ヨリ此艦ヲ奪取ラント頻リニ希望シタリ然ルニ其時ヨリ二三ケ月前四千噸ノ鐵船支那ニ於テ之ヲ引揚ケ援ケタル例アリシカハリンドウ氏知事佐々木ニ右海陽丸ヲモ皇帝政府ニ保有セシムベキヲ說示シタリ爰ニ於テ余ニ右許可ヲ與ヘラレシ事トハナレリ然シテウオルス、ホール社中ノリンドウ氏ト知事佐々木トノ間ニ於テ此相談未タ一決ニ至ラザル中「イサヽイ」ニ於テ右海陽丸ハ盡ク破船シ僅ニ其大砲耳ヲ救フ事ヲ得タリ是時ニ當テ他ノ蒸氣船モ亦此邊ニ於テ破船セシ事知ラレシカハ知事佐々木皆之ヲ余ニ買入ル事ヲ許可セリ而シテ萬一榎本ノ船隊未タ盡ク奪取ラレサル中ニ余諸修理ヲ充分セサルトモ皇帝政府ニ於テハ余カ榎本政府ヨリ買入タル物ヲ認許スベシトノ許可ヲ與ヘリ此時榎本右「ペーホー」船ヲ賣リシニ右船ハ陸ニカカリ沈沒シテ水其半ニ滿テリ而シテ是ハ榎本政府ニモ亦皇帝政府ニモ實地ノ價ナシト謂フベシ然ルヲ余之ヲ救ヒ得タレハ隨テ生スル利益ハ只余ニ屬スル耳ナリ其上「ヘーホー」船分捕ラレテアリシ間モ長谷部ノ外ハ知事佐々木ヲ始メ其外余カ面晤セシ官員皆每ニ余右船ヲ有ツノ權利アルヲ認許セリ且又余屢々合衆國公使水師提督諸領事ワルスホール社中及ヒ皇帝政府ノ諸官員ニ由テ余ニ右蒸氣船ノ必ス恢復アラン事將右分捕ハ不正ニテ皇帝政府ノ外務省ニ於テモ之ヲ認可セザリシ事及ヒ彼等ハ只ニ其分捕ヲ命シタル官員ヨリノ指揮ヲ待耳而シテ其指揮次第是ハ其持主ニ恢復アラン事等ヲ屢々余ニ保證アリタリ然ルニ余書森灣出帆ノ前兩度マテ知事長谷部ニ音信シ彼カ東京ニ送ルベキ書簡有ラバ之ヲ持參スベキ旨ヲ言出セシニ兩度共彼レ余ニ告クルニ「ペーホー」船分捕一件ノ顚末ハ已ニ巨細ニ政府ニ進達セリト告ケリ然ルニ右分捕ノ後二ケ月ヲ經テモ尙彼カ書簡ハ東京貴省ニ達セズ

而シテ貴省ハ「ペーホー」船一件ニ關係シテ少シモ往復ナカリシト辨解アリタリ

然ルニ閣下ノ要スル報告ハ當時靑森ニ在リシ水師提督海陸兩軍ノ總督士官等ヨリ閣下容易ク聞取ヲ得ン又若從前分捕ノ折ニ於テ余「ペーホー」船ヲ「ヤンツス」船ニ曳セテ横濱ニ去リ以テ彼地ノ皇帝ノ雇役ヲ缺キシナラハ余ニ於テ自己ヲ防護シ貴政府ノ戰爭ヲシテ甚タ永ク續カシムルニ至リ之カ爲貴政府ノ損亡ハ數艘ノ「ペーホー」船ノ價ニモ遙ニ過ルナルベシトノ事ヲモ亦彼等ヨリ閣下ニ報知スルヲ得ン從前余ニ於テハ貴政府ノ好意アル事ヲ今ノ如ク信シタレハ總督ヲ助テ彼カ兵隊ヲ運送シ以テ戰爭ヲ終ヘ皇帝政府ニ大ナル入費且災害ヲ防ントテ信實ニ盡力シケレハ貴政府ニ於テハ必ス其任ニ堪ヘザル官員ノ處置ヲ棄テ余ニ余カ所有物ヲ恢復シ且余カ受タル損害ヲ余ニ償還アラント信シテ更ニ疑フ事ナカリキ

然ル處今ニ至ルマテ閣下之ヲ其儘ニ差置キ給ヘハ余ニ於テハ其所ニ不善ナル勸言アリテ爾ルナラント信ス

且貴政府若余ヲシテ貴政府ヲ輔佐セシメハ彼ノ經驗ナキ人物ニ由テ年々已ニ費耗セル數億元ヲ省クノ利益アルベシト充分ニ信許ス

余ハ閣下ノ貴重ナル時間ニ斯モ蠶入スル事ヲモ閣下ノ海容セン事ヲ信シ且余ハ右船ノ不正ナル取押ニ由テ余カ受ケタル損亡ニ付相當ノ償還アラン事ヲ期望ス

右一件ハ甚タ永ク吟味ニ掛リシ事ナルハ閣下モ御承知且ツ余ニ右「ペーホ」船ヲ打捨置カレタレバ則閣下モ亦不正ナリシ事ヲ隱カニ默許アリシト謂ベシ然ラハ閣下ニ於テハ貴政府ヨリ余ニ償金ヲ拂フ事ナク余ニ大ナル不正ヲ爲シ之カ爲メ余カ會計ヲシテ破債ナラシメタル事ヲ推察セザルヤ

夫レ文明國ノ爲ス所ハ必ズ世界萬國ノ善シトスル所ヲ以テセサル可ラズ然ルニ今此事件ニ係ル證書類誓詞往復書類等ヲ以テ現今ノ儘之ヲ吾ガ華盛頓政府ニ委任セハ貴政府ノ某官員ハ文明國相應ノ氣節才幹ヲ缺キ又法律交際上ノ事件ニ經練ナキヲ示シ以テ之ヲ世界ニ證スルモ尙貴政府ノ利益タラント考フルヤ

余ハ此一件落着ニ付テハ甚タ忍耐シテ待テルヲ閣下モ御承知ノ事ナラン

余ハ平生貴國ノ國柄風土人民ヲ大ニ信用ス而シテ假令余貴政府ニ失策ノ數回ナル事ヲ目擊セシト雖モ余思フニ其將來

ハ必ズ繁盛ヲ起スベキ者ナラント且ツ余ニ正理アリト自知スル故ニ他人ヨリ一層忌憚スル所ナク議論シテ今斯ク直言隱ス事ナク閣下ニ陳述スル所ノ文體ヲハ海容アラン事ヲ希望スルニ由テ願クハ閣下右請求ヲ裁制アツテ最早斯ノ如キ官員ノ處置ヲ庇護スルナク何卒貴國人民ニ閣下ハ夫ノ諸外國ノ法律及ヒ常例ヲ廢棄セサル事ヲ證明アラン事ヲ即チ何レノ國ニ於テモ斯ノ如キ場合ニ會スレハ必ス斯ノ如キ官員ノ職ヲ解キ彼カ不束ナル所業ヨリシテ生シタル損亡ヲ償還シ且其國旗ヲ凌辱セル事ノ爲ニ其政府ニ充分ナル辨解ヲナス者ナリ

尙又余閣下ニ左ノ事ヲ告ン、サレハ皇帝ノ兵隊箱館ヲ攻取リシ後間モナク合衆國ノ小軍艦オネイダ號指令官ウヰルレム氏彼地ニ到着シ彼地ノ合衆國領事ヨリ「ペーホ」船分捕一條及ヒ右國旗凌辱ノ始末ヲ聞キ右領事ライス氏ニ其時右分捕セラレテ日本ノ國旗ヲ揚ケテ碇泊セル靑森ニ同行シ之ヲ箱館ニ曳キ來リ然ル上當時彼地ニ日本ノ軍艦アレハ右軍艦ノ指令官ヲシテペーホ艦ノ上ニ改テ亞米利加ノ國旗ヲ揚ケシメ而シテ之ヲ祝サシメン由ヲ告タリ然ル處余右領事ライス氏ト共ニ强テ指令官ウヰルレム氏ヲ勸解シテ水師提督幷公使ノ指揮ヲ待タシメタリシニ兩氏共指令官ウヰルレム氏ノ所爲ヲ許可セリ

右船一件ニ付余外務省ニ出頭セシ時ニ公使デロング氏ト共ニ席ニ臨メリ其節デロング氏ニ於テハ右要求落着ヲ促スベキ道理アルナレトモ日本政府ノ交際法ニ從ヘハ日本政府ハ右請求ヲ償還セザルノ策ニ出ツベシ且英國政府ハ八ケ年間モ其責ニ任スベキ事ヲ拒絕シ終ニ夫ノ「アラバマ」一件ヲシテ近頃判決ニ屬セント一致セルノ例アレハ若英國政府雙方判者ノ目前ニ於テ不正ナリト裁決セラルヽ上ハ日本政府ニ於テモ其時ニ臨テ其說ヲ變ジ又其交際法ヲ改ムルトモ其機ニ後レサルベキ由ヲ示サレタリ偖右「アラバマ」一件ノ判決モ已ニ終リタレハ余思フニ「ペーホ」船主モ其裁決ヲ得ベキノ時ナリト若今ニ及テモ閣下右一件ヲ公平ニ落着スルヲ欲セズンハ何故ニ右一件ヲモ亦判者ノ裁決ニ屬セザルヤ

余ハ此一件ヲハ東京ニ於ケル閣下ノ律師等ノ二人ニ屬スルハ甚ダ好ム所ナリ而シテ若右二人其說ヲ異ニセハ更ニ他ノ一人ヲ撰フベシ而シテ右三人ノ裁決セル損亡ノ高ハ則最末ノ決トナシテ雙方共之ニ反ク可ラサルナリ敬具

千八百七十三年三月五日東京ニ於テ

甲比丹 バツチエルデル

外務卿 副島種臣閣下

一九六 十二月三十四日 寺島外務卿ヨリ米國公使宛

「ペイホー」號抑留ハ正當ナル條理存セルニ付償金支拂方拒絶ノ旨回答ノ件

十二月廿四日達濟

百拾三號 ペーポウ船の義に付ビンハムえ往書案

貴國甲比丹ハツセルドル申立一件に付明治五年壬申八月廿四日附閣下先任公使より我先外務卿え被宛候書翰致披見候然る處此一件に付ては先年來往復猶接話の次第頗る繁擾に渉り居候へは定て貴館御書留類を以御承知の事と存候就ては右等繁擾に渉るものの内今茲に其要緊のケ條を述べ閣下に陳す予は閣下に於て素より予が陳言する確實正理なるを判然し速に其事實御了解あらん事を希望す

大江丸を取押へしは不正の船なるを以て也初め榎本我横濱に於て右大江丸を奪ひ去り箱館に於て佛人フハーブルブランド社中え賣却しフハーブルブランド社中は同國領事の査印をも不得甲比丹バツセルドルえ賣渡せしもの也而してハツセルドルは右榎本の其船を掠奪し且フハーブルブランドの密賣せしをも不顧加之賊徒若干のものの乗組みし船を以我官軍の屯しある青森港に乗込みしに因り其場の官兵之れを取押るは當然の事と云ふへし

然るに當時國内擾亂中青森えの通行不便書信の往復數十日を重ね事情探索を不得折柄舊公使フアン、フアルケンボルク氏貴國ペーホー船（但シ船名變名ペーポウセンは大江丸ナル事ヲ知ラザルナリ）の貴國の旗を引卸し引留め云々を以て再應切迫御請求終に時日を被限其期延引の時は此處置を貴國アドミラールに托し候外無之旨を以て御論判相成不得止處より右船取押へ候事實明了不致ながら出先に於て國旗引卸せしは其者の過誤なる旨拙者より謝辭申入且右ペーポウ船は先つ以てバツセルドルえ差返し候樣軍事裁判所え通達し差返したり爾後同公使には爲何義も不申出又拙者にも箱館平定後右の事情明了候へ共既に引渡濟の後にて漸く國内擾亂も平定に赴き追次内外益新（マヽ）睦ならんを祈念する折柄此事件も平穩の處置に歸し度一念にて默恕致し互に落着の事と存し居たり

其後二ケ年を經過し閣下先任公使より突然償金の義被申立其趣旨はバツチエルドル右船所有する權理正不正事理の是非曲直に不拘一旦引渡たる上は其損耗も可償還理あるべしとなり此償金論に渉れは我政府も默恕するに無由最初より之手續を審詳し是非曲直を明了にせざるを不得右大江丸は前文に陳述せし如く不正の者にて取押へ候は當然の義にて償金等談求素より可有之事に無之其委曲は我明治四年辛未七月八日附并明治五年壬申八月十七日附の書簡を以委曲申進置候間篤と御照知有之度候此段可得御意如此候敬具

明治六年十二月 日

外務卿 寺島宗則

事項一二　和蘭人「スネル」ヨリ會、米兩藩ヘノ銃器賣渡代價竝ニ新潟戰爭ノ際蒙レル損害物品代價要償ノ件

〔第五卷事項一四參照〕

一九七　一月二十吾　花房外務大丞等ト和蘭國代任公使トノ對話書

和蘭人「スネル」ヨリ會、米兩藩ヘノ購入武器未拂代金請求ニ關スル件

明治六酉年一月廿五日和蘭代任公使デロング出省花房大丞石橋少丞應接

スネルより庄内藩え武器賣渡の約定書を以去る辰年八月中判事寺島陶藏より領事懸合猶又東久世中將より公使へ懸合十月中公使立合吟味いたし右約定は草稿迄にて約定いたし候義に無之段相了候へ共抑敵え兵器を賣捌候證數口に相見既米澤會津も關係一條先達てフーヘンより云々申立候へとも外務卿と論說適せす追て寺島幷拙者と談判の積外務卿より被相答爾來取調候義にて米澤え送りし書翰にも奥羽同盟の各藩に對しスネル兄弟とも一身を拋ち助力いたし候段認載有之右の目論見を以武器運送いたし賊に助力いたし候段も判然なり則同人を賊と見做し候上は其敵の損失を償ふ理更に有之間敷候

中立を不守罪は和蘭國法に處し可然今日に至り右樣の御論は最早遲く畢竟伊孛の申立も同樣の筋に付蘭領事おいては右兩國の御處置振如何可相成哉是迄竊に御樣子相伺居候處夫々御償却相成候故最早スネル一條も彼是の論おのつから消え御償却の金高丈けの御相談いたし候へは事濟候心得に有之此上右等の御論より御採用不相成との義にては不都合に候

米國おいて南北戰爭後右樣の義數件有之夫々裁斷相濟候趣に有之我國おいても條理相立他國の誹謗を不受樣取扱度事に候

伊孛へ御償却不相成以前に候はゝ何樣とも取扱可相成今更いたし方無之候スネル一條最前よりの始末更に相心得不申當人又はボードインより承り候迄の義に付スネルを誘引いたし候

米澤會津兩家へ相掛り候一條證據書も有之候間スミツえも一覽爲致スネル申立をスミツにも爲承可申何れにも兵器を送りたる一條等明了候上ならでは償却の談判は難出來候

亘細の義は當人より直に御聞取有之度候

明後月曜日當人出省可有之候

一月廿七日第十時スネル出省花房大丞石橋少丞出席スミツ詰所にてスネル陳述す

一九八　二月二十七

新潟戰爭ノ際蒙リタル損害ニ關スル和蘭人「スネル」ノ申口書

附記　和蘭人「スネル」ヨリノ請求一件ニ關スル法律顧問「スミス」論說

新潟に於て分捕に逢ひ候私荷物商賣品損失

千八百六十八年中は同港に於て普蘭伊國の人民商賣仕候儀御禁止の旨別段布告又は告命も無之候然るに私は公使の允許を受横濱商會の支社を同港え相開き商業仕罷在候殊に日本政府御承諾の上會津米澤兩藩え引合も有之候に付同港え參り候儀に御坐候

横濱よりの送荷物は私にて引受新潟在住の仲間え夫々賣捌き千八百六十八年九月官軍滯陳中其賣殘し分丈を私土藏中え入置申候

右官軍進擊動搖に付ては無餘儀右引請荷物賣殘し分其儘其所え相殘し身害を免れんため一時逃避仕候儀に候且右荷物に付ては官軍指揮官へ段々及說明候へ共御聞入無之其後右商賣品家具金錢帳面書類等盡く官軍にて軍中の分捕物とし、て御奪掠相成候旨承知仕候

就ては其節損失の慥なる勘定書第一號差出申候尤右は證據有之候分而已にて其他にも有之候へ共證書類分捕被致證據無之候間不申出候

右賣品と一同土藏中に相殘し置候勘定帳取戻し得る時は右損失の高も別紙第一號に申立候より尙相增し可申然れは矢

張増し丈け日本政府にて夫々御引受可相成事なり

尤私其時分は新潟に分社を所持する横濱の商人にして右兩所の仲間へ商法取引罷在候事情を篤と御勘考有之度相願候且又當政府の不定にて新潟守護の不行屆よりして四年間も商賣相止罷在莫大の損失と相成候へとも右は確實の證書迚も無之儀に候へは事實明白の損失證據有之候分丈は外横濱在留の商社の者共力の所不及の事よりして相受候損失御償に相成候と同樣拙者も至當公平の御處分相願候事に有之候拙者より差出候書面及勘定書毛頭相違無之候早々御取捌被成下度御願申候別紙第二號拙者の誓詞幷第三號の積荷目錄請負證書等の寫御覽可被下候

拙者に於ては此上證據の申立樣も無之篤と事の始末御熟考被成下度猶も拙者の書面御不審も候はゝ貴政府に於て其節兵を率て新潟の地を略取被致候令官衆を御閉糺被成下度尤薩藩の兵士重に拙者の倉庫を分捕被致候

於東京千八百七十三年第二月廿七日

カウ、シネル（ヤ、ン）

註一、本號文書別紙省略ス

二、右「スネル」提起ノ武器未拂代價請求竝ニ新潟戰爭ノ

際ノ損害賠償請求ノ訴訟ニ關シ法律顧問米國人「スミス」ノ論說左ニ附記ス

（附記）

エトワルトスネル一件に付

スミツス氏の論說

エドワルド、スネル氏一件

西暦一千八百六十八年第二月十三日頃（我正月二十日）「スネル」ナル者値一萬五千「ドルラル」ノ品物ヲ斗南藩士ニ賣レリ其節手付金トシテ一千五百「ドルラル」ヲ拂置キ殘金一萬三千五百弗ハ二百日中ニ可相拂トノ約條ニ及ベリ右一萬三千五百弗ハ一千八百六十八年九月一日ヨリノ利息ヲ添テ斗南藩若クハ廢藩置縣ニ付大政府ヨリ之ヲ拂フハ不可ナルニ非ラス如何トナレハ其節賣拂之品物ハ皆賣買ノ差支無キ物ニシテ横濱港ニ於テ之ヲ賣リ會津藩士ニ相渡セリ此時新潟横濱之間ニ於テ日本人ノ賣買スルハ兼テ禁セサル所ナリ

同第四月十五日（千八百六十八年第四月十五日我三月廿三日）横濱住居荷蘭貿易社中ナル者銃炮（ライフル）七百八十挺會津藩鈴木多門ニ賣拂ヒタリ其値七千二十弗ニシテ百八十日ノ内ニ可相拂旨約定ス便チ千八百六十八年第十月十二日迄ナリスネル氏云ク余請合人タルガ故ニ右ノ代金會津ニ代ツテ彼ノ荷蘭貿易社中ニ拂フタリ然ルニ會津藩更ニ之ヲ償還セズ

荷蘭條約日本政府ノ外ニハ荷蘭人武器ヲ賣買スルヲ禁ス然ルニ……

同第二月八日（彼ノ武器賣拂ハ此布告ノ日ヨリ二ケ月以前ナリ）大日本政府ヨリ荷蘭公使エ左ノ布告ヲ與ヘタリ

將軍德川慶喜職ヲ辭ス以來ハ

天皇陛下躬ラ内外ノ事務ヲ督シ玉フ云々

右ノ銃炮（ライフル）賣拂之頃ニハ萬機皆天皇陛下ヨリ出デ外ニ政府ト稱スル者アラス故ニ彼ノ銃炮賣拂ハ政府ノ免許ヲ受ルニ非レハ國法ニ背クト云可シスネル氏云ク彼ノ銃炮ヲ賣渡シ荷積等ヲ爲スハ敢テ秘セザル所ニシテ横濱官吏之ヲ知リ且ツ之ヲ許容ス云々余思フニ七百八十挺ノ銃炮ヲハ地方官吏ニ秘シテ荷積差送ル等ハ甚タ一難事ナレバスネル氏ノ說理有ルニ似タリ大政府會津藩ノ爲ニ其負債ヲ償還スルトナラハ前書一萬三千五百弗ノ滯金モ同シク又此ノ荷蘭貿易社中ニ係ル滯金ヲモ償還セサルノ理ナシ又スネル氏ノ申立ニ外ニ七十挺ノ銃炮六百三十弗ノ値ヲ以テ會津ニ賣リ且ツ又會津ノ爲ニ英船アダヲ雇入其賃千六百十五弗ヲ船將ニ拂ヒ此雇入ノ爲ニ會津ヲシテ三千弗ヲ拂ハ使ントス

然ルニ或官吏荷蘭公使ノ願ニ由テスネル一件ヲ吟味セシニスネル氏曾テ會津ヨリ彼船雇入ヲ托セラレタル證據モ無ク又會津ニ於テモ更ニ彼七十挺ノ銃炮ヲ請取タル事モ有ラスト云々

スネル氏米澤一件

洋暦千八百六十八年第六月スネル氏ワアルシ。ホール社中ヨリ銃炮若干挺紙筒銅帽子火藥等五萬六千二百五十弗ノ値ヲ以テ買受ケ之ヲ米澤ニ差送リ其代金ヲ請取リ便チ彼ワアルシ。ホール社中ニ之ヲ拂ヒ此事件ハ此ニ於テ終レリ故ニ其時ノ處置ハ是非ニ係ラズ皆悉ク落着ニ及ベリ

今ニ於テ政府ヨリ關係スルノ理モアラス又其事實ヲ探索スルニ及バズ

一然レトモ千八百六十八年第二月十八日荷蘭公使「フヲンボールスブルック」諸外國公使ト同ジク其國民ニ左ノ條々ヲ布告セリ

一日本國ニ於テ戰爭差起リタルニ由テ軍器且ツ軍中ノ禁物ハ一切双方ヘ商賣ス可ラズ

一荷蘭人若シ前條ノ報告ニ背キ局外中立ヲ危クスルニ於テハ荷蘭國保護ヲ得ル能ハス加之晩近荷蘭日本トノ條約ニ記載セル通義免許等モ皆之ヲ受ル能ハス（合衆國千八百六十八年ヨリ六十九年迄ノ外國交際書第一卷第六百七十五葉ニ詳カナリ）

右ノ報告有テ以後彼ノ「スネル」氏局外中立ヲ犯シ謀反人ヲ扶助セル罪有ラハ同氏ハ荷蘭國ノ保護ヲ受ルノ義無ク荷蘭政府モ亦之ヲ保護スルノ義無シ國法ヲ以テ之ヲ論スレハ同氏ハ國賊ニシテ毫モ通義ヲ得ル事能ハズ故ニ之ヲ斬罪ニ行ヒ且ツ其家産等モ悉ク沒收セ使メテ可ナリ而シテ當人且ツ其政府ニ於テモ之ヲ非難スル事能ハズ

千八百六十八年第六月十四日以前　天皇陛下ノ軍兵越後新潟ニ於テ反賊追討ノ義ハ横濱港ニ於テモ皆人ノ知ル所ナリ其節勿論此事件新潟ニ於テモ能ク人ノ知ル所ナルベシ若シ當日ニ之ヲ知ラザレバ其後ニ至テ之ヲ知ラザルヲ得ズ「スネル」氏新潟ニ行キ千八百六十八年八月第十日迄此ニ住セリ故ニ何レカ官兵何レカ賊ナルハ「スネル」氏ノ能ク知レル所ナラン然ルニ同年八月十日ニハ彼ノ米澤ハ便チ反逆ノ徒タリ此以前ニハ分明ナラサル義モ有リト雖トモ此以後ニ於テハ米澤ノ名實共ニ謀反人タルハ人毎ニ知ラザル者ナシ

然ルニ「スネル」氏千八百六十八年第八月十日及同年九月十二日ニ當テ銃炮。火藥。紙筒（ヤゴ）及ヒ其他軍中禁物諸品六萬零四百十弗七十「セント」ノ値ヲ以テ米澤ニ賣拂エリ斯ノ如ク軍中禁物ヲ謀反人ニ賣リ以テ官兵ヲ害セ使メ置キ然ルヲ今又彼ノ代金ヲ　天皇陛下ニ乞フハ實ニ廉耻ノ無者ト謂可シ

右「スネル」氏ノ申立ハ國法ニ依テ之ヲ見ルニ實以テ正理ニ悖レリ故ニ　天皇陛下ノ政府寛仁ノ處置ヲ施シ前罪ヲ免ルノ彼ノ滯金一錢タリトモ之ヲ拂フトキハ以來國民ノ謀反ヲ招キ且ツ商人ヲシテ軍器ヲ謀反人ニ商賣セシメ而シテ謀反人其志ヲ遂ルモ遂ゲサルモ其商賣セシ品物ノ代値ハ此方ヨリ償還ス可シト云フニ異ナラス

千八百六十八年第八月幷ニ九月中ニ米澤エ賣拂ヒタル彼ノ武器等ノ爲ニハ一錢タリトモ其價ヲ拂フ可ラス假令ヒ大政府此軍中禁物ノ爲メ其値ヲ償ント欲スルモ茲ニ記ス可キ一事件有リ此品物ノ内値ヒ一萬二千五百六十九弗五十五錢ノ高ハスネル氏ニ屬セスシテ「スミスベーカル」社中米國人ヨリ之ヲ商賣ノ爲ニ同氏ニ送レルナリ

スネル氏云ク其値半バヲ拂フト然ルニ殘金若干相滯ルト雖トモ敢テスネル氏ノ關ス可キ事ニ有ズシテスミス。ベーカル社中ヨリ申立可キ事ナリ

千八百六十一年ヨリ六十五年間合衆國内亂ノ時ニ當テ斯ノ如キ事件發レル少ナカラス然ルニ政府皆之ヲ取上ケス故ニ合衆國政府ニ於テハ彼ノスミスベーカル社中ノ爲ニ其代値ヲ乞フ事無キ明カナリ

新潟表分捕物一件

千八百六十八年第六月「スネル」氏新潟ニ趣キ此ニ於テ銃炮火藥及ヒ其他ノ軍備等ヲ官兵ト鉾ヲ交ントセル國賊ニ賣渡セリ其節此商品ヲ買請タル人國賊ナルハ同氏ノ知ラザル能ハサル所ナリ

其後第九月十四日便チ官賊兩軍戰爭最中銃炮若干挺彈丸若干其他諸品ヲ積ミ十四艘ヲ仕立河ヲ溯リ兩軍相戰フ處ノ向岸ニ相送リ之ヲ賊兵ニ相渡セリ之ヲ以テ見レハ同氏ハ局外中立ノ道ヲ失ヒ荷蘭及ヒ日本國法ヲ犯セル獨リノ國賊ナルカ故ニ同氏ヲ捕ヱ之ヲ殺スモ亦理ナキニ非ス日本國賊ニ於テハ各其事フル處ノ主家有リ其奉スル處ノ將軍有ルガ故ニ其罪尚輕シト雖モ同氏ノ如キハ斯如關係モ無ク只管利益ヲ貪ルノ慾心ヨリ出テ、此死ヲ得ルガ故ニ其罪十倍ス故ニ同氏性命ヲ全フシ只其家産ヲ沒收スルハ實ニ寛容慈悲ノ處置ト謂フ可シ

（欄外註記）

宇内萬邦皆斯ノ如キ罪ヲ處スルニ嚴ヲ以テス

千八百六十八年二月荷蘭公使其國民エノ布告ニ局外中立ヲ犯ス者ハ其政府ノ保護及ヒ日本荷蘭條約ニ記載セル通義免許等モ皆悉ク得ル能ハズト云エルハ余輩宜シク注意シ記憶（マヽ）ス可キ事ナリ右ノ布告有ルニ依テ荷蘭政府ヨリ同氏ノ事ニ付キ訴訟スル事ヲ得ス同氏ハ其政府ノ保護ヲ得ル事能ハサル一ツノ罪人ニシテ然ルヲ今日本政府ニ對シ吾ガ曾テ之ヲ以テ罪ヲ犯セル其物品ノ爲ニ代値ヲ乞フハ恰モ槌ト斧トヲ以テ夜中一軒ノ人家ヲ破リ入リ而シテ其槌ト斧トノ代値ヲ乞フニ異ナラス

新潟分捕ノ事ニ付キ同氏ノ失フタル品物ノ値ヒ荷蘭岡士及同國商人ノ檢査ニ依レハ二萬五千五百四十四弗六十一セント且ツ其失フ處ノ金二萬零五百（千カ）弗總計四萬七千零四十四弗六十一「セント」ト云フ然レトモ同氏此金高ノ内一弗タリト

モ更ニ乞フ可キノ理ナシ

大政府若シ彼ノ横濱ニ於テ賣拂フタル品物ノ値ト新潟表ニ於テ同氏ノ失フタル金トヲ償却スルハ不可ナルニ非スト雖トモ之ヲ拂フ可キ廉有テ拂フニ非ス只寛大ノ處置ヲ施ス也若シ同氏此金高ヲ受ケズ皆悉ク利息ヲ合シ二十萬弗ヲ乞フニ於テハ更ニ之ヲ償フ事ヲ要セス同氏宜シク速ニ其身ノ爲ントスル所ヲ願ミ其政府ニ於テモ亦タ此事件ニ付テ須ラク注意熟慮ヲ加エズンハ有ル可ラス

イ、ペンシヤミン、スミス謹白

（御外註記）「［　］印可改定」

一九九　四月二十旦　上野外務卿代理ヨリ和蘭國代任公使宛

和蘭人「スネル」ヨリ會、米兩藩ヘノ武器未拂代金請求ニ關シテハ尚取調ヲ要スル旨竝ニ新潟戰爭ノ際叢レル損害賠償請求ニ對シテハ同人ニ國際法違反ノ廉アルニ付應シ難キ旨回答ノ件

四月廿六日横文相添達ス

エトワルトスネル氏訴訟一件に付一千八百七十二年六月十四日附幷同年八月三十日附を以て當省え被差遣候和蘭公使フアンテルフーフエン閣下の貴翰幷閣下と御談判および候件々左に回答申進候

一横濱におゐて米澤會津兩藩に賣渡し候由の品物に附ては證跡明確ならす候故償還すへきものありや否若し償還すへきものあらは若干の高なりやも即今當省に於て決し難く依て此一件は尚吟味相成候樣司法省え可相廻候

一新潟におゐて右兩藩に賣渡し候由の品物幷同所陷略の砌官軍のために掠略せられ候由の品物に付ては此儀別段の吟味およふへき條理も無之と存候素より同氏の自ら行て自ら爲せし所業により生する所の損害を當政府に於て償却すへき關係あるへしとも覺不申候抑新潟は官軍陷略の後迄日本政府に於ては外國人のために開き不申候

右は當政府と條約各國との取極によりて千八百六十八年四月一日迄は素より鎖し有之右日限に相成候處彼地方おゐて反賊頻りに蜂起いたし候

依て其義各國公使えも申入候處いつれも其國民の彼地に往くを差止るの至當たるに異論無之候尤第六月末に至り

孛漏生伊太利兩公使のみは其翌七月十五日已後其國民の新潟に往くを免許すべきと自ら決定いたし候得共其他各公使は尚其國民幷其所有品を同所に遣すを許さす候是れ同所は反賊の所據にして日本政府も外國政府も其安全を保つ不能所なる故に候

然るをスネル氏は當政府布告の旨にも各國公使の忠告にも不關同所に到りしは反賊を援助し且其地方の反賊に兵器を賣り非常の利益を得へきためたるは事實において明了に有之候

一千八百六十八年第二月十八日和蘭公使フアンポールスブルーク氏より布告して戰爭の起りし事を述べて

一兵器幷軍中禁物を雙方共え賣るべからすと言ひ且尚忠告するに都て和蘭屬民此中立を犯すものは其政府の保護を剝ぐべく又和蘭と日本との條約に依て得る所の權理特許をも盡く失ふべしとの旨を以てせり

此布告後一千八百六十八年スネル氏は新潟に行き同所に於て營業いたし候

一千八百六十八年九月十二日に至るまて度々兵器を米澤に賣渡し或は金を借し就中同月十三日十四日官賊兩軍河を隔てゝ相戰ふ所にてスネル氏十四艘の小舟に積み河を溯り賊に引渡し候ものも有之候

右は官軍新潟を陷略する前一兩日の事にてスネル氏の賊に援助便宜を與へ居候は官軍の親しく目擊する所に有之就ては若し官軍同氏を目するに兵杖を携帶せる敵を以てするとも素より其理なきにあらす候然るに唯其所有品のみを損害し其性命におよばさりしは尚寛宥の處置なるへく候

一此儀同氏の米澤え送りたる明治二年六月附書簡第五條に同氏所持の品を不殘兵士に奪取られし事其第六條には此時に當りては唯米澤のみの守衛を依賴し居たる旨其第九條には米澤の賴みに依り多分の兵器を新潟へ陸揚せし旨を述へ同千八百六十八年第十二月十日附書簡には去年の義に付ては米澤殆め同盟各藩の爲めには自己一身は申に不及兄弟の一命をも拋ち候存念なりし旨を述へ同年十二月廿日の書簡には色邊長門の賴により險難なる小舟にて波濤を凌き兵器を新潟え陸揚けせし旨詳記有之を以て見れは同氏の新潟へ兵器を陸揚けせしは反賊援助の爲めにせる事明了に有之候

一凡て内外國人の別なく賊地の住民は皆之を賊と假思せざるを不得候就ては賊徒征伐の際正統政府の軍兵のため損害を受候とも之に向て訴んと欲せは先つ内國人は其忠信たるを明かにし外國人は假令忠信たらさるも正敷局外中立たるを明かにせさるへからさる義に有之候右の故を以てスネル氏の申立は全く難取上け義に候且兼て蘭公使布告の趣も有之候間スネル氏は蘭政府の保護をも失ひ候ものと存候

一伊太利人孛漏生人新潟に於て官軍に被掠候由申立候品物の事件は一二件取揚候得共右伊太利及ひ孛漏生人はスネル氏のことく敵を扶助せし證據無之依てスネル氏の事件とは全く相違いたし居候

右件々回答如此御坐候敬具

六年四月廿六日　　外務少輔　上野景範

蘭國代任公使

シイデロンク閣下

註　本號文書ノ端書ニ「横文相添」トアル英文略ス尙該英文ハ「エドワルドスネル氏一件蘭國代任公使デロング氏

えノ書翰スミツス氏起草石橋少丞淨書ノ分本稿となる」ト註記シアルニ據リ御雇米國人「スミス」ノ起草セルモノト認メラル

二〇〇　五月八日　和蘭國代任公使ヨリ上野外務卿代理宛

和蘭人「スネル」ニ國際法違反ノ廉アルニ付同人ヨリノ損害賠償請求ニハ應シ難シトノ回答ニ對シテハ同意シ難キ旨申入ノ件

附記　上野外務卿代理ヨリ和蘭國代任公使宛書翰案

右「スネル」ヨリノ請求ニハ應シ難キ旨再應申入ノ件

United States Legation Japan,
May 8th, 1873.

His Excellency
Uyeno Kagenori,
Vice Minister for Foreign Affairs.

Sir,

Your note of date the 26th of last month refusing to compensate to Edward W. Schnell, for losses sustained by him at the Port Neegata, in the year A.D. 1868, by the action of the troops of your Government, in having seized his warehouses and appropriated their contents by force of arms to their own use, has been received.

This action and the reasons assigned by you, in support thereof surprise me very much.

Mr. van der Hoeven, formerly the Representative of Holland in this Empire advised me that His Excellency Soyeshima Taneomi, Minister for Foreign Affairs of your Government had promised him that this claim should be allowed and paid as soon as it was ascertained what the value of the property taken was.

Mr. Butzoff, my Russian Colleague, informes me, that His Excellency Mr. Soyeshima, so adviced him upon the strength of which assurance a demand of a similar nature that he was then settling for a German claimant, was reduced and allowed to be merged in this claim, as a portion of the goods seized from him, were the property of Mr. Schnell.

I understood Mr. Soyeshima to give me the same assurance, and acting upon this, I addressed myself earnestly to the business of obtaining and laying before you the proof as to the nature and value of the goods lost by Mr. Schnell.

It appears to me that Your Excellency must have understood the matter in a similar way or, otherwise, you would have told me long ago, as you do now, that without regard to value, you could not allow this demand.

You knew, six months ago, when I was furnishing this evidence to you all of the matters you now recite in defence of your resolution of this I am certain as in coversation with both, His Excellency Mr. Soyeshima and also with Mr. Hanabusa, allusion were made to these proofs which you had in your possession, as to Mr. Schnell's having furnished aid and assistance to the rebels in your late war, and those gentlemen also suggested the objection that Neegata was not an open port when Mr. Schnell went there and therefore he had no business to go,

which I then replied to.

I am therefore constrained to consider your action in employing me to obtain this evidence when you never intended to allow the claim at all, as incompatible with the dignified and courtious treatment you so generaly extend to me as a Representative, and as being in plain violation of an argument which although not made in writing, was no less solemn; and was often repeated to my Colleagues and myself.

Your note contains no denial of the following material avisements upon which this demand for compensation is predicated, to wit;

First.—That Mr. Schnell's warehouses at Neegata, containing property of his, in merchandize of the value of about Sixty Five Thousand Dollars was in the year 1868, seized by the army of Your Government and converted to its use.

Secondly.—That Mr. Schnell was, and is, a Subject of Holland.

Third.—That he has never received any compensation for his losses, and

Fourthly.—That Your Government has paid claims, presented by the German and Italian Representatives for goods of subjects of their respective countries seized by your army at the same time and place as were Mr. Schnell's.

In justification of your action You inform me that Mr. Schnell had no right to proceed to Neegata with his goods when he did, and had no legal right to have them there at the time when they were seized; that he went to Neegata in spite of Your notification, to the effect that you could not guarantie foreigners protection.

A sufficient reply to all of this, is that Dutch Subjects had equally as good a right to reside and trade at that port, as had German or Italian subjects, and your action in paying those claims estopps you from urging this plea in this case; in addition to this, it is known to me that this same line of defense was advanced by you when those other claims were presented; and abandoned by you as entirely untenable after argument with my Colleagues.

Mr. Schnell first, went to Neegata in the month of June 1868.

You state in one paragraph of your note, that, that port was not then opened, and immediately afterwards you make the following statement, to wit:

"By virtue of arrangements between this Govern-
"ment and the Representatives of the Treaty Powers,
"the port was kept closed until April 1st, 1868."

Now Your Excellency was led into the error of making such an illogical and contradictory statements. I am at a loss to understand. Beyond this I have but to refer You to the Treaty and the Osaka convention to prove that it was stipulated that Neegata should be opened upon the first day of January and its opening was deferred until the first day of April 1868. You offer no evidence to prove that the Representative of Holland ever consented to longer defer its opening.

You further declare that the Tenno's Government finding that insurrection was prevailing at Neegata gave notice of this fact whereupon all of the Foreign Representatives acquiesced in the propriety of restraining their fellow subjects from going to that port. You offer me no evidence in proof of this assertion and an examination of the archives of the Dutch Legtaion shows that the then Representative of Holland so far from acquiescing in any such request addressed you these notes dated respectively "June 25," and July 13th and 23th, 1868 in which he advised Your Government that he could not prevent Dutch subjects from going to Neegata.

That this claimant went to Neegata with the full knowledge and consent of his country's Representative is too well known to admit of dispute. He was appointed by Him Acting Vice Consul for Denmark; he obtained for his Representative a building to be temporally occupied by the Representative on the occasion of a visit which he then contemplated paying.

The notification you refer to, as having been given by your Government was to the effect that you might not be able to defend foreigners who went then from acts of aggression on the part of rebels. Had this claimant sustained his losses at

rebel hands, this notice would have been well to consider, but no intimation was given that any danger was to be feared from the actions of your own Authorities.

I sincerely hope that you do not wish me to understand that you consider that Your Government having given such a notification, was or is justified in its self despoiling the property of a subject of a Treaty Power.

You next essay to justify your conclusions by informing me that the Representative of Holland issued a Neutrality Proclamation in February 1868, which this claimant violated by rendering certain assistance to the rebels, wherefore you confiscate the property taken from him.

This in point of fact is the main and only ground upon which you realy seek to justify your action. Permit me, in a few words, to point out to you the complete error of this position.

Granting for argument's sake that Mr. Schnell did by some act violate that Neutrality proclamation; what law I beg to ask you did he violate, and how and by what authority may he be punished?

The Treaty between Holland and Japan confers upon Dutch subjects in Japan Extra-territorial rights. That is, it provides, that they can only be tried for crimes committed here, before Ductch Tribunals, and can only be punished by their own Authorities.

It next provides that property of Dutch subjects in Japan, can only be confiscated by judgements of Dutch Courts.

The proclamation you allege that he violated was Dutch Law, if it was any law at all.

In defiance of these solemn and long existing treaty rights, you have, it seems, put this claimant upon trial in a Japanese Court, convicted him of violating a Dutch Law and confiscated all of his property.

This trial (if so it may be called) has been conducted in strict secrecy, neither the claimant or myself having the least knowledge in the world that such proceedings were being taken; you have given him no opportunity of being heard or of producing any witnesses on his behalf, and you deem by your note to have convicted him upon the evidence of two letters, each bearing date the next year after his goods were taken from him, and those letters you never have shown to me or given Mr. Schnell any opportunity of controverting or explaining.

Well knowing as I do, your great love of justice, and your high regard for all treaty engagements, I must believe that you have not well considered this communication, or that you have in a surprising manner overlooked or misconstrued the treaty between Holland and Japan.

It is an important circumstance well known to you, that your present Minister to the Court of St. James, years ago preferred similar charges against this claimant upon which he was put upon his trial before a Dutch Court and was acquitted, it being wholly out of the power of your Authorities to prove your allegations. I have offerd repeatedly to have Mr. Schnell retried upon these same charges, if you wished it, and even went so far as to offer in case you settled this demand, to withhold the money for a season to give you a fair opportunity to institute proceedings for its confiscation if you should desire to bring such an action. This must convince you that I had no desire to shield Mr. Schnell from the proper consequences of any wrong he may have commited, or to deprive Your Government of anything that may justly be its due.

Your declination to accept such an offer and your persistence in pursuing a course unfair to the individual and so violative of your treaty relations with his Government, confirms me in the opinion that you have not well considered the reply that you have given me.

This claimant denies in toto the charges you make against him; he alleges that he reached Neegata with his goods in the month of June A.D. 1868, on a vessel that was cleared at this port, by your Authorities; that your Authorities accepted Customs duties on the goods; you subsequently took from him that perfect peace prevailed at Neegata, and this town was not attacked or captured until during the month of September following; that your Authorities at that port provided for the accommoda-

tion of himself and other foreigners, suitable fire proof warehouses and placed guards about them; and thus his goods were situated when the army of His Majesty the Tenno took possession of them.

During the whole course of these proceedings, you have not questioned these assertions.

The principle of law you refer me to, has no applicability at all in a country where the doctrine of extra-territoriality exists, I feel that it is wholly unnecessary for me to repeat my arguments that foreigners can only be tried in Courts of their own country, when in Japan.

I claim and defy successful contradiction that if Mr. Schnell did all you charge him with, that Your Government has no authority to try or punish him, either in the manner you have done or in any other manner.

I insist with all due respect that when a subject of Holland proves that Officers of your Government have forcibly taken his property and proves its value, the case is at an end in Your tribunals, and you must seek his punishment or the confiscation of his goods or property in Dutch Courts.

It sounds strangely like jesting to be told that it was Mr. Schnell's duty to prove his innocence and loyalty in this proceeding, when you never opened any Court to him or advised him in any way that he was being tried for any offence or required him to produce any proof upon this point.

In all kindness, Your Excellency, permit me to say that I am deeply pained by the receipt of this reply. I regard it as being in direct violation of a fair understanding with Mr. Soyeshima in the first place; sencondly; as discriminating unjustly between the subjects of Holland and those of Germany and Italy, and lastly as being so violative of the Treaty engagements between Holland and Japan that I feel sure it will deeply grieve the Government of His Netherlands' Majesty when brought to its attention.

I trust you will not feel annoyed at my stating that matters of this nature are used by those who fear to trust to Japanese laws and Japanese sense of justice, as arguments to prove that foreigners may not with security entrust their lives and property to Japanese jurisdiction; it is urged that, if the Japanese Government will usurp authority in defiance of treaty stipulations, what would it not do if the foreign subject had no protecting treaty guaranties? if the Japanese Government under present circumstances will place a foreign subject of a treaty power on trial in a secret tribunal, convict him in secrecy and take all of his property in their possession, regardless of its value, what mercy or justice could men expect to receive who fell under the ban of its suspicions and were subject to its jurisdiction? Arguments of this nature backed by reference to such transactions as this, are having greater influence than all other things in causing foreign states to insist upon the extra-territorial conditions, at present existing in the treatys.

For me, I deeply deplore this action and to prevent its having any tendency to injure your national reputation abroad, I shall withhold communicating the contents of your note, to either the Dutch Government or to my Colleagues in this Empire, until after you have had ample time to reconsider this matter and return me another reply, which I beg to solicit you to return at your earliest convenience.

Relative to the claims of Mr. Schnell, against the Yonesawa and Ydsu Hans, I beg to state, that I respectfully protest against any reference of any official business, that I present to you, to any Office or Department of this Government with whom I cannot hold direct diplomatic intercourse. I earnestly object to any more trials of causes presented by me in a Court which gives me no notice of its sittings, which hears only the evidence produced upon one side of a case; which delays the simplest transactions for months, and then reports upon wholly a parte testimony.

The goods sold to Yonesawa and Ydzu were sold and delivered under Government permits, prior to any declaration of war or proclamation of neutrality, at the open port of Yokohama.

The receipts taken have been handed to you and you have offered no proof against this conclusive

showing.

For over six months, I have been urging the payment of those demands. If you desire more evidence, please tell me so, and let me know what proof you have to offer against this claimant's demand, and allow him to be present to examine such witnesses as may be produced against him. Let this examination take place in your Office, before yourself when I may be present, and I will then feel confident that justice will be done.

I embrace this opportunity to renew my assurances of high consideration,

C. E. DE LONG.

U. S. Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary, in charge of Affairs in Japan, for the Government of the Netherlands.

（右和譯文）

千八百七十三年五月八日

去月廿六日附を以夫イドワルドスネル氏千八百六十八年新潟におゐて官軍の爲に掠略され物庫を奪はれ其物品を皆官軍の用に供されしに由て同氏の受たる損亡御贖方御拒絶の段御申越の貴翰落手いたし候右閣下の御處分且御議論甚驚愕不審の至りに存候其譯は

嘗て當國在留の和蘭國公使フアンドルフーフエン氏拙者に申聞候には外務卿副島種臣卿閣下右掠奪されたる所有品の價慥に相分り候へは早速スネル氏の請求に應し之を贖はんと同氏に御約束有之候趣に候

拙者の同僚魯國公使ブツソフ氏又拙者に申聞候には外務卿副島閣下右同樣御告知有之候に付夫を證としブツソフ氏嘗て日國某より訴出し右同樣の請求を取扱候時其請求の中にスネル所有の物品ありけるを以て夫丈御請求すへからさる者なりと相定候よし

又副島公右同樣の義を拙者に亦御保證有之候依之拙者スネル氏の奪はれたる物品の性質并直價等に付明細なる證據を得之を閣下へ差出可申と頻りに其處分致し候義に有之候察する處閣下の御賢慮も右一件に付ては副島公と御同存の義に可有之左なくは疾く閣下より右奪掠されたる物品の直價に關せす右請求には一切御許容難被成趣を御申越可被成道理と存候

偖又右一件の事に付六ケ月前に右の證據を閣下の前に差出したる時閣下今御示明の件々既に御承知相成居候事と存候されは副島公并花房公と應接の時閣下の御所持の證詰則右スネル氏は先年の戰爭に賊兵を援助したるに相違なしと言證據御所持の事は明了に御申聞無之又其折兩公新潟はスネル氏の彼地に至りし砌は未た開港場に非さりし故同氏彼地に行き業を營むへき理なしと御異論ありたるに付拙者其時御答申置候是を以て已むを得す拙者閣下に詰問せさるを得さる事と存候夫閣下右請求を少しも御許容無之に拙者をして右一件の證據を指出さしめられしは是迄閣下苟も公使たる拙者に御盡し有之たる威儀懇切なる御取扱に戻りたる譯にて假令慥なる書面を以取結ひたる約條に非ずと雖も亦隨分慥なる約束なるを判然と御破り相成たる儀と被存候尤右約束は拙者及同僚の公使等に再三御示も有之候者に御座候又貴翰には左の緊要なる確證を拒絶せる文を見す則右は全くスネル氏の右請求を確實にすへき者に候

第一　新潟に於てスネル氏大凡其價六萬五千元の物品を庫に入置たるに千八百六十八年官軍の爲に掠奪され直に右官軍の用に充られたる事

第二　同氏は其節和蘭國の從民なりし而して今猶同國の從民なる事

第三　同氏未た嘗て右償を少しも受ざる事

第四　同氏と同時に同所に於て日國及伊國の某氏官軍の爲に奪掠されたる物品償方に付右兩國公使よりの請求を御償に相成たる事

偖閣下の御存意を御持張あらんとて閣下より拙者にスネル氏は夫の賊軍蜂起の折同氏商買品を携へ新潟港に行へき理なく又之を所持する權なしと御示あり又右港は賊軍輻輳の地なれは何分外國人の保護行屆き難けれは右港に行くを見合すへしと貴政府より忠告ありしが之を聞入ず自ら好て彼地に行き物品を官軍に奪掠さるゝとも素と彼地に物品を貯ふへき權ありと持張し難しなと拙者に御申越有之候

都て右の御議論に答ふへき儀は若日國或は伊國の從民當時新潟に居留し貿易するの權理を持せしならは和蘭國の從民亦同樣此權理を持すへき理なり而して閣下右兩國の從民の請求を御許容ありて至當に御償有之候へとも和蘭國從民にのみ右請求を償ふべき理なしと御持張は難出來事と存候其上嘗て閣下右の日國伊國從民等より請求ありしも一旦右同

様御拒絶相成候得共拙者の同僚等と御議論の後終に行はれさる事と相成たる事と存候

偖右スネル氏は千八百六十八年六月に當り始て新潟に赴きたり然るに貴翰の中に其時此港未た開港場とならさりしと御申述有之且其次に日本國政府と諸條約國公使と一致したる故を以右港は千八百六十八年四月一日まて閉鎖されたりとあり右様なる不理反對の御議論有之は如何の譯に可有之哉拙者に於ては甚不審に存候右の外別に異論を申述ず唯條約書及ひ大坂約書に由て夫の新潟港は一月一日を以て開くへしと約束ありし趣又右開港は千八百六十八年四月一日まて延引されたる趣を陳す偖和蘭國公使は嘗て右開港を尙延引すへく承諾せし趣の證據を御示し無之唯閣下の御議論には（天朝より當時右港に於て謀反起りたる布告ありしかは則諸外國公使各の國民をして暫く右港に行しめさる同意せり）と然るに右に確證御示し無之和蘭公使館の簿冊を檢閲すれは和蘭國公使は夫々千八百六十八年六月二十五日七月十三日同二十三日附の書を以て貴政府の御賴談に同意する事なく却て何分にも自國の從民新潟港に赴き候事を差止め能はさる由を告けたり

スネル氏は本國公使承知の上新潟に赴きたるに相違なきは言を待すして明かなり又スネル氏は右公使の命にて右新潟港丁國の代辨副領事たり又スネル氏新潟港に於て右公使の到着を待て一宇の館を設けたり

又貴政府より當時告諭ありしは新潟は賊軍より不慮の襲も測り難けれは右港に行ける外國人の擁護行屆き難し）となり然らは若しスネル氏賊軍の爲に右の如き損亡を受しならは則閣下今の御告諭も當然の事と存候然れとも貴政府官軍の動作より危難生するも測り難けれは亦宜しく之を戒心すへしと云御告諭は一も有る事なかりき且拙者の愚考には貴政府にて右布告を出しなから其頃或は當今にても條約國從民の所有物を貴政府自ら掠奪したるを正き處置なりと拙者へ御說諭は有之間敷希望の至奉存候

又閣下の御決意を御辯解あらんとて貴翰の中に和蘭公使千八百六十八年二月を以て局外中立の趣を布告したりしか之を犯してスネル氏賊軍を援助したるなれは同氏所有の物品を沒官すへき理あり）と御告知有之右一件は閣下御處分の正しきを證する起首にして不可爭基礎として御持張被成候處なれは拙者亦唯兩三語を以て右閣下御定說の全く謬れる

を謹述せん

假令スネル氏或る所業に由て右局外中立の布告を犯したりと見做すとも閣下に於て彼れ何等の法津を犯せりと爲す歟將た何れの長官にて如何様に彼れを罰すへきや承り度候

日本と和蘭國との條約に依れは日本在留の和蘭國從民に日本管轄外の權理を與へたり則和蘭國從民若し罪行ある時は和蘭國の法院におゐて之を吟味し和蘭國の官員に由て之を罰すへしとなり

其外又在日本和蘭國從民の所有物は和蘭國法院の審斷に由て取上くへしと有之候

閣下スネル氏法を犯せりと御主張相成候得とも拙者之を信せす假令是れを信するも其布告は和蘭の法なる耳

右等の嚴格且久しく成立る條約上の權理を蔑視し閣下は「スネル」氏を日本の法院にて吟味し和蘭國の法を犯せる者と定め同氏の所有物を盡く沒官被成候様相見へ申候

又右のことき吟味（若し之を吟味といふとも）は請求者及ひ拙者におゐても世界中にていまた會て承知不仕候得は極て秘密の御取扱なりと云ふへし又閣下同氏を呼出して御吟味も無之又證人を差出すへき便宜を御與へも無之貴翰の趣に由れは閣下右奪掠に逢ひたる翌年の日附なる兩通の書簡を以同氏の罪を御決し有之候事と存し候且右書簡は拙者に御見せ無之「スネル」氏に辨解の便宜を得せしむる御處置は無之候閣下の條理を好み條約上の事を重んし給ふは拙者の能く知る處なれは御熟考の上の御回答とは不被存或は又日本と和蘭との條約を御錯解ありしならん數年前貴國の公使同様訴人の罪狀を「セントゼームス」廳へ御申立有しに依り和蘭國裁判所に於て同人を吟味に及ひしか其時貴國官員に於ても確證御辯解出來さりせは同人に於ては罪なしと決せり其後御存意次第スネル氏再吟味ある様再三拙者より申上且つ左様可致御決定あらは暫く金子御差留置かるゝ方沒收の御處分も有之節は都合よろしかるへしとまて申上置候右を以てスネル氏不正の罪を庇ふとか又は日本政府正理の御所分あるを妨けるとかの意ならさる事明白に候然るに拙者の勸告御採用なく其者の損害となり且其者本國の政府貴國政府との條約上に觸る可きの御所分ありて拙者えの御回答を拜閲するに事實御熟慮あらさる哉と存候

閣下より御申立の罪を否とし訴人申出候には當港に於て貴國官員より出港御免ありたる船に貨物を積入れ千八百六十

貼紙

八年六月中新潟え到着せりと貴國官員貨物の運上を收納せり右貨物は其後奪ひたり新潟の地は九月中迄は全く靜謐にして攻擊掠奪ありたる事なし其港官員は同人其他外國人の爲め適宜の防火土藏を備え且番人を附置けり因りて貨物も損害なかりしか官軍の兵來りて之を奪取れりと

然る處御吟味中右等の事件更に御取調もなく且閣下より拙者え御示諭なりし法則の儀は領外管轄の規則存する處の國に於ては適用すへき者に非す今玆に拙者の議論を喋々贅述するも無益に歸すれは其要を摘するに外國人日本國え在留の時は各其本國の裁判所に於て吟味を受く可し

スネル氏に於て閣下より御申立ある罪科盡く有りとするとも御處分ありし通りにても或は如何樣にても貴政府に於て同氏を吟味し或は所罰するの權なき事拙者の確論なり和蘭國の人民我所有物を貴國政府の官員に掠略せられたりと申出其事確實且其代價明白なる時は貴國裁所判に於て吟味を遂け其罰し方或は罪人の所有物を沒收する等の事に到りては和蘭裁判所と之を謀るへき也

嘗てスネル氏を公然御糺もなく又何等の罪ありて吟味すとも告けす又此個條に證據ある哉とも問はす其身の無罪を辯し日本政府に其身の向背を述るはスネル氏の自ら明かに爲すへきの事なりとの御說あるは驚愕の至りにして殊に此回答愁歎に堪へす第一副島閣下と談判の意に齟齬し第二には和蘭人民と獨逸伊太利人民とに不公平なる區別あり殊に日本と和蘭との條約上に觸れたる事にして此事我政府へ申達しなは深く慨歎すへし日本國法に從ふを危み日本を信任せさる人は右等の事件を以て口實として外國人性命或は所有物を日本政府の保護に依賴すとも安す可からさるの論を立る事あらん日本政府條約に關せす斯く權を悉にせは外國人民は條約の保護を失ひ何を以て賴みとせんや此節の事の如く日本政府條約外國人民を內々に吟味して罪科ありとなし代價を問はす盡く其所有品を沒收せは嫌疑を受け寃罪を蒙りし者は何所に因りて仁慈を乞ふを得んや如斯き處分ありて如斯議論生する時は外國は皆現今條約中に存する領分管轄の事を主張する論に關する事大なり斯く成行きては拙者深く歎する事なり且斯る事は外國に貴國の名聲を汚する事なれは貴答の書意を蘭政府或は當帝國在留の我同僚にも通達するを見合せ置く可く候故篤と御再考の上速に再ひ御回答あらん事を乞願いたし候

米澤會津藩え對しスネル氏の訴訟に付ては拙者より閣下え申立たる公事を外國交際上に關し拙者直談判を得へからさる官員或は官省へ御廻しあるは拙者に於ては其意を得す拙者申立し件ゝ最早裁判所におゐて吟味あるを欲せす右裁判所に於ては唯一方のみの證據を聽聞し譯なき事に時日を費し遂に回答あるも唯一方の證據なり

米澤會津藩に賣渡したる貨物は横濱開港場におゐて戰爭の布告或は局外中立の布告前政府の免許を得て賣渡せり右請取書閣下へ差出しあれとも夫れに對したる確證も御回答なく六ヶ月以上も右拂方催促に及へり尙外に證據となるへきもの要用なるや且スネル氏の請求に對し如何なる證據あるや承り度候或はスネル氏を否となす證據人を御吟味ある節は同氏も出席御免有之度右の御吟味は其御省に於て閣下も御立合ありて拙者も出頭其曲直拜承致度此段申上候敬具

日本在留和蘭代理公使

シ、イ、デロンゲ

（貼紙）

此事果シテ然ラハ彼レニ權理アリ

註　右ニ對スル上野外務卿ヨリノ返翰案左ニ附記ス

（附記）

再答案但シ此意ハ談判ニテ濟セ書翰ハ送ラス

貴國人スネル氏我政府え對し申立の義に付當月　日附の貴簡披見卽右回答として左の件々申述候

貴簡中に副島より御約束申入云々と有之候處右は拙者同人より話上承り候處にてはスネル氏義彼地におゐて取引の模樣彌賊軍に應援いたし候事無之との確證有之事明亮に歸し候上は申立の趣聞屆可申との意味に有之此義は同人の話にて兼々承知いたし候義にて且は我政府の外務卿たるもの苟も事情點檢を盡さゝる前外國公使え約定および候等の過失は無之筈に候將又此般の一條事情調査候處却てスネル氏に取り不爲めに相成候姿にて其譯は同人より議論の證據として差出候書面によれは全く同人の所業戰爭時間禁制の諸品を輸送し賊の助援を爲せし事瞭然に有之候

又貴簡中御記載有之候四ヶ條の廉左に答を申述候

第一條

四月廿六日附拙者の書簡中に縷述及候通り官軍新潟近傍へ差迫り候節スネル氏賊に兵器金額等を仕送り以て賊勢を援け是かため賊の防禦彌堅固にして戰爭の時間極めて長延に

至るべきの憂あり是れ官軍の兵士等新潟え進入の節彼スネル氏の所有物を盡く取押へし所以なり此時誤て外獨以兩國商人の所有物をも取押へ候次第に有之候故にスネル氏所有物は全く敵兵の物具と見做し殊に其品柄に於ても亦敵兵の力を益すものなれは斷然之を取揚候義に有之候

第二條

是迄スネル氏に對し候ては他の外國人同樣常に相當の待遇いたし來候得共同人義假令陽に敵を助けさるも陰に我兵を傷害いたし候所業を以て一旦我敵と相成候上は我兵に對し戰鬪する者の一人と視るの理あれは爾後は同人生國の名を失へるものと我方にて見做すの理有之候

第三條

一旦同人を以て敵兵の壹人と見做せし上は何樣の次第ありとも我政府に於て同人の請求に應するの理無之候

第四條

獨以兩國の商人賊に應援せしとの事は我政府おゐて曾て知らさる處なれは同人等申立の趣聞屆候は當然に有之候

スネル氏は條約の權理に基き新潟に趣きし理あるを以て姑く公論と見るとも敵兵の勢力を助け我政府え對し不正不當の處業をなせしを正理とは難申同人は我國に對し至極懇親にして友誼厚き故を以て局外中立を布告せし主君の臣下中の壹人なれは其主君と政府との趣旨を奉戴せさるを不得事と相考へ候

條約による時は正月第一日新潟を開港すへき筈なれ共其條約中には戰爭のことき一國の大難事を前知して預め之に用ゆへき條令を設けしことなく然る上はかゝる時變に際し各國政府にも强て條約の文面通り一々踐行すへきを我に迫ることは被致間敷況乎爾時我政府より發出せし布告に付各國公使多くは承諾せしに於るをや殊に此布告を出せしは同所は戰場の一部にして政府充分に中外の人民を保護する能わさるにより外國人え戒心諭告の爲めなれは是我政府至當の職掌をなせしに有之候

我書簡中スネル氏局外中立の法を破りしことを擧けしは同人主君の命令に悖戻するの罪は勿論萬國公法に違背せしは其罪不可遁事に付右の故を以てもスネル氏は既に貴國政府の保護を失し候事と存候旨を申述候義に有之候

貴簡又云同人を隱密の吟味にかけしと拙者是を解する不能其故は曾て同人新潟に於て取引せし模樣に付拙者共より同人え尋ねしこと有之然れ共之を以て秘密の吟味と稱せらるゝは全く誤解と存候長文（ママ）長文なる貴簡中始終閣下には更に御注意無之全く御放棄被成候一大事有之候今閣下其事に御注意あらんことを希望いたし候是れ他事にあらすスネル氏賊勢を援助せしより數多の人命を失亡し人の所有品を損害せしこと夥敷隨て之か爲め戰爭も無益に長延に及候然るに爾時賊兵同氏より仕送りし軍器等のこときものを得るに非されは早く干戈を止めしを更に疑ふへきにあらす之を以て考ふるときは交兵の時に當り敵の所有品中其勢力を加添すへき諸品は斷然之を取上くるとも聊か正理に反せること有之間敷是文明各國政府の認むる處と符合いたし候事と存候

結局右の次第に候得は我政府におゐてスネル氏自己の處業と所望とによりて引請けし損失を無謂償ふの理無之候間乍御氣毒及御斷り候且此事件に付閣下公明正大の氣節を以て御熟考被成候へは我政府辯論する處一々事理至當たること明亮に御了解可相成と希望いたし候

會津米澤えスネル氏より賣渡したる品物代價拂戻の義は司法省え申遣し同所おゐて微細に點檢の上裁判可及筈に有之

即　月　日附拙簡を以て當省と司法省との間事務取扱の振合申進せし通に有之候尤貴簡に外務省の外他の省と直ちに御引合被成候事は御不都合に有之趣に付御所望に候はゝ貴館書記の內を裁判の席え立會として御差出被成候義は聊か故障無之候

貴簡末文に我國の聲名を汚すことなれは和蘭政府或は當國在留の御同僚え御通達御見合被成候との義一應御好意の段は謝入候得共前文縷述および候次第更に秘置へき義に無之候間公然貴政府に御申立相成候とも拙者於ては敢て不辭處に候

右回答如此候敬具

六年六月　日

外務少輔　上野景範

シデロング閣下

二〇一　五月十日　上野外務卿代理ヨリ大隈大藏事務總裁宛

和蘭人「スネル」ヨリ會、米兩藩ヘノ購入武器未拂代金請求ノ儀ニ關シ處置方依賴ノ件

（朱書）「第四百五十四號」

横濱在留和蘭商人エドワルドスネルより舊會津米澤藩に係る負債幷戊辰八月新潟におゐて官軍に被掠奪候物品貨幣共合金拾貳萬四千九百四拾九弗（ふカ）九拾セント當政府より償却を請求候旨一昨年中同國公使より申立候に付爾後談判を重ね事實大概取調候處前書スネル義は戊辰戰爭間會津米澤等諸藩へ兵器賣渡の取次等いたし候ものにて右負債も多分其ため所生の物に付掠奪といへとも右等の擧動より釀成せる事に付凡て當政府にて可引受理無之との譯を以て此程別紙の通代任公使へ申遣置候乍去會津米澤兩藩に係り候訴は必竟藩債にて逐々御省に於て償却相濟候舊仙臺藩瑞西人シーベル獨乙人テキストル等の件々と略同樣のものにも有之旁當省限り裁定可致ものに無之依て藩債取扱定例に從ひ先御省へ御廻申候御調査の上例の通御取扱可有之候此段和歐書類相添申入候也

五月十日　　上野外務少輔

大藏事務總裁參議　大隈重代（マヽ）殿

追て昨年中當省於て取糺候に付今般差進候書類の外雙方より差出候書類も多數有之候間御入用の節は何時も可差出候也

註　本號文書ニ對シ六月四日附大隈大藏省事務總裁ヨリ上野外務卿代理宛書翰ヲ以テ「何分於當省難取扱到底於司法省審判可有之事件と相考候間夫是御再考之上可然御取計有之度」トノ旨ヲ以テ關係書類ヲ返却シ來レリ

二〇二　五月三十一日　上野外務卿代理ヨリ太政官正院宛

和蘭人「スネル」ヨリノ請求ニ對シテハ情狀酌量ノ上特ニ若干ノ金高ヲ惠與シ解決セシメ度旨伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官指令

（朱書）「第七百十五號」

横濱在留和蘭商人エトワルトスネルより舊會津米澤兩藩に係る負債幷戊辰八月二日（西洋千八百六十八年九月十七日）新潟にて官軍に被掠奪候物品及現金損失とも合三件金高拾貳萬四千九百四拾九弗貳拾セント辰年以來五ケ年の利息を加へ合金高拾五萬餘弗即今當政府より償却の儀願立候旨一昨年中同國公使より申立爾後逐々事實取調談判往復をも相重ね猶反復熟慮仕候處甲立中事實齟齬の廉々も不少見候得とも新潟において物品掠奪せられ候義は相違も無之右は此程償却相濟候孛伊兩國人の分と同樣の事件に付其所置も自ら區別致し難き筋に有之若し强て區別する時は國柄に寄りて處分を異にするもの〻如く自然交際偏頗の嫌を免かれ難く到底此申立を悉皆棄擲すへからさるは理勢不得已次第に有之然る上は今其取捨許否に付數回の談判を重ね精細算計致し候とも其眞に可棄擲もの能く幾何なるへき哉未可知候就ては此節スネル氏眼疾危篤歸國を思へとも此事決せさるか爲め歸り得さる趣も申立其情可憫次第も有之旁即決を主とし不要の手數を省き其取捨精細の算計に及ふ事なく請求高拾五萬餘弗の三分一以下の高可拂渡見込を以談判及ぶへくと存候右にて可然候はゝ金高等確定の儀は逐て談判の上申上候樣可仕候依て此段相伺候也

明治六年五月三十一日　　外務少輔　上野景範

正院御中

（朱書）「伺之通ニ候條談判之顚末委詳可申立事」

明治六年六月三日　正院之印」

註　右指令ニ從ヒ六月四日附上野外務卿代理ヨリ太政官正院宛書翰ヲ以テ明治五年以來ノ談判經過ヲ報告シ大藏省ヘノ指令方申請セル處六月七日附太政大臣ヨリ大藏省ニ對シ外務省ヘ金四萬弗即日渡スヘキ旨指令アリタリ

二〇三　六月三日　上野外務卿代理ヨリ和蘭國代任公使宛

和蘭人「スネル」ヨリノ申立ニ對シテハ情狀酌量ノ上特ニ四萬ドルヲ惠與シ同人ヨリノ請求ヲ今後一切廢棄セシメ度旨申入ノ件

六月三日達濟

エトワード、スネル氏請求一件ニ關ル貴翰致落手候然ハ同人ヨリ差出セル請求ノ儀ハ何レモ我政府ニテ全ク之ヲ採用セサルト雖トモ恐ラクハ我官軍ノ爲メ且當時戰爭ノ際商業ヲ營ムニ付多少ハ損失ヲ受シナリト被相考候間同人右等ノ請求ヲ取纏メン事ヲ欲シ久々當地ニ滯留シ窮迫且病ニ罹リタルノ情實ヲ察シテ墨斯哥銀四萬元ノ金額ヲ當人自己ノ手

當トシテ閣下ノ手ヲ經テ同人ニ差與ヘン事ヲ決セリ就テハ同人モ是迄我政府幷ニ舊藩々ニ對シ告訴シタル都テノ請求及ヒ尙告訴シ得ヘキ請求ハ向後盡ク廢棄スヘキヲ以テ請取證書ニ調印可致又我政府ニ於テモ是迄同人ノ爲シタル所業ニ付種々請求スヘキ事アリトモ向後盡ク之ヲ廢棄可致候右回答申進候敬具

明治六年六月三日

外務少輔　上野景範

荷蘭國代任公使
シイテロンク閣下

二〇四　六月三日　和蘭國代任公使ヨリ上野外務卿代理宛

和蘭人「スネル」ニ四萬ドル惠與ニテ同人ヨリノ請求廢棄セシメ度儀ノ申出ハ同人ニテモ承諾セルニ付金子受取ノ爲出頭スヘキ旨回答ノ件

附記一、六月五日右「スネル」ノ金額請取書
二、七月九日獨國辨理公使ヨリ上野外務卿代理宛獨國商人ノ新潟戰爭ノ際蒙リタル損害ニ

對シ賠償アリ度右交渉ノ官員任命アリ度旨申出ノ件

三、明治十年三月十六日寺島外務卿ヨリ岩倉右大臣宛
獨國商人ヨリノ新潟戰爭ノ際蒙リタル損害賠償請求ニ對シ支拂方伺ノ件竝ニ之ニ對スル岩倉右大臣決裁

四、明治十年八月八日獨國商人ノ右支拂金請取書

U. S. Legation Yokohama,
Japan, June 3rd 1873.

His Excellency
Uyeno Kagenori,
Second Vice-Minister for Foreign Affairs,
Yedo.

Sir,

Acknowledging the receipt of Your Excellency's Note of this date embodying a proposal relative to a settlement of the business of Mr. Edward Schnell, I beg leave to state that I have submitted the same to Mr. Schnell who authorizes and requests me to state that inasmuch as his failing health imperatively calls upon him to leave him forthwith for Europe he feels compeled to accept of your proposal regardless of the amount of money he thereby sacrifices. I therefore beg leave to state that your offer is accepted.

On the 5th inst. I will call at your office with the required receipt signed by Mr. Schnell; and accept for him a return receipt and the money in question.

I am Sir
Your obedient Servant,
C. E. DE LONG.
Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of the U. S. of the America,
Acting Representative of the Government of His Netherlands Majesty in Japan.

(右和譯文)

スネルエトワルド氏引合一件落着の御取計御打合として本日附の貴翰正に落手御申越の趣本人え申聞候處同氏も病氣養生の爲め此節歐洲え歸國候積に付損失なから御申立の通り然諾可致旨閣下へ御通達致呉候樣申出候就ては明五日拙者本人の請取書持參にて貴省え罷出金子請取幷本人よりの請取書御落手の證書頂戴可致候此段御答旁申進候敬白

千八百七十三年六月三日

米國公使
シ、イ、デロング

上野外務少輔閣下

註　右ニ謂フ「スネル」ノ請取書左ニ附記ス尙該請取書ヲ領收セル旨ノ六月八日附上野外務卿代理ノ證書ハ省略セリ

(附記一)

Yokohama Japan
June 5, 1873.

Received from the Japanese Government the sum of Forty Thousand Dollars (Mexican) in full payment satisfaction and discharge of each and all claims and demands held and presented by me prior to this date against the Japanese Government including the claims presented against the former Hans of Aidzu and Yonesawa.

EDW. SCHNELL.

Attest,
C. E. DE LONG.

（右附記ニ和譯文）

墨斯哥銀四寫弗

右の高日本政府より正に落手仕候然上は拙者今日迄日本政府幷舊會津及米澤藩に對し差出たる各種の請求需要共悉皆廢棄決算仕候也

千八百七十三年
第六月五日於横濱

エトワルド、スネル手記
シ、イ、デロング證

陸
右和蘭人「スネル」同樣新潟戰爭ノ際蒙リタル損害ノ賠償方獨國人ヨリモ請求アリ同件ニ關スル主要文書左ニ附記ス

（附記二）

Kaiserlich
Deutsche Mission
in
Japan.

No. 32. Yedo, den 9ten Juli 1873.

Nachdem der Daidjo Miyamoto dem Secrétaire-Interprète der diesseitigen Mission Herrn Kempermann auf eine diesbezügliche Anfrage erwidert hat, dass die von meinem derzeitigen Stellvertreter unter dem 19ten Februar an Seine Excellenz den Minister der Auswärtigen Angelegenheiten Herrn Soyedjima gerichtete Note bezüglich einer Reklamation der ehemaligen Firma Rothmund & Co. gegen die Kaiserlich Japanische Regierung bei dem Auswärtigen Amte nicht eingegangen sei, beehre ich mich, Euerer Excellenz nachstehend den Wortlaut derselben zu wiederholen:

Von dem Verwalter der Fallitmasse der ehemaligen deutschen Firma Rothmund & Co. zu Yokohama ist mir Verzeichniss von Waaren mitgetheilt worden, die dem s. z. in Niegata etablirten Holländischen Kaufmann Eduard Schnell in Consignation gegeben und bei der Einnahme von Niegata im September 1868 von Kaiserlichen Truppen geplündert worden sein sollen. Eine mir ebenfalls vorliegende vor dem deutschen Consul in Niegata zu Protokoll gegebene Erklärung des p. Schnell über den ganzen Sachverhalt scheint es unzweifelhaft zu machen, dass die von der ehemaligen Firma Rothmund angegebenen Gegenstände wirklich in der oben erwähnten Weise verloren gegangen sind, rechtlich unumstössliche Beweise werden zudem die Eintragungen in die Geschäftsbücher der Firma ergeben. Indem ich daher mit Rücksicht auf den Umstand, dass die Kaiserlich Japanische Regierung in der letzten Zeit verschiedene durch die Einnahme Niegatas verursachte Entschädigungs-Ansprüche anderer Personen anerkennt hat, nicht zweifle, dass Euere Excellenz auch dem Antrage des Verwalters der Fallitmasse der Firma Rothmund & Co. eine Vergütung der erlittenen Verluste von zusammen etwa 4500 Dollar Statt geben werden, schlage ich Hochdenselben vor, zur Prüfung der von dem Massenverwalter gemachten Angaben einen Beamten beauftragen zu wollen, mit dem Secrétaire-Interprète der Legation Herrn Kempermann in Verbindung zu treten, welchen letzteren ich angewiesen habe, dem hohen Auswärtigen Amt alle wünschenswerthe Auskunft zu ertheilen und die obberegten Schriftstücke zu dessen Einsicht bereit zu halten.

Ich benutze diese Gelegenheit, Euerer Excellenz die Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung zu wiederholen.

M. v. BRANDT.

An
Seine Excellenz
den Stellvertretenden Minister
der Auswärtigen Angelegenheiten,
Herrn Uyeno,
Yedo.

（右和譯文）

七月十二日受取
第三十二號

以手紙致啓上候然ハ過日當公使館ケンプルマン氏去ル二月十九日拙者ノ代任我國元ロートモント會社ヨリ貴國政府ニ對シ訴出候義副島外務卿閣下エ被宛候手紙ノ義ニ付宮本大丞貴下ヘ承リ候處外務省ニテ落手無之旨被答候間其手紙ノ文言今猶左ニ記申候

以手紙致啓上候然ハ過日分散致シ候獨乙國ロートモント會社先達テ新潟在留ノ和蘭人エートアルトスネル氏ニ賣捌ノ

貼紙一　爲メ預ケ置キシ品物同港一千八百六十八年第九月中官軍入込候時兵卒ニ之ヲ掠奪セラレ候處右分散ニナリシ會社殘リタル身代ヲ取扱者ヨリ右品物ノ算計書ヲ拙者ヘ差出候偖其

貼紙二　後スネル氏新潟在勤我國コンシュルノ前ニテ認置候口書同ク手ニ入候處之ヲ見方ヘ候ニ其算計書ニテ書載ラレシ品物

貼紙三　右ノ通紛失致シ候事眞實ニ相見候且又ロートモント會社ノ帳面中其一件ニ付扣置候部類ヲ糺シ候ハヽ是又公平ナル證跡ニ可相成ト存候將又貴國政府近頃他人ノ新潟一件ニ付因テ贖金ノ歎願御差許シ相成候事モ有之候ニ付閣下ロートモント會社ノ殘身代ヲ取扱モノ之願ニ應シ其損毛ノ惣高則凡四千五百枚程ノ金子爲御贖可被下ト存候間右取扱人ノ十分ヲ糺ス爲メ貴省ノ役人ヘ此任ヲ御命シ當公使館ノ書記官兼通辨官ケンプルマン氏ニ應接ナサセ候樣イタシ度尤貴省右一件ニ付可取調諸ケ條ケンプルマン氏委敷說明スヘキ且前書ニ申述候ノ書類御一覽ノ爲メ用意置ヘキ樣申付置候右ノ通ニ候間爲御心得申上候敬具

明治六年七月九日

獨乙國辨理公使　フオン　ブランド

上野外務少輔閣下

貼紙四

（貼紙一）スネルヘ預ケタル證據アリヤ

（貼紙二）此算計書

（貼紙三）此口書可取調事

（貼紙四）此書翰其後取調候處ヒウツヲフ代任中ニテ六年二月中差出有之候事

（附記三）獨逸國人ロスモントヨリ新潟戰爭ノ節損失品ノ償申立候一件伺

横濱在留獨逸國人ロスモント氏明治元辰年中在新潟ノ和蘭商人スネル氏ヘ商品若干ヲ輸漕シ賣捌方致依托候處同所戰爭中右商品スネル所有物ト共ニ官兵ノ爲掠奪セラレ候ニ付我政府ニ對シ損失金請求ノ義明治六年七月中同國公使ヨリ申立有之然ルニ右請求ノ證據トシテ差出候書類或辨稅等何

レモ判然タラス依テ數回談判又ハ書翰往復ヲ重ネ今日ニ至ル迄ハ未タ更ニ明瞭ナル證書類彼ヨリ不差出候ニ付右請求ハ可受理筋無之候得共彼ノ所論ハ嘗テ同國人クレメル伊太里人アンドリコ和蘭人スネルヨリ右同樣ノ請求有之節我政府夫々ヘ償却セシ適例有之獨ロスモント氏ニ限リ不相拂理ハ有之間敷トノ論ヲ唱ヘ居候處右アントリコ及クレメルノ二件ハ我官兵ノ掠奪セシ模樣概略相違無之ニ付其求ニ應シ被拂遣候儀ニ有之スネルノ分ハ損失品ノ內譯頗多數ナルノミナラス其事跡頗詭譎ニ出到底可相拂條理無之候ニ付嚴敷謝絕候得共其請求高拾五萬圓餘ノ內多少ハ損失セシニ相違無之ト被察加之和蘭公使ヨリ再三懇請シ交際上難默止ト認候ヨリ其頃外務卿代理上野少輔ヨリ明治六年五月六日兩度正院ヘ伺ノ上特別ノ御詮議ヲ以洋銀四萬弗惠與金ノ名ヲ以被拂遣候儀ニ有之右ロスモントモ事證判然ナラサルトハ乍申スネル同樣多少損失セシニハ相違有之間敷且ロスモントヨリ訴出サル前スネル請求高取調候砌同人差出候內譯書ノ內ニモロスモントノ品ノ分ハ相除キ不申立旨ハ計算書ニ記載有之スネルヨリ償辨セシモノニアラサル事明ナル上ハ彼ノ請求斷然謝絕スルニ忍ヒススネルノ例ニ倣ロスモント請求高四千四百弗餘ノ四分一以下位ハ拂遣ワサヽルヲ得スト存候右ニテ可然候ハヽ金高等ハ猶談判確定ノ上追テ上申可致候此段相伺候也

明治十三年三月十六日

外務卿　寺島宗則

右大臣　岩倉具視殿

（朱書）「伺ノ趣聞屆候事
明治十年三月廿九日　右大臣岩倉具視印」

（附記四）

Hiermit bescheinige ich, dass ich von der japanischen Regierung die Summe von Eintausend Dollars erhalten habe als Entschädigung der Masse Rothmund & Co. für s. Zt. beim Bomberdement und der Einnahme Niigatas durch die Kaiserlichen Truppen erlittene Verlüste und erkläre ich im Namen der Masse wegen dieser Angelenheit keine weiteren Reklamationen gegen die japanische Regierung erheben zu wollen.

Yokohama, 8. August 1877.

JOHN MAACK.

Massenverwalter für Rothmund.

(L. S.) Die Wichtigkeit obiger Unterschrift des Herrn John Maack, Verwalter der Masse für die in Liquidation befindliche Firma Rothmund & Co. wird hiermit attestirt.

Tokio,

den 8. August 1877.　　V. EISENDECHER,
Minister Resident.

(右和譯文)

曾テ新潟ノ掠奪ニ際シ我商會官軍ノ爲メ損失ヲ受ケシ償却金トシテ今般洋銀一千弗ヲ日本政府ヨリ正ニ收領致候且ツ右事件ニ關シ日本政府ヘ對スル訴訟ハ是ニテ相止メ可申候此段爲保證如斯ニ候也

横濱千八百七十七年八月八日

ロートムンド商會ノ後支配人
ジョーン、マーク　手記

右ロートムンド商會ノ後支配人ジョーン、マーク氏ノ收領證ハ正ニ確實ナルモノニ有之候也

東京千八百七十七年八月八日

獨逸國辨理公使
フオン、アイセンデツヘル　自記

在日本獨逸公使館ノ印

事項一三　秘露國風帆船「マリヤ、ルス」號ニ關スル件

〔第五卷事項九參照〕(事項六參照)

二〇五　三月五日　副島外務卿ト秘露國使節トノ對話書

日秘兩國間通商條約締結ニ先立チ「マリヤ、ルス」號事件了解ノ爲關係書類要求ノ件

明治六年三月五日於外務省副島外務卿秘魯國特派全權公使カルシヤと應接記

侍座　上野外務少輔　筆記　花房外務大承
　　イ、ビスミツス
通辨　秘魯公使館書記　エルモール
　　米國公使館通辨　ラ　イ　ス
　　戸橋外務少承

公使

過日謁見の砌言上候通今度使命の大意は穩當正理の交誼取結度義に有之候就ては今日は右の條件委曲御談判仕度候

一三　秘露國風帆船「マリヤ、ルス」號ニ關スル件　二〇五

兩國互に其富を有し候義は申迄も無之就中ペリューにては「ゴアノ」幷金銀鑛の類日本にては茶絹其他耕稼の事最其富める所にて互に其富を交易するは兩國の爲め不可缺事に付夙くより兩國結交至要の段評議有之既に昨年八月使節派遣の義相決し其使事を鄭重にし其敬意を表せん爲め軍艦二艘を將てカヒテイン、カルシヤを差遣すへきに定られ候處其出帆に臨みマリヤルーツと申ペリュー國船日本にて御吟味筋有之候趣リマ在留英公使より承知いたし候に付右事件不詳明迄は使節差遣の事も暫く見合置候處右船關係のもの其他支那幷に歐羅巴州え差出置候諸官より報知の趣も有之委細相分り候へ共日本在留米國公使へペリュー國の事務も托し置候事故同氏の公報をも相待居候處其砌同氏は留守中故歸着後月日後れて右事件同氏より公然報知有之候然るに右一件は唯ペリューと日本との關係のみならす右船に關係あると然らさるとに論なく宇内各國の公儀も有

之事實萬國公法に關し不容易義に付篤と評議も有之候上此度の使節を軍艦にて御差遣候ては却て天下の疑意を招き候半と憚り且日本に於ても素より公平至當の御取扱可被下を信し郵船より差遣相決し候事に御座候當國ペリュー國大統領は有名の政事家にて百事正理に基き其政を施し候事は是又御信用可被下義敢て疑を容れさる所に御座候且是に申上候は先年ストーンウオールと申甲鉄艦米國より御取よせの砌ペリュー領カヤヲに着仕候節も最懇信の取扱仕候事に御坐候右は御國船をペリューにて正しく懇篤に取扱候徴候に御坐候此度前段申上候懇信の交誼取結へき御談判仕へきに付ては其前右マリヤルーツ一件篤と了解いたし度候付ては關係の書類等不殘拜見相願度候

此時外務卿右一件書類刊行の物差出され

此分は當時刊行せし寫に有之此餘御入用も候はゝ後刻追々可差出候且拙者義近日外行可致積に付若し御談判急に片付兼候樣の事に候はゝ上野少輔に代理爲致へし尚此一件に付ては時宜に寄各國の公儀にかけ候ても宜敷尤可成出立前片付候樣可致候

二〇六　三月七日　副島外務卿ト秘露國使節トノ對話書

「マリヤ、ルス」號事件解決ニ到ラサルトキハ第三國ニ委託スヘキ旨商議ノ件

第貳應接書

明治六年三月七日於外務省副島外務卿秘魯國特派全權公使カルシヤと應接記

筆記　花房外務大丞
通辨　石橋外務少丞

秘魯國書記
同　アルモール
米國公使館通辯
同　ライス

拙者發期の差迫候に付其前御使命の大意篤と承知致置度態々御足勞相掛ケ候其故は過日御差出相成候御國書にては條約御取結の御趣意と相見へ候其義如何に候哉且マリヤルーツ船の義に付ては當政府に於ては極て仁義と正理とに基き取扱候事にて最初入港差許候事幷に訴訟に關せる諸入費等差出方其他右船長取扱方に付ては可成慈愛と正理に基き候事申迄も無之事に御坐候乍然右一件に付御議論も有之候はゝ素より聽容を辭せさる事に御坐候得共先御使命の大意承知致し置かす候ては發途に際し天皇陛下に奏上するにも差支且清國に在ても他人の問に答へき言をしらす候故先其大意承度候

本來出使の大意は結約の爲に有之候得共發するに臨てマリヤルース一件の新報を得候已來先右一件の事を議すへき義使命の第一義と相成隨て結約の事は第二義と相成候事に御坐候一體右マリヤルーツ一件は通常萬國公法上の事件とも異り非常の御取扱とは存萬國の評論をも受ペリュー人民於て非常の損害を蒙り候事と相見へ候に付ては此事件明了不相成前は他事に陟り兼候事に御坐候此事に付ての書類は夙く一見致候得共尚其他御國にては書類も有之へくと過日一見相願則御遣し被下候事に御坐候得ば不遠逐件申上候樣可仕候兩政府の趣意一致と相見へ候件々は別に書面にて申上候程にも無之候得共齟齬致候樣相見へ候ヶ條は明確なるへきため書面にて御往復仕候樣致すへく候

本來使命の大意結交議約に有之上は假令此一件議論如何に相成候とも兩國間の事件に付他國の評論を乞は素より不好事にて又如此せされは不叶程の頑論は決て申さゝる積に有之候

素より不好義に候得共詮方なくはと申結局の論より過日も若し結末決し難くは他國の論に任し候ても可然と申たる事に御坐候

且他國に論を乞ふは不好事には候得共若し不得已して此境に至り候はゝ一の他國に御任せ可被成乎又は各國に御任せの積りに候哉

一國にても各國にても無論に候尚其節の模樣によるへし

兩國正理により公平に取扱ふは申迄もなき事に候得は若し不得已時に至り候共各國に任すにも及はさる事と存候

間兩國にて懇信の一國え任せ候樣相成可然と存候此度の一件損害些少なるも公法の條目に取り大切の事に候間如此申上候事に御坐候譬ば何れの一國に任せ幾月の間に其政府にて決する所の論に從ふへしと申樣豫め其方法を取

極置候はゝ可然と存候

未た議論の所至を知らす何そ結局の決議を論するを得んや

左様に候乍去他國に任すと申一段はペリューの船を差留られ候に付て生する處の損害可償哉否と申所たけに有之候

それ等は委曲わ申立候はゝ對論の上模様次第他に任すとも如何とも可致且即今其仕方の委曲を定る譯には不相成候

即今議論の最初にあたり未た委曲を不盡して他に任すと云ふ事を議するの主意は閣下御出立前此一件の局を結ひ度との御趣意と存候故に候

必らす發足前に結局し度との意には無之反覆議論の末結局に至らさる節は不得已他國に任せさるを得すとの意に有之候

然は近日逐件可申立候素より穩當至公ならん事を望事にて決て頑固の癖論を主張する譯には無之候此一條はペリューに限らす凡て航海國の爲には極て緊要の事に有之候得は萬國公法に基き公平至當の議論を以結局せされは不叶事にて極て丁寧に議論を盡し書面も細密に取調度候付

少々日數費し可申に付若し其中御出立相成候はゝ代理の方え申上候様可仕候

然らは出立後にても夫々取調御答仕候様命し置へく候

終る

二〇七　三月三十一日　秘露國使節ヨリ上野外務卿代理宛

「マリヤ、ルス」號處置ハ不法ナルニヨリ右損害賠償アリ度旨申越ノ件

附屬書一、明治五年七月十四日林權典事及「ヒル」ノ「マリヤ、ルス」號船乘組人取調書

二、三月十一日澳門總督代理ヨリ在日本秘露國使節宛書翰寫

「マリヤ、ルス」號ニ移民乘込ノ實情報告ノ件

三、明治五年七月二十一日澳門支那人移民監督ヨリ澳門總督宛書翰

「マリヤ、ルス」號乘組支那人ニ關シ報告ノ件

四、慶應三年十月二日各國公使等ヨリ幕府老中兼外國總裁小笠原長行（壹岐守）宛書翰

横濱外國人居留地取締規則報知ノ件

五、慶應三年十一月二十二日舊幕府老中兼外國總裁小笠原長行（壹岐守）ヨリ米國公使宛書翰

横濱外國人居留地取締規則同意ノ旨回答ノ件

以手紙致啓上候然者貴國官員我秘魯國「バルク」形「マリヤルズ」船ヲ取押へ無法ノ處分ヲ爲シタルハ實ニ奇怪ノ事ナレハ萬國衆人之ニ注意シ且我祕魯合衆國ノ名聲及ヒ我國民ノ利害ニ關スルヲ以テ我大統領閣下ノ命ニ依リ今爰ニ閣下ニ呈書ス

前件ノ顚末ヲ糺シ事實ヲ明カニシ我秘魯國ニ案外ノ不正ヲ施シ我國民ニ損害ヲ加ヘシ次第ヲ論シ貴國政府ニ對シ我政府ヨリ至當ノ請求ヲ爲スヘキハ素ヨリ書翰ノ眼目ナレトモ拙者常ニ貴國トノ親誼深カラン事ヲ欲スレハ當月五日閣下ノ前官副島種臣閣下ト面談ノ節申述タル趣ヲ先ツ爰ニ再ヒ敬述ス我祕魯國ハ貴國ノ内地及ヒ國政ヲ開明シ通商ヲ盛ニシ駸々開化ノ域ニ進メル景況ニ注目スル事爰ニ數年ナリ抑兩國ハ物產ニ富ミ其種類各相同シカラサレハ雙方互ニ之ヲ流用シ且大ニ稱譽スヘキナリ又兩國間ニハ唯一大洋アルノミナレハ航海通商ニ便ニシテ一年内九ケ月ノ間ハ如何ナル船舶ヲ以テ航スルトモ更ニ危難ノ患アル事無シ

土地培養ノ鳥糞（當地ニテハ最モ必要ノ物ナリ）ヲ夥多輸出スルハ我秘魯國ニ限レリ且我祕魯國ハ肥饒廣大ノ地ニシテ硝石、硼砂、埃阿顛ヲ產シ又許多ノ砂糖、秘魯木皮、加非、呀嚙蟲、羊毛「ヲルチラ」（染料ノ名）等ヲ生ス是等ノ物品ハ當帝國ニ要スルモノナレハ漸次供用スル事多キニ至ラン貴國ニ於テハ各國ノ市場ニ於テ頻ニ渴望スル絹、蠶、茶、陶器、米、材木、石炭、漆器、黃銅、石等種々ノ製品ヲ輸出ス依テ我國多クノ智者永續ノ基礎ヲ以テ兩國ノ通商ヲ定メン事ヲ希望シ既ニ三年前利馬府商人ノ回章及ヒ新聞紙ニモ當帝國ニ公使ヲ遣シ和親通商航海ノ條約ヲ取結ヒ商客及ヒ資金ノ保護ヲ爲サン事ヲ論シタリ是ニ於テ千八百七十二年八月米國銳敏聰明ナル拔群ノ政學家ドン、マニュール、パルドー閣下我秘魯國ノ大統領ト爲リ政ヲ執ルニ當リ素ヨリ練熟賢明ノ人ナレハ貴國ト確然通商ノ法ヲ立ナハ兩國ノ

裨益大ナラン事ヲ知リ則チ下名ノ者ヲ特派全權公使ニ任セリ大統領閣下ハ其尊敬ノ意ヲ

天皇陛下ニ表セン爲メ我國最良ノ甲鉄軍艦「フレガット」形「インデペンデンシヤ」艦「コルフェット」形「ユニオン」艦ノ二艘ヲ以テ此使節ヲ送ラン事ヲ命シ速ニ其用意ヲ調ヘ既ニ解纜セントスルノ折偶々英公使館ヲ經テ秘魯國「バルク」形「マリヤルズ」船横濱港ニ於テ差止メラレ日本裁判所ノ處分ヲ受タリトノ新報ヲ利馬府ニ得タリ依テ我政府ハ尙精細ノ確報ヲ得ント待居タリシガ幾程モ無ク其始末種々ノ新聞紙上ニ見ヘ且外國在留我國官員ヨリノ來書中ニモ見ヘタリ

千八百七十年四月以來當帝國ニ於テ我秘魯國ノ事務ヲ兼任セル公使シ、イ、デロンク氏「マリヤルズ」船ノ差止メラレシ時折惡クモ合衆國ニ行キ當國ニ在ラザリシカ程無ク歸着シテ事ノ顚末ヲ聞キ精ク我政府ニ公報セリ依テ無法ノ處分アリタル事利馬府ニ判然知レタレハ我政府先見ヲ以テ此節「マリヤルズ」船取押ノ事起ルニ當テ前決定ノ如ク軍艦ニテ使節ヲ送リナハ或人其勸告ノ容ラレン事ヲ欲シテ事實ヲ變セント頻リニ企チタレハ此人々（日本長官ハ右勸告ヲ用ヒ

正道ヲ捨タルナリ）奇怪ニ思フニ至ラント推察シ是ニ於テ我政府ハ最モ平穩ヲ旨トシ且ツ貴國政府ノ公平ナルヲ信シ右海軍ヲ送ル事ヲ止メ公使館附屬ノ官員ヲ率ヒ郵船ニ乘シテ可成丈速ニ發出セン事ヲ命シタリ是レ我政府其趣意ヲ變スル事ナク又當帝國ト和親條約ヲ取結ハント欲スルノ意ヲ廢セサルヲ以テナリ閣下宜ク爰ニ注意アラン事ヲ請フ

右ノ外拙者「マリヤルズ」船一件ニ付不條理且其損害ノ爲メ貴國政府ニ相當ノ請求ヲ爲スヘキヲ併セ任セラル是レ素ヨリ利馬ノ內閣ニ於テハ貴國政府ノ公正ナルヲ信スレハナリ故ニ今尙兩國永續ノ和親交誼ヲ結約セントスサテ三月八日副島閣下ト二度目應接ノ時「マリヤルズ」船ヲ處置セシハ貴國政府ニ於テ敢テ我國ニ害ヲ爲シ我人民ノ利益ヲ妨ントノ趣意ヲ以テ爲シタルニ非ス唯善意ト人道ヲ盡ス爲ナリト副島閣下ノ御辨解ヲ以テ觀レハ豈和親ヲ結フ事ノ難カランヤト思ヒ且右御辨解ノ趣キヲ聞キ大ニ喜フ所ナレハ今閣下拙者ノ論說ヲ甘ンシテ熟覽アルヘシ閣下熟覽アリシ上ハ右「マリヤルズ」船ノ處分假令善意ヨリ出ルトモ又拙者之ニ同意スルトモ是ヲ以テ一人或ハ一國ノ權理ヲ犯セルヲ補フニハ足ラザルベシ閣下此說ヲ容ラルヘキハ敢テ疑ハザル所ナリ

「マリヤルズ」船ノ船司ハ則チ我秘魯國ノ人ニシテリカルドウ、ヘルレラナリ千八百七十二年五月廿八日移民雇夫二百二十五人ヲ乘セ「カルラヲ」ニ向ケ葡國領瑪港ヲ開帆セリ右ハ利馬府在住ノセノル、エミリヲ、アルゾースノ手代瑪港ニ在ルタンコウ、アルメロウ氏トノ定約ニ因テ然ルナリ又船司直約定ヲ以テ小使十二人ヲ乘セタリ右ノ定約ハ何レモ欺僞ナキ爲メ葡國規則ノ本手數ヲ爲シ加之瑪港在留秘魯領事ヨリモ右ノ通相違ナキノ證書ヲ取レリ葡秘兩國ノ保護法ハ淸國ノ法ト異ル事ナク其法則ヲ循守シタレハ右證書ハ公法ノ旨趣ニ適ヒ確實ナルモノナリ故ニ書面ノ通リ行フト行ハサルトニ付處置裁判スルハ約定ヲ爲シタル國ト約定ヲ果スヘキ國ト雇夫ノ本國トニ在リ則チ葡、秘、淸、是ナリ

出帆ノ後三四日ヲ經テ風雨ノ爲メ船ニ損所出來ケレハ之ヲ修理スル目的ノミニテ貴國ニ向ケ航海シ遂ニ同年七月十日神奈川近海ニ投錨セリ然ルニ地方官初メハ船ノ入港及ヒ滯泊ヲモ否ム事ナク又其後雇夫船ナルヲ知リナカラ諸書類ヲモ預リ置ケリ

爾後七月十三日迄ハ格別何タル事モ無ク船中ノ者共修覆ニ

リ

取掛リ居タリシカ同日港內碇泊ノ英艦「アイロン、ヂューク」號ニテ近傍ノ海中ニ在ルヲ引揚ケタリトテ雇夫一人ヲ橫濱英領事ロベルトソン氏ヨリ神奈川縣令ヘ送リ渡セリ斯ノ如キ事ハ輻湊ノ港ニ於テハ屢アル事ナリ右ハ兎角船中ニ馴レザル者ハ困倦ニ堪ヘサルヨリ右等ノ所行ヲ爲シ又此移民輩ノミナラス右樣ノ約定ニ束縛セラル、水夫兵卒ノ如キモ其給料ヲ前以請取リ既ニ遣ヒ盡ス時ハ其使役ヲ遁レントスルハ常ニ有ル事ニシテ是等ノ事ヲ知レル人ハ敢テ此ノ如キ事ニハ心ヲ留メザルベシ貴國官員モ此事ヲ了解アリテカ何國ノ人タルヲ論セス送リ返スヘキ脫走水夫取扱ノ例ニ倣ヒ右脫走ノ雇夫ヲ本船ニ送リ返シタリ

尙三四日ノ後他ノ雇夫一人「アイロン、ヂューク」艦ニ泳キ來リシカ其艦ヨリ陸上ニ送リ放テリ「マリヤルズ」艦ノ士官之ヲ見當リ本船ニ送リ返セリ

「マリヤルズ」船ハ損所ノ修覆モ整ヒタレハ最早開帆セント思フ內千八百七十二年八月二日驚愕スヘキ一事出來セリ右ハ公法中ニモ例ナク各國公使毫モ承諾セサル甚タ危險ノ一事ナリ則當帝國在留英國代理公使ロベルト、ガラント、ワットソン氏艦長次官ト譯官ヲ伴ヒ軍艦附屬ノ小船ニテ「マ

リヤルズ」船ニ行キタリ折節船司ハ上陸中ナリキ右ノ如ク非常ニ船中ニ來リ英國ノ舊親友タル國ノ旗章ヲ揚タル船（マリヤルズ船ヲ云）ノ中ニテ吟味ヲ爲シ獨立國ノ領海（日本海ヲ云）ニ於テ可成丈事ヲ重クセントシタルナリ

最初ニ脫走シタル一人ノ雇夫髮尾ヲ截斷セラレタルヲ見出シ其翌日ワットソン氏一書ヲ貴省ニ送リ右ハ全ク取扱ノ宜シカラサルヤト推察スルノ由ヲ告ケタリ是其推察ノ由テ起ル所ハ全ク斷髮セラレタルニアリ髮ヲ截斷セシハ相違ナキ事ナレトモ取扱宜シカラサルトハ言ヒ難シ

右ワットソン氏ノ書翰ハ見閲ノ爲メ閣下ヨリ寄送アリタル「マルヤルズ」船處分公書簿ノ最初ニ載ラレタレハ拙者ノ欲スル所ニ非レトモ事ノ順序ヲ整ヘンカ爲不得止前條ノ情實ヲ記サンワットソン氏ノ此事ニ關セシハ利馬議院ト「シント、ゼームス」（英國）議院トノ間ニ關ル論ナレハ暫ク措テ爰ニ論セス謹テ英國政府ニ告ン

今神奈川縣廳ノ處分ヲ論セン各國領事ヨリ其頃抗論ナシタレトモ斷然之ヲ採用スル事無ク其處分ハ外務省ニ於テ管轄シ其後之ヲ許可シタレハ右ノ處分ハ貴國政府ノ責ニ歸スヘシ

右裁判ハ左ノ缺典アレハ廢物タルヘシ

第一　所轄ニアラサル事

第二　裁判設立方ノ正シカラサル事

第三　處分ノ自儘ナル事

第四　獨裁ヲ爲サヽル事

大洋或ハ他國ノ海中ニ於テ外國船中ニ起リタル事件ニ貴國ノ官員或ハ他國ノ官員ニテモ之ニ關スルハ公法ノ許サヽル所ナリ若シ貴國領海ニ於テ港内ヲ騷カシ或ハ公私人民ノ損益ニ關スル等ノ事アル時ハ地方官之ニ關スルヲ至當トス然リト雖モ唯船中教戒ノ事ニ於テハ之ニ關スル事ヲ得サルナリ

「マリヤルズ」船横濱滯泊中船司ノ取計ニ三箇條ノ罪アリトセル其理否及ヒ如何ナル罪ナルヤヲ今爰ニ辨論セン偖支那人三名ノ髮尾ヲ截斷セシハ其與徒ヲ懲戒セン爲ニテ是等ノ事ハ船中ニ於テ船司タル者ノ有スル權ナリ殊ニ私ノ事ナレハ敢テ罪犯ニ非ス又支那人自國ヲ出タルトキハ斷髮セサル者甚タ稀ナレハ敢テ取扱ノ粗暴ナルニモ非ス

又泳テ「アイロン、ヂューク」艦ニ逃レ復ヒ「マリヤルズ」船ニ送リ返サレ懲戒セラレタリト云フ雇夫モ又嚴酷ノ取扱ヲ受タリト云フ者モ自ラ其由ヲ司法官或ハ船中ニ在ル貴國遷卒ニモ愁訴スル事ナク唯他人ノ代リ告ゲシナリ然レトモ其人證據人ト云フニモ非ス唯自ラ見聞スル所ヲ實トシ述ルノミ依テ罪科ヲ以テ船司ヲ論スヘカラス然ルニ罪ニ處セラレタリ

移民ノ脫艦ヲ防クハ則定約中ニ含メル意ニシテ船司タル者ハ之ヲ防クノ手數ヲ施スヘキ權ヲ有ス假令船司ヲ罪アリト爲シ貴國官員ノ處置ヲ爲シ得ヘキ事ト爲ストモ雇夫ヲ不殘上陸セシメ吟味ヲ爲セシ原因全ク充分ナラス別紙第一號八月八日附ペンソン氏ノ書翰別紙第二號同月十五日附林氏及ヒヒル氏報知ノ趣ヲ以テ觀レハ雇夫共ノ愁訴セシハ貴國所轄外ニテ起リタル事ノミナリ又八月十九日裁判ノ節縣令大江卓氏申サレタルニハ瑪港ニ於テ誘拐サレタル趣ノ愁訴ヲ吟味セン爲メ移民共ヲ上陸セシメ尋問セシト是レ日本所轄ノ外ニ起リタル事ニシテ海賊ノ所業ニモ類セサル事ナルヲ其權ヲ犯シテ吟味セラレタルナリ

「マリヤルズ」船ハ自ラ好テ定約セル移民ヲ運送セル者ナリト云フ事ハ素ヨリ記憶シ置ヘキ事ナリ殊更右ハ葡國及ヒ秘國法律ノ許ス所ニシテ貴國ノ法律及ヒ風俗ノ禁スル者ニモ非ス右ノ次第ハ裁判ノ節差出セル確證シタル約定書、瑪港移民取締局ヨリノ船免狀、通行切手、健康狀其外諸證書類ニテ明カナリ

右等ハ正當ノモノナレトモ敢テ之ニ關セス貴國所轄外ニテ取極メシ定約ノ事ヲ主トシテ吟味セラレタリ是ノ如クシテ右ニ云無疑ノ證書ヨリ猶支那人ノ證據モナキ中立ヲ重ンシ縣廳ニ於テハ吟味ノ時モ裁判ノ時モ右證書ニ關セサリシナリ

右ニ付明治五年八月十五日附ヲ以テ副島外務卿閣下ヨリ葡國

皇帝陛下ノ使節兼瑪港ノ鎭臺ナルウィスカウント、テ、エス、ジヤニュアリオ閣下ノ訴訟ニ對スル返翰ノ趣ヲ今爰ニ贅述ス其旨意ニハ「葡國

皇帝陛下政府ニ於テ瑪港ヨリ出ル所ノ支那移民ヲ正道ト仁義ヲ以テ保安セン事要用ナリト思惟アリシ條件ヲ我奉職ヲ辱フスル政府ニ於テ敢テ論スル趣意ニハ無之又日本裁判所ニ於テモ右規則ハ瑪港ヨリ出ル所ノ移民ヲ進退シ支那人ヲ保護スル爲ニ編制スル者ナレハ其旨趣其意ニ適セサルトハ

思ハザルナリ」ト外務省編成秘魯「バルク」形「マリヤルズ」船一件ノ公書附錄（ヘ號）ニアリ

瑪港官員現今ノ法律規則ヲ守リテ正シク「マリヤルズ」船移民ノ約定乘込及ヒ發船ノ手續ヲナシタル事ニ付尙證書ヲ要サレナハ別紙第三號證書ノ寫ヲ尊覽アルヘシ右ハ必要ノ證書ナレハ渴望シアリシカ瑪港鎭臺ヨリ送リ來リシモノナリ

前ニ揭ル第二件裁判設立ノ不正ナルハ別紙第四號ノ約書面ニ依テ明カナリ右約書ハ千八百六十七年十月二十八日東京ニ於テ英、佛米孛蘭ノ公使ト貴政府ト同議シ慶應三年十一月二十二日附ヲ以テ同意ノ旨ヲ外務執政小笠原壹岐守ヨリ米、孛公使フアン、フアルケンボルグ及ヒフォン、ブランド其他外國全權ニ報知アリタルモノナリ其文意左ノ如シ

閣下ト英、蘭、孛公使ノ間ニ議定セシ横濱居留地邏卒竝ニ道路規則書ヲ英公使ヨリ拙者ニ送リ來レリ拙者右規則ニ同意セシニ依リ早速英領事館ニ奉職シアルマルチン、ドーメン氏ヲ右居留地取締掛ニ命シタリ

右規則書ヲ封入シ閣下ノ閲ニ供ス（別紙第五號）

日本政府右ニ一致シタル旨ヲ米公使ファン、ファルケンボルグ氏ヨリ千八百六十七年第十一月十六日附ノ書翰ヲ以テ

米國政府ヘ申遣シタリ右文面ハ別紙第六號千八百六十八年ノ合衆國公使往復書第二編七十三片葉ヲ觀テ知ルヘシ

右約書第四ケ條ニ若シ横濱居留地或ハ神奈川管内ニ居住スル條約未濟國ノ人民ニ裁判ヲ施スニハ神奈川縣令居留地取締役ノ補助勸告ヲ受ケ且各國領事存意アラハ其勸告ヲ聽テ開クベシトアリ

因テ日本官員モ此約書ヲ遵行シタリ其證據ハ「チュニス」國蒸氣船「サドキヤ」船ノ船司スピンクス氏ヨリ同船乘組ノ者ヘ對シタル訴訟ヲ裁判スルニ當リ千八百六十七年第十月二十八日ノ約書ノ趣ニ從ヒ此吟味ニ出頭アラン事ヲ請フ旨神奈川縣令陸奥宗光氏ヨリ別紙第七號千八百七十二年六月三日附ニテ各國領事ヘ書柬ヲ送ラレタルニ因テ了然タリ右ハ「マリヤルズ」船難澁ニテ着港シタル兩三日前ノ事ナリ

然レトモ「マリヤルズ」船取扱一件ノ原記ヲ閲スルニ居留地取締役其裁判ニ加ラズ又各國領事ノ勸告ヲ用ヒス此一件ヲ處分スヘキ權ナキ裁判ヲ開カレタリ

神奈川縣廳ノ裁判ヲ開キシハ唯東京ニテ取結ヒシ約書第四ケ條ニ違背セシノミナラス此裁判ニ關係モナク又權力モナキ輩加リタレハ實ニ日本ノミニテ正シク取設タル裁判ト謂

ヘカラス

其輩ハ則チ米法律家二人（此内一人ハ唯施術家ナリ）且英裁判家一人ニシテ此輩縣令ト共ニ列坐シ直ニ證人等ヲ種々ニ訊問シ其勸言ニ因テ審斷セシナラン

都テ刑法ニ關スル裁判ノ職ハ素ヨリ平常ノ裁判タリトモ嚴正ニシテ相當ノ官員ナラテハ其裁判ニ參與スルノ權ヲ有スル事ナシ況ンヤ其國ノ臣民ナラス又管下ノ人ナラザルニ於テヲヤ右ハ文明各國ニテ施行スル法ニシテ日本帝國ニ於テモ外國人民ニ關スル事ハ此法ヲ用ヒラレン事更ニ疑ヒヲ容レサル處ナリ

神奈川縣廳ノ「マリヤルズ」船一件ニ付施セル所置タルヤ特ニ之ヲ隨意ト謂フヘキノミナラス至當ノ裁判ヲ行フニ緊要ナル總テ公正ノ定規（前ニ揭ル第三件ナリ）ヲ破ル者ト謂フヘキハ右ニ付縣聽ノ施行セル眞ニ奇怪ノ處置ヲ左ニ揭示スルヲ見レハ瞭然タリ

船司ヘルレラニ豫メ口上ヲ以テモ或ハ書面ヲ以テモ同人ヘ歸セシ罪狀ヲ知告スル事ナク全ク知ラサリシ間ニ彼ヲシテ其船及ヒ旅客ヲ失ハシメ殊ニ貶黜スヘキ犯罪律ノ重キニ由テ直ニ彼ヲ裁判所ニ呼出セシ事（別紙第八號）

右情實ヲ貴國官員承知セハ直ニ貴國官員右處置ヲ施ス前先ツ右船中ノ檢査ヲ施スヘキニ之ヲモ行ハス右情實ヲ聞ケル兩三日後ベンソン氏及ヒ林氏等直ニ其殘刻ナル事ノ告白眞僞如何ト吟味シタリシニ右吟味ニ因テ船司ノ貴國管轄内ニ於テ犯シタリト云罪行ノ一證據ヲモ露出スル事ナカリシノミナラス又吟味ヲナセシ疑ノ廉モ全ク晴タルナリ（別紙第一號及第二號ヲ見ルベシ）

右二條ノ陳說ハ一千八百七十二年九月十九日船將マクドナルド氏船將ポルウエス氏又船將ベウ゛ル氏ヨリ神奈川縣廳ニ差出シタル確乎不拔ノ證據ニ由テ尙確實ナルナリ

右マクドナルド氏ハ測量方且數年間水手長ヲ勤メシ人ナリシカ此人ノ口書ニ「右「マリヤルズ」船ハ他船ノ艤裝ニ異ナラス印度支那ノ雇夫船ト一樣ニテ右旅客ハ敢テ不自由ナラサル樣ニ見エタリ」トアリ

右ポルウエス氏ハ英國軍艦ノ船將ニテ三十年間續テ海軍士官ヲ勤メシ人ナリシカ此人ノ報知ニ「予右船着港ノ日右船ニ乘込ミ船中ヲ見シニ其船清潔ニシテ夫々ノ供給ハ是マテ予カ見タルモノヨリ一層手厚カリシ其後予數回右船中ニ立

越タルニ前ニ異ナル樣子モナク雇夫ハ禁錮サルヽ事ナク甚タ自由ヲ得或ハ吹煙シ或ハ骨牌ヲ打チナトシテ樂ミ居レリ然ルニ予「ブリチス」半島東方社中ニ在リシ時凡ソ船司タル者ハ何等ノ旅客ト雖モ之ニ指令スルノ權理ヲ有スル故ヲ以テ其命ニ依リ上等旅客其船室ニ禁錮サレタル事ヲ聞シ」ト又「ベルス」(船室ノ兩側ニ在ル寢床)ハ通例軍艦ニ備フル者ヨリ大凡二「インチ」半許リ長ク且空氣ノ流通モ軍艦ヨリ猶好ク其高サモ他船ニ比スレハ頗ル大ナリ」ト

右ベウ*ル氏ハ「ジヤパンメール」新聞紙ノ副作者ニテ右新聞ハ此一件處分中「マリヤルズ」船ニ向テ敵意ヲ示シタルモノナリシカ此人ノ言ニ「右旅客ヲ見シニ其容貌甚タ寛裕ナルニ感心セリ又善ク食ヲ給サレ至テ健康ニ見エタリ」ト又「予或時移民船ニ乘リ「イングランド」ヨリ出帆セシニ航海中大人一名小兒十五名死シタル事アリ右船ハ食物乏シカリシ故種々之ヲ歎訴セシカト誰アツテ之ヲ恤ム者モナク且船中モ非常ニ不潔ナリシ然ルニ右「マリヤルズ」船ハ清潔ニシテ美麗ニ思ハレタリ」ト又「予屢々蒸氣船ニ乘リタルニ或時其船司ノ權ニテ上等旅客ヲシテ旅費ヲ拂フ事能ハサルカ爲船中ニ强留セシヲ見タリ」トアリ

又右等ノ事情ニ拘ラス「マリヤルズ」船ヲ强留シ其吟味ヲ受シ爲告訴ヲナセシ原因タル種々不審ノ件々ハ右檢査ヲ行ハン爲ニ委任ヲ受テ此船ニ行キタル被ノベンソン林兩氏ノ公告ニテ全ク消ヘタリト謂ヘシ而シテ船司右移住雇夫ノ横濱港ニ於テ不圖滯留ノ間ニ右船ヨリ出ル事ヲ禁止スヘキハ約定書上ヨリ同人ニ與ヘラレタル權理ナリ然ルニ右等ニモ拘ラス吟味ヲナシ遂ニ八月二十二日ニ至リ右船中ノ雇夫殘ラス日本ノ遷卒ニ伴ハレ上陸スルニ至レリ右ハ前ニ記シタル大江卓氏ノ演述ニ由レハ則人ノ話ス如ク彌タ瑪港ニ於テ略奪サレシカ或ハ又右ニ準シタル所業ノ彌々他國管轄ノ地ニ於テアリシ乎ヲ詰問スル爲ニ設ケタル裁判ナリ

サレハ右雇夫ヲ上陸セシメシハ全ク不正ノ趣旨ヲ以テ爲シタル事ナリ然レトモ假リニ之ヲ正道ノ事ナリト見做ストモ右雇夫ハ自ラ證人トナルカ或ハ原告トナルカシテ裁判所ニ出頭スヘシ若シ雇夫證人トシテ出頭セシナランニハ只管自分ノ告白ヲナスノミニテ他人ノ告白ヲ辨證セス日本管内ニテ行ヒタル事ヲ歎訴スルニ就テノ證人トハ言ヒ難シ若シ又右雇夫盡ク原告ナル時ハ則縣廳ヨリ右歎訴ノ實ヲ證スル爲ニ且刑法定規ノ手續ヲ組立之カ處置ヲ施ス事ノ條理ニ適ヘ

ルヲ示スニ足ルヘキ明瞭ナル事情ヲ看出ス爲ニ先ツ前以テ假ニ右船中ニテ吟味スヘキナリ然ルニ此緊要ナル事件ヲ行フ事ナカリキ

加之右雇夫ヲ上陸セシメントセシトキ其船司ニ再ヒ彼等ヲ船中ニ還サント云フ保證ヲナス事ナク或ハ右告訴ハ全ク無根ノ事カ或ハ輕忽ヨリ出タル事瞭然タレハ船司ニ之ヲ賠還スヘシト云フ保證ヲ與フル事モナカリシナリ故ニ只右雇夫ノ利益ノミ注思シ聊モ船司及ヒ其傭主ノ利益ヲ顧ル事ナカリシト謂フヘシ

神奈川縣廳ハ其處分ニ對シ船司ヘレイラノ異論アルニ少シモ意ヲ用ヒス又諸領事ノ異論アルニ聊モ心ヲ注カス(別紙第九號)單ニ此事ヲ外務省ニ申立外務省ヨリハ裁判所ニ直ニ其異論ニ關係スルニ及ハサル旨ヲ命シタリ(別紙第十號)之ヲ詳言スレハ則所謂正道ノ主意及現今萬國交際ノ道理ヲモ打捨テ秘魯人民ノ利益ヲ損害セシナリ斯ノ如キ曲道ヲ行ヒ終ニ不正ノ審斷ヲ申渡シタリ

右一件ヲ吟味スル初ヨリ之ヲ決斷スルノ終マデ神奈川縣廳ハ自己ノ獨斷ニ由ラズ其命ヲ奉スベカラザル一ノ行法局ノ强迫ニ每ニ從ヒシナリ

是故ニ拙者右一件ノ簿冊ヲ檢閲シテ裁判所ハ右事件ニ關係アル對手ノ歎訴ニ就テ審案ヲ始メシニ非ス殊ニ外務省ノ命ヲ奉シ之ヲ始メシ事ヲ知ル是ヲ以テ右事件ヲ裁判スヘキ裁判所ハ却テ行法者ノ如クニシテ眞ニ兩立シカタキ職掌ヲ兼勤セシナリ

神奈川縣廳ハ右事件審案中外務省ノ命ニ因リ右ノ如キ處分ヲナシタレハ右裁判所ハ恰モ外務省ノ支局ノ如ク重事ハ大概外務省ノ審案ヲ乞ヒ千八百六十七年東京ニ於テ取極メタル約定ヲ破リタル趣ノ船司及ヒ諸領事ノ異論ニ付テモ唯外務省ノ命ニ從フタリ

サテ拙者目安及裁判書ト稱スル者ヲ平心精密ニ熟覽スルニ其體裁全ク裁判所ノ偏頗ナキ申渡ニハ非スシテ右ニ擔當スヘカラサル他ノ勸告者ノ前以決定シタル罪案ニ貴政府預メ允可ヲ與ヘ而シテ之ヲ以テ處斷セシメタルヲ知ルナリ

拙者右ノ外許多討論有之反復詳論スヘケレトモ三月八日副島外務卿ニ拜接ノ折「マリヤルズ」船一件ノ談ニ涉リシ時同卿ノ御言辭ヲ先ツ爰ニ記載セサルヲ得ス則同卿ノ言ニ「此一件ハ予カ政府只管人情默止シ難キヨリ斯ク處セシナリ」ト右御趣意ハ所謂人道ノ善教ニ合ヘル事ナレハ拙者モ每ニ

之ヲ奉シ且ツ之ヲ尊フ事ナレハ今猶爰ニ論セサルヲ得ザルナリ

サテ前文ニ右「マリヤルズ」船一件ノ不正ナル處置ヲ論列スル事餘リ激烈ニ出テ又移民ノ事ニ付誹謗ヲ受ケ且殘酷ノ處置ヲナセシトノ說アルヲ以テ下文ニ於テ瑪港及「チモル」州ノ「ロビチーン」(新聞ノ名別紙第十一號)ノ官報ヲ閣下ノ高覽ニ供ヘサル能ハサルノ場合ニ立到レリ右ハ千八百七十二年同處移民移住ノ事ニ付移殖總督ノ言ヲ載スル者ナリ其言ニ云

予爰ニ左ノ事ヲ報告ス前ニ日本ニ在リシ「ベルク」形(即マリヤルズ)船ニ乘組タリシ移民ノ過半當局ヲ經テ更ニ種々ノ船中ニ乘組ミ既ニ移住シ又續テ移住スルナリ尤右ハ大ニ滿足シテ每ニ小人數ニテ乘組ムナリ

又三月十六日附在東京葡萄牙國領事ヨリ拙者ニ差越タル書翰ヨリ左ノ一文ヲ拔萃シ爰ニ揭ク其書ニ云

予瑪港「ガセット」中ニ於テ船司ヘレイラ氏一等士官トナリテ乘組ミ出帆シタル蒸氣船中前ニ「マリヤルズ」船ニ乘組ミタル移民數多アリテ少シモ故障ナク認許ヲ得タリ

サテ右確實ノ事情ヲ閣下竝貴政府ノ公正ナル判斷ニ任シ喋々愚言ヲ費サスト雖モ右等ノ別紙ニテ右移民ハ彌々「マリヤルズ」ノ船司ヘレイラノ略奪セル者ナル乎又同人ノ苛酷ニ取扱ヒタル乎ハ判然御了解可相成儀ト存候所謂雇夫貿易ト稱スル者ヲ記者多クハ甚タ激烈ナル言詞ヲ以テ論シタレトモ右等ノ議論家ハ就中秘魯國ニアツテハ右雇夫ノ健康ヲ保チ且其行狀ヲ善良ニスル利益ヲ得ル事ヲ未タ驗知セサル人ナリ而シテ右雇夫貿易ト雖トモ其實ハ全ク人口非常ニ聚密タルヲ以テ屢々餓饉戰爭疫疾ノ患ヲ免レ難キ彼ノ支那大帝國ノ僅カ一小部分中ヨリ自由不羈ナル移住ヲナスニ異ナル事ナシ蓋シ先ツ右等ノ人民ニ預メ移住運送ノ旨ヲ告ケ然ル後其傭役ニ至當ノ賃錢ヲ拂ヒ其身體及ヒ權理ヲ保護スルナリ且秘魯「カリホルニア」「キュバ」及英佛ノ所領地等ノ如キハ天然ノ豐饒未開ノ土地許多アリテ人工ヲ待テ世界一般ノ爲ニ新物產ヲ開クナリ是等ノ爲ニハ必ス右等ノ移民ヲ要スル事ナリ

千八百六十年十月二十四日及二十五日北京ニ於テ清英佛三ケ國ノ間ニ取結ビタル定約ノ第五條第九條竝ニ千八百六十四年十月十日天津ニ於テ清西兩國ノ間ニ取結ビタル和親貿

易航海ノ條約第十條等ハ清國從民ニ英佛西所領ノ殖民地ニ移住スル權理ヲ認許スル者ナリ(別紙第十二號ヲ見ルヘシ)又恭親王ト英佛兩國ノ公使シル、ロゼルホルド、アールコック、ヘンリー、ベルロンネット兩氏ノ間ニ北京ニ於テ調印シタル千八百六十六年三月五日ノ定約ハ清國人移住ノ事ヲ亘細ニ整正スルモノニテ而シテ清帝之ヲ允可シケレハ則千八百六十八年五月二十二日恭親王之ヲ布告シタルヲ以テ卽チ清國ノ一律トハナレリ

總テ右等ノ事ヲ差措キ從來諸國ニ向テ年々數多清國ヲ出帆スル船舶ノ多キ中ニ秘魯國「バルク」形「マリヤルズ」船ハ暴天氣ニ逢ヒ止ムヲ得ス每ニ秘魯國ヨリ親視スル日本海岸ニ近ク吹寄セラレシニ同船ノ現在橫濱灣ニ打捨ラレタルハ實ニ非常殘酷ナル處置ニシテ古來ヨリ右「マリヤルズ」船ノ如ク秘魯國移民ヲ運送スル船數多ナレトモ何レノ國ニ於テモ未タ嘗テ斯ル非常ノ處置ヲ受ケシ事ナシ彼ノ「ホノル、」府ノ官員聊モ中軍艦(フリゲート)「ゼイラ」「マカヲ」「ドン、ジョアン」(皆船名)及ヒ他船ノ隨意ニ入港セシヲ妨ケサリシ又「バタヒア」府ノ官員モ海峽ヲ航スル時「ジャワ」ノ海岸ニ觸近シタル諸船ノ一ニモ迷惑ヲカケサリシ又英國所領地「シント、ヘレナ」島ノ鎭臺ニ於テモ「ハランナ」ニ向テ進航スル所ノ諸船不絕其處ニ到ル事アリシカ決シテ之ヲ妨ケサリシナリ

サテ右「シント、ヘレナ」島ニ到着シタル諸船ノ中ニ秘魯國「アメリカ」「マカヲ」「オーロラ」號等ノ船アリ然ルニ右「マリヤルズ」船ニ付起リタル如キ事ハ世界萬國ノ歷史ニ於テ未タ嘗テ斯ノ如キ例ヲ見ズ(日本國ノ歷史ニ於テモ之ヲ以テ始トナスベシ如何トナレハ他ノ移民船ナル卽「ケ、エ、パールメル」船ヲ聊モ妨ケサリシヲ以テナリ)又此一件ノ處置ハ法律正道ノ主意ニ悖レリト謂フベシ

尙又爰ニ拙者ノ議論ヲ述ン先ツ右「マリヤルズ」船ノ移民ヲ假リニ奴隷(スレーフ)ト見做ストモ(奴隷ハ今秘魯國ニアル事ナク又之ヲ許サヽルナリ)日本官員右船及ヒ右旅客ヲ管轄スルノ權理アル事ナキ也就テハ米國「バルク」形「クレヲル」(船名)ノ一件ヲ閣下ノ熟考ニ供ン右船ハ穩ナラサル色ヲ顯ハシタル奴隷ヲ許多載セ千八百四十一年英國所領地「ナツソウ」ニ卸錨セシニ當時奴隷貿易ハ今日ノ如ク英國所管內ニ於テ嚴禁タリ然ルニ右奴隷ノ若干數脫走シテ上陸シタレハ英國官員ハ之ヲ勞ハリ別ニ非道ノ關涉ヲ爲サヽリシ然ルニ右奴隷ヲ還スヘク合衆國ヨリ要求セシカ英國政府之ニ同意セサリ

シヲ以テ其後合衆國ヨリ英國ニ右償金ヲ要求シ終ニ此事件ヲ會同裁判ニ委托シ其裁判ヲ受ケタルカ右ハ合衆國ノ勝トナリテ英國政府ヨリ若干ノ償金ヲ拂フニ極マリタリ但シ右ハローレンシ氏ウイートン氏ノ萬國公法第一ノ部分第二節第九章註釋第七十章ニ於テ明ラカ也

是故ニ當時英國官員英國ノ律ニ因レハ不正ノ貿易ニ唯懇切ヲ以關渉シタル事サヘモ曲事ナレハ今國律ニ依テ許セル貿易ニシテ且支那、葡萄牙、秘魯、佛蘭西、是班牙、英吉利國ニ至ルマテ律ヲ以テ右貿易ノ細條目ニ至ルマテ之ヲ整正シタル此貿易ヲナセル船中ニ右ノ如ク暴ニ關渉ヲナシタルニ付テハ日本官員其責ヲ受ル事猶一層重キナリ（亞細亞洲ヨリノ移住及支那旅客ノ律令規則法令等ヲ記セル支那日本及ヒ「ピリツピーンス」諸島ノ記錄定例書ヲ見ルヘシ）サテ今秘魯國「バルク」形「マリヤルズ」船ノ一件ニ付前條ノ事實ヲ更ニ爰ニ論辨セン

第一此事ヲ處スヘキ權理ナクシテ右船ヲ吟味スル爲ニ裁判所ヲ設ケ日本管轄外ニ於テ罪ヲ犯セシトテ其罪ノ爲ニ右船ヲ强留シ凌辱ノ罰ヲ秘魯國民ニ加ヘタル事

第一右船司右雇夫ヲ暴ニ禁錮スルノ罪アリト定メ右裁判所ニ充分ニ眞正ナル約定書面ヲ無力ト爲シタル事

第三右船司及傭主ノ利益ヲ保護スヘキ保證ヲモ爲ス事ナク特ニ不審ノ件々ニ基キ移民殘ラスニ上陸ヲ命シタル事

第四右處分ヲ假リニ日本裁判所ノ管轄内ニテ起リタル事ナリト見做トモ神奈川縣廳ハ千八百六十七年約書ノ趣ヲ破リシノミナラス尙裁判所ハ其腰架ニ坐スヘキ權理アリト決シテ認許スヘカラサル人々ヨリ成立スレハ右縣廳ノ處分及ヒ其決斷ハ眞ニ廢弛スヘキモノナリ而シテ右定約ヲ破リシモ且右ノ如キ人々ヲ之ニ臨マシメシモ皆貴政府ノ指令許可スル處ニシテ秘魯國從民ノ利益ヲ大ニ害シタルナレハ則貴政府ニ其責ヲ歸スヘキ事

第五縣令大江氏ヨリ右吟味ハ只假吟味ナリト保證アリト雖トモ右船司ニ付取設ケ施シタル處置ハ全ク刑律ノ處分ナリ而シテ右取扱中原告ヨリ直ニ明瞭ナル訴訟ヲナス事ナク且ツ相當ニ之ヲ船司ニ告グル事無カリキ是故ヲ以テ苟モ交際ノ道立テル國民ノ一樣ニ循奉スル所謂人生ノ名譽利益ヲ保守セン爲ノ破リ難キ保證ヲモ破リタリト謂フヘシ

第六右船司ノ罪ニ定メラレタルハ雙方ノ告白ニ依テ之ヲ審

斷シ互ノ確證ヲ取テ之ヲ裁判セシニ非ス唯屢々變說シタル告白ヲ用ヒシノミナラス所謂對詰ノ方法ニモ依ラサリシナリ又少シモ船司ノ爲ニ證據ヲ聽糺ス事ナク同人及ヒ諸領事ノ異論ヲ顧ミス非常ニ急キ混亂ナル威力ヲ以テ何等ノ證據モナキニ忙シク之カ處斷ヲ申渡シタル事

第七右裁判所ハ始終外務省ノ命ヲ受タレハ右船司等ニ取リ不幸ナル吟味ノ間神奈川縣廳ノ處置ハ甚タ不合理ニ設立セラレタル上廳ニ之カ裁判ヲ仰キタレハ恰モ行法局ノ一支局ノ體裁ヲナセリ

夫レ此ノ如クンハ右等ノ責ハ全ク貴政府之ヲ任受スヘキ事ナリ元來貴政府右ノ法外ナル告白ヲ承諾シ之ヲ吟味スルヲ許可シ遂ニ右ニ關係シタル手續ヲ佳トシタルヲ以テ右秘魯國ノ船モ强留セラレ且打捨ラルヽ事トナレリ右船主及傭主等之カ爲メ大ナル損害ヲ受ケタルナリ

然ト雖トモ拙者貴政府ノ正實公平ナル事ヲ素ヨリ信仰シタレハ嘗テ拙者公務應接ノ折彼ノ「マリヤルズ」船一件ニ付貴政府ノ御處置ハ聊モ我秘魯國ノ名譽ヲ害スルノ意ナカリシトノ公正ナル御告諭アリシ上ハ實ニ拙者モ之ヲ滿足シタリサレハ右ニ付生シタル損害ニ付正當ノ償金ヲ御差出有之右秘魯國市民ノ損亡御償ノ儀貴政府於テ御躊躇有之候事トハ不被存候就テハ速ニ右御償方相辨シ候得ハ天下萬國モ貴政府ニテ所謂自主國ノ互ニ讓リ難キ條理ヲ御尊重有之右御處分有之候事ト驗知致シ益々貴政府ノ名聲相增候事ト存候

拙者此度貴政府ト正ニ通信ヲ始ントスルニ當リ默シ能ハサル事情ニ付我國ノ請求ヲナスハ拙者ニ於テ素ヨリ憂悲ニタエサル事ニ御坐候サレトモ全ク嚴密ナル條理ニ基キ論シタル事ニ候ヘハ貴政府モ是等ノ趣御承引有之今已ニ懇親ヲ堅クセントスル兩國間ニ萬世不易公平ノ主意ヲ以テ其交際ヲ脩メ得ヘキハ拙者ニ於テ深ク信スル處ニ有之候右可得貴意如此御坐候謹言

千八百七十三年三月三十一日

オーレリヲヂ、ワイ、ガルシヤ手記

上野外務少輔閣下

在日本白露國公使館附書記官

ゼ、フェデリコ、エルモール譯

註一、本號文書原文（西班牙語）ハ省略セリ

二、別紙十二通中第一、六、七、八、九、十、十一、十二ノ各號ハ省略セルモ第一、第八、第九、第十ハ第五卷二〇二、二〇〇、二一九本文及同附屬書一、二、三ト夫々同文ナリ

（附屬書一）

Copy

Legacion del Perú.

Enclosure No. 2.

Translation from Japanese Minutes of Visit to Ship.

Return and Report of Hayashi—

Gontenji and G. W. Hill.

On the 14th day of the 7th month, at one and one-half o'clock p.m., I went on board the "Maria Luz," and calling from below a few of the Chinese into the cabin, questioned them.

Coolie No. 1. stated: I am employed for eight years; have received no wages. Left Macao on 22nd day of 4th month. Signed contract on board ship 19th of 4th month. Since went on board ship; have never been on shore. If I work one month I will get wages from the captain; was employed as cook on board ship, and have done some work on board; have worked since ship left on 22nd of 4th month. The men who are doing work on ship are about eighteen. I have been told by Chinamen that we ought to go to Peru; have sufficient provisions and no complaint.—

Coolie No. 15, stated: We left on the 24th of 4th month; signed contract on 18th of 4th month. Received $8. on shore; I spent $4. on shore and lost $4. Am entitled to receive $ 4. per month. Was told I was to work on board, but have never done so. The hatches were closed to prevent me going on shore. The captain has prevented me from coming on deck. I only learned that the ships would leave Macao in a few days, but did not learn where she was bound to. Was told by the captain I was to work for eight years; don't know what sort of work—only told must work. When I signed the contract there were about 240 men together. Contract was read to me on shore by a foreigner in the Chinese language. Just now I think I am bound for Peru by the contract. Since I came to this port have not had sufficient food—only twice a day. I am not

allowed to go on deck until I get to Peru. Signed contract on the ship; it had been read to me before. The captain treats me well, but the head men very badly.

Coolie No. 5. stated: Lately we have had sufficient provisions, but for a few days not enough; don't know where I am to go. Received $8. and spent it. I am to work one year for $8. The head men always prevented me from going on deck. One day I was tied to the mast and beaten by the Chinaman No. 8., a head man, with a rattan; am not allowed on deck either in fine weather or foul. The head men are permitted on deck.—

Coolie No. 8. stated; (Showing a stick) this is the stick I beat No. 5 with. I was ordered to do so by the captain. The contract was read to me by a Peking man. I came on board the ship four or five days before the ship left, in a small boat, with forty or fifty other Chinese. The contract was signed two days before the ship left. I was forced to signed two days before the ship left. I was forced to sign by a foreigner. The contract was brought from on shore with me. No one threatened me with a pistol or other arms when the contract was signed.—

After I had examined these coolies one by one in the cabin, I went with Mr. Hill, and bringing Ching Shing, the interpreter, down into the hold where the Chinese were, I informed them through the interpreter that while they were in port they would have the protection of the Japanese Government, but that if they made a difficulty, and were guilty of any offence, that they would certainly be punished.—

I then passed through the hold. Certain of the coolies came to us, saying through the interpreter, that they had been kidnapped, and praying for the assistance of the Government. Some of their numbers I took, as follows: 187., 182., 157., 175., (changed from 176.,), 205., who seemed very ill, and 160. who appeared very sullen. While I was taking down these numbers, the others began to gather around me with great cries, and in the most earnest manner begging for assistance. They so pressedupon

us that I was obliged to tell them their case would be looked into; further, I could hardly escape from their importunity. I left the ship about 5. o'clock p.m.

(Signed) HAYASHI GONTENJI

I have read the foregoing translation of the return and report by Mr. Hayashi Gontenji and have compared it with the minute, kept by myself on the same occasion, and find it to be correct.—

We found all the Chinese passengers confined below deck.—

(Signed) G. W. HILL

Yokohama, Japan August 15th. 1872.

A true copy—

J. FEDERICO ELMORE

Secretary Peruvian Legation.

（右和譯文）

別紙第二號

船中ニ至リ書留タル和文ヨリノ譯

但シ林權典事並ヂ、ドブルユ、ヒール氏ノ報知

七月十四日ノ午後第一時半〔マリヤルズ〕船ヘ罷越支那人共四五名ヲ船室ニ呼込ミ取糺候處左之通申立候

第一番雇夫之申口

八个年ノ間被相雇候

給金ハ未タ請取不申候

四月廿二日瑪港出發仕候

四月十九日船中ニ於テ約定書ニ調印致シ候

乘船以來曾テ上陸不致候

一个月之仕事相勤メ候ハヽ船長ヨリ給金請取候筈ニ御坐候

船中料理人トシテ被相雇候且船中ノ仕事モ相勤候

四月廿二日出帆以來仕事致シ候船中仕事致シ候者凡十八人ニ御坐候

秘魯國ヘ可罷越樣支那人ヨリ承知致シ候

食物充分ニ有之何ニモ出訴致シ候事件ハ無之候

第十五番雇夫申口

四月廿四日ニ出帆致シ候

四月十八日約定書ニ調印致シ候

陸上ニテ八弗請取申候

陸上ニテ四弗ハ遣拂ヒ殘リ四弗ハ失ヒ申候

給料一个月四弗ニ有之候

船中ニテ仕事可致候樣承リ候得共曾テ左樣不致候

艙口ヲ閉チ上陸ヲ禁セラレ申候

甲板上ニ出候儀ハ船長相禁シ申候

不日出帆ト申事ハ承リ候得共何レノ地ヘ向ケ出帆致シ候事乎存シ不申候

八个年ノ間仕事致シ候樣船長ヨリ私ヘ申聞候

何等ノ仕事ナルヤ存シ不申唯是非勸ムヘシト申聞候

約定書ヘ調印致シ候節ハ都合凡ソ二百四十人程モ有之候

一人ノ外國人支那語ヲ以テ約定書ヲ陸上ニテ讀聽セ申候

右約定書ニ據レハ秘魯國ヘ差越候儀ト唯今相考申候

當港來着以來食物充分ニ無之唯日々二食宛ニ御坐候

秘魯國ヘ達スル迄甲板上ニ出ルヲ禁セラレ申候

船中ニ於テ約定書調印致シ候右ハ其以前讀聞セラレ候モノニ御坐候

船長ノ取扱ハ宜舗候得共頭取ノ取扱ハ甚不宜候

第五番雇夫ノ申口

近頃迄ハ食物充分ニ候得共此四五日ハ充分ニ無之候

何所ヘ行クヤ存シ不申候

給料八弗ヲ請取右ハ遣果シ申候

八弗ニテ一个年仕事致ス可キ積リニ有之候

頭取ノ者ヨリ常ニ甲板上ニ出ルヲ禁シ申候

或日帆柱ニ縛シ頭取ナル第八番ノ支那人藤杖ヲ以テ私ヲ打擲致シ候晴雨共ニ甲板上ニ出ルヲ禁セラレ申候頭取ハ甲板ニ出ルヲ免サレ申候

第八番雇夫申口

杖ヲ出シテ第五番ノ者ヲ打擲候杖ハ則是ニ御坐候

船長ノ命ニテ斯ク致シ候

北京人私ヘ約定書讀聞セ申候

支那人四五十名ト同伴小船ニテ當船出帆四五日前乘船致シ申候

出帆二日前ニ約定書調印致シ候

外國人强ヒテ調印爲致申候

約定調印ノ節短銃若シクハ他ノ兵器ヲ以テ威スモノ一人モ無之候

右雇夫共ヲ銘々船室ニ於テ糺問ノ上ヒール氏ト同行シ通辨官チンシンヲモ引連レ支那人ノ居ル船艙ニ到リ右支那人共當港滯在中ハ日本政府ノ保護ヲ受ヘシ然レトモ難題ヲ釀シ罪ヲ犯ス等ノ事アラハ斷然所罰スヘシト右通辨官ヲ以テ相達シ船艙ヲ過キ通候處若干ノ雇夫共進ミ來リ右

秘魯國公使館書記官

ゼ、フ゛デリコ、エルモル

（附屬書三）

(Translation). Enclosure No. 3.

Legation of Portugal

In Japan.

No. 47.

Most Illustrious and Excellent Sir:

His Excellency the Covernor having to absent himself from this Colony by Virtue of his office of Minister Plenipotentiary to the Court of Siam, directs me answer the dispatch which Your Excellency addressed him dated the 27th of last month, anouncing the arrival of Your Excellency to Japan, and offering him your service in the capacity of Minister Plenipotentiary of the Republic of Perú to that Court.—

The expression of friendship with which Your Excellency addresses him, was very pleasing to His Excellency the Governor, and on his part, he hopes to return it by giving all the aid to Your Excellency to accomplish the mission with which you

通辯官ヲ以誘拐ニ逢ヒシ事ヲ述ヘ且日本政府ニテ救助アラン事ヲ懇求致シ候

書留タル右役夫ノ内左ノ如シ

百八十七番

百五十七番　百七十六番ヨリ變類

百七十五番　此者大病ト相見得候

百六十番　此者甚不平ノ色顯ハレ候

右番號書留候共他ノ役夫共喧シク坐右ヲ取卷キ切ニ救助ヲ請求シ頻リニ相迫リ候ニ付詮方ナク何レ此儀吟味ニ及フヘシト申諭シ尙懇願止マサルヲ漸クニシテ之ヲ避ケ午後第五時頃右船ヲ去リ申候以上

林　權　典　事　手記

前件林權典事ヨリ報知ノ譯文ヲ右ト同時ニ記載セシ拙者所持ノ書留ト讀合セ申候處相違無之左候ハヽ支那旅客ハ悉ク甲板下ニ閉込メ有之候以上

チ、ドブリユー、ヒール　手記

日本横濱ニ於テ

千八百七十二年第八月十日

右抄爲相違無之候

are charged.—

The close relations of friendship which bind our Countries impose on His Excellency this duty.

Concerning the principal object of the dispatch of Your Excellency with regard to the question of the barque "Maria Luz" the Governor of this Province had decided before the arrival of Your Excellency to furnish you with all the documents which illustrate this affair, as it concerns not only the dignity of the Country which he has the honor to represent but also the good name and reputation of the authorities of this Colony.

In the dispatch, copy of which I have the honor to forward, Your Excellency will see the way in which the emigration is made from this port, this document is signed by the Authority which especially watches and superintends the affairs of the emigration, and is beyond all suspicion, and the veracity can not be permitted to compare with the witnesses of the Coolie emigrants who testified at the tribunal of Kanagawa.

If this question did not involve the national dignity and that of the officials of this Colony which all the citizens should look to, His Excellency the Governor would not have cared to answer the accusations so devoid of truth as those uttered at the said tribunal. For Your Excellency to estimate the credence which the testimony of the emigrants of the "Maria Luz" deserves, the circumstances are sufficient of their giving false names and the affirmation that they signed the contracts on board when by the regulations which I have the honor to forward to Your Excellency such contracts are signed at the Superintendency and often even after embarkation some of the Coolies have been disembarked not wishing to proceed on the voyage.—

By the "Boletin" herewith, Your Excellency will see that in the month in which the "Maria Luz" was dispatched 702 Coolies were distributed to the Country of their nativity. Equally by this same document is seen that some of the Coolies of the "Maria Luz" said to have been deceived, returned to Macao to emigrate, and of these dishonest men a good many are now on the way to Peru.—

In the month of May when the "Maria Luz" left; 3.520 Coolies were embarked in several ships, 790 were distributed, 58 taken by their parents, 22 prefered to remain in Macao, 21 wanted to go to other countries, 11 disembarked after signing their contract, making a total of 902, or out of 100 Colonists embarked 28,4 had the destination above mentioned.—

Only those who are completely prejudiced by passion against emigration, can say that it is not made from this port with the greatest liberty and spontaneousness on the part of the emigrants.

The numbers I have marked are most significant, and against undeniable facts no arguments can be possible.

We can with bold front say to the civilized nations that the Asiatic emigration as it is today managed in this Colony is more spontaneous and more free than that which takes place from Europe to America.

The Governor of this Colony has devoted a serious study to this branch of administration, and has succeeded by his regulations in accomplishing the desired object which he has in view. My scruple has been carried to excess and the diatribes of the foreign press against the emigration have been responded to by giving the colonists new guarantees and new advantages, and enacting new measures of greater vigour against abuses.

The documents and regulations which I have the honor to place in the hands of Your Excellency are more than sufficient to show the injustice of the judgement of the tribunal of Kanagawa and to manifest its false foundation.

I avail of this occation, Sir, to assure to Your Excellency of my highest and distinguished consideration.—

God preserve Your Excellency.—

Macao 11th March 1873.

The Secretary General

Acting Governor.

(Signed) HENRIQUE DE CASTRO

His Excellency S. D. Aurelio Garcia Y. Garcia.

Minister Plenipotentiary of the Republic of Perú to the Court of Japan.

A true translation.—

J. FEDERICO ELMORE.

Secretary Peruvian Legation.

（右和譯文）

別紙第三號譯

四十七號

當所領臺閣下全權公使の職を奉し「シャム」朝庭え至り不在中に付閣下去月廿七日附を以日本國到着を報知せられ且同國にて秘魯國全權公使の職におゐて用向を辨し呉られ候旨領臺閣下え宛申送られたる貴書の回答拙者より可申進旨同人より下命有之候偖閣下御申述の懇切領臺閣下に取り満足の至に候同人は又之に報るに閣下に助力するを以てして閣下公使の任を全ふせられん事を希望せられ候兩國は素より交誼厚きを以て助力するは領臺閣下の當務に候

「マリヤルズ」船一件貴書の大主意に付此事件を明載せる書類を悉く呈せんと閣下の到着前に領臺閣下決し罷居候如何となれは此儀は國の名譽に關するのみならす當地長官の名譽にも係るを以てなり

今般差進候書簡寫を以當港より送出す移住の方法御了解可有之候此書は特に移住の事を監督する長官にて手記せるなれは更に疑を容るゝ處無之候は確實なるに至ては神奈川縣裁判所に證據を立て移住する役夫の證據人等と同日の論にあらす

此儀國の名譽に係らす且衆人目さす所なる當地官員の面眉に關せされは右裁判所におゐて申立たる斯る無實の詞訟に對應する事領臺閣下において敢て意とせさる事に候

「マリヤルーズ」船乗込み移住人にて立し證據信用すへきものなるや否やを閣下の計り知られんには其僞て姓名を書し剩へ今般差進候規則に從ひ陸上監督局に於て條約調印すへきを船中におゐて之を調印致し候抔と申立候を以て其事情知るに足るへし加之假令乗船の後に至り役夫の中渡海する事を欲せすして上陸せしものも往々有之候「マリヤルーズ」船出發の日に當り役夫七百貳人其本國へ夫々歸候事は別紙「ポルチン」紙新聞にて御了解可有之候又同船え乗込み候役夫の中欺かれしと云ひ移住せん爲め「マカヲ」に立戻りし事も同書の中に相見へ候右樣不正の者の中若干秘魯國へ向け當今渡海中なり

第五月中「マリヤルーズ」船出發の時役夫三千五百貳拾人數艘の船に乘り七百九拾人は其本國に歸り五拾八人は其父母の手に渡り貳拾貳人は「マカヲ」に止るを好み貳拾壹人は他の國々え渡らん事を欲し拾壹人は條約調印の後上陸せり其數都合九百貳人と相成候即ち乘船せし移住民百人の內右國々え向ひし者貳拾八人四の割合なり

當港より送出す移住は移住人え大なる自由下らすといふは獨移住の事に深く通せすして之を拒む者の言に候

前文に記したる役夫の數最顯明なる者にして其確實に對し論を入るゝ處叶はさるへし

方今當港に於て取扱ふ亞細亞洲移住は之を歐羅巴より亞米利加への移住に比すれは一層自由を加る事は開化の國に向ひ余等の斷然述へ得る處なり

當所鎭臺閣下此移住の法に甚た心を勞し終に規則を設けて志願の目的を全ふするを得られたり拙者も此事に心を用ゆる至らさる處なく而して新たに移住人え受合を與へ利益を施し且惡言を嚴く防くの策を建て以て移住の事に付外國新聞の惡評へも相應し遺候

閣下へ差進候書類并規則を以神奈川縣裁判所の裁斷不公平

なるを示すに足る且之を以其基礎立さる事判然たり右爲可申述敬白

代任鎭臺

總書記官

於瑪港一千八百七十三年第三月十一日

ヘンリク、デカストロ手記

日本ニテ秘魯特命全權公使

ヱスデキー、オーレリヲ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ

閣下

實正の寫なり

秘魯國公使館書記官

ゼ、フェデリコ、ヱルモール

（附屬書三）

Translation.—　(Annexed to Enclosure No. 3.)

(Copy)

Secretary's Office of the
Government of Macao and Timor.

Superintendency of the Chinese emigration of Macao. No. 350.

Most Excellency and Illustrious Sir:

In obedience to Y. E.'s orders, I proceeded to enable myself by the books of this superintendency to have the honor to inform Y. E. with regard to what relates to the Chinese Mopin-Aluk-Apon-Achon-Sampon-Ahkay-Akum No. 176. Afat Nos 182 & 187 Sum-hoy, said to have been embarqued on board the Peruvian barque "Maria Luz" despatched from this port on the 29th of May last with 225 Chinese coolies for Perú, and put into Japan in the 9th of July last.

Neither in the books of this superintendency or of the deposits I caused to be brought to this Department to be duly examined I can find the names mentioned above, but I can assure Y. E. that in conformity with the regulation of the emigration from the port of Macao, no coolie could have embarked in the "Maria Luz" that was not minutely examined in the Superintendency: consequently it show the bad faith of these coolies, and no reliance should be placed on their statements, as they either gave false names in this Department when they were examined, or are doing so now in the tribunal of Japan where they are being interrogated. The numbers 176, 182, 187 Afat, Sum-hoy are in the books of this Department and of th deposit designated by the latter = L = of which is charged the Assistant Joze Bernardino with the names of Soliong & Cham-son-hoy and the 182 that has no name, is in the same books with that of Holay.—

The coolies embarked in the said barque were interrogated in this superintendency, proceeding with the formality with all of them as follows:

During the days that they appeared at this superintendency the contract were read and explained to them in the three Chinese dialects-Wuntis-Aka--and Chinchen, and made one by one in the office of the superintendency, publicly and in the dialect spoken by each of them, the following questions:— If they wanted to emigrate? If they knew where they are going to emigrate (if not, it is explained to them) If they knew the conditions of the contracts (explaining and removing any doubts should there be any.) If they have been deceived or illtreated? telling them that they can without fear

declare if they had been illtreated or deceived, and assuring them the protection of the Government until their distribution in case they should not wish to emigrate. This is all I have to say on the subject, and I hope having so satisfied the wishes of Y. E.—

God preserve Y. E. = superintendency of the Chinese Emigration = Macao, 30th August 1873.

His Excellency Viscount San Juanario Governor of Macao and Timor etc., etc., etc.

The Superintendent of the Chinese Emigrations,

(Signed) HERMENEGILDO AUGUSTO PEREIRA RODRIGUEZ

A true Copy.—

Office of the secretary of the Government of Macao, 10th March 1873.

The Secretary General

(Signed) HENRIQUE DE CASTRO.

A true translated copy.—

J. Federico Elmore.

（右和譯文）

別紙三號附錄

マカヲより支那移住民監督局三百五十號

閣下の命に順ひ支那人モヒン、アルク、アホン、アチョン、サムポン、アーケー、アキュム百七十六號アハット、百八十二號及ひ百七十七號サムホイ儀二百二十五人の支那人と共に白露國マリヤルス船に乗込み昨五月二十九日に當港より白露へ向け出帆致し去る七月九日に日本へ到着仕候と申立候一件に付當監督局の帳面に依り閣下に報知せん爲め余自ら其所に至れり

取調へん爲め當局に取寄せたる此監督局の書類にも又役夫を置く所の書にも上に記載せる名を見出し不申候然れともマカヲ港よりの移住規則に據る時は監督局に於て精密に吟味致さすして役夫をマリヤルス船え乗せ候義難出來候故に右役夫共信なきは判然にして其者共の申口は信用なりかたく如何となれは當役所に於て吟味仕候節僞名を申立又當時究問致され居候日本國裁判所に於ても同樣僞名申立候百七十六號百八十二號百八十七號アハット、シュムホイの名は當役所の書類及ひLの字を以て標號する書中に記載有之候右書はソリンク及ひシャムホイの名も記載有之助役ショスヘルナルシノ氏の管轄する書にして無名の百八十二號もホライの名と共に前同書中に有之候

マリヤルス船中に乗組たる役夫は當監督局に於て左に記載する如く何れも禮法を以て究問仕候

此監督局へ役夫の參り候當日の問は約條をユンチス、アカ及ひチンチュン此三人の支那人を通辨として讀み聽かせ且之を說明し各其土音を以て一人毎に監督局におゐて公然と左の究問を致させ申候

汝等移住するを欲する哉

汝等移住する地を知る哉若し之を知らさる時は說明すへし

汝等此移住約條の箇條を知る哉何等疑はしき處あらは之を說示し之を除棄すへし

汝等欺かれ或は薄待されたるある哉若し欺かれ又は薄待されたるあらは恐るゝ事なく申立へし且汝等移住するを欲せさる時は各其國え歸るまては當政府の保護を受け合ふへしと申聞かするなり

上に申上候事の外此移住の事件に付別に申上候儀無之候間右にて閣下の御望に應せん事を希望仕候閣下の幸福を祈る

一千八百七拾二年八月三十日　マカヲにおゐて支那人移住監督局にて

マカヲ及ひヒモル鎭臺

ヒスコラント、サン、ユアナリヲ閣下

支那人移住監督

ヘルメテジルドヲーキュスト、ヘレイラ、ロドリキュス　調印

千八百七拾三年三月十日　マカヲ總書記官

ヘウリキューテカストロ調印

反譯抄寫相違なし

シェヘデリコエルモール

（附屬書四）

CONVENTION.

(Enclosure No. 4)

YEDO, OCTOBER 28TH, 1867.

The undersigned, having met to consider the Memorial of the Land Renters at Yokohama to the Foreign Representatives, dated July 15, 1867, requesting that the Japanese Government may be called on to resume the control and management of the Municipal affairs of the Foreign Settlement of Yokohama, have agreed to recommend to the Japanese Government the adoption of the following measures, as being essential, under present circum-

stances, to ensure the maintenance of order and health within the said Foreign Settlement :—

I.—That an office to be called the Land and Police Office, be formed under the Japanese Government at Yokohama, and placed in charge of a Foreign Director, who will be subordinate to the Governor of Kanagawa.

II.—The said Director, acting under the authority of the Governor of Kanagawa, shall see to the repair, cleanliness, and efficiency of all the streets and drains in the Foreign Settlement of Yokohama. He shall be authorised to received such complaints relative to police or the state of drains and thoroughfares as may properly be addressed by Foreigners to the local Government direct, and in the name of the Governor of Kanagawa will prosecute Foreigners before their own authorities for nuisances or any infringement of public order.

III.—The said Director, acting under the authority of the Governor of Kanagawa, will have the charge and the direction of all Foreigners who may be employed as Police for the maintenance of security

and order within the Foreign Settlement of Yokohama, or for the repression of disorderly conduct on the part of Foreigners within the Port of Kanagawa. Whenever a subject or citizen of a Treaty Power is arrested in the commission of an offence by the said Director, or any Foreigner or Japanese acting under his orders, or the orders of the Governor of Kanagawa, the person so arrested must be conveyed at once to the Consul of his nation, who will take steps for the detention of the offender until he can be prosecuted.

IV.—The Governor of Kanagawa, acting with the advice and assistance of the said Director, and with such advice as he may obtain from Foreign Consuls, will exercise jurisdiction—both criminal and civil—over the subjects of China, and the subjects and citizens of other non-Treaty Powers residing within the said Settlement, or within the Port of Kanagawa.

V.—The Land Rents payable by Foreigners will be collected by the said Director as soon as they become due, for and on account of the Governor of

Kanagawa, and the said Director, acting in the name of the Governor of Kanagawa, will be empowered to sue Foreigners for default of payment before their own authorities.

VI.—The undersigned undertake to instruct their respective Consuls to confine within the narrowest limits compatible with public convenience, the number of licenses issued by them to their respective subjects or citizens, as sellers of foreign spirits or liquors, or as keepers of houses of entertainment within the Foreign Settlement, or within the Port of Kanagawa. A copy of every license will be furnished by the Consul, as soon as it is issued, to the Governor of Kanagawa, and the said Director will inform against any person who sells liquors or keeps a house of entertainment without the license of his authorities.

VII.—The Japanese Government will make arrangements for the safe storage, at reasonable rates, of Gunpowder or other explosive substances imported into the Port of Kanagawa, and the undersigned will take the necessary steps to prevent

their respective subjects or citizens from using any other place for the storage of these dangerous substances.

(Signed,)

HARRY S. PARKES.
L. ROCHES.
R. B. VAN VALKENBURGH.
VON BRANDT.
D. DE GRAEFF VAN POLSBROEK.

(右和譯文)

別紙第四號

英國公使より差出候規則書和解

千八百六十七年第十月廿八日江戸に於て日本政府にて横濱外國人居留地に屬せる事を差配し處置すへきを望みて千八百六十七年第七月十五日附横濱地貸主の覺書を外國名代人等へ示して之を熟考すへき旨を得たれは余各國名代人と相會して右外國人居留地内に都合よき取締を立て且人民の健康を保護せしめんは當今の形勢にて必要たれは下件の良法を設けて日本政府へ告知すへきに決定せり

第一　横濱に於て地所及ひ取締の役所と唱ふる一ツの役所を日本政府にて取設け神奈川奉行に屬すへき外國世話人を雇ひ置之に任すへし

第二　右世話人は神奈川奉行の指揮を受けて横濱の外國人居留地内の街衢溝渠の修復掃除及ひ其仕上けを見分すへし

○此世話人は取締向又溝渠及ひ道路の事に付外國人より右役所え愁訴する旨を受へき樣に任し又神奈川奉行の命を受て法を犯す人民ある時は之を自國役人の目前に呼出し之を糺明すべし

第三　神奈川奉行の指揮を受たる右の世話人は横濱居留地内の外國人を安全に保護し且神奈川港内に在る外國の不法なるものを取押ゆへき諸外國人の取締及ひ差圖の權あるへし○條約を取結ひたる各國の臣民右世話人或は神奈川奉行の命を受とる他の外國人又日本人より犯法の爲に捕へられし時は其者を省に自國の領事に引渡す但領事は其者の引渡まて之を繋捕者の方に置くへし

第四　右居留地或は神奈川港内に居住せる支那人及ひ他の末々條約を取結はさる臣民の刑法及ひ取締は神奈川奉行右世話人の評議幷補佐と外國領事より得へき評議とを以て之を取行ふへし

第五　外國人より拂ふへき地税は右世話人より神奈川奉行の目的に適當する丈速に取集むへし又神奈川奉行の指揮を請けたる右世話人は地税の拂方滯る時其者の自國領事目前にて外國人より之を取立るの權あるへし

第六　余各國の領事に命して衆人の生活に適當するため領事より各國人に出せる許容の數に最も狹き界限を立へき事を企てたり譬へは外國の燒酎又は名酒を商ふ者或は外國人居留地内若くは神奈川港中に料理店を設る者の如し右樣事件を許容する事あらは領事より速に其寫を神奈川奉行へ送るへし若又領事の許容なく名酒を商ひ或は料理店を設る者を報知すへし

第七　日本政府に於ては外國人を安全にするため神奈川港内に輸入する火藥或は其他の迸裂すへき物品を至當の數料を以貯へしむへし而して余は右樣危險の物品を積置其他の場所を用ひて各國臣民の危險を防くへき緊要事件を設くへし

ハルリースパルクス

アルヒワンワルケンヒュルク

手記

エムホンブランド

ド、デ、カラースフアンボルスブルツク

（附屬書五）

Translation.

Enclosure No. 5.

Copy

Legacion del Perú

To His Excellency R. B. Van Valkenburg,

Minister Resident of the U. S. of America.

I have the honor to inform the following to Your Excellency:

The regulation of Police and Road within the foreign settlement of Yokohama being negotiated between Your Excellency and the English, Netherlands and Prussian Ministers is sent to me by the English Minister.—

I have also agreed with it and taken on the moment Mr. Martin Dohman in English Consulate in service, to charge with the police of settlement.—

Enclosing the said Regulations I have to bring it to Your Excellency's notice.—

With respect and esteem

(signed) OGASAWARA IKINO KAMI.

The 22nd day of the 11th month of Keio 3rd year.

A true copy of the translation.

J. FEDERICO ELMORE,

Secretary Peruvian Legation.

（右和譯文）

別紙第五號

以書面申入候然者横濱外國人居留地内取締及道路の規則を閣下英國和蘭及ひ孛國公使と御協議の上英國公使より拙者へ被送候拙者に於ても右規則に同意致候に付英國領事館に罷在候マルチン、ドーメン氏を差向き雇入れ居留地取締を任し申候此段別紙取締規則添御報知及ひ候謹言

慶應三年十一月廿二日　　小笠原壹岐守手記

米國ミニストル、レシデント

アルヒフアン、フアルケンボルグ閣下

反譯抄寫相違無之

白露國公使館在書記官

ジエ、フエデリコエリモール

二〇八　六月十日　三條太政大臣ヨリ外務省宛

「マリヤ、ルス」號處置ニ關スル秘露國使節ヘノ回答評決セル旨指令ノ件

外務省

白露國マリヤルーズ船一件別冊之通評決候施行可致事

明治六年六月十日

太政大臣　三條實美

「別冊」ハ次ニ載スル上野少輔ヨリ秘露公使ニ贈レル書東ノ草案ナリ六月八日少輔正院ヘ持參上陳セラレシヲ以テ別ニ伺書ナシ

註　右ニ謂フ「別冊」ハ二〇九ヲ指ス

二〇九　六月十四日　上野外務卿代理ヨリ秘露國使節宛

「マリヤ、ルス」號ニ對スル我方ノ處置ニハ不法ノ廉ナキ旨回答ノ件

バルク形マリヤルーズ船一件に付千八百七十三年三月三十一日附の貴翰正に落手致候

右マリヤルーズ船は洋中にて破損を受け修復の爲め横濱港に來着せる事に候故此船若し正路の商賣を爲すものなりせは船中の士官を始め水夫船客等を信切に補助し保護なすべきは勿論なり然るに所謂雇夫商賣をなせる船なれは聊か人の害と爲らざる正路の業の爲に航海して難破に及ひたる船と等しき特典を與へずして可なるや否やの如きは今爰に論ずるに及はず

凡各國の慣習に於て企て爲すにあらす止むを得ずして難を避けて港内に入來るの船艦に特典を附與して殊更に犯すの意なく且惡意なくして犯せし罪は之を寛恕する事あるは必竟慈仁の心と天然の公義とによれるなり

仁慈によれは再航し得へきの援助を附與すへく公義によれは如此船の船主又は士官水夫等は假令罪ありとも企て犯すものに非さるよりは地方法律に照して之を罰せさるなり就中其罰其船に及ひ又は其乘組を禁獄する等其船の航海を留むるに至るへきものなる時は通常之を寛恕するを以て例とす

此義航海を業とせす自ら航海する不羈の旅客に及施すべからず如何となれは如斯人船中に在るは航海の爲め要せさる而已ならす都て煩雜を生し入費を增し且其が爲め屢々危險を釀す事あるは則ち「マリヤルーズ」船の僅に數日間の航海中起れる事件を以ても知らるべき事に候

閣下「クレヲル」船一件の例を引用あるは地方管轄の外に置く事の法は船客にも及すへしとの義と相見へ候へ共右船中に有りたるは恰も有性の積荷にして全く通常の物品同樣に取扱候譯に有之即ち彼等は賣奴にして其生國の法津によれは全く家什と等しきものに候

且此「クリヲル」船の一件を所分せしは惡習流行の時にして奴隷を以て豚牛同樣の積荷となし之を船客と云さるは勿論又敢て之を移民とも唱ふへき事は人に曾て思ひよらさりし事に候

困難により他國の港内に入來れる船は好んて他國の領内に入來れる船と區別ある事此の如くなるを論したれは今玆に其國管轄の權力の分界を論したる有名なる公法家の說を揭け以て閣下の注意を仰かん輓近英國女皇陛下の狀師たりし民法博士タラウエル、トウイス氏の著述せる平時萬國の權理及義務と題せる書に云く二百三十葉ニアリ

商船乘組人數及ひ物品は地方の規則之を管轄するに於て充分の權あり今英國商船の旗章を揚けたる船其水夫の中に自主黑奴を乘せたるもの「チヤルレストン」港に入り來る事あとき其船英商船旗を揚けたるか爲め其自主黑奴を保護するを得す是れ南「カロライナ」に自主黑奴の其國内に入るを禁するの法ありて破るべからさるによるなり然るに英國管下自主の黑奴黑人等英國商船水手の籍に入りたるもの「チヤルレストン」港に入り來る處の英商船中に在るにより其港の官吏地方法津の權を以て忽ち之を陸上に引揚け禁錮し置其船港外に出るに及て始て歸國の免許を與へ再ひ右船に送り返せし事は啻に數回耳ならすと此所分の曲直は措て論せされとも合衆國内に於て賣奴の行はれたる間は「チヤルレストン」「モビール」「ニユー、オリーンス」或は其他諸港に於て大英國の如き威力堂々たる大國も又其所置に從へり

米國の著述家「ハルラツク」氏の說に云く百七十二葉ニアリ

地方官は尋常探索の事あるときは其港内に滯泊せる外國船に乘入るを得べし然りと雖も捕縛の事に至つては其管

轄内に於ける事件に限るべし

又云く

事若し船中に起るとも其港或は其船乗組外の人の安寧を妨けさる事なるか或は大洋航海中船上にて爲したる事なるときは地方管轄に歸せずと

ウエイトン氏云佛國法律に於ては如此船の爲めに地方管轄の權力萬國公法に於て要する處のもより一層寛にせり

同氏又千八百六年内閣會議決論の譯文を引證して地方管轄の最寛優なる制度と雖も船手ならさる人に對したる船中の犯罪をして此例に同しからしめさるを示し候

右會議決論の原文は船手と船客を明白區分して詳に之を論せり今之を抄錄して左に掲く

船手の者他の者に對し違犯等の事あるときは假令船中にて事起ると雖も其地方の裁判所にて裁決を受くべし且船手と他の者と取結ぶ約定等も同斷なり

右の事件地方の裁判に歸すべきは疑を容れすと雖も中立國の船中にて其船手同士互に犯せる罪犯は此例にあらす

南亞墨利加有名の公法「カルウオ」の說に云く

全く地方の管轄を脫するは唯軍艦あるのみ商船に至ては

特に條約の取極めあるに非れは地方の管轄を免かれさるを以て通常の規則とすと

又云く

通商の利益或は大洋航海の爲めの取締及ひ警戒肝要なるが爲此常則を弛め所置せし事あり然れとも如斯は皆兩國間に斯る明約あるか或は地方の法則に因て然るなり

是れ別格條約の取極めあるに非されは斯る事を以て當然本分の事務として斯る特典を與る事なく唯其國の意見と信切とを以て與るものなり

地方の管轄を脫する事に付船手と船客との區分あるを定むる爲め尙此餘諸家の說を引用するは容易なりと雖も暫く之を措て更に左の論を加へん洋中に於て乗組の船客惡行を爲し船の危難或は乗合の者の性命にも關るへき事あるとき船司たる者之を壓制するの所分に付ては如何なる條理あるにもせよ其船既に和親國の港に入り其地方官の扶助を受くる時に至ては其條理も全く徒爾に屬するなり船司は其船手の主なり船客に對しては從者に類す猶客舍の主人の客を迎へ飲食臥床を設け小使を附置に異るなし

拙者右の如く商船船手の一人なる船司と右船手の外なる人々の間に生する爭論を管轄するの權理を論せり右は今此論を述るに當て充分なる確證とするものに候されども閣下の御論夫の米利堅合衆國公使通信書に據らるゝ樣相見へ候に付拙者も又此書に依て世界第一の兩貿易國も亦皆右地方管轄の權力を船司及船手等に及す事を承知する趣を閣下に申述へく候則千八百六十六年及六十七年間の公使通信第一卷百四十片葉に於て閣下は夫の在龍動米國公使アタムス氏より本國の國務尙書に贈たる書簡を見らるべし

右は「ケンチュキアン」號船に乗組たる船手の若干右船を脫せんとする勢あるか爲め其船司合衆國領事の勸告により右等の者共を船中に禁錮したりしに「サウゼルラント」の官員之を解放したる所置に對して同船司の異論を陳たるものなり其時右官員等右の如く所置したる耳ならす尙右船主の所置を不公平なる暴行として若干の過料金を命したり又「アタムス」氏英國政府と前任公使と通信したる公書を檢閲し陳述して云く條約書中別段此意を表する事なき時は此王國の港に碇泊する外國船に屬したる船手或は脫艦し或は背反の色を顯し或は使役に服するを嫌ふ等の事あるときに當り地方官其所置を施さんに他より之を制遏すべき一の權理ある事なしと

又同卷百六十九片葉に於て閣下亦夫の「セワルト」氏より「アダムス」氏に將來右等の如き事件起るとも不都合のなき樣改て領事職掌の定約を商議すべく命したるを見らるべし

又同卷に在龍動公使「ブッカナン」氏より「イールクラレンドン」氏に投したる書翰あり其言に云く「イールクラレンドン」氏も承知ある如く去千八百五十四年「マルボルン」より龍動へ至る航海中合衆國船「ソーウヘレン、ヲスゼーシース」號船中に於て起りたる船手背反の一件を以ても是等の爲め別段條約を結はずんばあるへからざるは明らかなりと但し此時は凡十名の者背反の罪を以て禁錮を受居しか英國に於ては此事に付別に法則なく又之を拘留するの法なきを以て皆之を解放したり偖英國法院の右所置をなしたるも合衆國政府の右所置を承服したるも則別に約條あるにあらされは外國の港に到り其地方法律の保護を求むるときに當て外國の水手と雖も其地方管轄の權を廢するを要求し又之を許諾するの理なきを兩國にて均しく認めたれはなり偖又現今英國海軍裁判所の長官ドクトル「ヒリモール」氏の言に凡

各國相互に交際の通義を踐行する爲其地方にて施す處の方法は其如何を問はす他の我に對して交際の通義を踐行すべきを要むるの理あるは一般の通義なりと然は則此一般の通義を以て暫く疑ふへきに屬せりとするも夫の大英國に對して合衆國の請求したる所謂「アラバマ」一件に付「ゼネバ」府の裁判に於て頃日審判議決したるを以ても此通義の眞正確實にして干かすへからさるを證するに足れり

閣下の御議論或は極て至當ならざる所あるも又至て精密御注意あつて嘗て當政府にて横濱港に於て「マリヤルース」船司の施せしと云ふ暴行を吟味するに至りし情實を御陳述有之候

右暴行は船手の中に船中の規律を守らしめんとて加へたる罰責には非すして右船司「ヘレラ」も始終船手に非す船客なりと說明せし人を打擲毆傷し且之を禁錮したるなりと告白ありしなり

偖右吟味に及ひたる條理を言はゝ當政府於ては其暴行ありし事充分信すへき報知を得たるか故之を施したりと云ふを以て足れりと存候

夫吟味とは其本體を論すれは則單に實なりと自信して告白する者あるに臨み彌其慥なるを證するに足らされは其告白の虛實如何と之を確證する事に過きざる耳而して右告白者の信すへきと信すべからさるとは先最初には其當人の行狀にて之を察し右告白の唯輕忽なる疑察に出るか或は彌實事に由りたる確說なるかは獨り吟味を經て後始て之を證實し以て之を決定するを得へき事に候

抑此一件の告白を得たるは最初に當時在日本英國代理公使「ワットソン」氏より外務省に差越たる公書體の書簡に在り次て當時在日本米國代理公使「セバルト」氏より書翰に由て尙之を確實するに至れり則右「セバルト」氏も右吟味を爲さん事を當省に申立たるなり

閣下も懇信國の公使より書面を以て爲せる報告は固より信許すべからざる者と見做し給はざるは拙者の敢て信する處に候然るに右報告一個の平民より出たるならんには當政府其報告に應して某の所置を施さんとするに當り先つ彼が誓詞を要したるならん然れ共夫の外國公使の如きに至ては如何なる政府と雖も之に誓證を要するの理なく之を詳言すれは公使其在留する國に於て自ら證人となり呼出さるゝ事を免るゝは即ち其君主の特典なるは閣下に於ても能御承知の

事と存候然れとも凡西教國に於て誓詞と稱する者は即ち人其演述する事の眞なるを天に誓ふの恭禮にして日本法院に於ては未た無之式例なるは無論閣下は御承知無之事と存候當政府は何等の法何等の人或は行政或は司法の官に由て吟味をなすとも其國律に戻らされは全く政府の隨意たり今其實に付て之を言へは多年以前より夫の「マリヤルズ」一件を取扱ひし頃迄は各縣の行政官皆司法の權を兼帶したりしが右は施政の際に於て不都合なるを以其後之を改革したるなり然る處宇內各國各自ら其國法を設け自國人及他國人の別なく等しく之を適用するの自由有り

且米國外務總裁「マルセー」氏萬國公法の例則として千八百五十五年第四月六日附の命令狀を以て當時在「ウキンナ」米國公使に指令したり其文に曰

凡そ外國に於て其地在留の我人民を所分するに當り現在行はる處の其國裁判法に於て其人民の占有する所の利益は殘りなく之を得せしむるを其政府に請求し得べしとなり

又大英國の有名なる外務總裁「カンニンク」氏一の英國人の佛國に在て只眞の疑に罹り若干時間禁錮され其後吟味もなく放されたる事に付千八百二十三年第一月二十七日に左の確說を演述したり

凡外國に寄留する者は假令自ら其國法を以不良なりとし或は其法眞に苛酷なるも其居留の間は假りに之を遵奉し之に從服せざるを得ずとの一事は萬國公法中の最緊要の旨趣なり譬へは英國人佛、西、若くは魯、孛、に行く事あるとき其國にて其國法を適用するに當り英國政府は其人民をして之を脫せしめ其自己の法律を以て之を保護する事能はす或は「コンスタンチノーブル」「アラツポー」或は「アルヂール」を始とし他の專治國の曾て法律と稱する者無しと謂つべき國にても若し英國人民之に行く事あらは英國政府其者の爲に玆に本國の法律を移し別段に之を保護し或は他の人民と之を區別するは能はさるなりと是に適例とすへき一事は前年英國人民と稱せる「カンスタット」を「ハラゲー」に於て繫獄したるより英「ハラゲー」兩國間に起りし議論なり「ハラゲー」に於ては南亞墨利加中は素より萬國に名を得たる博學明才の萬國公法家にして熟達老練の大臣「チヤルレス」氏を特命使となし以て書を通し事を論せり「チヤルレス氏は現今英國海軍裁

判長官たる「ドクトル、ヒリモール氏の著述せる論意に憑り或は「ツーウネル及「デルアントリュイス」兩氏の說に憑れり「ツーウネル氏は當時佛國外務執政たり「デルアントリュイス」氏は當時外務省法律官にして其後外務執政となりたる人なり右「カンスタット」は數ケ月獄に繫かれ久しく代言者又は友人と接するを免されす又英國領事も同人と對面せん事を强て申立たれとも遂に其免許なく復た證人と突合せもなくして內吟味を以て證據を取集めたりされ共「バラゲイ」人も是等の時は同樣の取扱を受くべけれは右「カンスタット」氏に於て「バラゲイ人と異なりたる取扱を受たるに非さるの故を以て右苛酷の所置を相當なりと定めたり

ドクトル、ヒルモール氏云く英國斷刑の規則及ひ慣習はパラゲイに比すれは甚美にして且善なる而已ならず大に人情に合へるとの事は實說にして予か意復是に同し然れとも予か意を以て之を外國に當て行はんと欲するとも唯其意を述るのみにして必竟行ふへからさる事なり譬は佛國斷刑の法則と其仕方とは大に英國斷刑の法則と異なる事明かなり且佛國にて其皇帝を弑せんと謀りたる英國人ありて之を佛國にて審斷するに當り其者の防護を爲すは英國にあつては至當公正欠くべからさる者とすると雖も其防護の法を之に適用せんとするとも遂に行はれさるべし又西班牙に於て英國人英版の聖經を賣販したるのみにして其他に罪ありやなきやの調査もなく七ケ月間禁錮せられしが此時英國政府の其事に關するを拒みしは至當なりと千八百六十年一月三十一日下院中に於て「ロルト、ヂョンルツセル」辨論せし事を夫の「カルウヲー」氏引證せし事あり

夫れ國各自己の風習に隨ひ其國法を施行する事隨意たる道理は白露國の政學家も屢々巧みに之を辨論せられたるものなり此理によりて之を推せは橫濱港に於て「マルヤルズ」船の船客取扱方或は船司「ヘレロ」氏より神奈川縣廳え申立たる二ケ條の訟詞假吟味の仕方に付閣下の御批評に對し敢て答論を要せさるべし

右二ケ條中第一の所置を以て之を審斷なりとするも歐州に在ては所謂「プロセスド、アンストロクション」審問法則大英國并合衆國に在ては「インクワイリーバイガランドジュリー」陪審糾問

若し此審問法は之れに異なりと云は丶其異なる處皆大に船司の便宜となれるものなり如何となれは船司「ヘレロ」は證人と突合吟味を免され復た代言者の補助を得又船司の所望によりて證人を出す事をも免されたれはなり

然るときは右所分は勿論其他の所置に於ても萬國普通の公義に悖る事なし但し其公義は之を遵行するの際其方法に至つては國々にて各差違なき能はすと雖も齊く遵守せさるを得さる者とす今玆に論するは不要に屬すと雖も既に閣下の高論を愼聽するに當て又閣下の誤認なるべきを見ては之を記載せさるを得す

神奈川縣廳にて假吟味を爲たる人の事及ひ千八百六十七年江戸約條コンウヘンション」と唱へらる丶者の事は何れも閣下の誤認と被存候閣下の書翰中別紙第六號と記されたる「フアン、フアルケンボルグ」氏の書中に右寫は大に輕き意義の文字を以て取極(アランジメント)めと名け且交際上の主意に取ても決て約定と云ふべき者の體裁ならす其序言にも唯或外國公使の勸言に依りてとの意を示せるのみにして公使其本國政府の名を以てするにも非す又本國政府の爲にするにも非す唯友情を以て橫濱借地人の代として爲せるものなり則借地人煩事洪費を厭ふか故に政府に於て外國人居留地取締の事を更に管理あらん事を乞へるものにて其大旨意は政府にて地所并に取締の一局を設け外國人の內一人の執事を命し之を司らしめ此執事は神奈川縣令の所屬たるべしとの義なり

第四條に神奈川縣令は右居留地取締役の助言補佐及ひ外國領事より助言する事あらは其れに由り支那國民其他條約未濟國の人民を管轄すべき趣を載するものなりされ共是れ各國互同の盟約に非るを以て正式に適へる約書の體裁ならす且天皇陛下又は將軍或は締盟國の君主等に由て之を批准したる者に非るなりされは右假の取極めを設立する事を勸めたる外國公使等當時の事情にては居留地內に取締を立て健康を保全するに緊急なりと考へ設けたる只假の取極と謂へき耳

素より當時年限を定め其間は之を遷奉すべき者と預め定めたるに非す故に之を永久守るも又は之を廢するも當政府の隨意たるへきなり殊に第四條の如き之を永久の約束と見做すは實に笑ふ可きの事也抑日本國の取結たる諸條約は其個條に明瞭揭載あるを以て日本の都合によりては千八百七十二年七月を以て終るべきなり且當時外國公使或は其勸告を

承諾せし將軍家の官員とても其公使國民の權理を我所轄の國民の爲め定めたる時限の後にも管轄すべき取極をなさんとの趣意なりしとは考へられす候且白露は其時も當今も條約末濟國なり仍て思ふに天皇陛下より閣下と和親貿易の條約を商議のため委任を受たる官員貴國人民總て他の事件は自由なりと雖も夫の外國諸領事の衆評に由り施行する束縛管轄法のみは之を免かれしむる事能はすといふを聞かは閣下は必す驚愕不滿にして且言はん英佛米孛荷の公使何等の權を以當時の形勢によるとて日限をも定めす常久白露國人を吟味するの定例を設立せしやと定て御不審可有之と存候此儀若し或る領事云へる如く領事たる者は唯其勸告を與ふるの權ある而已ならす又其衆議にて與ふる勸告は正に之を行はしむへき權理を有し神奈川縣令は唯領事の口舌となりて其決斷を其儘甲渡すべき者なりと認る時は若し不正の決斷あるとも當政府にては之を拒き之を正すの權なけれは其責を外國に歸するが如き非常の場合に立到るへき事と被存候

且又事實に於ても神奈川縣令は假吟味中外國留地取締役を補佐とし其勸告を聞き其他閣下の暗指せる人々の列席勸告を乞ひし如く外國領事の列席勸告を乞しなり

縣令は衆論を聞き其理否を參考し之を取捨せり是縣令の權理と職任とによれるなり而て其吟味の結末を上申するは獨り縣令の擔當する所にして勸告者の關する事に非す

縣令は吟味によりて船司「ヘレロ」の横濱港に於て船客に苛酷の所行ありたる事其罪正に罰すへきを知れとも時日遷延の難澁たるを察し其罪を定めて歸帆なさしめんと上申し則ち允准を經たり爾後更に船司に對し所置したる事なく又政府にて其船を拘留したる事なし

裁判所に於て船司より申立たる訴訟を審問するの際船司自ら甲出るには自後縣廳を煩はさず雇夫輩は殘し置き拙者は出帆すへしと希望ある旨は詳知せりと

吟味中船を留め置しは船司自己の意に出たり且其間船客は證人として留め置くものなるに政府より居所食物を給與したれは却て船司の省費となれり訴訟の爲に時日遷延したるは船司の自ら爲せるにして猶船司自ら先に「マリヤルズ」船を放棄し其後隨て船手輩之を放棄したると同一樣の事なり

假吟味中船司を捕へ或は引留めたる事なしとも船客を留め置きたれは船司も止むを得す船を留め置かさるを得さると

し暫く之を實正なりとするも事跡に就て之を觀れは果して然るや否や今爰に之を陳へん

神奈川縣廳に於て所置したる其手續書を閣下の高覽に供したれは書中重要の件々は必す抄錄せられたるべし

然るに此吟味は多分日本海外にありたる事の審問に係れりと云閣下の議論に對し今其事の始末を詳論すべし先つ最初の證人は支那人「モクヒン」なる者なり

神奈川縣令は右支那人の「マリヤルズ」を脫艦し取押へられ右船に送り屆られたる事等には同人に對し汝如何なる故を以て右船を脫せしや精しく其事情を知らんと欲すとの趣を述たり縣令の此の如く述たる所存は港内にて同人に對しての惡行に付同人より之を告訴するを得せしめたるにして決て我か期し且望む所の答をなさしめんと仕向たるに非す然る處「モクヒン」自己の意を以て答て曰（四月十八日私兩三名の支那人に誘拐せられ船中に携へられ兩三日の後右船司より禁錮せられ且酷薄に取扱はれ申候）と此の如く同人の演述する所の事は則支那管轄内にて起りたる所業又は大洋上にて起りたる所業なり斯く同人告白したるも彼自ら申出たる事にて縣令より促かしたるには非りしなり蓋し右支那人其國語を以て陳述する故に縣令も其回答全く終り譯官の之を國語に譯する迄は右支那人返答の何たる事を知る能はざりし也故に假令其陳述する處或は外事に涉るならんと思惟する事ありとも即座に之を差止め能はさりしなり而して右支那人は右返答の内に右船中に於て死するよりは寧ろ水中に投じて死せんと決心して水中に飛込申候且惡しく取扱はれ或は打擲され終に髮を切斷せられ申候と陳述せり此終のヶ條は横濱港内にて起りし事なるは充分なる證詰を以て確定する處に候

夫れ閣下は支那人の髮尾を切斷する事を以てさまで害とは御考量無之義と被存候成程右髮尾を切斷するは少しも其身に疼痛を生せさる事なれは船司「ヘレロ」の此罰法を選用せしは必竟夫の犯人に苦痛を與へずして他の支那人をも戒心せしむるの手本となさんと仁慈の心を以てしたる事と被存候

右船司は支那旅客を携て已に六回の航海をなしたる者なれは右髮尾を切斷するが如きは支那本國にては至て賤むへき刑罰にして其髮尾のなきは則罪科貶辱の目證たるは亦已に知りたるべし

然るに閣下の御議論には右髮尾を切斷する事は凌辱には非す如何なれは支那人外國に在ては其髮尾ある者甚た稀なるを以てなりと此恐くは閣下白露國内のみに於て御實見有之候處を以て御議論有之候事にして右は矢張夫の船司「ヘレロ」の如き所業に由て耳然る儀と被存候乍去閣下今我日本に於て其髮尾の無き支那人は一人も無之儀容易に御實驗可相成候又米國郵船にて歳々横濱を通過する支那人數千の内にも斷髮せる者を見す又聞く現今合衆國に在る支那人は其數大凡十萬許なるに此中愛論人に由て凌辱さるゝか又は或る罪科あるに由て自國の人より罰せらるゝかに非れは一人も其髮尾を切斷せる者無之と此儀は閣下御調へ有之候へは御分明可相成存候

「モクヒン」を吟味後直ちに即日船司「ヘレロ」を招き聞糺せしに横濱港内に於て「モクヒン」幷に其他三四人を手鎖に入れ三人の髮尾を切斷せしめたる事は相違なしされ共船中の者皆無事にある由陳述し尚又唯一人御尋あるも無用なるへけれは廿五人乃至五十人若しくは思召次第にて幾人にても御尋あるべしと申述たり因て縣令は其意に任せ一少女の外當時船中にある者殘らす呼出し吟味を爲したるなり

船司を吟味せし時右罰を加へたる趣意は旅客を船中に閉込置かん爲なりしと隱す事なく申立將又支那人悉く上陸せんと謀らは拙者之を如何せん又此の如き時に當つて誰か旅費を拂はんやと又支那人を打擲し手鎖に入れたる事を辨解し申には(彼等船を焚かんとせしか故なり)と爰に於て幾許の人斯く謀りしやと問たれは(殘らす)と答へ且此事は今より六七日前なりしと云へり左すれは横濱着船の後なり又其節訴訟の確證として申せしには瑪港出帆兩三日後船客輩船に放火せんとの用意を爲したる事ありしと

支那人「アタック」は右船を脱せし故を以船司の命にて己か髮を切斷されたる事を陳述し且右脱艦を企たる譯は全く食物不足なる上藤杖にて打擲せられたるを以なりと且支那人多くは皆食物の不足なる趣又種々苛酷なる取扱を受たる趣告訴したり而して右船司「ヘレロ」然りとせし事實を見ても右船中の情實を吟味する事其理に符ひたる事は充分に明かなるべし且右等の旅客此取扱を不滿に思ひ且將來如何と恐怖せし事なるは判然たるなり

審問の節右船司は數名の士官と等く自己の代言者の爲めに證人となり列席して陳述せり是を以て我政府我より之を求

めずして右旅客の告白を自然確實にするを得たり故に今拙者右船司及士官等か自ら演述せる所の事を左に揭けん

右船司の云十五名乃至二十名の雇夫横濱港内にて水中に投したりしが皆游く事を能くせざりし故船司脚船を出して右等を拾ひ上けたるに由り再ひ船中に歸り來れりと又閣下は夫の航海船中に慣れさる人々は必ず困倦の情を覺ゆるの儀を御陳述ありたり

右は一應理あるに似たれとも夫の十五名餘の人々我游き能はざるを知りながら水中に投し我生命を危ふせんとせる詞柄には相成間敷と存候且又右船司の云く(余時としては背反を鎭壓せん爲に藤杖を用ひたる事あり又六月九日より凡そ十三四日の間此の背反者共に手鎖を置きたり)と是を以て觀れは夫の大困倦の情態は已に右航海の初に當りて自然顯はれたる事なるを知るへし偖又此背反と稱する者は(船司自ら之を名付て背反とせり)船中晴方「セレーワ」氏此旅客共船に放火せんと企て謀反(セレーワ氏躬ら斯く稱するなり)をなし即ち同氏の自ら之を見顯したる事なりと說明す蓋し右放火の目的にて藁及ひ燃へ易き品物を用意したりと又旅客不殘右目的を達せんとて其用意をなしたりと陳せしよし同氏は是まで

屢々此の如き事を經驗せし事と被存候如何となれは同氏の言に(右は通例の仕方にて爲したり)とあればなり又大洋上にて我か乘れる船に火を放ち自分の生命を失はんとするは自由の旅客等の通例行ふ所の事なるか將た否さるかは閣下是迄航海御實驗にて御承知有之候事と存候拙者思ふに夫の歐洲より北亞米利加洲に行く所の數百萬の移民の中に於ても斯くの如き事は未だ嘗て起りしを見さるなり

船司及ひ按針役「アリール」の申立を聞くに船客一人は五月三十日航海中自ら水に投し一人は六月六日同しく水に投せり(最初船を焚かんとせし二日前なり)又外に一人飛込し者あり其時日は知れされ共着港前の事なるよし

右等の事ありたるを以て當帝國の海内へ着船の後苛刻の取扱を受けたるとの船客の愁訴は實事なるを察するに足るべし又日本政府に於て大洋或は外國領内に起りたる事を以て船客を援け船司を罰するの權利なしとの議論ありとすとも日本領内に於て船司船客共取扱に付雙方互に爭論せるを日本政府に於て孰れか正孰れか邪なるを證明せんとの眞意にて航海中の手續を糺し或は船司苛刻の所行ありたるは全く横濱にて船客の船を脱せんとするを防禦せん爲め事實止む

を得さるに出たるや否を審問するは更に司法裁判の趣旨に戻る事なく至極適當なる事なり

神奈川縣令此訴を裁斷し二人の船客を强ひて「マリヤルス」船に歸らしむる事を拒みしは司法の權を以て之を處置したるなり夫れ各國人民不正の裁斷を受けたりとおもふ時は其人自ら裁判上廳に上告し充分手を盡したる後ならては其本國の政府にて派出の官員を以て其者の爲に之に關係するの權なきは是れ克く人の知る所なり因て此一件に付ても上告するを得へきに嘗て船司「ヘレロ」又は誰あつて當帝國司法最大の權力ある司法省に上告したる事なしされともこれは左の二件の爲めに措て論せさるへし則其一は日本政府は裁判上廳の再判を不要縣令の裁決を以て其責に任するを甘んすれはなり其二は此一件は其事情全く罪人交付の一に屬すれはなり且政府の人を保護すると然らさるとの事に至つては之を要するの權獨り政府に在て司法省は唯之か勸告者なれは之を處するの權なきか故なり

縣令大江卓氏か裁判をなしたる條理は拙者におゐては一として不當の儀無之と存候即左に揭る一つの條理のみにても其正當を證するに足るへし

右旅客は船司より申出て之を請求するに因て上陸せしめたるなりされは右旅客正しく神奈川縣令管下に屬する人民にて當政府の保護を求めたる者なり然るを如何なる詞柄ありて右等の人民の保護を剝脫し如何なる名義に依托し譬へはスペシフィクペルフヲルメンスと稱するものにて脫國の罪人或は脫艦の水夫を交付すると同一途なり拙者今一證を引て之を確實にせんされは萬國公法に於て苟も一種の約條ありて極惡なる罪人を互に交付する事を約するに非れは何なる場合にても甲國より乙國に此の如き罪人を交付せさるへからさるの職分なきなり然れとも右約條ありて之を要するにあらさるも間々之を交付せし事ありしは全く罪人の逃避潛匿して國中に在る時は是れか爲め其國の平和安全を害せんも計られさるの恐れあるを以ての故なり偖閣下曾て夫の「クリヲル」船一件を引證せり就ては拙者も亦右一件に付「ウヰフストル」(當時米國外務執政ナリ)より夫の英國公使「ロルト、エスホルトン」氏の下に投したる書翰を引證せん其書簡に云

（合衆國にて罪を犯したる人若し英國所領地に脫して潛匿する事ありとも右等事件に關したる一種の約條を取極めさる間は其交付を要求せさるへし蓋し右は法を避けて

逃遁せるの罪人を交付すると否らさるとの一件は各國とも特に自國の裁量に從てこれを處置すへき者なりと互に一致理會するを以てなり是れを以て右交付を拒む事も決して交際の通典を破れりとせす）と

罪ありて脫走したる人たりとも交付するを拒むの權あり況乎他國に携行せんとの約定を破りたる譯のみを以て脫走したる人を交付すへきの請求を拒むにおゐておや航海中船舶運用助勢の爲め雇入る〻水夫の約定は至極貴重のものとす閣下も躬自ら勇剛拔擧の航海家なれは水夫の所屬を脫するを好み給はさるは素より當然なり水夫輩の脫走するは恰も船の帆檣を失ふたるか如し故に海外通商を專らにするの國々は最も水夫輩をして其約を踏ましむるを勉むるなり然れとも港内にて水夫の脫する事ある時別に明約の取極あるに非されは强て之を歸船なさしむるの權なし

千八百五十年四月十日に取結ひたる白露と英國との條約第十條に兩國互に前件の取極めあるは則條約に據りてのみ如斯するの證なり「セルトマルメボリー」此條約取替の時の布告の文に白露國人所有の商船に乘組たる賣奴水夫の脫走する時は此例にあらさるとの事を別段注意して記載せり然るに白露國は夙く千八百二十一年國内に來る所の賣奴は免るして不羈と爲すとの令を發したる國にして尙何の故を以て此事あるやは閣下の容易く辨別し得る處なるへし

凡そ萬國公法中此規則を奉する確乎たる一例は大英國及合衆國の所爲を以て見るに足れり抑此兩國は世界に冠たる通商國にて其船帆實に宇内至らさる所なし而て兩國の水夫は其言語相同しく其風俗又相以たれは兩國の水夫とも其言語風俗の異なる國に脫せんより右兩國の内に脫せん事寧ろ便利なるを以て皆之に脫せんとするなり譬へは英國の水夫は高き賃錢を欲して日々合衆國に脫し合衆國水夫は英本國の港歟或は世界に散在する海外所領地の諸港に脫す然るに兩國共曾て右脫艦者を交付せんと互に要求することなし其故如何となれは若し兩國の水夫和親の他國に脫することある時は互に之を交付せんとの規則は設立したれ共未た嘗て右兩國の間にて脫艦水夫の交付をなすへきとの約條なきを以てなり兩國政府とも右取極めをなすに於ては大に利益ありと雖も合衆國獨立建國の古へより今日に至り依然として未た此取極をなさず

閣下の議に白露國の船にて支那移民を開放せしは「マリヤ

ルズ」船を以て始とすといひ「オノル、」「バタヴイヤ」或は「セントヘレナ」港に雇夫を乘せたる船の隨意に入り復其儘出たる事を揭げらるれども右は全く雇夫輩其時羈絆を免れんと裁判所へ愬訴するの機會を得さりし故なるへしと察せらる拙者今又玆に「オノル、」の一例を引き云はんに『伊太利亞蒸氣「クレンサンノックス」船に「ウオンスウ」なるもの禁錮せられたりしを布哇島裁判上廳之を助け出せり此者は「コスタリカ」に行き力役すへきを瑪港にて約定したりと申立たれは裁判官之を聞き云けるには船司此船客の上陸を拒む事は互の取極にも其事無く我國法或は條約にも揭載なし依て又裁判所に於ても命して乘船せしむるの權なし依て我國法の免るせる界内は上陸するを得べしとて』外船客同樣勝手に陸行することを免されたり

（下ケ札）

されは右一件に付拙者の陳述する云々を御熟考あらは開明の貴政府に於ても當政府は右に付貴國の商民に不正を施しゝるに非す又當政府貴國の名義を耻かしむるの意ありしに非るは御詳知相成へく若し其間に曲事ありとも右は全く若干名の支那人自ら好て己か約束を破りしにて當帝國に於ては支那人に右約束を守るべく要責すること能はさりし也殊に右は獨り慈仁の趣意に於て然らさるを得さるのみならす當帝國と支那帝國の間に存する格別なる義務に由ても右支那人を我保護の外に措き能はさりしなり

依て拙者に於ては閣下再ひ貴政府の命令を受け貴國と我國の間に至厚の友誼を脩めんとの御趣意にて公明に御熟考の上再應御回答有之樣致希望候右貴答如此候敬具

明治六年六月十四日

外務少輔　上野景範

白露國特命全權公使

オレリヨ、デー、ワイ、カルシヤ閣下

（下ケ札）

『』ノ間一系下書スル方ナラン

二一〇　六月二十日　上野外務卿代理ヨリ三條太政大臣宛

「マリヤ、ルス」號事件ノ裁判ヲ第三國ニ委任方伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政大臣決裁

附屬書　六月十九日「マリヤ、ルス」號事件裁決ニ關スル上野外務卿代理ト秘露國使節トノ約定

昨十九日白露國公使とマリヤルーヅ船一件に付反復討論の末終に別紙の通り締盟國の裁判に任すへき事に決議いたし候右の通り取計候て可然哉早々御下知有之候樣いたし度此段相伺候也

明治六年癸酉六月廿日

外務少輔　上野景範

太政大臣　三條實美殿

（朱書）「伺之通」

明治六年六月廿日卿

（附屬書）

約　定

一千八百七十三年六月十九日下名ノ日本皇帝陛下ノ外務卿代理上野景範ト秘魯國特派全權公使「カピティン、アウレリヨ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ、ト秘魯國船マリヤルーヅ號一件ヨリ起テ兩國政府ノ間ニ未定ノ議論ヲ盡サンタメ日本外務省ニ會合セリ

秘魯公使ハ一千八百七十三年六月十四日附上野氏ノ書翰ニ付テ議ヲ創メマリヤルーヅ一件ニ於テ日本政府ハ決テ秘魯國ノ威權ヲ凌辱スルノ意匠アラサリシト云外務長官ノ說明ヲ見テ最落意セル由ヲ述ヘ次ニ秘魯國人ニ對シテ聊カ不公平ノ處置アラサリシト云上野氏ノ辨論ハ落意セサル所アリト云ハサルヲ得サルハ遺憾ニ堪サルノ由ヲ以テシ且カピテン、ガルシヤハ一千八百七十三年三月三十一日附書中ニ述ヘタル主意ト上野氏答書ノ趣旨ト所見不合ノ件々ヲ枚擧シ其論駁ニ於テ日本政府ノ其責ニ非サルヲ證スルニ足ラスト思ヘル由ヲ以テス是ニ於テ外務長官モ秘魯公使ノ說出セル件々ヲ辨駁シマリヤルーヅ一件ニ於テハ日本政府ノ正シク法律ニ照準シ公道ニ基キ處置シタル由ヲ論辨ス

此ノ如ク雙方互ニ其議ヲ主張シ辨論數刻ニ及ヘリ

雙方政府各自其有理ヲ思ヒ相互ニ屈スルヲ欲セサルハ明白ニシテ卒ニ雙方ノ主意ニ於テ協和スヘカラサルノ岐異ヲ生シ且兩國ノ友誼ヲシテ益懇篤ニ至ランシメン事ヲ欲スルハ雙方素ヨリ企望スル處ナレハ下名日本及ヒ秘魯ノ政府ニ代リテ此一件ヲ締盟國ノ君主不偏ノ裁判ニ任スヘキ事ヲ決定ス

下名ハ速ニ判者ノ選定及ヒ判者ニ此事件ヲ任スヘキ方法ヲ約定スヘシ

下名ハ現ニ記載セル處ノ事ヲ證センカ爲メ玆ニ一千八百七

十三年六月十九日東京ニ於テ四通ニ認メ記名スルモノ也

明治六年六月廿日

外務卿代理

外務少輔　上野景範

白露國特命全權公使

シカヒテン、アウレリヤ、ガルヤ、ワイ、ガルシヤ

（右英文）

Protocol

On the 19th of June 1873 a conference took place at the Department for Foreign Affairs of Japan, between the undersigned, Mr. Wooyeno Kagenori, His Imperial Japanese Majesty's Acting Minister for Foreign Affairs and Captain Garcia y Garcia, Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of Peru, in reference to the discussion pending between the two Governments, growing out of the case of the Peruvian barque "Maria Luz."

The Peruvian Minister opened the conference by referring to Mr. Wooyeno's despatch of 14th June 1873, stating that he had seen with great satisfaction the declaration of the Minister for Foreign

Affairs, that the Japanese Government in the "Maria Luz" case had no intention to affront the dignity of Peru; and added that he was sorry to be obliged to say that Mr. Wooyeno's arguments to prove that no injustice had been done to Peruvian citizens, did not satisfy him. Captain Garcia then explained at length all the points of disagreement between his views of the case, as exposed in his note of 31st March 1873 and those of Mr. Wooyeno's in reply; and concluded that the Japanese Government, in his opinion, had not proved their irresponsibility.

The Minister for Foreign Affairs discussed the several objections presented by the Peruvian Minister and endeavored to demonstrate that in the case of the barque "Maria Luz" the Japanese Government had acted in strict observance of law and the principles of justice.

A long and frank discussion ensued between both Ministers, each one sustaining his arguments and conclusions.

It being evident that each Government thought itself in the right and neither being willing to yield any point to the other, this irreconcilable diversity of opinion, united to the earnest desire expressed by both of cultivating the most friendly relations led the undersigned, in representation of the Governments of Japan, and Peru, to agree to submit the case to the decision of an impartial judge, to be the Chief of a friendly State.

The undersigned will as soon as possible agree upon the selection of Arbitrator and the manner of submitting the case to him.

In testimony of which the undersigned have subscribed these presents, in quadruplicate in the City of Tokio, on the 19th June 1873.

(Signed) Wooyeno Kagenori (in Japanese)

(Signed) AURELIA GA. Y GARCIA.

二一一　六月二十九日　大江卓殿　花房外務大丞

「マリヤ、ルス」號事件ノ裁判ヲ露國皇帝ニ委任方決定セル旨通知ノ件

「第二千十九號　達了」

大江卓殿　花房外務大丞

ハルク形マリヤリユース船一件ニ付別紙寫の通り白露公使え返簡相達し候間即ち差進申候御落手有之度候尤右一件は追々反覆討論の末互に其持論協同せさるより終に魯西亞帝の裁判を乞ふ事に決定其約定等調印相濟申候右寫未た出來不申候間追て差進可申候也

明治六年六月廿九日

陸　本號文書別紙ハ二〇九ト同文ニ付省略ス

二一二　七月三日　三條太政大臣宛上野外務卿代理ヨリ

「マリヤ、ルス」號事件ノ裁判ヲ露國皇帝ニ委任方相互了解ナリタルニ付右ニ關スル約定書ニ證印アリ度旨上申ノ件並ニ之ニ對スル太政大臣決裁

附屬書　六月二十五日「マリヤ、ルス」號事件ノ裁決ニ關スル上野外務卿代理ト秘露國使節トノ約定

(朱書)「第一千六十八號」

白露國船マリヤルーヅ一件ニ付他の締盟國君主の裁判に可任す段先日相伺候處伺の通御指令相成候に付去月廿日午後三時雙方調印相濟申候其後猶雙方評議の上魯西亞皇帝を以此裁判者と爲し自今マリヤルーヅ一件は都て同帝の處分を仰くべく旨雙方談判相整ひ同廿五日再ひ調印いたし申候右は先般の御指令も有之候事に付此段取計申候依之別紙約定原文幷和譯共相添差上申候間御證印の上御下渡有之度此段申進候也

明治六年七月三日

外務少輔　上野景範

太政大臣　三條實美殿

(朱書)「上申之趣聞屆候事
明治六年七月十日卽」

(附屬書)

約　定

本月十九日下名ノ日本皇帝陛下ノ外務卿代理上野景範ト秘魯國特派全權公使「カピテイン、アウレリヲ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ」ト秘魯國船マリヤルーズ號一件ヨリ起テ兩國政府ノ間未定ノ異論ヲ締盟國ノ君主ノ裁判ニ任スベク鈴印シタル約定書ニ基キ今又千八百七十三年六月廿二日外務省ニ會合シ下名ノ兩人兩國ノ政府ニ代リ魯國皇帝陛下ヲ判者トシ此一件ヲ其裁決ニ任スヘキ事ヲ約諾ス就テ又兩人約諾セル件々左ノ如シ

第一條

兩國政府ヨリ魯國皇帝陛下へ此事ヲ賴ミ遣ス書ハ各自之ヲ本年十二月中ニ送致スベキ事

第二條

魯國皇帝陛下此事ヲ然諾シテヨリ十二ケ月以内ニ兩國政府ヨリ各此事件ヲ判者ニ申立ベク而シテ又雙方ヨリ差出スヘキ證據ハ此一件ニ關シタル諸書翰或ハ往復公書或ハ其他證據トナルヘキ公書類ヲ以テスベキ事

第三條

判者承允ノ告知アル日ヨリ六ケ月以内ニ雙方共ニ判者ノ考案ヲ乞ハント思フ所ノ書類ハ寫ヲ以テ之ヲ互ニ送致スベシ尤抗論ノ證據ヲ表シ或ハ的實ノ議論ヲ申立ルヲ得ベシ就テ兩國政府各其代人(アゼント)ヲ命シテ魯國ニ送リ事ヲ辨セシムルヲ得ベキ事

第四條

秘魯國ノ請求條理アリト決スルトキハ日本ヨリ幾許ノ償金ヲ出スベキヤ判者ノ裁斷ヲ乞フベキ事

第五條

魯國皇帝陛下ノ裁斷ハ則結末ノ裁決ト爲スモノナレハ毫モ忌避遲延ナク其裁斷ヲ奉循スベキ事

現今横濱在港マリヤルズ號船ハ船司ノ立去以來合衆國公使ニシテ其際日本ニテ秘魯國事務代任ナリシシ、イ、デロング氏日本政府ノ許諾ヲ得テ看護人ヲ附置アレハ日々ノ經費ナキ能ハス故ニ此始末ヲ附ケン事下名兩人ノ欲スル所ナレハ右船ニ關渉セル諸人ノ利益ヲ謀リ之ヲ糶賣スヘキ事ヲ約諾ス

兩國政府孰レモ糶賣ノ金ヲ收納スルヲ好マサレハ船司立去以來滯船中ノ諸雜費ヲ仕拂ヒ殘金ハ正當ナル裁判所或右判者ノ命ヲ待テ處分スルガ爲横濱ノ「バンク」ニ附托シ置ベシ

右ノ證據トシテ下名ノ兩人玆ニ記名鈴印シ依リテ秘魯國大統領ノ許可ヲ得ベキモノナリ

明治六年六月廿五日卽千八百七十三年六月廿五日

東京ニ於テ四通ニ認ムルモノ也

上野景範

オウレリヨ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ

(下ケ札)

兩全權鈴印スレト尙秘魯國大統領ノ許可ヲ仰カサレハ施シカタキモノト見エ然レドモガルシヤ氏ヨリ其統領ヘ許可ヲ仰クハ然ルヘキ事ナレト我少輔モ共ニ證シテ之カ許可ヲ受ルハチト不體裁ナラスヤ且保約ノ權ナキ人ト鈴印スルモ亦解セス

(右英文)

Protocol

The undersigned, Wooyeno Kagenori, His Imperial Japanese Majesty's Acting Minister for Foreign Affairs, and Captain Aurelio G. y. Garcia, Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of Peru, having stipulated in the agreement of which a Protocol was signed on the 19th day of the present month that the difference pending between the two Governments growing out of the "Maria Luz" case, be submitted to the arbitration of the

Chief of a friendly States, have, at a further Conference held at the Gwaimusho on the 22nd day of June 1873, agreed on behalf of their respective Governments to refer the case to the decision of His Majesty the Emperor of all the Russias as Arbitrator.

They have also agreed :—

1st. That the note to be addressed by both Governments to the Government of His Majesty the Emperor requesting his acceptance, shall be despateched by them respectively in the course of the month of December of the present year.

2nd. Within twelve months after the date of the acceptance by His Majesty, each Government shall present its case to the arbitrator. The evidence to be presented may comprise such documents, official correspondence and other official or public statements bearing on the subject of the reference as they may consider necessary to the support of their respective cases.

3rd. Within six months from the date of receiving the notification of the arbitrator's acceptance, the respective Parties shall transmit to each other copies of all the papers which they then intend to submit to his consideration ; but each shall be at liberty to present to the arbitrator any rebutting evidence and such arguments as it may deem proper. For this purpose, either Government may appoint an Agent or Agents near the Court of His Majesty to conduct its case before the arbitrator.

4th. The arbitrator shall be requested to decide if the claim of Peru is well founded, and if it is, what indemnity shall be paid by Japan.

5th. The award of His Majesty the Emperor of all the Russias shall be considered as absolutely final and conclusive, and full effect shall be given to such award without any objection, evasion or delay whatsoever.

And whereas the barque "Maria Luz", abandoned by her Captain, now lies in the bay of Yokohama in charge of a guardian placed on board of her by the then Representative of Peru in Japan, the Hon : C. E. De Long, Minister of the United States, and

with the consent of the Japanese Government ; and whereas that Guardian-ship has been and is now the cause of daily expense, the Undersigned, equally desirous to bring to an end this state of things, have agreed that the Ship shall be sold in public auction for the benefit of all parties interested in the vessel.

Both Governments declining to receive the proceeds of the sale, such proceeds after the payment of the expenses of keeping the ship since her abandonment are to be deposited in a bank of Yokohama to await such disposition as may be ordered by a competent Court or by the Arbitrator.

In testimony of which the Undersigned have subscribed and sealed the present agreement which shall be approved by the President of Peru.

Done in quadruplicate in the city of Tokio (Yedo) on the 25th day of June 1873, corresponding to the Japanese date the 25th day, 6th month, 6th year of Meiji.

(Signed) WOOYENO KAGENORI

(in Japanese)

(Signed) AURELIO GA. Y GARCIA

二二三　七月十三日　三條太政大臣宛　上野外務卿代理ヨリ

「マリヤ、ルス」號羅賣一件ニ關スル米國公使ノ書翰ノ催ニ關シ同ノ件並ニ之ニ對スル太政大臣決議

附記　七月十四日　上野外務卿代理及秘露國公使ヨリ米國公使宛

「マリヤ、ルス」號羅賣方依頼ノ件

「第千百八十六號」

マルヤルス船羅賣の義に付外務少輔

秘魯公使連名にて合衆國公使え書翰同

過る六月廿五日約定マルヤルス船羅賣一件に付別紙の通り

拙者幷秘魯國公使連名にて合衆國公使え書翰差遣し度候右

にて可然哉此段相伺候也

明治六年七月十二日

外務少輔　上野景範

太政大臣　三條實美殿

（朱書）「伺之通」
明治六年七月十二日卽」

註　米國公使宛送付セラレタル書翰ハ本號文書別紙ニ「一二字ノ轉置減加」ヲ施シ「書キ替ヘ」タルモノニシテ七月二十日附ヲ以テ上野外務少輔ヨリ三條太政大臣宛其旨事後承諾ヲ求メ居ルニヨリ右別紙ハ省略シ改訂送付セラレタルモノヲ左ニ附記ス

（附記）

マリアルス船一件より起り候日本と秘魯兩國間の異論を魯西亞皇帝陛下の裁決に任すへき事を兩國に代り下名の者共千八百七十三年第六月廿五日約諾せる約定を左に拔萃し閣下に報知す

現今横濱在港マリアルス船は船司の立去以來合衆國公使にして其頃日本にて秘魯國事務代任なりしシ、イデロンク氏日本政府の許諾を得て看護人を附置あれば日々の經費なき能はす故に此始末お附事兩下名の欲する所なれば右船に關渉する諸人の利益を謀り之を糶賣すべき事を約諾す兩國政府糶賣代金を收納するを好まざれは船司立去以來滯船中の諸雜費を仕拂ひ殘金は横濱バンクに附托し置正當の裁判所或は判者處分の命を待べし

依て閣下秘魯國人の利益を謀り日本政府の許諾を得て千八百七十二年第十月中マリアルス船を引受けられ其後右船は其儘になりたる故今閣下を煩し約定に基き右船高價に賣れんと閣下の思はるゝ時分に相當の仕方を以て賣却する所を施され且賣拂代金の義は右雜費を引去り前約定に據り夫々處分致し呉られ候はゝ下名の者共に於て欣然の至なり閣下此一件所置被致候に付合衆國政府或は閣下を其責に歸せざる事判然たり敬具

千八百七十三年
第七月十四日

於東京

外務少輔　上野景範

在日本秘魯特派全權公使
アウレリヲ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ

在日本
合衆國特派全權公使
シ、イ、テロング閣下

二一四　七月十六日　米國公使ヨリ上野外務卿代理及秘露國使節宛

「マリヤ、ルス」號糶賣方委託了承ノ旨回答ノ件

(In Duplicate)

No. 55

U. S. Legation Yokohama
Japan, July 16th, 1873.

To Their Excellencies
Uyeno Kagenori
Acting Minister for Foreign Affairs
of H. J. Japanese Majesty and
Aurelio Ga Y Garcia
Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary
of Peru in Japan.

Sirs,

The undersigned acknowledging the receipt of your joint communication addressed to him of date the 14th inst with respect to the disposition of the barque "Maria Luz" begs leave in reply to state; that as a matter of accommodation he will forthwith comply with the request you make. The undersigned begs leave to assure Your Excellencies of his high and most distinguished consideration.

C. E. DE LONG.
Envoy Extraordinary and Minister
Plenipotentiary of the U. S. of
America in Japan.

（右和譯文）

第五十五號

以手紙啓上いたし候然はバルク形「マリヤルズ」船一件に付本月十四日附御兩名の書翰正に落掌披見致し候然は閣下御申越の趣委細承諾致候此段可得御意如是御坐候敬具

千八百七十三年七月十六日

米國特命全權公使
シー、イ、デロング

外務少輔　上野景範
秘國特命全權公使
オウレリヲ、ジ、ワイ、ガルシア

兩閣下

二二五　七月十八日　三條太政大臣宛上野外務卿代理ヨリ

「マリヤ、ルス」號裁判ノ儀露國皇帝承諾ノ趣同國公使ヨリ申立アリタル旨上申ノ件

附屬書　七月十八日右ニ關スル露國公使ノ口上

（第一千二百九十號　七月十九日達了）

魯公使出省白露國猪仔船裁判の義承諾の傳報有之候旨申立に付上申

本日魯國公使出省別紙の通申立候に付此段上申候也

六年七月十八日

上野少輔

三條大政大臣殿

（附屬書）

七月十八日魯國公使出省口上

彼特堡ヨリ電信アリテ白露國猪仔船ノ義ニ付魯皇帝裁判承諾アリ乍併改テ日本幷白露國等ノ政府ヨリ頼ミアラハ其事ニ擔當スヘシ

二二六　七月二十日　上野外務卿代理及秘露國使節宛米國公使ヨリ

「マリヤ、ルス」號及同船積荷賣却布告書寫送付ノ件

附屬書　七月十九日右布告書寫

(In Duplicate)

No. 56.

U. S. Legation Japan
July 20th, 1873.

His Excellency
Uyeno Kagenori
Acting Minister for Foreign Affairs and
Aurelio Ga Y Garcia, Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of Peru in Japan.

Gentlemen,

I have the honor to enclose for your information copy of published notice of Sale of Barque Maria Luz with her cargo, also copy of inventory of personal property on board the vessel which will be sold with him.

I have the honor to remain
Sirs
Your most obedient servant
C. E. DE LONG.

（右和譯文）

第五十六號

以手紙致啓上候然は閣下御承知の爲「ベルク」形「マリヤルス」船幷に荷物賣却布告書寫幷右船と共に賣却すへき船中什物目錄寫差上申候御落手可被下候敬具

一千八百七十三年七月廿日

シ、イ、デロング

上野外務少輔

白露國全權公使　閣下

ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ

（附屬書）

NOTIFICATION.

The undersigned has received from Their Excellencies the Acting Minister for Foreign Affairs of Japan and the Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of Peru in Japan, the following joint official note, to wit:

To His Excellency C. E. DE LONG,
Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of the United States in Japan.

YEDO, July 14th, 1873.

Excellency:

We have the honor to bring to your Excellency's notice the following extracts from the protocol of the agreement, made on the 25th of June, 1873, by the Undersigned in representation of Japan and Peru for the submission to His Majesty the Emperor of all the Russias of the difference between the two Governments growing out of the *Maria Luz* case.

Whereas the barque *Maria Luz*, abandoned by her Captain, now lies in the bay of Yokohama, in charge of a guardian placed on board of her by the then Representative of Peru in Japan, the Hon. C. E. De Long, Minister of the United States, and with the consent of the Japanese Government; and whereas that guardianship has been and is now the cause of daily expense, the Undersigned, equal-

ly desirous to bring to an end this state of things, have agreed that the ship shall be sold in Public Auction, for the benefits of all parties interested in the vessel.

"Both Governments declining to receive the proceeds of the Sale, such proceeds, after the payment of the expense of keeping the ship since her abandonment, are to be deposited in a bank of Yokohama, to await such disposition as may be ordered by a competent Court, or by the Arbitrator."

We beg in consequence to say, that it will be agreeable to the undersigned, if Your Excellency, who, with the consent of the Japanese Government took charge of the ship in October, 1872, acting for Peruvian interests,—will trouble yourself, in view of the condition of the barque not having been modified since, and do us the service to take measures for selling the *Maria Luz* at such time and in such manner, in conformity with the Protocol, as in your judgment will be likely to obtain the best price, and will dispose of the proceeds, less expenses of sale, according to the terms of the above agreement;—it being understood that this action on your part shall in no case be a cause of any responsibility to the Government of the United States, or to yourself.

We have the honour to assure Your Excellency of our highest and most distinguished consideration.

GAIMUSHO-YU, UYENO.
AURELIO GA Y GARCIA,
Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of Peru in Japan."

The undersigned has, in pursuance of such request, given directions to Messrs. C. A. FLETCHER & Co., to sell the Barque *Maria Luz*, with all her appurtenances, cargo, etc., by Public Auction, in the Bay of Yokohama, on the 1st day of August, at 10 o'clock a.m.

C. E. DE LONG,
Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of the United States in Japan.

Yokohama, July 19, 1873. t.d.

（右和譯文）

布告

下名の者日本外務卿代理及ひ日本に在留白露國特派全權公使兩閣下より連名の公簡を落手せり其書に曰く（註 以下二一三附記ト同文ニ付中略）

下名の者右求に應し横濱港内にあるマリヤルツ船を總て其附屬品及ひ積荷等併て第八月一日午前第十時糴賣にすへき旨をシ、エ、フレッチエル社中に下命せり

於横濱

千八百七拾三年第七月十九日

在日本合衆國特派全權公使

シ、イ、デロング

註 右附屬書ト同時ニ送付セラレタル付物目錄ハ省略セリ

In Duplicate

No. 60.

U. S. Legation Japan
August 7th, 1873.

Their Excellencies,

Soyeshima Taneomi and Wyeno Kagenori, H. I. J. M.'s Ministers for Foreign Affairs and His Excellency Aurelio Garcia Y Garcia Minister for Peru in Japan.

The undersigned has the honor to advise you that on the 1st instant the Barque Maria Luz was sold at Auction. The Auctioneer C. A. Fletcher yesterday morning returned to the undersigned an account of sale (Enclosure No. 1)

The undersigned also received yesterday morning an account stated from Messrs Walsh Hall & Co. covering the expense of keeping the Barque from the date when the undersigned took her into his

possession until this date (Enclosure No. 2)

The undersigned also forwards copy of Draft of a Bill of Sale of the Barque that the purchaser requests the undersigned to sign when making delivery of the vessel (Enclosure No. 3)

The undersigned makes proffer of these documents to Your Excellencies for your information and consideration requesting your Excellencies in reply to advise him if he shall accept the money from Captain Fletcher as per his account of sales, pay Messrs Walsh Hall & Co. the amount of the account rendered by them, sign the Bill of Sale, deliver the Barque to the purchaser and deposite the residu of the money in Bank for the benefit of the creditors of the vessel.

An early answer will oblige the undersigned who begs to subscribe himself.

Your most obedient Servant,

C. E. De Long.

（右和譯文）

六十號

以手紙致啓上候然者當月一日「バルク」形「マリヤルズ」船雜賣相成右賣高勘定書（別紙第一號）昨朝糴賣人シ、エ、フレッチェル氏より拙者へ差送申候且又拙者右船を預り候日より今日迄の雜用勘定書（別紙第二號）ウォルシ、ホール商社より昨朝致落手候且右船の買主へ船引渡の節拙者に記名相望候右賣拂手形寫（別紙第三號）をも差進申候右書類閣下へ御報知且參閲の爲め差進申候就ては「ケピテン」フレッチェルより差出候賣拂勘定書の通り同人より金子請取り其上にてウォルシ、ホール商社にて仕拂置候雜費の高を同社へ相拂拙者賣拂手形に記名致し船は買主へ相渡し殘金は其金を得へき人の利益のため銀行へ相預可申哉右の廉々速に貴答有之度相願候敬具

千八百七十三年八月七日

シ、イ、デロング

日本皇帝陛下外務卿

副島種臣

同外務少輔

上野景範　閣下

在日本秘魯公使

オウレリヲ、カルシヤ、ワイ、ガルシヤ

註　本號文書ニ謂フ別紙第二號ハ省略セリ（二一九附屬書ニ參照）

（附屬書Ⅰ）

Account Sales Barque "Maria Luz" sold by order of His Excellency C. E. De Long at public auction by the undersigned for account of the concerned.

The Barque Maria Luz with Inventory		$ 7250 00
Charges		
Advertising in Japan Herald Gazette and Nishin Shingishi month	60 00	
	$ 10 00	
Inventories 100	4 00	
Boat & Coolie hire on provisions	217 30	291 50
Commission 3%		
Net proceeds secured by H. Ko & S. Bank payable 11th Aug.		$ 6958 50

E. & O. E.

Yokohama 2nd August 1873.

C. A. Fleteher & Co.
Auctioneers.

（右和譯文）

第一號

シ、イ、デロング閣下の命に依り下名の者「バルク」形「マリヤルズ」船を糴賣にて賣拂候勘定書

洋銀七千貳百五十元	「バルク」形「マリヤルス」船幷其附屬品共賣拂代
右雜用	
洋銀六十元	「シヤツペンヘラルド」「カセツト」日新眞事誌諸普告代一ケ月分
同十元	什物目錄百枚の代
同四元	用意の爲め小船幷目備人足雇代
同貳百拾七元三十錢	三分の口錢

	Feet	inches
Measurements		
Length from the fore part of stern under the bowsprit to the aft side of the head of the stern post	109	2
Main breadth to outside of plank	26	8
Depth in hold from tonnage deck to ceiling at Midships	18	5
Tonnage		
Tonnage under tonnage deck		
Closed in spaces above tonnage deck if any		
Space or spaces between decks		
Poop		
Round House		
Other enclosed spaces if any		
Total Tons	370	

I. Charles E Delong having been authorized by

註
右附屬書英文中點線ノ箇所ハ七月十四日附上野外務少輔及秘露國使ヨリ米國公使宛書翰ナル處二六附屬書中ニ引用セラレ居ルヲ以テ省略セリ

（右和譯文）

第三號

賣品ノ書附

一公ノ番號	
一入籍ノ日附船ノ概略	
一船名	マルヤルズ
一船建造ノ地	英國
一元入籍ノ港	ワイトハーレン
一推前力	帆前
一甲板ノ數	二段
一桅數	三根
一船形	ハルク
一船艢	
一造船	カルウヱル
一船尾樣臺	無シ
一船頭	婦人半身ノ像

洋銀六千九百五拾八元五十錢　雜用差引の上八月十一日香港上海「バンク」へ相預候正味

於横濱千八百七十三年八月二日

羅資人

シ、エ、フレッチエル

（附錄第三）

Bill of Sale

Official Member of ship		Date of registry	
General description of ship		Original port of registry	How propelled
Name of ship	British or foreign built		
Maria Luz	British	White-haren	Sails
Number of decks	Two	Build	Carvel
number of masts	Three	Galleries	None
Rigged	Barque	Head	Woman's bust
Stern		Frame-work	Wood

the following joint official note to wit :—

.....

..... did, in pursuance of such request, give directions to C. A. Fletcher & Co. to sell the Barque "Maria Luz" with all her appertainances by public auction, and same having been purchased by L. Haber Esq. a German subject do now in consideration of the sum of Mexican Dollars Seven thousand two hundred and fifty paid to me by said L. Haber Esq. the receipt whereof is hereby acknowledged, hereby transfer to the said L. Haber Esq. the whole of the shares in the ship above particularly described. Further I covenant with said L. Haber that I have power to transfer in manner aforesaid the said shares and that the same are free from incumbrances.

In witness whereof I have hereunto subscribed any name and affixed my seal this day of August one thousand eight hundred and seventy three

Executed by the above
named in presence of

一建造　木製

尺度

一船嘴ノ下部ヨリ艫頭迄　百〇九フート二インチ

一甲板ノ濶サ　二十六フート八インチ

一底甲板ヨリ中央ニアル天井迄ノ艙ノ深サ　十八フート五インチ

噸數

一トンネージデッキ下ノ噸數

一トンネーシデッキ上ノ噸數

一甲板間ノ空所

一船尾樓

一圓樓

一右ノ外空所

一總噸數　三百七十噸

（註　以下譯文ヲ缺ク）

二一八　八月九日　上野外務少輔ヨリ米國公使宛

「マリヤ、ルス」號賣却金處分ニ關シ回答竝ニ右臺力ニ對シ謝意表明ノ件

此横文草案スミス氏へも爲見異論無之候

第六十號當月七日附にての貴翰落掌致候然はバルク形マリヤールツ船八月一日に糶賣相成候由御申越承知致候且右糶賣人賣高勘定書竝にウオーシホール商社にて右船を千八百七十二年十一月十二日より千八百七十三年八月六日まて預り置候雜用勘定書且右船賣高の手形の草案倶に御添被下慥に落手致候

扨千八百七十三年六月廿五日の約定書に據れは前條貴下の御取計ひ別段拙者に於て故障無之且乍御面倒右賣高手形ぇ貴下御記名被下候はゝ拙者閣下の御申立に異存無之候此段及回答候

船將フレツチェルより賣高勘定の通り金子御請取の上其買主に船を渡且ウオーシホール商社え同社立替の惣高を拂ひ其上にて殘金は右船賣主の便宜のため銀行（バンク）へ御預け可被成候閣下右一件に付御懇情に御取扱被下候段感謝不淺候右外務卿の命に依り回答旁申進候敬具

明治六年八月九日

外務少輔　上野景範

シー、イー、デロング閣下

二一九　八月十二日　米國公使ヨリ副島外務卿等及秘露國使節宛

「マリヤ、ルス」號賣却金處分濟ノ旨報告ノ件

附屬書一、八月十一日糶賣人「フレツチヤー」社中ノ「マリヤ、ルス」號賣却ニ關シ使用ノ雜費受取書

二、八月十一日「ウオルシュ、ホール」社中ノ「マリヤ、ルス」號保管中ノ立替金受取書

三、在横濱香港上海銀行社中ヨリ米國公使宛「マリヤ、ルス」號賣却金預證書

(In Duplicate)

No. 64.

U. S. Legation
Yokohama Japan
August 12th 1873.

Their Excellencies
Soyeshima Taneomi and
Uyeno Kagenori H. I. J. M.'s.
Ministers for Foreign Affairs
and
His Excellency
Aurelio Garcia y. Garcia

The undersigned has the honor to advise you that on yesterday he signed the "Bill of Sale" of the Barque "Maria Luz" and received from C. A. Fletcher & Co. the proceeds of her sale less their "account of Sale, for which please find copy of their receipt marked (Enclosure No. 1), paid Messrs Walsh Hall & Co. their account for expenses of the vessel to date for which please find Copy of their receipt marked (Enclosure No. 2) and deposited the balance in the Hong Kong and Shanghai Bank in trust for the creditors of the Barks "Maria Luz" as per copy of certificate to that effect marked (Enclosure No. 3)

Trusting that in these actions he has followed out your wishes the undersigned has the honor to subscribe himself

Your most obdt. Svt.
C. E. DE LONG

（右和譯文）

六十四號

以手紙致啓上候然者「バルク」形「マリヤルズ」船靜渡證書ニ記名致シ右船賣拂代金ノ内右雜用引去リ別紙第一號ノ通シ、エ、フレッチェル社中ヨリ落手致シ且右船其日迄ノ費用ウォルシ、ホール社中ヘ相拂別紙第二號ノ通受取書取置殘金ハ「バルク形」(マリヤルス)船引受人ノ爲ニ香港上海銀行ヘ預置申候右預證書則別紙第三號ノ通ニ御坐候右ハ閣下ノ御望ニ任セ致處分候義ニ有之則拙者自ラ茲ニ記名致シ候

右可得御意如斯御坐候敬具

千八百七十三年第八月十一日

シ、イ、デロング

外務卿　副嶋種臣

外務少輔　上野景範

オウレリオ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ

閣下

（附屬書一）

C. E. De Long Esq.

Dr to the Undersigned

For 100 Inventories	1000
„ Coolie Hire discharging provisions	400
„ Advertising, Japan Herald, Gazette & Nishin Shinjishi, 2 Weeks	6000
„ Commission on $ 7250 at 3%	21750
Total	$ 29150

E & O E

Yokohama 11th August 1873

Received payment

C. A. Fletcher & Co.

Auctioneers

（右和譯文）

別紙第一號

シ、イ、デロング氏ヨリ下名ノ者ヘ可拂勘定

洋銀拾元	船中什物表數百枚印行料
同四元	食物陸揚日雇賃
同六十元	「ジヤッパン、ヘラルト」「ガゼット」日新貫事誌ニテ二週間普告ノ價
同貳百拾七元五拾錢	洋銀七千貳百五十元ノ三分ノ口錢
通計貳百九十壹元五十錢	

誤脫用拾之事

右之高正ニ落手候也

千八百七十三年八月十一日

糶賣人

エ、フレッチェル社中

（附屬書二）

Duplicate

Received from His Excellency C. E. De Long United States Minister the sum of Twenty Two Hundred Forty Five Dollars Twenty Two Cents Mixican being disbursements of the Peruvian Barque "Maria Luz" as per our account current.

Yokohama 11th August 1873.

Walsh Hall & Co.

$ 2245.22

（右和譯文）

別紙第二號

一貳千貳百四拾五元二十二錢

右者秘魯國「バルク」形「マリヤルズ」船ノ費用勘定トシテシ、イ、デロング氏ヨリ正ニ致落手候

千八百七十三年第八月十一日

於横濱

ウォルシ、ホール社中

（附屬書三）

Memorandum

From the
Hong Kong & Shanghai
Banking Corporation
Yokohama

To C. E. De Long
U. S. Minister

Dear Sir

I am in receipt of Messrs Walsh Hall & Co. Cheque for $ 4713.28 which I have placed in Current Deposit acc. under the name of "C. E. De Long in trust for the creditors of the Bark "Maria Luz"

Yours faithfully
J. G. Hodgson
acc Manager

（右和譯文）

別紙第三號

在横濱香港上海銀行社中ヨリ
米國公使シ、イ、デロング氏ヘノ覺書

一洋銀四千七百拾三元廿八錢
右者ウォルシ、ホール社中ヨリ證券ニテ受取「バルク」形「マリヤルズ」船引請人シ、イ、デロング氏ノ名ヲ以テ正ニ預リ申候入用ノ節ハ何時モ差上可申候也

社中總代
ゼ、ジ、ホッドソン

二二〇　八月二十日　副島外務卿ヨリ米國公使宛

「マリヤ、ルス」號賣却金處分濟ノ旨了承並ニ右盡力ニ對シ謝意表明ノ件

第六十四號本月十二日附貴翰致落手候然者「バルク」形「マリヤルズ」船賣渡證書ニ御記名相成右賣拂代金ノ内別紙受取書ノ通リ雜用引去リフレツチェル社中ヨリ受取幷其日迄ノ船費用ウォルシ、ホール社中ヘ拂入相成候受取書且殘金四千七百拾三元二十八錢ハ横濱ニ於テ香港上海銀行會社ヘ預置カレ右會社ヨリ預リ證書ノ寫供ニ御差越正ニ致落手候前條ノ義ハ千八百七十三年六月廿五日秘魯公使幷外務卿代理ト調印シタル約定書幷千八百七十三年七月十四日右兩名ヨリ閣下ヘ差進候書翰ニ隨ヒ全ク閣下御處分被成候義ニ有之候閣下此一件ニ付御煩勞被下候段今更ニ我政府ニ代リ拙者ヨリ厚ク感謝申入候敬具

明治六年八月二十日　外務卿　副島種臣

米國特派全權公使
シ、イ、デロング閣下

二二一　十月二十九日　杉浦權大内史ヨリ外務大丞宛

清秘兩國船艦又ハ人民來航ノ際ノ取扱方ニ關スル大藏省ヨリノ伺ニ關シ照會ノ件

附屬書　十月二十八日大隈大藏卿ヨリ岩倉右大臣宛
右伺書

明治六年十月廿九日

外務大少丞御中　杉浦權大内史

清國白露兩國船艦人民取扱の儀大藏省より別紙の通伺出候間及御問合候也

明治六年十月廿九日

（附屬書）

支那幷秘魯國取扱振の義に付伺

今般支那幷秘魯の兩國御條約御取結相成候趣に付ては收稅其他海關於て處分の方法未た何等の御達無之右は孰れとも御沙汰可相成筈には可有之候得共而後追々兩國の船艦進航又は人民來港致し候節目下處分の際差支候儀に付追て何分の御達有之候迄は先御條約濟外各國同樣の振合に照準諸般爲取扱置候樣可仕哉差向實地差支候間至急御沙汰御座候樣仕度此段奉窺候也

明治六年十月廿八日　大藏卿　大隈重信

右大臣　岩倉具視殿

二二二　十月三十一日　花房外務大丞ヨリ杉浦權大内史宛

清、秘兩國船艦又ハ人民來航ノ際ノ取扱方ニ關シ回答ノ件

（朱書）「乙第一千五百十一號　十月廿日達了」

杉浦權大内史殿　花房外務大丞

清國白露兩國船艦人民取扱振に付御問合の處白露假條約取結の義は本年八月廿五日附にて上申清國假條約は辛未七月廿九日交換にて副島大使本年七月廿六日歸朝復命の節本條約書差出候に付右條約に照準取扱候樣御指令相成可然義と存候尤白露船幷人民の義は各國同樣の振合に處分する事勿論に候得共支那船民は從來條約未濟國を取扱候振合に屬し居候故今度本條約等御取換相成候以上は彼より領事官派出可致處未其義不行屆當分日本地方官にて萬事條約を照し管轄致呉樣彼政府より我大使へ面談依賴相成居候に付其含を以て取扱可然事に候兩國條約書上木の分は追々出來次第御官へ差出し幷各府縣へも分布候積に有之候依て及回答候也

六年十月卅一日

二二三　十一月三十日　寺島外務卿ヨリ岩倉右大臣宛

花房外務大丞ヲ露國駐劄臨時代理公使ニ任命シ「マリヤ、ルス」號事件裁判委託ノ儀取扱ハシメタキ旨伺ノ件並ニ之ニ對スル右大臣決裁

附屬書一、露國駐劄臨時代理公使ニ任命ノ花房外務大丞ヘノ辭令

二、十一月　寺島外務卿ヨリ露國駐劄花房臨時代理公使宛達

「マリヤ、ルス」號事件露國皇帝ニ委託ノ儀取扱方達ノ件

三、寺島外務卿ヨリ露國外相宛書翰案

露國在勤花房一等書記官ヲ露國駐劄臨時代理公使ニ任命セル旨通知ノ件

四、露國駐劄臨時代理公使ヨリ露國外相宛書翰案

「マリヤ、ルス」號事件裁判ヲ露國皇帝ニ委託シタキ旨申入ノ件

外務大丞兼一等書記官花房義質以下魯國公使館在勤の輩支那在留魯國公使ウランカリー歸國の節同行致させ候はゝ都合可宜と存候然るにウランカリー儀一昨廿五日當地出帆香港に於て凡十四五日計滯在の趣に付右期に後れす花房義質以下派出相成候はゝ可然と存候因て全權公使派出迄の間同人可爲代理の旨別紙甲號幷秘魯國マルヤルズ船一件取扱乙號の通相達置同國外務卿へ差遣候書翰及同人より秘魯國マルヤルス船一件に付同卿へ差出候書面案相添此段申進候也

明治六年十一月廿七日

外務卿　寺島宗則

右大臣岩倉具視殿

（朱書）「伺之通　明治六年十二月二日　右大臣岩倉具視印」

（附屬書一）

甲號

外務大丞兼一等書記官　花房義質

魯國在留公使派出候迄可爲臨時代理公使事

年　月　日

外務卿　寺島宗則

（附屬書二）

乙號

臨時代理公使　花房義質

秘魯國マルヤルス船一件魯國皇帝陛下ニ依賴スル仲裁ノ儀可取扱事

明治六年十一月

外務卿　寺島宗則

（附屬書三）

丙號

我日本國

皇帝陛下今幸ニ其政府人民ト魯西亞全國

皇帝陛下ノ政府人民トノ間ニ存スル所ノ交誼ヲ益厚ク益親クセント祈望セラル、事爰ニ久シ是ニ於テ其最モ忠實英明ナル大臣ノ一人ヲシントヘートルスブルグ朝ノ特命全權公使ニ任ス然ルニ同氏ハ其使命ヲ奉シテ已ニ旅裝ヲ整ヘ將ニ發軔セントスルノ際忽然世ヲ去レリ

皇帝陛下更ニ新公使ヲ命スヘキモ其魯行必須ノ旅裝ヲ整備スルニ多少ノ時日ヲ要スルヲ察シ且斯ノ如クナル時ハシントペールルトルスブルグニ公使館ヲ設置スルノ期愈遷延セン事ヲ深ク歎カセラレ急ニ外務大丞花房義質氏ヲ發軔スヘキニ決セリ同氏ハ貴國在留日本公使館ノ一等書記官ニ選マレ深ク

皇帝陛下ノ信任ヲ享ク其才器ノ此任ニ當ルハ素ヨリ其代理公使ノ任ニ於ルモ亦然リ故ニ在魯國全權公使到着ノ日迄此職ヲ奉セシム花房義質氏謹テ此書ヲ殿下ニ呈セン依テ望ラクハ我

皇帝陛下ノ爲ニ同氏ノ殿下ニ禀達スル者アル時ハ悉ク其言ヲ篤信セラレン事ヲ且魯西亞帝國ノ康寧繁榮ト魯西亞國

皇帝陛下ノ盛福ヲ祝シ併セテ余カ殿下ニ對シ恭敬ノ意ヲ表スルニ當リテハ殊ニ之ヲ信セラレン事ヲ希フ

明治六年　月　日

日本國

外務卿　寺島宗則

魯西亞全國皇帝陛下ノ太政大臣兼外務卿

アレキサンドル、ミハイロウイチ、ゴルチヤコフ殿下

（附屬書四）

丁號

日本

皇帝陛下ノ政府幷秘魯共和國ノ政府「マリヤルズ」船一件ニ付兩政府ノ間ニ起レル差縛ヲ全魯西亞國

皇帝陛下ノ中裁ニ任セ宜ク秘魯國要求ノ當否ヲ裁シ其要求若シ果シテ正當ナルニ於テハ我日本國ヨリ何等ノ償補ヲ爲ス可キ哉ヲ決裁セラレン事ヲ依托スベキ旨明治六年六月二十五日則魯曆千八百七十三年六月十三日東京ニテ記名シタル約書ヲ以テ各同意約諾セリ則右約書ノ寫ヲ今爰ニ附添ス

且兩國共其親友タル貴國

皇帝陛下ノ公明正大ナルハ固ヨリ信スル所ナレハ各自親ク貴國

皇帝陛下ニ倚賴セン事ヲ合同決定シタリ故ニ若シ

陛下幸ニ中裁者ト爲リ裁斷セラルヽニ於テハ其裁斷ハ完ク結局ノ者トシ毫頭異議ナク必ス速ニ遵奉スヘキ旨ヲモ約諾セリ依テ我

皇帝陛下ノ代理公使タル拙者日本ノ方ニテ約諾シタル決議ノ趣ヲ貴國

皇帝陛下ニ告ケ宜シク右中裁ヲ許諾セラレン事ヲ我

皇帝陛下切ニ懇禱スル趣ヲ報スヘキ旨ヲ命セラレタリ故ニ冀クハ殿下此書ヲ貴國

皇帝陛下ニ呈シ前條期望スル所ノ中裁ヲ許諾セラルヽ哉否拙者迄告諭アラン事ヲ

明治六年　月　日

日本皇帝陛下ノ代理公使

敬具

魯西亞全國皇帝陛下太政大臣兼外務卿

アレキサンドル、ミハイロウイチ、ゴルチヤコフ殿下

五五二

二二四　十二月日缺　露國駐劄花房臨時代理公使ヨリ寺島外務卿宛

「マリヤ、ルス」號事件裁判ヲ露國皇帝ニ委託ノ儀取扱方ニ關スル心得ノ條々伺ノ件竝ニ之ニ對スル外務卿決裁

義質在魯京臨時代理公使としてマリヤルヅ一件も取扱候樣蒙命候に付ては左の條々兼て伺置度候條夫々御指揮奉願候

第一着

外務卿或は其代任たる人に面晤し小官其事を任せられたる旨を述秘魯政府より既に申入たる哉否を聞若し秘魯よりも代人差立たる時はその者とも打合同時に書翰にて申入候樣可致積り

右は七十四年一月二月の間に可有之

第二着

右承諾の返事有之候はゝ直に電報可仕候

但約書第四條に據るに此電報到着後六ケ月以内即七十四年五六月迄に秘魯國御國雙方とも魯國に送るへき書類等取揃互に取替わせなるへき筈なり右は外務省於て取扱の事也

第三着

諸證據書類等御送致相成候はゝ魯政府へ差出し考案に備ふへし

但此書類は約書第二條に據るに魯皇帝承諾の日より十二月内に送るとあり即七十四年八九月迄に差立られ可然割なり尤此遲速に付別に機會の宜きものあらば其節電報致すへき心得尤其事理を甲辨して書外の條理を述ふへきため有力の代辨者有用なる時は預め可申立に付右書類御差送の節現情熟知の法律家御差向相成度萬一別に御差向の義差支候節は於彼地目的相同しきものを雇ひ其用に充候樣可致

右廉々は取扱の間事々魯政府は素より秘魯代人有之候はゝ其方えも打合取計候心得に候

明治六年十二月

在魯臨時代理公使　花房義質

外務卿　寺島宗則殿

申立の通㊞

事項一四　高島炭坑回收ニ關スル件

〔第五卷事項二二參照〕

二二五　一月三十日　宮本外務大丞ヨリ工部省宛

英米公使等ト談判ノ必要上高島炭坑手續取調書差越方等依賴ノ件

達ス

工部省御中　　宮本外務大丞

高島石炭坑の儀に付英米公使幷和蘭商社代人ボウトインとも本日出省外務卿引合の上來二月三日第十時より於本省談判相始候約に付當日吉井權頭殿幷に右に御關係の官員右刻限早め御出省可被成且拙者より前同人へ御約束致置候右炭坑手續は明三十一日午後二三字頃迄に御差越可被下候也

一月三十日

二二六　一月三十一日　吉井鑛山權頭ヨリ宮本外務大丞宛

高島炭坑手續取調書送付ノ件

別屬書一、右高島炭坑手續取調書

二、明治五年七月佐賀縣貫屬松村源藏申口書

三、明治五年七月佐賀縣貫屬石橋家九郎申口書

昨日御談有之候高島石炭山手續取調別紙差進申候御落手有之度候也

第一月卅一日

宮本外務大丞殿　　吉井鑛山權頭

（附屬書一）

高島は從來佐賀藩家老深堀何某の領地にて從前炭坑小稼人有之候處佐賀本藩より一年稼の目論見を起し器械等注文相成居候半英ガラバ商社と組合の相談に押移り候事にて其時に當ガラバは勿論同人社中も炭山一見の上元費貳三萬兩に不過して有益に可相成樣見込み其元費も彼一手より無利足

にて繰出し猶別廉に貳拾萬兩程の用金佐賀藩え可取替旨を以て切に炭坑組合の義渴望熟談致し來候末定約に及候由

一定約は慶應四戊辰閏四月長崎にて取結へり

此時松林源藏は守約行事の任を受るに因て調印いたし候得共其結約を許可するの權は羽室雷助に在りし故同人奥印せし由松林申口第一條にあり右定約後兎角有益に不運失費不少候故ガラバ社中從前の定約にては難澁の由を以て改約の義追々松林源藏え歎談いたし來候義に有之其要領は年限を繼き噸稅を減するの廉に候

一明治四年六月松林源藏一紙の追約を結ひ添たり右は年限を辰閏四月より七ケ年半午正月より七ケ年と改定する事を證せり

但此追約は佐賀藩まては承知いたし居候得共政府の筋へ伺候義は無之且松林一名の結約にて別に同藩中奥印人も無之候此廉工部省より和談の場に於ては默許の姿に相成居候事

一前同年松林より改定約の條紙ガラバに遣し候義有之候得共調印に不至して止む

其手續は松林申口第三條に在り

一當二月石橋家九郎炭坑一件引合人と相成候以來松林源藏は炭坑關係無之間石橋申口を見るべし

一當二月以來石橋家九郎出府いたしボートエンと改約の相談下組有之候得共官許を不得して止む

其趣意は內債は鍋島にて引請外債は和蘭商社に歸し年限を此時より向渾拾年餘にいたし稼方は和蘭商社一手に任し鍋島家は賣炭代價一割五分の取切りに相成候積の仕組なり

一當五月工部省にて結末を付候積りにて鑛山師長ゴットフレー長崎に出張しガラバ社中關係人と引合改約起草いたし候得共見合に相成候

一前同時にガラバ松林源藏に迫り更に延期の約定いたし奥候樣談込み結局延期周施可致旨私證遣し候義有之候松林源藏申口第四條にあり

但是は松林源藏高島炭坑關係相離れ候後の義にて全く無用に屬し候ガラバ方よりも此事は曾て論發不致候

一當七月吉井鑛山權頭長崎出張御雇テビソンを以て引合いたし先つ定約の通り難取續候はゝ稼方取止め可申段を以て談判の初步といたし候處從前噸稅を減し年限を繼候廉はボ

ードエンより鍋島正四位殿えも親話し何れも承知可相成様子ゆへ夫のみを見當に是迄大金も一手にて繰出し事業も心配罷在候事に候今日に至り取止の義承諾難致旨申述候

此事鍋島正四位殿へ相話候段は虚妄なり松林申口第五條にあり然れとも佐賀藩に於て彼此を決せずして時月を移し候事と相見候此廉は外國人方議論一理あり

右に付和談は容易に難決被存候間噸税丈は相當に減却し定約面の廉々不取締の義を分明にし次に從前先方に於て定約外の口錢等勘定に相立居候間是等は禁ずべきを禁し許すへきを許候積り夫々當方に於て決意掛合の結局はデビソンよりハンドルボットに差送候書面に相見候猶勘定向の義は同時に御雇テルボットを以て先方の帳面檢査いたし改正せし算當書あり

（附屬書二）

（朱書）「壬申七月於長崎吉井鑛山權頭并ニ御雇デビソン取調」

松林公留申口

一松林ハ定約ヲ結ヒ或ハ是ヲ變換スルノ權ナシ佐賀ニ伺ヒ重役ノ命ヲ奉シテ事ヲ行ヘルノミ定約ノ時ハ羽室雷助長崎ニ出張シ奥印セリ

一カラハ談ニ因テ去秋延期ノ儀ニ付松林限リノ書案「ヒコ」迄遣シ候儀有之右ハ年限中ガラバ諸事滿足ニ爲運候ハヽ期限ノ時ニ至ヲ（マヽ）延期ノ儀ハ松林周旋可致旨ヲ述候而已

一一昨午年ガラバ定約一變不致候テハ難取續ヨシ再三談判ニテ松林東京ニ罷越其頃佐賀重役在京ニ候間廉々伺ヒ歸崎候處カラハ商社沒滅致シ候ニ付趣向相違シ又々佐賀ニ罷越再ヒ在國ノ重役ニ伺ヒ昨春國役兩人ト長崎ニ出張シ再定約取結候積リ文案遣シ候得共ボートエン歸洋中ニテ決着不致此方ニ於テモ東京外務省エ相伺候處難被閉濟因テ此事モ調印ニ不至シテ廢ス

一當年ゴツドフレー長崎出張中ガラハ松林ニ面談イタシ度儀有之由紙面差送リ其晩ニ罷越延期ノ儀ハ無論ト存シ兼テ銀主共エモ相話シ居候處今日銀主共ニ被問詰確證無之、別シテアデリヤンニ被罵候旨ヲ以テ歎談シ是非確證遣シ候様差迫リ候ニ付去秋「ヒコ」迄遣シ候文意ヲ以テ印書相渡候其時古賀ハ參合セ居綾部ハ在國ニ候間三名ヲ記シ在席二名調印致シ候尤ガラバモ右書中ニ唯周旋可致ト有之ノミ延期契約ニ無之段赤面憤怒候得共遂ニ其印書取歸候由且日附去秋松林在職ノ時ニ認候姿ニ致シ置候旨

一鍋島當君午正月西洋行ノ積ニテ長崎ニ參リ其後五月再ヒ長崎ニ參リ高嶋ニモ被罷越候由八月ニハ松林宅ニ御入有之其時ボードエン罷越已ニ公ハ御歸館ニ臨ミ候折柄切ニ御逢相願候此時松林ハ次ノ間ニ差控エ居候處別ニ炭坑ノ談話ハ無之老公東京ニテ御死去相成兄ボードエン御療治致シ候儀モ有之ニ付悔ヲ申上候爲メ罷越候ニ相聞エ候此外公和蘭商社ノ人ト御面會相成候儀無之

一カラハノ時ニハ唯二度勘定書ヲ松林ニ送リシノミ初度ノ勘定ハ七十年三月第一日附ケ次ハ同年六月第一日附ナリ和蘭商社ニ至テハ追々勘定書差送來候

此等ノ勘定面ハ一度モ此方ヨリ承諾之旨相答候儀無之初發カラハヨリノ勘定差越候節利足ヲ加ヘ口錢ヲ取候廉ハ、不條理ニ候間差除候様談判致シ有之候得共未決ニ打遇（マヽ）居候

（附屬書三）

（朱書）「壬申七月於長崎吉井鑛山權頭并ニ御雇デビソン取調」

石橋申口

一石橋家九郎高島一件聞掛候義ハ昨冬以來ノ事ニテ初ハ松林ト一同取扱候得共改テ石橋一人ノ取扱ニ相成候義ノ掛合ハ當二月初旬石橋ガラバ方ニ罷越夫ヨリ同道出嶋ニ參リバンドルボットニ對面日本人ニ於テハ高嶋ノ儀取引人ハ以來我也其方ニ於テハ誰人ナルベキ哉問候處バンドルボット并ガラバ兩人共其人ハボードエンニ有之候旨披露致シ候其節「ボードエン」ハ他港ニ有之候由

二二七　二月三日　副島外務卿等ト英、蘭各公使トノ對話書

高島炭坑ノ處置ニ關スル件

明治六年二月三日於外務省副島外務卿上野外務少輔吉井鑛山權頭英蘭兩公使等ヘ引合

高島石炭坑の事

石炭坑の儀は貴政府於て廢藩置縣に付ては元佐賀藩（現代任公使テロシング）にてカラハと被取結し條約を御引受漸次御所置相成候儀と存候外國公使等決して無理なる事は不申上候間條約を結候義も双方都合宜敷様相願申度候

藩の約を其儘履行致候はゝ固より議論も無之候へ共改定せんと欲するか又追加せんとするに因り遂に論に渉り候儀に

有之候
吉井藩の約定あれはとそ今日談判及ひ候次第に有之候
(關公使)前條約を守り候は勿論に候へ共地中の義に付豫め察洞する不克堀發に隨ひ追々見込も因り出る處ありと考候
(肥)双方共固より利益を得んと欲する爲に起したる工業なれと遂に損失に及へり
(關公使)肥前藩とコロールと半分つゝ出金の約定なれとも堀坑の入費凡二十三萬弗の内八千弗肥前より差出コロール商社より其不足を差出せり
炭坑に二あり一坑は堀るとも多分の炭を出さす一坑は堀得候はゝ十分の利益を得へきなれとも肥前より出金無之費用續かさる故に四ヶ年延引にて益となるへきが却て損となり候儀に有之候コロール分散後蘭商社にて助力の上坑業引受出金盡力いたし候は將來の利益を要して也
器械方の見込にては是迄通にて坑を堀らは漸くにして入費を補のみにて別に利益は見へ間敷候
兩坑の内一坑を堀るときは必益と見込候間佐賀藩との前約より期限を延しなば蘭商社方にて出金工業を仕遂申度候且從前一噸に付一弗の税を納め來り候へ共右にては不都合に付利益の内五分の三を佐賀藩にて取り二をガラバ方にて取るの事に致度候
爾後ホードイン一旦歸國に付此談判を延引したれ共尚又御國へ立戻り長崎へ着の處右談判は纏申間敷と横濱へ相越談判可致の際廢藩置縣の御沙汰あり依て東京へ立出松林石橋等と談判を重ね候へ共結局同人等には其權無之故此事件に付有權の者を可遣旨を工部省へ口上にて申立然るにホートイン同省へ出頭可致旨達に付出省候處吉井鑛山權頭而已にて談判に不相成空敷立歸りたり又三日程を過きコットフハイ氏其實地探檢に付て尚談判可及と同意し同氏高島坑へ被參候間十分有權の者と見做したり
英蘭兩公使及ホートイン器械方の夫々見込の趣を以て申上候間閣下方御見廉相伺候上決議いたし度候
(肥)其見込承り可申候
(關公使)一の坑を二百五十フートも堀込されは炭部に不達此入費凡十七八萬弗も掛り可申右は其職方の見込に付必す利益に可至又其上二百フート深堀すれは水を迸出し又一の坑に達し都合四百五十フートを堀るには凡三十一萬弗を費すへし

右は先約にては工業被成期延に非されは不克
一英國には石炭山多分に有之故右を堀る例に準して業を起すへし
右法に因れは約定調印の日より二十年間の工業を要す都合により廢業するならは一ヶ年前に報知すへし
英國には石炭を堀る税なし賣高にて相當の分割を納むる方法に付況や御國にては時の相場違ある故賣上高に因て其六分を納むへし
英國にては石炭坑を見出す共器械其外諸入費を引去り全くの利益を得るに至らされは分割を不收且石炭山多分に有之故一旦用ひし器械も又外に用ゆる事もあるへし御國にては然す
(肥)最初佐賀藩との約定第一條に無據事あるときは云々とあり同藩も自有の坑山には無之人民より多分を金を以て買取り候譯にて敢てカラハ而已の損失に無之双方の不幸に有之且最初確乎たる目的も無之浮雲を攫する如き起業なりと被存候
(關公使)双方の申立を折衷の上宜敷御所置可被下候全體一方は工部省一方はガラハの訴訟に付御省へ申立候ては御味方へ對するの論なれ共公平に御決裁を仰き甲候
玆に一事覺る儀あり石炭の地所は貴政府の御所有なれは器械置場波戸場等は可然御許可被下候尤天災を除くの外器械置場を我方にて設備し滿期に至り貴方へ御引渡の時迄損傷無之樣に任ずへし
一蘭商社の考案には一年五分の原價を引去り若二十年の許可あらは機械は無代にて貴政府の所有となるへし
一六ヶ月毎に入費を正算し會計の明瞭なる樣可致候
一貴政府より檢官來らは何時たりとも無差支其點査を受くへし
一石炭を運送するに日本船へ積込候ては碎散し易く候に付外國船にて直に搬運を致度候事
右にて午餐
一週間の内に英蘭何れも其次第を精署し公使の手を經て書面可差出候間閣下方宜敷御判決相願候
畢

二二八　九月二十六日　上野外務少輔ヨリ米國公使宛

高島炭坑回收ノ儀和蘭商社代人「ボードイン」ニ

通達方依頼ノ件

「明治六年九月廿六日
米國公使ヘノ電報」

總ての勘定を決算し且プラント及びストックを買上高島炭坑堀稼の免狀を消滅するため四十萬元をゴロウル社中の分散せる身代引受人に渡さんと欲する旨をポウトウキン氏に通達し給ふへし此外に可然取纏方なければ此事右引受人にて承諾すへき哉否ポウトウキン氏の考へ承知いたし度右引受人にて此事承引いたし候はゝ右金高は直に拂ふへし

千八百七十三年九月廿六日於東京

上野

シ、イ、デロング貴下

三三九　九月廿六日　上野外務少輔ヨリ米國公使宛

高島炭坑回收示談金ノ儀ニ關シ異議申越ノ件

附記　和蘭商社代人「ボードイン」ノ右回收示談金ニ關スル意見書

My dear Sir,

I am very thankful to you for your very kind telegram.

Relative to the Takashima Colliery matter permit me in reply to state. I do not in the least doubt your honest desire to settle this affair and to settle it reasonable and right but I consider that you could not have understood the case to have made the offer you have.

You admit your liability to pay the debt of Hizen to Glover & Co. and the debt you owe us on the working account in cash.

The debt to Glover of Hizen is at least

$ 100,000.00

The half of working act that you owe Trustees is at least 75,000.00

$ 175,000.00

One hundred and seventy five thousand dollars in cash you are then to pay us as soon as Mr. Talbot return, whether we compromise this business or not. This leases Two Hundred and Twenty five thousand which you offer us for our half of the plant and our three and one half years' remaining lease. One half of the plant is worth at least Seventy Five Thousand Dollars. This leases One hundred and Fifty Thousand Dollars which you expect us to receive for surrending a Lease which by your own showing is worth in 3½ years to us Seven Hundred and Fifty Thousand Dollars.

Such an offer you must admit is not a business proposal in any sense.

I beg you to consider this reply and as soon as possible I will meet you and we will discuss the matrer further and I trust be able to agree on some settlement or an arbitration.

Yours very truly,

DE LONG.

H. E.

Uyeno Kagenori,

Foreign Office Yedo.

（右和譯文）

「六年九月
米公使ヨリノ來翰」

御厚意の電報に感謝いたし候

高島炭坑一件に付御回答旁左に申述候

此一件を正當に御取纏被成度との御思召は拙者におゐて聊疑ひ不申候得共此一件能く御了解無之義と存候

肥前より

ゴロウル社中への負債并炭坑堀稼入費の勘定の負債辨償方御引受の義既に御承引相成候則ゴロウル氏え肥前の負債十萬元并身代引受人に可拂堀稼入費の勘定半高七萬五千元なり

此十七萬五千元は此一件の和談の運ひに不拘タルボット氏歸着次第現金にて御拂可相成高なり

器械の半高及ひ殘り半ヶ年の免狀のために御渡し可相成金高全く二十貳萬五千元に可相成器械の半高は少くとも七萬五千元丈けのものに有之免狀殘期限三ヶ年半を七十五萬元と御見積りに相成候其免狀を消滅のため御渡可相成金高十五萬元に相成申候折合を附くへき企に無之義は御同意可有之候

此返書御勘考被下度可成丈速に御面晤を期し此一件を尚御談判可致候其節何とか纏りを附け候歟又は中立裁判に任せ候歟何れにも取極め度存候

デロング

外務省にて

上野景範閣下

陸　高島炭坑回收ノ示談金ニ關スル和蘭商社代人「ギードイン」ノ意見書左ニ附記ス

(附記)

The working account of the Takasima Mine shewed under 30 June 1873 a balance debt of about $ 135,000. of which the Government must pay its half share viz:

$ 67,000 met.

The old and new accounts between Saga and Glover & Co. will shew after examination that the Government will have to pay for settling those amounts, a sum of about—

$ 85,000. and besides it will have to pay a promissorynote of the Saga Han in favour of Glover & Co. and amounting to—

$ 48,611
$ 200,611 met

on which interest is due since 4 years.

Note. It was formerly intended that the royalty due to Hizen would be deducted from the promissory note.

In a printed report I found that the evaluation under 30th April 1873 of the plant &c. at Takasima drawn up by Mr. Potter amounts to $ 280,000.

Taking into considerations the improvements made since we may evaluate said plants &c. to represent now $ 300,000.

If the lease did expire to day and that we had to settle with the Government, it would have to pay to the estate its half share working account.

1. $ 67,000
   Balance of accounts due to Glover & Co.
2. $ 85,000
   Amount of promissory note.
3. $ 48,611
   $ 200,611

besides, a fair price for and share in the plant and I think it reasonable to adopt for this a figure of

$ 150,000
350,611

But the lease does not expire to day, we have still 3 years and a half to work and according to the statement made by Mr. Wooyeno the estate may expect a profit over—

$ 700,000
1,050,611

Consequently the estate by working the mine during next 3½ years would expect to be made by the Government and from profits resulting from the coal mine a sum shewing one million of dollars and more—

For selling all this the Government offers $ 400,000—

being about 40% of what the estate could expect if the mine is worked under a fair and reasonable contract.

Mr. Dickens has stated to me that a firm in bankruptcy can not claim its discharge from the creditors if it can offer a payment of 50 cents in the dollar.

Under the most favorable circumstance, the trustee of Glover & Co. will not be able to offer 50% by what is offered by the Government as a final settlement of the business.

I am prepared to make a sacrifice if necessary in order to settle the business as well with all creditors as with the Government, must be more liberal after being acquainted with the foregoing figures.

(右和譯文)

デロング氏を經由してボウトウキン氏より差出す

高島炭坑堀稼勘定面にては千八百七十三年第六月卅日迄大約十三萬五千元の負債有之右金の半高則六萬七千元を日本政府より拂わざるを得す

佐賀とゴロウル社中の新古勘定取調の上政府より可拂高大約八萬五千元其他ゴロウル社中に拂ふへき佐賀藩の證券四萬八千六百十一元都合二十萬六百十一元なり此高に四ヶ年以來の利子を加へ拂ふへし

但し肥前に納むへき稅銀は右證券より引去る積に有之

候

ボットル氏にて千八百七十三年第四月卅日迄高島に在るブランド等價を附けし金高廿八萬元たる事を出版せる報告書にて知れり

右ブラント等の價を附けし後修整したるを以て三十萬元となるなり

免狀今日を以て滿期となし且政府と此一件を取纏むるには政府よりゴロウル社中の身代に拂ふへき分

一炭抗堀稼勘定の半高六萬七千元

二ゴロウル社中に拂ふへき勘定殘八萬五千元

三證券面の金高四萬八千六百十一元

合廿萬六百十一元也

右の外にブラントの代價十五萬元と見積り至當と被存候

〆三十五萬〇六百十一元也

併し免狀の期本日終らさる時は尚三ヶ年半の期殘れり上野氏の陳述に據れはゴロウル社中の身代に七十萬元餘の利益あるへし

惣計百五萬〇六百十一元

依之向三ヶ年半の間政府にて堀稼く時は炭坑より生する利益は百萬元餘になるへし

右を都て買上けんため政府より四十萬元を拂わんと云へり炭坑を正當の約定に據り堀稼く時はゴロウル社中の身代にて得らるべき金高の凡四割に當るへし

分散せる商社より負債高の五割を拂わざれば負債決算の事を債主に求むる事能わさる旨をジツケンス氏より聞けり

此好機會に當てゴロウル社中の身代引受人此一件落着のため政府より拂わんとする金高を以て負債高の五割を債主に拂ふ事出來ざるへし

此一件を取纏め債主の方を片付るに不得止時は余におゐて勘辨可致積に候得共政府におゐて前條の算計を承知の上は尚公平にあらさるを得す

二三〇　十一月五日　英、墨各公使ヨリ寺島外務卿宛

高島炭坑回收ニ關スル我方ノ申出了承ノ旨申越ノ件

British Legation Japan,

November 5 1873.

His Excellency
Terashima Munenori,
H.I.J.M.'s Minister for Foreign Affairs.

Sir,

The undersigned on behalf of the estate of Glover & Co. in liquidation beg leave to advise you that we accept the offer submitted by the Japanese Government to us of the sum of four hundred thousand dollars (Mexican) payable in cash on the first day of January next, in consideration of the cancellation and surrender to your government on that date of the lease of the Takashima mining property together with a transfer to your government of all plant and machinery upon the mine and all other property appertaining thereto. The Japanese Government on the other hand agreeing to assume the execution of all existing contracts made on behalf of the mine or arising out of the working of the same.

Both the Japanese Government and the trustees of the estate of Glover & Co., on said date to execute and deliver to each other full and complete releases and acquittances from and on accounts of all matters of claims or demands existing between them to that date.

In submitting the acceptance of the above terms to Your Excellency the undersigned take this opportunity of renewing their assurances of their most distinguished consideration.

HARRY S. PARKES,
H.B.M'S Envoy Extraordinary and
Minister Plenipotentiary.
C.E. DE LONG,
in charge of affairs for H.
Majesty in Japan.

（右和譯文）

分産セル「グロウヰル」社中ノ保管人ニ代テ閣下ヘ左ノ事ヲ報告セント欲ス則來ル第一月第一日ニハ高島炭鑛ノ免狀廢止且右免狀竝右礦所屬ノ諸道具諸器械等悉皆同社ヨリ貴政府ヘ讓渡ニ由テ來ル第一月第一日正金ヲ以テ貴政府ヨリ拂ハルベキ（墨西可）四十萬弗ノ金額ニ付御申越ノ趣拙者共ニ於テ承諾ス

又貴政府ニ於テハ右炭礦ニ關係セル現今ノ諸條約及ヒ右炭礦工作一條ヨリ起ル處ノ諸條約ヲ施行スル事ヲ約定ス

仍テ貴政府竝「グロウヰル」社中ノ保管人等ハ前顯承諾ノ月日ニ至レバ此日迄雙方ノ間ニ存在セル諸要求ノ事件ヲ盡ク落着セシムル旨ノ證書ヲ互ニ交付スベキ事ヲ約定ス

前顯約定ノ承諾ヲ閣下ニ陳シ併テ下名至敬ノ恭賀ヲ新ニス

一千八百七十三年十一月五日在日本英國公使館ニ於テ

大貌利顛國特命全權公使

ハルヱス、パルケス手記

和蘭國代理公使

シ、イ、デロング手記

寺島外務卿閣下

二三二　十一月十七日　上野外務少輔ヨリ英、蘭各公使宛

高島炭坑回收ニ伴フ處置ニ關シ通告ノ件

花房公の命により本日宿直竹内より十一月十六日達済

千八百七十三年第十一月五日附貴翰落手致候然は石炭坑并其堀方の儀に付取結たる現在の約定を引受候趣は日本政府の趣意に無之拙者右條約引受候趣は決て陳述不致單に洋銀四十萬弗を相拂高島坑免許を廢止且右炭坑の權理利益を始め高島長崎に在る貯品器具家屋機械其他の所有品を捨て又肥前の證文且附屬の證書（機械等に關するもの）は勿論坑業に關する諸勘定并に訴訟等決算落着の爲め來年一月一日より右石炭坑并其所有物を工部省鑛山寮に引渡し右一月以來堀工の爲差支無之樣則方今堀方致居候同樣の方法便利を以後來堀方出來候樣注意堀工相働き千八百七十三年第十二月三十一日前賣捌けさる石炭は政府の所有物となし無代にて政府へ相渡し可申候其他右石炭坑に渉る別廉の訴訟ありて政府の分局を經て願出しものも有之則旅費或は法律家を雇入るゝ如き工部省の爲に相起りたる入費且石炭坑より可仕拂ものとして引請人より拂置たる入費は右洋銀四十萬弗の内を以引去可申候

十一月五日附書翰に陳述する現今の約定書は日本政府にて相調其内若干は採用し得へきものなる哉報知可致候へとも當時の處にては右如何可有之哉相分り不申候

右可得貴意如此候敬具

明治六年十一月十六日

外務少輔　上野景範

英國特派全權公使

サーハルリーエスパルクス閣下

和蘭國代任公使

シイデ　ロング閣下

本文加筆の通り相成り十一月十七日引替進す

註　本號文書ハ右文末ノ註記ニ云フ如ク加筆ノ上十六日達ノモノト引替十七日進達セラレタルモノト認メラルルヲ以テ十七日附トセリ

二三三　十一月二十八日　上野外務少輔ヨリ英國公使館通譯官兼譯官宛

高島炭坑回收示談金ヨリ控除スヘキ金額ノ勘定書送付ノ件

附屬書　右高島炭坑回收示談金ヨリ控除スヘキ金額勘定書寫

附記　十一月二十六日工部省雇「テルボット」ノ高島炭坑回收示談金ヨリ控除スヘキ金額ニ關スル覺書

十一月廿八日達濟

以内狀致啓上候然高島礦山一件に付過日我政府より相拂んと企てし四拾萬弗の金高より引去べき別紙の通の勘定書落手致し候間貴公使閣下へ御進達有之度此段得貴意候拜具

明治六年十一月廿八日

上野景範

ドブルユー、ジ、アストン貴下

（附屬書）

「グロウル」社中ノ身代引受人ヘ對シタル小山ノ要求高ニ付「タルボット」氏ノ勘定書

但シ千八百七十三年九月卅日迄ノ仕上ニテ日附マデノ利息一ケ年壹割五分ノ割合

註一、此ノ勘定書ハ概算ノミ收錄シ其ノ細目ハ省略セリ但シ下ケ札ハ之ヲ採レリ

（下ケ札）第一號小山ノ訴訟ハ分散前ノ事ナレバ分散法ノ處分ヲ受ル事ニ十二月廿四日上野少輔英公使ヱ引合ノ節決定シタレバ此目錄中ヨリ除キタリ

諸桁概算但利足共	兩		弗	
第一　石炭仕送代殘金	七三六四	一一		
第二　石炭貸附同斷				
第三　石炭二千六百五拾担堀立代金	六三〇七〇		五七六三	六八
第四　償金	一二三七	五〇		
第五　波戸場屋舍其外代金	七六〇三	一四		
第六　人足賃幷ニ諸入費	二七四一	四七		
	一九五七六	九二	五七六三	六八

諸桁概算但利息ハ追テ取極ベキ分

	兩		弗	
第七　手當金	三七四六	六三		
作工並ニ修繕料	一五八六	六二		
合	二四九一〇	一七	五七六三	六八

（原註）註　右勘定ハ小山ノ手ニテ仕上タル勘定書ノ譯文ヨリ取調タル者ナレバ誤脱ノ廉々ハ之ヲ改正スベキナリ

千八百七十三年九月卅日以來利ヲ附ベキジョーセフ、ヒコ氏ノ要求高			二〇三〇	六二
千八百七十三年九月卅日以來利ヲ附ベキ松林氏ノ要求高			一八一一	七四二
デキツトソン並ニタルボツト兩氏ノ諸入費並ニ謝金高	二四九一〇	一七	三一五九一	五六七九 二二五〇
外ニ吉井、ゴツトフレイ兩氏ノ諸入費アリ追テ仕上ノ上加入スベシ				

此勘定書ニ依レバ四十萬弗ノ内ヨリ引去ベキ總高ハ凡五萬六千二百五拾弗許ナルベシ

（弗五六二五〇）

註三、右附屬書原文ハ元來左ニ附記スル工部省雇「テルボット」ノ覺書ノ別紙ニシテ更ニ「アストン」宛廻送セラレタルモノト認メラル

（附記）

Copy　　Yokohama, 26 November 1873.

Sir,

The accompanying form shews particulars of items to be charged to the account of the Takasima Mine amounting to Rios 24910.17 and dollars 31591.22. The sums as given are subject to some further charges for interest from 30th September last or earlier dates to time of payment.

1st. Concerning Mr. Koyama's claim (a copy of whose account is enlosed) the Trustee stated that the coal lent by Mr. Koyama to the Colliery was substantially correct but that the understanding was that Mr. Koyama should repay himself by taking away the quantity due him at any time he wished. The trustee declines to recognise the claim in money and also declines the acceptance of the interest charged.

2nd. The charges for raising 2650 piculs coal were stated to be correct by Mr. Glover.

3rd. The indemnification for Hyakumazaki Mine is stated to be agreed to in writing.

4th. Indemnification for losses etc. caused by the rioters the trustee declines to recognize on the ground that such claims should be made to the Foreign Office and not upon the Colliery.

長崎千八百七十三年十月二十九日

高島石炭坑

石炭坑ヨリ取立ベキ諸仕拂金並ニ諸入費

註二、此ノ勘定書ハ概算ノミ收錄シ其ノ細目ハ省略セリ但省略部分ノ原註並ニ下ケ札ハ之ヲ採レリ

（原註）註　小山、松林、ヒコ、三氏ノ要求高ヘハ千八百七十三年九月三十日ヨリ金子拂渡日迄ノ利息ヲ附ケ、デキツトソン、タルボツト兩氏ノ諸入費ヘハ諸向ニ金子拂渡ノ日ヨリ落着ノ日迄ノ利息ヲ附ベキ事

（下ケ札）デウキソン氏タルボツト氏トノ諸入費幷謝金及ヒハンナン氏出席手當等ハ去十二月廿四日英公使上野少輔ト對話ノ節訴訟目錄ノ内ヨリ取除ク事ニ決定セリ

概算

	兩		弗	
千八百七十三年九月卅日以來利ヲ附ベキ小山氏ノ要求高	二四九一〇	一七	五七六三	六八

5th. The claim for piers, houses etc. is disputed by the Trustee on the ground that they have not been taken over by the Colliery and still remain the property of Koyama.

6th. The items for labour, drainage etc. are disputed on the ground that all such accounts were very regularly settled, and if these were not treated in the same manner, the items must be those disputed by Mr. Potter.

Mr. Davidson having had a relapse is unable to leave his room today and has deputed me to send up these memoranda.

I am,

Sir,

Your obedient servant,

W.H. TALBOT.

（右和譯文）

「工部省（案書）ヨリ來

明治六年十一月廿六日附　但別紙箇條書ハ十一月廿八日英アストンヘ廻送

工部省ヨリ廻送」

貳萬四千九百拾兩拾七錢及ひ三萬千五百九拾壹弗貳拾貳錢

の高に及へる高島石炭坑の勘定として可取立箇條は別紙に委細相示し候右金高には昨年九月三十日或は其前より拂濟迄の利息を別に可被拂に候

第一條

小山氏訴訟に付（同人勘定書の儀は別紙にあり）跡引受人の申立に同氏より石炭坑に石炭借渡し候儀は確然相違無之候併同氏勝手次第何時たりとも其石炭の高を受取るへき積り也との儀に有之候由依之金子にて返却可致との訴訟は引受人承引不致且右に利足を相拂候儀も同人不承知に候

第二條

石炭貳千六百五拾擔堀出しの入費は相違無之とグロウル氏申立候

第三條

ヒャクマザキ石炭坑償却の儀は書面を以て結約可致と申述有之候

第四條

亂暴人の釀せる損害等を償却するは引受人不承知に候其故は斯の如き儀は外務省へ可訴事にして石炭坑に關せざれはなり

第五條

木柱及家屋等の訴訟は引受人之に反論す右は石炭坑にて不引取依然小山氏の所有物と相成居るを以なり

第六條

工業及ひ水拔等の箇條は之に反論す其故は右勘定は悉く正に相濟候に付若勘定不相濟候はゝ右個條はポットル氏の反論すへきものなるべし

ダウイッドソン氏病氣再發致し今日外出出來兼候に付此書付拙者より差進候樣相托し候敬白

於横濱一千八百七十三年第十一月廿六日

ドブリュー、エッチ、タルボット

三三三　十二月二十日　英國公使ヨリ寺島外務卿宛

高島炭坑關係訴訟ノ儀談判致シ度ニ付日時取極方申越ノ件

Yedo, December 20th 1873.

Sir,

On the 5th ultimo, acting in conjunction with Mr. De Long who represented the Netherlands Minister, I addressed Your Excellency a note accepting the offer of the Japanese Government to purchase Messrs Glover & Co's interest in the Takashima mine for $400,000. In the two replies written by the Vice-Minister Uyeno on the 17th and 18th ultimo, Mr. De Long and myself were informed that the Japanese Government had to bring forward certain claims against the mine which they considered should be paid out of the said $400,000. Particulars of these claims were afterwards supplied by Your Excellency at an interview which the Dutch Minister and myself held with Your Excellency and the Vice-Minister Uyeno on the 5th Instant. Having ourselves no knowledge of these claims which we then heard of for the first time, the Dutch Minister and myself have called upon the Trustee of the bankrupt estate of Glover & Co. for explanation, which has now been supplied. We are therefore prepared to continue the consideration of this question with Your Excellency as soon as it may suit you to name a time for this purpose.

I avail myself of the present opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my most distinguished consideration.

HARRY S. PARKES.
Her Britannic Majesty's
Envoy Extraordinary and
Minister Plenipotentiary

His Excellency
Terashima Munenori,
Minister for Foreign Affairs.

（右和譯文）

翻　譯　文

貴政府より高嶋鑛山ガラバ商會所持の分四十萬弗を以御買上被成候旨被申聞候に付拙者蘭國公使名代たるデロン氏と連名の書簡を以右致承諾候事申進候處上野少輔より去月十七十八日兩度の書簡を以右鑛山に掛り候訴訟有之に付右訴訟之金高前文四十萬弗の内より相拂われ可然事と貴政府に於て被存候旨被仰越候右訴訟仔細の事は後日閣下幷上野少輔え拙者と蘭公使當月五日御面晤の砌御告知有之候所拙者共に於て右訴訟の事初て承り一向不存候に付蘭公使幷拙者

よりガラバ身代振取扱の者に了解可致樣致指揮候處只今右を了解申來候間打續談判致度に付御都合宜敷時日御取極の上被仰越度存候敬具

十二月廿日

英國公使
ハリヱスハルケス

寺嶋外務大輔閣下

註　本號文書中「上野少輔ヨリ去月十七十八兩度ノ書簡ヲ以」云々トアレト十八日附ノモノ見當ラス

二三四　十二月二十二日　上野外務少輔ヨリ英國公使宛

高島炭坑關係訴訟ニ關スル談判ノ日時報知ノ件

十二月廿二日夜七時十五分三時限ヲ以テ横濱へ達濟

十二月廿日附貴翰致披見候然は高島鑛山の義御取調相成候處右訴訟の事柄御了解相成候に付御談判被成度義有之都合宜敷時日御問合の趣致承知候然るに外務卿義此程より病氣に付御面晤致兼候就ては拙者御面會可致候間明廿三日午後

第二時當省へ御入來相成候樣致度此段回答如此候敬具

明治六年十二月廿二日

外務少輔　上野景範

大不列顛國特命全權公使
ハルリーエスパークス閣下

（朱書）「同廿三日英公使ヨリ返書アリテ廿四日應接ニ決ス返書ハ同公使來翰ニ詳ナリ」

二三五　十二月二十四日　上野外務少輔ト英國公使等トノ對話書

高島炭坑關係訴訟ニ關スル件

附記　十二月二十七日上野外務少輔ト英、蘭各公使トノ右ニ關スル約定書

明治六年十二月廿四日於外務省上野少輔英公使パークス蘭領事ボードウキン及ヒホルメーストル高島炭坑一件應接ノ大意　石橋少丞（アストン通辨）侍席　坂田權中錄筆記

一禮畢リ

英公使云　此程高島炭坑ノ儀ニ付此人ボルメーストル長崎ヨリ態々參リ候ニ付御面晤ノ儀ヲ廿日ニ申入レシニ御返詞カ遲シ尤ハンデルポツト儀ハ足痛ニテ途中ニ留リ未タ着港不致候

上野少輔云　私ハ速ニ返書ヲ差出タリ今日ハ蘭公使モ御同伴ノ積ノ處御差支ニ候哉

蘭公使不快ニ付出省不能ニ付拙者ヱ萬事依賴致シ候

私ハ寺島ガ不快ニ付其手紙ヲ廻シ越廿二日ノ暮ニ受取哉否直樣返書ヲ差出タリ

夫ヲ汽車ニテ請取タレトモ讀ム能ハズ昨晩歸テ始テ譯ガ分リタリ夫故本日私方ニテハ寺島卿ヱ御面晤ヲ申入タリ今日閣下カ寺島公ノ積ト存候

一ニ書類ヲ出ス

訴訟目錄中

第一

小山ノ要求高ハガラハ分散前ノ事ナレハ分散法ニ因リ他ノ債主同樣所分ヲ受ク可キ筈也

右同種ノ訴訟有之候哉

ボイトノ訴訟右ト同樣ノ者也

然ラハ此目錄中除キ別ニスベシ

第二

小山ヨリ貸シタル訴訟目錄中石炭九千五百十九担アリ
内二千六百五十担返濟
分散前カ
然リ
是レニ利足カ有ル
最初利足ハ不拂ト云約條アリ尤總テ石炭ニテ返ス筈也
利足ノ事極ラヌ時ハ是訴訟ナリ
石炭ノ事ナレハ利足無カルヘシ
然ラハ是ハ跡ノ事

第三

百魔崎石炭二千六百五十担堀上代是ハ未タ拂ヒシカ不拂カ聢ト不分明ナリ全ク拂ハヌ物ナラハ拂フベシ夫ハ疾クニ可受取筈ナルヲ其儘ニ致シ置今ニ至テ云ヒ出シタル事故利足ハ拂フ理ナシ

第四

百魔崎ノ償

第五

右ノ波戸場一ケ所及ヒ礦夫用ノ家十八軒是ハ小山ヨリ受取シ者ニアラス
其波戸場ハ何ノ爲メニ作ルカ
地平均ヲ爲ル爲メニ石ヲ取除ケルナリ其石ヲ以テ波戸場ヲ作ル事ノ免許ヲ願ヒタリ是ハ小山カ自分利益ノ爲メニ致セシ事ナラン右ハ礦山堀稼ノ延期ガ出來テ此波戸場カ用ニ立テハ入費ハガラバヨリ拂フ約束ナレドモ波戸場未タ不出來
此方ニハ出來上ツタ趣ニ認メテアル
延期ノ事ガ濟ネバ我方ニテハ用ナシ左レハ出來テモ出來無クトモ同シ事ナリ
屯シテ居ル人足ハ小山ノ人足ナリ
元小山カ勝手デ入用ノ爲メ作リタル家ナレドモ是モ入用ノ時ハ買取ル筈ナリ其時小山ハ不賣事ヲ不得約束ナリ且此家ハ人足ヨリ家賃ヲ拂テ居ル故家賃ガ高ケレハ人足賃ヲ上ケネハナラヌ故買取ル積リナリ
五尺礦脈ノ風穴并役所ノ石垣及ヒ六十一間半ノ石段アリ
此三ケ條ハガラバ、ニテ異論アレトモ小山ト、ガラバ、ト面會ニテ示談セバ事整フベシ
草屋ハ十八軒ノ家ト同シ譯ナリ

第六

水拔人足ノ事此賃何程カ拂フ左レトモ此ノ事ニ付異論アリ
異論ナキ分丈ハ拂フタリ其高拂殘ノ高ナレハ其高ヲ證明シアリシ後拂フベシ

第七

第四ト同樣ナリ

第八

第六ト同樣ナリ
最早日數モ無キ故跡ニス可キ事ハ置キ要件ヲ早ク決セント欲ス速ニ極テ今ヨリ電信モ掛ケ人モ遣ス可シ
拙者モ早ク決シタシ
九千餘ノ高ハ其廉明了ニ付引拔ク石炭利足ノ事ハ跡ニテヨシ第三拂不拂并波戸場家等ナド不分明ノ廉ヲ集四十萬ノ内ヨリ引去雙方ノ名ニテ受取事ニ致シ　ヲリエンタルバンクエ預置其上右不分ノ廉ヲ決シテハ如何
是レヲ決スル人ハ誰
正シキ人ヲ撰ム可シ
分散前ノ勘定ヲ明了ニシ其後ニ又訴フル者アル時ハ誰カ之レヲ引受ル者ガ無ケレハナラヌ

鑛山ノ事ニ付災難一揆ノ如キハ拂フヘキニ非ス
夫レモ事柄ニ次第アリ山ヘ水カ入タトカ何カナラバ拂ハネバナラヌ
此事長崎領事ノ裁斷ニスベシ
夫レハ不都合ナリ
拙者ト閣下ト不同意ノ時ハ如何
夫ハ無關係者ヲシテ斷ゼシム
ヒコ月給ハ既ニ五百弗拂フタリ今訴フル處ハ松林ガ自分ニテ遣ヒシモノナラン
併シ礦山ノ爲メニ遣フタルナラバ鑛山ノ勘定ナルベシ已ニ五百弗拂ヒシト云モ鑛山ノ爲メナルベシ
松林ノ仕拂高ハ分散前ノ事ナレトモ給料等ナレバ不殘拂フ可シ併松林ヨリ可拂六千餘アリ機械ヲ質ニ入レ期限ニ到テ拂フ能ハス故ニ夫ヲ取ラントス機械ノ外ニ松林ヨリ可拂モノアリ
夫レハ松林ニ係ルモノニハ有ルマジ肥前ノ嵯峨ニ係ルモノナラズヤ
嵯峨ニ係ルモノナリ左レトモ高島ノ金ヨリ拂フ筈ノ約束ナリ

此廉甚不分明ナリ然レハ此ハ不詳ト致シ置ヘシ
デビソン入費幷謝金ノ事且貴國裁判役ハンナン、ノモ有リ
ハンナン、ノ諸入費謝金ノ勘定書ハ此ノ處ニアルカ
爰ニ無シ工部省ニアリ
ハンナン、ヨリ決テ謝金等ヲ請求スル筋ナシ右ハ間違ナルベシ
決テ間違ニハ無之旣ニ同人ノ請取書一見セリ四十萬ハ直チニハ不拂鑛山ヲ請取事迄檢査等ニ少クモ日數十五日ハ懸ル趣ナレハ受取ガ濟ヌ前ハ不拂右受取ガ濟シ趣電報來リ次第即日御渡シ申可シ
今迄關下御注意ナキ故遲クナリタリ
夫レハ不知正月元日ヨリ堀ル事ヲ止メサセ其先十五日ヲ要スルナリ
休メバ水カ山ニ入テ大事ヲ引出スベシ併シ是ハ君ノ御都合次第君ヨリ金ヲ渡セバ山ハ何時ニテモ渡ス可シ
願クハ正月一日迄ニ山ガ受取レバ幸ナリ今申ス休業ノ事ハボンブ丈働カセル事ニスヘシボンブ、サヘ働カセ置バ妨ナカルベシ
夫ヨリ不分明ノ請求高ヲ除キ金ヲ御渡シノ方可然

夫レハ不出來先ツ物ヲ買フニ品ヲ取ラヌ先ニ金ヲ渡ス事ハナシ是レト同樣ナリ
十五日トナレハ一月一日後ノ堀稼入費ハ政府ニテ拂ハルベシ
然リ一月一日後ノ入費ハ政府ニテ拂フベシ
元日ニ引渡シノ式ヲ行ヒ其後二三日ノ事ナルヘケレハ此方ノ入費ニテ働クベシ
御親切ノ話ナレトモ無入費ニテ働カセ候事ハ甚迷惑ナリ夫等ガ却テ面到ニナリテ悪シ
一日ヨリハ丸テ帳面モ新キ(マヽ)スレハ面倒ハナシ若シ强テ政府ニテ入費拂度トナラハ請取テモヨシ
今ヨリ工部省ニ行テ咄テ見ルベシ
一日ニ山ヲ引渡ス筈ナレハ其後ノ利足ヲ拂フト云證書ヲ御差遣シ被下度候
山ヲ引渡ス一條雙方ノ不同意ヨリ起リ如是遲クナリタル事ナレハ素ヨリ利足ノアルベキ理ナシ併シ此方ニテハ晦日ニテモ山ハ引渡ス用意整ヒ居候
檢査セサル内ハ受取難シ其日數ハ十五日ハ懸ル
是ヨリ日數十五日歟來月ノ十五日歟

來月十五日ト約スベシ併シ其壙山ニ備附ノ物品五ツアル筈ノ物ガ不足シテ貳ツナレハ不受取
訴訟不分明ノ廉ノ分ハ多ク見積リテ四萬四千ト致シ置ベシ
今日ノ御話ハ蘭公使モ御同意ノ事ト存候
然リ元日ヨリ後ハ火事其外災難ナト總テ政府ノ方エ屬スベシ
夫レハ受取後ノ事ナリ
如何樣ノ災害ガ有ルモ不知故ニ此方ニテ不受合仕事ヲ休メハ人足カ酒ヲ飲ミ一揆ノ樣ナル事ノ起ルモ計ラレス君ノ方ニテ仕事ヲ休ル事故君ノ方ニテ請合フハ當然ナリ且元日ヨリ我方ニ利益少シモナシ利益ガ無ケレハ請合ハ出來ヌ筈ナリ
人ノ事計ナレハ邏卒ヲ多ク遣ルベシ併シ礦山ヲ不受取内ハ如何樣ノ災害アルトモ當方ニテ受合ハ出來サルナリ
此處ニテ炭坑此方ニ引受ル約定書案ヲ綴リ懸ル
訴訟ノ條々分散前後ノ處能ク分テ置ネハナラヌ
成丈多ク見込ンデ置ク方宜シキ故四十萬ノ内ヨリ四萬五千兩オリーンタルバンクエ預テ置クベシ

夫レハヨシ其外ニ跡カラ訴カ出タラ我方ニテ不知彼方エ行ケト云フ其處ガナケレハナラヌ此ノ樣ノ事最早アルマジサレドモ其意味ヲ含マセテ置ネハナラヌ
十五日迄ニ不訴出モノハ不取擧トスベシ
夫レハ餘リ短シ一向布告モ何モシテナキ故ニ四十萬ノ内ニテ夫ヲ引受ル事ハ兼テホードインモ聢ニ云フタリ且書タ物モアル
長崎ハ狹ヒ所故何モ總テ知レ居ル
狹ヒ所デモ氣ノ附ヌ者モアルベシ
然ラハ廿日トスベシ
布告ノ日ヨリ一ケ月トスベシ
然ラハ其旨新聞ニテ知ラスベシ
今一ツ書ク事アリ小山ノ訴訟
元ヨリ夫レハヨロシ其通リニ取扱テ居ル(マヽ)候
是ハ入ラヌ事ナガラ引拔ク故ニ外ノ炭礦仕拂勘定ト同樣ニスベシ
ヨシ五萬元ノ内ヨリ是後訴出ノ分モ拂フ
不足ナラバ孰カ出スヤ
夫ハ大丈夫ナリ元日ヨリハ　リスク之事ハ不受合

其事誠ニ困却ナリ

益ハ政府ガ取リ　リスク、ハ我方ニテ引受ルハ無理ナリ

然ラハ今月卅一日金ヲ、ヲリーンタルバンクニ預ケ置山ヲ受取ル上ニハ右金ハ勝手ニバンク、ヨリ受取ル事ニセバ如何

何ノ故ソ

右ノ通ニスレハ山ヲ受取ル日限カ急ギニナリ成丈手操リヲスル道理ナレハ七日歟六日ニハ受取ル樣ニナルベシ

其間山ノリスク、ハ如何

其方デ引受ケラルベシ

其金ハ三井ニ預テアルモ、バンク、ニ預テアルモ同シコト也夫デハ矢張リ、リスクヲ引受ル事ハ出來不申

夫ハ極急カセル法ニテ今ノ樣ニスレハ六日頃ニハ受取ル樣ニナルモ不知二三日ノ事ナレハ無入費ニテ引受ルト云シ言葉モアレバ日ガ短ケレバ引受テモヨロシカルベシ

リスク、ノ事ハ難承諾

此事一ツデ、イツ迄モ手間カ取レル故然ラハ一月一日ヨリ政府ニテ引受ル事ニ決スベシ

爰ニ於テ約條書面ノ草成ル（但シバークス草ス）

此草稿一兩字ハ換ル事アルベシ乍去意味ハ少シモ不換積夫レヲ明日認テ上ル

是ヨリ正院エ參リ工部卿ニ此咄ヲ致シ電信モ掛ケル事ニテ今既ニ四時ニ近ケレハ人ヲ遣ス事ハ五時迄ニ間ニ合ヘバ頂上多分六ケ敷ト存候電信案モ同シ樣ニスベシ

電信案草成ル

遊獵規則ノ事ニ付外務卿明日二時半ヨリ御面會致シ度ニ付右規則ニ付御論議アル公使ヲ御同伴御出省可被下候

明日ハキリストマス故出省致シガタシ

然ラハ幾日御都合宜シキ哉

卅日ハ如何

然ラバ卅日二時半御出省

止ム

註　右高島炭坑回收ニ關スル約定書左ニ附記ス

（附記）

約　定　書

下名ノ者日本政府ニ代リゴロウル社中ノ分散セル身代引受人ニシテ和蘭商社ノ名代タル英蘭兩公使ヘ高島炭坑及總テ其道具機械假舍家屋其他高島長崎及ヒ其他ニ在テ右炭坑ニ（プラント ストワクマシネリー）

關係アル各種ノ物品及ヒ右引受人ヨリ日本政府ヘ引渡タル各種ノ蓄貯品目錄中ニ記載アル畜產且右炭坑引渡ノ日マテ炭坑ノ爲ニ買入タル諸品（當然ノ破損ハ之ヲ除ク）ニ付ゴロウル氏社中ノ權利買入ノ爲メ洋銀三十五萬元ヲ拂ハン事ヲ爰ニ約諾ス（ストック インテレスト）

右引受人ノ帳面勘定書等ハ前顯諸物受取中日本政府ノ檢查ニ備フベシ右炭坑及諸物品ハ整備ニシテ且總テ負債訴訟擔任ハ何レモ之ヲ脫去シ以テ來ル一月十五日或ハ其後十四日ノ內ニ工部省全權ヨリ延期スル刻日ヲ以テ日本政府ヘ引渡スベシ尤右負債訴訟等ノ內ニハ肥前ノ證文其他證券類及ジッキンス氏ノ記名セル原告人ノ覺書中ニ枚擧スル總テノ訴訟ヲ包抱シタル者ナリ

右引渡ノ時マテ右炭坑ヲ正當ニ堀稼キ而シテ後日ノ堀稼ニ障ラサル樣致スヘキヲ約ス

ゴロウル社中ノ身代引受人ハ其引受人タルノ間ハ右炭坑ニ對シテ已ニ起レル訴訟或ハ此後起ルベキ訴訟ヲ總テ引受ケ其拂方ヲ爲スヘキ旨ヲモ約諾ス但シ右ハ炭坑ヲ日本政府ヘ引渡サヾル前ニ差縺レタル訴訟ヲ云フナリ

此約定通リ右炭坑ヲ日本政府ヘ引渡ス迄ハ從前ノ通リ損益ハ右身代引受人ノ責ニテ引受人之ヲ堀稼キ又其引渡ノ日ニ右炭坑ニ在ル石炭ノ貯蓄ハ全ク日本政府ノ所有物タルベキ旨ヲ約諾ス

下名ノ者又前顯買入方ノ爲メ洋銀四萬五千元ヲ横濱ノ東洋銀行ヘ預置事ヲ約ス尤右高ハ本月五日英蘭兩公使ヘ交付セル目錄中ニ記載アル訴訟吟味マテ預置ベシ尤右目錄中ニ記載アル第一號小山氏ノ訴訟ハ右訴訟ノ外トス右小山氏ノ訴訟ハゴロウル商社分散ノ身代ニ涉ル者ナレハ右炭坑ニ關ハル他ノ諸債主ノ訴訟ト同樣ニ處分ヲ受ベキ者ナリ而シテ又右目錄中ニ詳記アル「デウキソン」「タルボット」兩氏ノ費用手數料モ同樣右訴訟ノ外タルベシ（エステート）

右訴訟ノ吟味ハ英蘭兩公使及日本外務卿ヨリ其爲メ命スル處ノ判者之ヲ爲スベシ右原告ヘ拂フヘキ分ト右判者ノ定斷シタル高ハ右四萬五千元ノ內ヲ以テ充分ニ拂濟シ其殘金ハゴロウル社中ノ身代ヘ拂入ルベキ旨ヲ約ス

右洋銀三十五萬五千元ノ高ハ右炭坑ヲ引受人ヨリ日本政府ヘ引渡濟ノ報告ヲ得タラハ横濱ニ於テ英蘭兩公使或ハ其指圖アル人ヘ拂渡スベシ而シテ右洋銀四萬五千元ノ高モ其節共ニ横濱ノ東洋銀行ヘ預置ベキヲ約諾ス

洋曆一千八百七十三年第十二月廿七日横濱ニ於テ之ヲ
二通ニ書シ以テ記名スル者ナリ

外務少輔　上野景範

余輩ハゴロウル社中ノ分散身代引受人ニ代テ
此約定書ヲ承諾ス

英國皇帝陛下ノ特命全權公使
ハルリー、エス、パークス

和蘭國皇帝陛下ノ辨理公使
ドブリュ、フラン、ウキッキヘルリン

（右英文）

Copy.　　Agreement.

The undersigned acting on behalf of the Japanese Government hereby agrees to pay to the British and Dutch Ministers, as representing the trustee of the bankrupt Estate of Glover and Company and the Netherlands Trading Society, three hundred and fifty five thousand Mexican Dollars in purchase of the interest of Messrs. Glover & Co. in the Takashima Coal mine and in all its plant, stock machinery, sheds, houses and all the other property of every kind at Takashima and Nagasaki and elsewhere in connection with the said mine and also in those properties mentioned in the various stock lists, which have been handed to the Japanese Government by the said trustee and in all things which have been purchased for the mine to date of transfer reasonable wear and tear excepted.

It is further agreed that the books and accounts of the said trustee shall be open to inspection by the Government during the taking over of the said properties and also that the said mine and property shall be handed over to the Japanese Government on the 15th January next, or within fourteen days thereafter according as the time may be postponed by the specially authorized representatives of the Cobusho in good condition and free of all debts and claims and burdens whatsoever, including all declarations of attachment the "Hizen promissary notes" and all the claims which were raised or made in the "memoir of the plaintiffs signed by Mr. Dickins.

It is further agreed that the mine up to the time of handing over shall be worked fairly and properly and in such a way as shall not interfer with the future working of the mine.

Also that the trustee of Glover & Co.'s estate shall give a guarantee that he will be responsible for and pay all the claims of every description, which have been or may be made against the mine so long as he shall continue to act as trustee provided always that the said claims shall have been incurred prior to the transfer of the mine to the Japanese Government.

It is further agreed that the mine shall be worked by the trustee as hitherto at the risk and for the profit of the said estate until the said mine shall be handed over to the Japanese Goverement under this agreement and that the stock of coal at the mine at the date of transfer of the same shall be the property of the Japanese Government alone.

The undersigned also agrees to deposit in the Oriental Bank at Yokohama the sum of Forty five thousand Mexican Dollars on account of the above named purchase which sum will be held subject to the examination of the claims named in the schedule delivered to the British and Dutch Ministers and the 5th instant with the exception of Koyama's claim No. 1, which being a claim upon the bankrupt estate of Glover and Co. will be dealt with in the same way as the claims of other creditors connected with the said mine and also with the exception of the "expenses and fees. of Messrs Davidson and Talbot" as detailed under that head in the said schedule.

It is further agreed that the examination of all the said claims shall be made by the arbitrator to be appointed for this purpose by the British and Dutch Ministers and the Japanese Minister for foreign affairs; such amount as are decreed by the said arbitrator to be due to the said claimant shall be paid in full out of the said sum of Forty five thousand Dollars and the balance shall be paid to the estate of Glover and Co.

Finally it is agreed that the said sum of three hundred and fifty five thousand Dollars shall be

paid over to the British and Dutch Ministers or to their order at Yokohama upon receipt of information that the said mine has been transferred by the said trustee to the Japanese Government and further that the said sum of forty five thousand Mexican Dollars shall be deposited at the same time in the Oriental Bank at Yokohama.

Signed at Yokohama this twenty seventh day of December 1873 in duplicate.

We accept this Agreement on behalf of the Trustee of the Bankrupt estate of Glover and Co.

外務少輔　上野景範

HARRY S. PARKES,
H.B.M.'s Minister.

W. VON WECKHERLIN,
Minister Resident van
Z. M. den Koning der Nederlanden.

二三六　十二月三十六日　上野外務少輔ヨリ三條太政大臣宛

高島炭坑回收示談金用意方大藏省ヘ指令アリ度旨上申ノ件竝ニ之ニ對スル太政大臣決裁

高島炭坑差縺一件に付英商コロウルえ可相渡示談金云々に付上申

高島炭坑堀稼約定差縺一件是迄英蘭兩公使と數回談判の末日本政府にて右炭坑堀稼約定破談幷其所屬の諸物品悉皆四十萬元にてゴローウル社中引受人より買上候事に決定致し右炭坑當方え受取候旨長崎より報知の上來る一月十五日右四十萬の内三十五萬五千元は外務省より横濱に於て英蘭兩公使え可相渡殘り四萬五千元は我國人より右炭坑に對したる訴訟取調裁斷迄右同日横濱ヲリエンタルバンクえ預け置候事に昨二十七日約定調印致し候間右期日に至り右金額當省より掛合次第渡方差支無之樣前書金高用意の義大藏省え御指令相成居度此段上申候也

明治六年十二月二十八日

外務少輔　上野景範

太政大臣　三條實美殿

（朱書）「伺之通　明治六年十二月廿八日　太政大臣三條實美印」

註　右指令ノ趣十二月廿九日附ヲ以テ上野外務少輔ヨリ山尾工部大輔宛通知シ居レリ

二三七　十二月三十日　外務大丞等ヨリ太政官史官宛

上野外務少輔等高島炭坑ヘ出張セル旨届出ノ件

（朱書）「十二月卅日達濟」

外務少輔上野景範外務少丞石橋政方外務權中錄清田長秋高島炭鑛ヘ御用として本日出發いたし候此段及御屆候也

明治六年十二月卅日

外務大少丞

史官御中

事項一五　舊貨幣ノ整理ニ關スル件

〔第五卷事項一六參照〕

二三八　四月一日　獨國辨理公使ヨリ上野外務卿代理宛

金札ヲ新貨幣ト交換スヘキ期限切迫ニ付右引換ニ關スル規則照會ノ件

Kaiserlich
Deutsche Mission
in
Japan.

No. 11.　　Yedo, den 1ten April 1873.

Durch die Note vom 29ten Tage des 5ten Monats des 2ten Jahres Meiji (8ten Juli 1869) hatte Euerer Excellenz Herr Amtsvorgänger Date Chunagon mir mitgetheilt, dass das von der Regierung Seiner Majestät des Tenno bis dahin ausgegebene Papiergeld bis zum Ende des Jahres 1872 gegen baares Geld eingelöst, und dass für die etwa nicht eingelösten Beträge von diesem Zeitpunkt an in sechsmonatlichen Raten eine Zinsvergütung von 4 Procent jährlich gezahlt werden solle.

Diese Mittheilung hatte ich auf ausdrücklichen Wunsch des Prinzen zur Kenntniss der in Japan ansässigen Deutschen gebracht.

Da der erste Termin der verheissenen Zinszahlung heranrückt, darf Euere Excellenz ich daher wohl ergebenst suchen, mir geneigtest eine Mittheilung über diejenigen Bestimmungen zugehn lassen zu wollen, welche die Kaiserliche Regierung in Ausführung der durch die Note vom 29ten Tage des 5ten Monats in Aussicht gestellten Massregel getroffen hat.

Ich benutze diese Gelegenheit, Euerer Excellenz die Versicherungen meiner ausgezeichnetsten Hochachtung zu wiederholen.

M.v. BRANDT.

Seiner Excellenz
dem stellvertretenden Minister
der Auswärtigen Angelegenheiten,
Herrn Uyeno Kagenori,
Yedo.

（右和譯文）

第十一號

以手紙致啓上候然者閣下ノ御先役伊達中納言殿去ル明治二年五月二十九日ノ御書簡ヲ以天皇陛下政府ニテ其時迄御發行相成候金札ノ義一千八百七十二年ノ終リ迄ニ是ヲ正金ト御引替可有之且引替不相成分ハ六月賦ヲ以一年四分ノ割合ニテ利息御拂可被下趣被御申越候間中納言殿ノ御懇望ニ隨テ其段日本在留獨逸國人民ヘ布達致候然ルニ右日限最早近ニ相望居候ニ付右五月二十九日ノ御書簡ニテ被御申越候手續被爲行爲メ如何樣ナル御極リニ被及候哉御報知有之度樣希候右ノ段可得御意如斯御座候以上

四月一日　　獨逸國辨理公使
フホンブランド

上野外務少輔閣下

二三九　四月九日　上野外務卿代理ヨリ太政官正院宛

金札引換ニ就キ獨國公使ヨリ申出アリタルニ付右ニ關スル條令通達方伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官指令

（朱書）「第百四十號」

金札引替の儀に付別紙の通獨逸公使より申出候に付第百十五號及ひ第百二十一號御布告に基き右條例同公使は勿論他各國公使へ布達可致と存候右にて御差支有之間敷哉尚大藏省へ御下問の上早々御下知有之度此段相伺候也

明治六年四月九日　　外務少輔　上野景範

正院御中

（朱書）「第百二十一號ノ公布而已布達可致事
明治六年五月四日　正院之印　」

（貼紙）
御廻シ濟后
先前申立書トモ寫取可申筈局備ナリ

註　右ニ謂フ「第百十五號」ハ「新舊公債證書發行條例」（一月二十八日附）ヲ通達セル三月二十五日附太政官布告

ヲ指ス尙「第百二十一號」ニ關シテハ二四〇附屬書參照

二四〇　五月九日　上野外務卿代理ヨリ獨國辨理公使宛

金札引換ニ關スル照會アリタルニ對シ引換公債證書發行條例送付回答ノ件

附屬書　三月三十日金札引換公債證書發行ニ關スル太政官布告

五月九日達ス

第廿四號

四月一日附貴簡致披見候內地楮幣發行の義に付去る己巳年五月廿九日附を以外國官知事伊達中納言より御書通およひ置候義に付云々御來示の趣致承知候右は則引換公債證書發行條例別冊摺本の通今般相定候此段及回答候敬具

明治六年五月　日

外務少輔　上野景範

獨乙公使閣下

（附屬書）

第百二十一號

明治元年戊辰太政更始ノ際官省札ヲ十三ケ年限リ發行候處速ニ收却ノ議ヲ決シ己巳ノ冬ヨリ壬甲年中ニ新貨幣ヲ以テ交收シ遺殘ノ札ハ一ケ月五朱ノ利子毎年七月十二月兩度ニ割合拂渡スヘキ旨己巳五月廿八日布告候處政府ニ於テ尙收却ノ都合ニ至兼候ニ付金札所持人ヘハ約ノ如ク一ケ月五朱ノ割合ヲ以テ利子可相渡候得共各處散在一々難拂渡ニ付明治六年第三月十五日ヨリ金札所持ノ者ヘ一ケ月五朱卽チ年六分ノ利息付公債證書ヲ可下渡候條別冊公債證書發行條例ヲ遵奉シ證書讓渡等可致候若此條例ニ犯違スルヨリ差起リタル訴訟等ハ一切裁決不致候此段兼テ相達候事

但金札所持人ノ勝手ヲ以テ證書ヲ不望者ハ其意ニ任スヘキ事

明治六年三月三十日

太政官

註一、右附屬書ニ謂フ「別冊」二月二十八日附「金札引換公債證書發行條例」ハ省略セリ

二、右附屬書ハ同時ニ五月九日附上野外務少輔ヨリ各國公使宛、宮本外務大丞ヨリ各國領事宛書翰ヲ以テ夫々通達セラレ居レリ

〔第五卷事項一七參照〕（事項二參照）

二四一　一月二十四日　佛國外務省ニテ岩倉大使ト佛國外相トノ對話書

日本政府ノ耶蘇教信仰ニ對スル處置ニ關スル件

明治六年一月廿四日（西暦千八百七十三年第一月廿四日）佛國於ウエルサイル外務省岩倉大使同國外務卿レミュサ應接記之內

公使　ウートレー

待座　鮫島辨務使

前略

一外開國論の外又宗教の論有之候是も頗る緊要の務に有之歐米各國の人心をして日本へ向わしむるには最も至當の方略にて古來より今日に至り猶御執行相成候舊法御廢棄邪蘇宗に歸化せしものに對し仁惠の意御示し被成候事に有之御國內情おゐて宗旨の自由を一般御差許の儀定て御差支可有之候へとも宗旨寬恕の趣意を表し候事に付ては一向妨碍無之事と存候我篤と同教の諸人其心衷信仰の事に付更に他人の煩を受くることなく又無罪の平民等前年御國にて御處置御坐候如き歎憂すへき處置に逢わさる樣御處置有之事最肝要に候此宗旨一條は佛國おゐては甚注意致し深く憂慮致居候間日本政府にても外文明各國におゐて執行來り候法を御採用相成是を實地に御施行被成候樣相成候は我政府には甚滿足可致去迚

天皇陛下政府の爲御迷惑を引起し候事は甚望まさる事に御坐候間此儀は別段の御思考被下御注意有之度存候御國の形勢は其習俗政法及邪蘇宗信仰の者を安堵せしめ候方便等を種々推考致候處只今申述候處を御處置有之候外無之大に歐洲各國民の意に適し何も深く賞譽可致事に存候先差當り緊要奉存候條には右の兩條に有之

就ては右兩條快意の御處置有之に付ては佛國政府にも御國のため御都合と存候處置は盡力可仕被存候

實地の事に付ては外務卿より申出る事纔にして偏に日本と佛國との貿易を盛昌ならしめん事を望みこれか爲の力の及ふ丈け周旋すへし先使節に對し云ふへき事は是迄なれは使節の見込を承り度と云ふ

岩倉使節一宗旨一條は頗る緊要の事件とは兼々承知いたし候我政府にも何れ自由と申場合に立至り可申總て今日の處置も右の場合に運ひ候樣いたし度事に有之候乍併國内の情實未たかゝる大變革を起し候ては決て不相成候間此段は兼て御心得置有之度何れにも只今御申聞御趣意不取敢政府へも可申遣我政府おゐて深く注意可致と疑無之事に候且我政府にも此等の事にては歐洲各國と同樣にいたし候樣諸事精々盡力致し候事にて時至り候はゝ即今被行候邪蘇制禁の法をも廢止候樣可相成到底各國同樣に成行候は必然に有之候得共只今より何頃右處置に及可申との時限等は豫め取極めかたく候

外務卿一日本使節右の如く陳述せしを聞大に滿足す然る上は此事件に付再ひ可申入事無之只々日本政府にて宗旨の事は緊要の一事なる事を熟知あらん事を望むとの意を述ふ

岩倉使節一彼僧徒一條に付ては今少々申入度義有之右は我國民の邪蘇宗に歸せしもの我國の法度を犯し候も其宗門僧徒の保護を得候事時に有之是等は不正の所業にして政府の威權を妨く差當り夫か爲政府の力我民におよはさる樣成行可申候

外務卿一右樣の義出來候はゝ速にこれを罰し聊か猶豫致すへき事に無之候其土地の人民其國の法度を犯しこれか爲め追捕せらるゝとも決して外國人の保護を受くへき理は更に無之加之右樣の者は公然たる裁判所の吟味を願出候權を失ひ可申候一體の道理は暫く置官吏の處置殘酷なるに比し候へとも僧徒の所業のみ甚敷とも難申存候且又僧徒右樣の事に立携り候とも或は其不幸なる者の苦慮を見るに忍ひす人情より出て救を乞候はゝ尋常の事にて宗旨の事とは別段に御坐候

ウートレー一右事件は既に東京おゐて談判の節只今使節より申聞られしことく我僧徒に對し彼等の所業なりしとて日本政府より申立られし旨有之候へ共卒に確證を擧て論破せられし事無之殊に又此事に付公使館へ公報無之候

使節一一體の有樣を申入候迄にて自分考へには各法度を嚴重に遵奉し候へは自然右樣の行違は無之樣相成可申候

此時使節鮫嶋と暫時日本語にて話あり鮫嶋發言して曰く右は唯々佛國僧徒のみを指していふには無之可成僧徒國内の事務に立入候事無之樣いたし度さも無は竟に國論に涉り不容易事に可成行候

外務卿一佛國官吏は總て條約に違背致候者を罰するため要用の權を有し居候且又條約違背の廉々無之とも總て國内政務上の事に付妨碍をなし候ものは同樣に處置候義自分より御受合申候て差支無之候

一岩倉使節外務卿の好意なる詞を謝し且政府へ申送るへしといふ

二四二　二月二十三日　白國ニテ岩倉大使等ト白國藏相トノ對話書

日本政府ノ耶蘇教信仰ニ對スル處置ニ關スル件

明治六年二月廿三日西暦千八百七十三年第二月廿三日白耳義國於比律悉岩倉大使山口副使同國大藏卿シュレー、マロ應接記の内

筆記　田邊一等書記

通辨　栗本二等書記

前略

彼方一今一事は宗教の事に候宗旨の事は既に歐洲にも多少の人命を損し候位の儀にて兎角六ツケ敷ものには候へ共即今は開化に赴き全く爭論無之候御國にても御國民の西教に入候もの嚴酷の御處置無之信徒自由相成候樣御變革有之度此義は別して御勘辨可有之候

我一宗教の儀は我政府にも頗る注意いたし既に古來の法に比し候へは餘程寛裕の處置に至り候位の事に候猶篤と勘辨可致候